

上信越自動車道
埋蔵文化財発掘調査報告書 5

——長野市内 その3——

松原遺跡

弥生・総論 6
弥生後期・古墳前期

1998

日本道路公団
長野県教育委員会
長野県埋蔵文化財センター

上信越自動車道
埋蔵文化財発掘調査報告書 5

—長野市内 その3—

松原遺跡

弥生・総論 6
弥生後期・古墳前期

1998

日本道路公団
長野県教育委員会
長野県埋蔵文化財センター



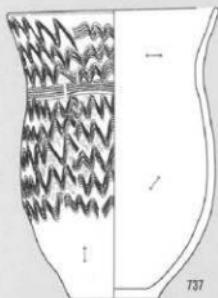
弥生時代後期



古墳時代前期

第 VI 部

弥生時代後期・古墳時代前期の調査



例　　言

- 1、本書は長野県長野市松代町東寺尾地籍に所在する松原遺跡の報告書である。
- 2、本書は『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書5 長野市内その3 松原一弥生・縄文・総論一』全8分冊中の第6分冊である。
- 3、調査は上信越自動車道建設に伴う事前調査として実施し、日本道路公団より長野県教育委員会を通じた委託事業として、財団法人長野県埋蔵文化財センターおよび財団法人文化振興事業団長野県埋蔵文化財センターが実施した。
- 4、調査にあたっては以下の関係機関のご協力を得た。
長野県教育委員会文化財保護課、日本道路公団名古屋建設局、日本道路公団東京第二建設局、長野市教育委員会、JAグリーン長野農協
- 5、発掘調査から本書の刊行に至るまで多くの方々のご指導、ご協力を得た。本文中にお名前を掲げさせていただいたが、厚く感謝申し上げたい。
- 6、本書に使用した地図は、日本道路公団作成の上信越自動車道平面図(1:1,000)、長野市発行の長野市都市計画図(1:2,500)をもとに作成したほか、建設省国土地理院発行の地形図(1:25,000)を使用した。
- 7、調査記録、出土遺物は報告書刊行後長野県立歴史館に移管し保管する。
- 8、発掘調査、整理、刊行にかかる体制、分担は本文中に示した。
- 9、編集は青木一男が行い、百瀬長秀が全体を校閲した。

凡　　例

- 1 本書に掲載した実測図の縮尺は原則として下記の通りで、該当箇所のスケールの上に記してある。
ただし地形図・調査区全体図・造構配置図などは任意である。
 - 1) 主な遺構実測図
竪穴住居址・井戸 1:80 住居内施設 1:60
 - 2) 主な遺物実測図
土器 1:4 (大型土器については一部 1:6) 鉄器・青銅器 1:1
木製品 1:6 (一部 2:3) 石器 1:4 土製品 1:3
- 2 本書に掲載した遺物写真的縮尺は、任意の大きさである。
- 3 土器図版ナンバーは、写真図版ナンバーと一致し、造構出土地点の遺物ナンバーも一致させている。
ただし、旧河道の遺物出土状況図のナンバーは遺物取り上げナンバーであり、土器ナンバーとの照合は第3~11表 旧河道土器出土状況一覧で照合できる。
- 4 実測図中のスクリントーン等は下記のように用いた。これら以外の場合は、当該項目の中で説明するか、図中に凡例を示した。

1) 遺構実測図



焼土、火床



炭化物

2) 遺物実測図

● 土器

▲ 石



赤色塗彩

本文目次

第VI部 弥生時代後期・古墳時代前期の調査

卷首図版

例言・凡例

第1章 調査概要

第1節 経緯と経過.....	1
1 経緯.....	1
2 経過.....	3
3 体制.....	4
(1)調査体制 (2)整理体制	
4 調査・整理方法.....	5
(1)調査区の呼称方法 (2)遺物の整理と管理	
第2節 遺跡の概観.....	8
1 地形・層序.....	8
(1)長野盆地の地形 (2)遺跡周辺の地形 (3)調査地の層序	
(4)ボーリングコアの層序	
2 歴史的接近.....	16
(1)長野盆地南部一松代地区— (2)長野盆地の歴史的位置	
(3)中部高地型土器様式圏	

第2章 遺跡

第1節 遺構の概要.....	23
第2節 弥生時代後期集落址の調査.....	30
1 概要.....	30
2 遺構.....	31
(1)竪穴住居址 (S B) (2)井戸 (S K) (3)若干のまとめ	
第3節 古墳時代前期集落址の調査.....	49
1 概要.....	49
2 遺構.....	49
(1)竪穴住居址 (S B) (2)井戸 (S K) (3)青銅鏡片出土ポイント	
第4節 旧河道の調査.....	55
1 調査概要.....	55
2 旧河道の調査.....	55
(1)S D100A・B地点 (2)S D101 (3)S D102	
3 遺物出土状況.....	62
(1)S D100A・B地点 (2)S D101C・D・E地点 (3)S D102	
(4)旧河道土器出土状況一覧	

第3章 遺物各説	
第1節 弥生時代後期77
1 観察の視点77
2 集落址出土の土器79
(1)堅穴住居址出土土器 (2)土壤・遺構外出土の土器	
3 旧河道出土の土器84
(1)旧河道 S D100出土土器 (2)旧河道 S D101出土土器	
(3)S D100・101追加資料 (4)變形土器成形・調整観察表	
4 土製品、石製品、ガラス製品、鉄製品157
(1)紡錘車・加工円盤類 (2)小形品 (3)石製品	
(4)ガラス小玉 (5)鉄製品	
第2節 古墳時代前期163
1 集落址出土の土器163
(1)堅穴住居址出土土器 (2)井戸・遺構外出土土器	
2 旧河道出土の土器166
(1)旧河道 S D100出土土器 (2)旧河道 S D101出土土器	
3 石製品、青銅製品、木製品192
(1)石製品 (2)鏡片 (3)木製品	
第4章 成果と課題	
第1節 中部高地型櫛描文系土器群の理解197
1 はじめに197
2 中部高地型櫛描文を施すする後期甕197
(1)後期甕の分類 (2)後期甕におけるB類 (3)文様施し手法	
3 中部高地型赤彩甕208
(1)分類 (2)装飾・文様	
4 中部高地型赤彩高杯214
(1)脚部の形態 (2)杯部の形態	
(3)鉢と高杯の法量の転換 (4)三角透し孔	
5 長野盆地南部における後期編年218
(1)弥生時代後期編年の動向 (2)編年	
第2節 古墳時代前期の土器の理解230
1 はじめに230
2 松原遺跡における古墳時代前期土器群の構成230
(1)高杯・器台 (2)鉢 (3)壺 (4)壺	
3 松原遺跡の編年的位置づけ240
(1)長野盆地南部の基準資料 (2)様相の把握 (3)松原遺跡の編年的位置	
第3節 長野県出土鉄鉋の基礎的整理250
1 はじめに250

2 分布と時期	250
3 出土状況の検討	250
4まとめ	253
第4節 松原遺跡出土鏡の伝世と廃棄	258
第5節 長野盆地南部の集落動向	263
1 弥生時代後期から古墳時代前期の土器編年	263
2 集落動向	263
第6節 箱清水式土器の施文技法	267
1はじめ	267
2 槌描文の施文具	267
3 施文の時期	268
4 壺の施文手順	268
(1)縦内型の波状文の場合 (2)中部高地型の波状文の場合	
(3)羽状文の場合	
5 土器回転のための用具と施文	273
6まとめ	273
(1)施文者と施文面 (2)施文意識 (3)施文具と調整具	
引用・参考文献一覧	276
第5章 結語	280
写真図版（P L）	
報告書抄録	

挿図目次

第1図 松原遺跡の位置	第17図 弥生後期、遺構割付図（3）
第2図 調査区の位置	第18図 古墳前期、遺構割付図（1）
第3図 調査進行図	第19図 古墳前期、遺構割付図（2）
第4図 工事エリアと調査地点の呼称	第20図 弥生後期集落概念図
第5図 グリッド設定・呼称法	第21図 S B71遺構図、埋土内土器出七状況図
第6図 長野盆地の地形	第22図 S B131・132遺構図
第7図 遺跡周辺の地形区分図	第23図 S B133遺構図、埋土内土器出土状況図、 埋置土器出土状況図
第8図 基本層序	第24図 S B134遺構図、遺棄土器出土状況図
第9図 柱状断面図（1）・（2）	第25図 S B135遺構図、埋土内土器出土状況図
第10図 長野盆地南部の遺跡分布図	第26図 S B140遺構図
第11図 長野盆地の遺跡分布図	第27図 S B141・152遺構図
第12図 中部高地型土器様式図	第28図 S B153・157遺構図
第13図 遺構の分布	第29図 S B153遺棄土器出土状況図
第14図 弥生後期・古墳前期集落全体図	第30図 S B154遺構図
第15図 弥生後期、遺構割付図（1）	第31図 S B158・171遺構図
第16図 弥生後期、遺構割付図（2）	

- 第32図 S B172遺構図・遺棄土器出土状況図
- 第33図 S B202・203・205遺構図
- 第34図 S B204遺構図
- 第35図 S B206遺構図・埋土上層土器集中区出土状況図
- 第36図 S B380遺構図・S B379遺構図・埋土内土器出土状況図
- 第37図 SK70遺構図・土器出土状況図
- 第38図 弥生時代後期 堪穴住居址の規模
- 第39図 弥生時代後期 堪穴住居址主軸方位
- 第40図 弥生時代後期 堪穴住居址検出面・床面レベル
- 第41図 弥生時代後期 地床炉集成図
- 第42図 古墳前期集落概念図
- 第43図 S B 8 遺構図
- 第44図 S B30・182遺構図
- 第45図 S B322・396遺構図
- 第46図 S B393遺構図
- 第47図 S K56遺構図
- 第48図 S K166遺構図
- 第49図 青銅鏡片出土古代住居址
- 第50図 旧河道（S D100・101）配置図
- 第51図 旧河道（S D100・101）流路変遷
- 第52図 S D100B地点
- 第53図 S D101
- 第54図 S D100、B地点土器出土状況図
- 第55図 S D101、D地点土器出土状況図
- 第56図 S D101、E地点土器出土状況図
- 第57図 S D101、E地点大型壺集中区出土状況図
- 第58図 弥生時代後期土器の部位呼称法
- 第59図 文様帯および施文手法の呼称法
- 第60図 堪穴住居址出土土器・後期（1）
- 第61図 堪穴住居址出土土器・後期（2）
- 第62図 堪穴住居址出土土器・後期（3）
- 第63図 堪穴住居址出土土器・後期（4）
- 第64図 堪穴住居址出土土器・後期（5）
- 第65図 堪穴住居址出土土器・後期（6）
- 第66図 堪穴住居址出土土器・後期（7）
- 第67図 堪穴住居址出土土器・後期（8）
- 第68図 堪穴住居址出土土器・後期（9）
- 第69図 堪穴住居址出土土器・後期（10）
- 第70図 堪穴住居址出土土器・後期（11）
- 第71図 堪穴住居址出土土器・後期（12）
- 第72図 堪穴住居址出土土器・後期（13）
- 第73図 堪穴住居址出土土器・後期（14）
- 第74図 堪穴住居址出土土器・後期（15）
- 第75図 堪穴住居址出土土器・後期（16）
- 第76図 堪穴住居址出土土器・後期（17）
- 第77図 堪穴住居址出土土器・後期（18）
- 集落址出土土器・後期（1）
- 第78図 集落址出土土器・後期（2）
- 第79図 集落址出土土器・後期（3）
- 第80図 S D100出土土器・後期（1）壺
- 第81図 S D100出土土器・後期（2）壺
- 第82図 S D100出土土器・後期（3）壺
- 第83図 S D100出土土器・後期（4）壺
- 第84図 S D100出土土器・後期（5）壺
- 第85図 S D100出土土器・後期（6）壺
- 第86図 S D100出土土器・後期（7）壺
- 第87図 S D100出土土器・後期（8）壺・赤彩深鉢
- 第88図 S D100出土土器・後期（9）赤彩深鉢
- 第89図 S D100出土土器・後期（10）無頸壺・高杯
- 第90図 S D100出土土器・後期（11）高杯
- 第91図 S D100出土土器・後期（12）高杯
- 第92図 S D100出土土器・後期（13）高杯
- 第93図 S D100出土土器・後期（14）鉢
- 第94図 S D100出土土器・後期（15）壺・有孔鉢
- 第95図 S D100出土土器・後期（16）壺
- 第96図 S D100出土土器・後期（17）壺
- 第97図 S D100出土土器・後期（18）壺
- 第98図 S D100出土土器・後期（19）壺
- 第99図 S D100出土土器・後期（20）壺
- 第100図 S D100出土土器・後期（21）壺
- 第101図 S D100出土土器・後期（22）壺
- 第102図 S D100出土土器・後期（23）壺
- 第103図 S D100出土土器・後期（24）壺

- 第104図 S D100出土土器・後期（25）壺
- 第105図 S D100出土土器・後期（26）甕
- 第106図 S D100出土土器・後期（27）甕
- 第107図 S D101出土土器・後期（1）壺
- 第108図 S D101出土土器・後期（2）壺
- 第109図 S D101出土土器・後期（3）壺
- 第110図 S D101出土土器・後期（4）壺・赤彩深鉢
- 第111図 S D101出土土器・後期（5）赤彩深鉢・高杯・甕
- 第112図 S D101出土土器・後期（6）甕
- 第113図 S D101出土土器・後期（7）甕
- 第114図 S D101出土土器・後期（8）甕・追加資料
- 第115図 S D100・101出土土器・後期追加資料
- 第116図 S D100・101出土土器・後期追加資料
- 第117図 箱清水式土器群
- 第118図 紗錐車・加工円盤実測図
- 第119図 弥生時代後期 小型品実測図
- 第120図 弥生時代後期 石製品実測図
- 第121図 ガラス小玉実測図
- 第122図 鉄製品実測図
- 第123図 竪穴住居址出土土器・前期（1）
- 第124図 竪穴住居址出土土器・前期（2）
- 第125図 竪穴住居址出土土器・前期（3）
- 第126図 集落址出土土器・前期（1）
- 第127図 集落址出土土器・前期（2）
- 第128図 S D101出土土器・前期（1）壺
- 第129図 S D101出土土器・前期（2）壺
- 第130図 S D101出土土器・前期（3）壺
- 第131図 S D101出土土器・前期（4）壺
- 第132図 S D101出土土器・前期（5）壺・鉢
- 第133図 S D101出土土器・前期（6）鉢・高杯
- 第134図 S D101出土土器・前期（7）高杯
- 第135図 S D101出土土器・前期（8）器台
- 第136図 S D101出土土器・前期（9）甕
- 第137図 S D101出土土器・前期（10）甕
- 第138図 S D101出土土器・前期（11）甕
- 第139図 S D101出土土器・前期（12）甕
- 第140図 S D101出土土器・前期（13）甕
- 第141図 古墳時代前期 石製品実測図（1）
- 第142図 古墳時代前期 石製品実測図（2）
- 第143図 青銅鏡片と想定復元図
- 第145図 S D102出土木製品
- 第146図 S K166出土編み籠
- 第147図 後期甕の分類
- 第148図 甕B類・プロポーションによる分類
- 第149図 松原遺跡出土甕B類の諸型式
- 第150図 甕B類の型式と法量
- 第151図 頸部形態
- 第152図 頸部形態の変化
- 第153図 甕内外面の調整比率
- 第154図 節状文の静止回数の割合
- 第155図 節状文静止回数の遺跡別風向図
- 第156図 甕B類波状文の段数とその数
- 第157図 甕文様帶の施文順位類型
- 第158図 松原遺跡の甕B類施文順位
- 第159図 壺の型式分類（その1）
- 第160図 壺の型式分類（その2）
- 第161図 松原遺跡出土甕B類
- 第162図 壺の赤彩率・部位別ミガキ方向の割合
- 第163図 甕頸部文様帶の構成率
- 第164図 壺頸部文様帶の諸型式とその変遷
- 第165図 高杯脚部型式と杯部・脚部の法量
- 第166図 高杯の型式分類
- 第167図 高杯法量 松原と篠ノ井の相関図
- 第168図 中期から後期の鉢・高杯の口径
- 第169図 長野盆地南部の土器変遷図
- 第170図 弥生時代後期器種変遷図
- 第171図 千曲川下流域1～2段階土器群
- 第172図 弥生時代後期高杯変遷図
- 第173図 弥生時代後期壺変遷図
- 第174図 弥生時代後期甕変遷図
- 第175図 松原遺跡出土高杯とその型式
- 第176図 松原遺跡出土の器台・鉢とその型式
- 第177図 松原遺跡出土甕とその型式
- 第178図 甕の型式
- 第179図 松原遺跡出土甕とその型式
- 第180図 古墳時代前期遺跡・遺構別器種組成
様相1・2・3土器群

- 第182図 様相2・4・5土器群
 第183図 古墳時代前期種変遷図
 第184図 松原遺跡の編年上の位置
 第185図 森将平塚古墳出土土器群
 第186図 長野県鉄鋼出土遺跡分布図
 第187図 長野県出土鉄劍集成（1）
 第188図 長野県出土鉄劍集成（2）
 第189図 長野県出土鉄劍集成（3）

- 第190図 銅鏡参考図
 第191図 編年対照図および長野盆地南部の集落動向
 第192図 篦状工具による施文例
 第193図 構造揭示写真 実測図
 第194図 589の施文順位を示す展開模式図
 第195図 739の施文順位を示す展開模式図

挿表目次

- 第1表 弥生時代後期竪穴住居址一覧
 第2表 古墳時代前期竪穴住居址一覧
 第3表 旧河道土器出土状況一覧（1）
 第4表 旧河道土器出土状況一覧（2）
 第5表 旧河道土器出土状況一覧（3）
 第6表 旧河道土器出土状況一覧（4）
 第7表 旧河道土器出土状況一覧（5）
 第8表 旧河道土器出土状況一覧（6）
 第9表 旧河道土器出土状況一覧（7）
 第10表 旧河道土器出土状況一覧（8）
 第11表 旧河道土器出土状況一覧（9）

- 第12表 瓢形土器成形・調整観察表（1）
 第13表 瓢形土器成形・調整観察表（2）
 第14表 瓢形土器成形・調整観察表（3）
 第15表 瓢形土器成形・調整観察表（4）
 第16表 瓢形土器成形・調整観察表（5）
 第17表 瓢形土器成形・調整観察表（6）
 第18表 紡錘車・加工円盤観察表
 第19表 ガラス小玉観察表
 第20表 住居址出土自然縞観察表
 第21表 長野県出土鉄劍一覧

写真図版目次

- P L 1 遺跡周辺
 P L 2 遺跡遠景・田中琢先生指導
 P L 3 弥生後期面金景・東条小6年生遺跡見学
 P L 4 S K70・S B10, 71, 131, 132
 P L 5 S B133, 134, 135, 140, 141
 P L 6 S B152, 153, 157
 P L 7 S B157, 172, 182, 204, 205
 P L 8 S B206, 214・SD100A地点
 P L 9 SD100A地点・SD100B地点
 P L 10 SD100B地点
 P L 11 SD100B地点
 P L 12 SD100B地点
 P L 13 SD101E地点・SD101D地点
 P L 14 SD101E地点土器館・SD101E地点壁断面・IIMグリッド壁断面

- P L 15 竪穴住居址出土土器・後期（1）
 P L 16 竪穴住居址出土土器・後期（2）
 P L 17 竪穴住居址出土土器・後期（3）
 P L 18 竪穴住居址出土土器・後期（4）
 P L 19 竪穴住居址出土土器・後期（5）
 土坑出土土器・後期
 P L 20 井戸址・グリッド出土土器・後期
 SD100出土土器・後期（1）
 P L 21 SD100出土土器・後期（2）
 P L 22 SD100出土土器・後期（3）
 P L 23 SD100出土土器・後期（4）
 P L 24 SD100出土土器・後期（5）
 P L 25 SD100出土土器・後期（6）
 P L 26 SD100出土土器・後期（7）
 P L 27 SD100出土土器・後期（8）

- | | | | |
|-------|-------------------|-------|------------------|
| P L28 | SD100出土土器・後期 (9) | P L41 | 竪穴住居址出土土器・前期 (1) |
| P L29 | SD100出土土器・後期 (10) | | SD100出土土器・前期 (1) |
| P L30 | SD100出土土器・後期 (11) | P L42 | グリッド出土土器・前期 |
| P L31 | SD100出土土器・後期 (12) | | 竪穴住居址出土土器・前期 (2) |
| P L32 | SD100出土土器・後期 (13) | | SD100出土土器・前期 (2) |
| P L33 | SD100出土土器・後期 (14) | | SD101出土土器・前期 (1) |
| P L34 | SD100出土土器・後期 (15) | P L43 | SD101出土土器・前期 (2) |
| P L35 | SD101出土土器・後期 (1) | P L44 | SD101出土土器・前期 (3) |
| P L36 | SD101出土土器・後期 (2) | P L45 | SD101出土土器・前期 (4) |
| P L37 | SD101出土土器・後期 (3) | P L46 | SD101出土土器・前期 (5) |
| P L38 | SD101出土土器・後期 (4) | P L47 | SD101出土土器・前期 (6) |
| P L39 | SD100出土土器・後期 (16) | P L48 | SD101出土土器・前期 (7) |
| | SD101出土土器・後期 (5) | P L49 | SD100出土土器・後期 (3) |
| P L40 | SD100出土土器・後期 (17) | | SD101出土土器・前期 (8) |
| | SD101出土土器・後期 (6) | P L50 | 鏡・編み籠・土器棺 |



土器接合作業風景

第1章 調査概要

第1節 経緯と経過

1 経緯

本書は「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書5 長野市内その3 松原-弥生・総論-」のうち、第6分冊「第VI部 弥生時代後期・古墳時代前期の調査」である。

長野県長野市松代町東寺尾地籍（北緯36°34'40" 東經138°12'25"）に所在する松原遺跡は、弥生時代中期および古代の遺物を出土する遺跡として周知されており、上信越自動車道建設に伴う記録保存対象遺跡として日本道路公団東京第二建設局、長野県教育委員会文化課等 関連諸機関の調整により(財)長野県埋蔵文化財センターが発掘調査を行った。発掘調査は平成元年から3年に及び、縄文前期から弥生・古墳・古代・中世に至る複合集落遺跡の姿が明らかとなった。「上信越自動車道埋蔵文化財報告書5 松原-弥生・総論-」の大半は、弥生時代中期後半、栗林式様式のムラを報告することになるが、第6分冊の第VI部「上信越自動車道埋蔵文化財報告書5 長野市内その3 松原-弥生・総論-」

第1分冊 第I部 調査の概要
第II部 遺構（本文）
第2分冊 第II部 遺構（図版）
第3分冊 第III部 土器（本文）
第4分冊 第IV部 土器（図版）
第5分冊 第V部 石器・その他
本 著
第6分冊 第VI部 弥生後期 古墳前期
第7分冊 第VII部 考察・検索
第8分冊 第VIII部 総論・化学 分析



第1図 松原遺跡の位置



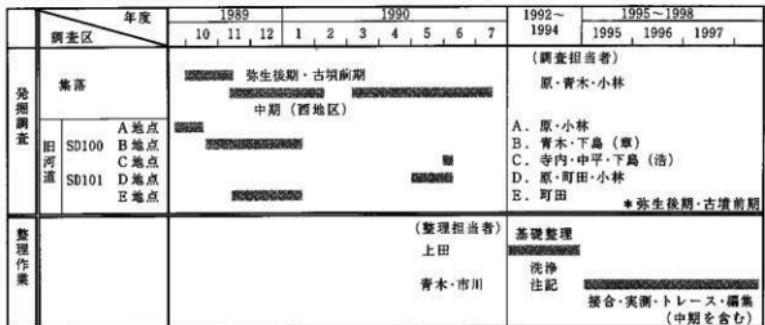
第2図 調査区の位置

では、その数パーセントにも満たない弥生時代後期・古墳時代前期の資料を公にする。「松原-弥生・総論-」全8分冊の構成は前述(P1)の予定であり、平成11年度をもって全分冊を刊行する。

2 経過

松原遺跡の調査は、平成元年4月に開始された。開始当初は調査区約46000m²の全城(第2図)に何層もの遺物包含層が埋没していることは周知されていなかったが、平成元年夏には地表下約0.5~1mに古代集落址が、地表下2~4mに弥生中期集落址及び遺物包含層の存在が明らかとなった。折りしも、松原遺跡調査地点は長野インターチェンジ工事と盛土用土取り予定地の中間点に位置しており、工事上、早期着工の重要なエリアでもあった。県教委文化課および埋蔵文化財センターは、調査研究員の増強を決断すると伴に、日本道路公団、施行合同企業体との協議を進め、橋脚およびカルバートボックス部分の調査を優先し、工事エリア(第4図)に従って調査区を設定することになった。平成元年秋、長野電鉄河東線より西側の古代面の調査がほぼ終了したところ、調査区西端の地表下4~5mに埋没した旧河道の所在が判明する。当時、埋蔵文化財センターは、沖積地深く埋没する弥生~古代水田調査を石川条里遺跡で継続しており、低湿地遺跡への対応の困難さを熟知すると伴に、調査研究員はその調査方法について摸索していた。旧河道は松原西地区を蛇行することが明らかとなり、ボックス工事が急務となっていた旧河道地点を最優先に調査を進めることにした。特に旧河道SD101⑥区東地区(第3図C地点)では、工事との関係上10日間の調査となり、調査員と作業員は重機のバケットがかきあげた廃土から遺物をひろい集めた。SD100, 101の調査では、集落側斜面に多量の箱清水式土器の廃棄を確認して多大な成果を収めた。古墳時代前期・弥生時代後期集落面の調査は、旧河道の調査と併行して進められた。試掘の成果で、古墳時代前期・弥生時代後期の集落面は、松原西地区に限られることが明らかとなっていたため、長野盆地においては調査例がまだ数少ない箱清水式土器の廃棄を確認して多大な成果を収めた。古墳時代前期・弥生時代後期集落面の調査は、旧河道の調査と併行して進められた。試掘の成果で、古墳時代前期・弥生時代後期の集落面は、松原西地区に限られることが明らかとなっていたため、長野盆地においては調査例がまだ数少ない箱清水式土器の廃棄を確認して多大な成果を収めた。

松原遺跡の調査は、地表下1mに古代、2mに弥生中期、3~5mに何面かの縄文包含層を明らかにし、縄文、弥生中期、古代の拠点的集落址の姿が浮上がらせて平成3年、3年間に及ぶ調査を終了した。平成4年から開始された整理作業は、コンテナ7000箱の土器洗浄、注記、図面写真整理、先行して刊行する縄文編、古代編の刊行行務を整理担当1名体制で3年間行った。平成7年、松原遺跡弥生整理班が、開館まもない長野県立歴史館内の埋蔵文化財センター遺物整理室においてスタートする。縄文・古代担当の2名と弥生担当の2名で、整理作業は本格化した。平成7~9年の弥生班の整理作業は、コンテナ4000



第3図 調査進行図

箱の弥生中期土器の接合、実測、トレースを中核に作業が進められた。弥生時代遺物量のうち、弥生時代後期、古墳時代の遺物量は弥生全体の10%に満たない。本報告書は弥生時代中期の整理作業の狭間で刊行された。

3 体制

(1) 調査体制 調査体制は次の通りである。

① (財)長野県埋蔵文化財センター事務局

役職 年度	副理事長	常務理事	事務局長	総務部長	調査部長	総務部長補佐
平成元年度	伊藤万寿雄	塚原隆明	半田順計		笹沢 浩	
平成2年度	伊藤万寿雄	塚原隆明	塚原隆明	塚田次夫	小林秀夫	松本忠巳
平成7年度	田村 治夫		峯村忠司	西尾紀雄	小林秀夫	外谷 功
平成8年度	佐久間鉄四郎		青木 久	西尾紀雄	小林秀夫	外谷 功
平成9年度	佐久間鉄四郎		青木 久	山崎悦雄	小林秀夫	外谷 功

②長野調査事務所

役職 年度	所長	庶務部長	庶務部長補佐 庶務課長補佐	調査部長	担当調査課長
平成元年度	塚原隆明	半田順計	永田伸男	笹沢 浩	白田武正
平成2年度	峯村忠司	塚田次夫	松本忠巳	小林秀夫	宮下健司
平成7年度	小林秀夫		外谷 功		百瀬長秀
平成8年度	小林秀夫		外谷 功		百瀬長秀
平成9年度	小林秀夫		外谷 功		百瀬長秀

③(財)長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター

役職 年度	所長	副所長	管理部長補佐	調査部長	担当調査課長
平成10年度	佐久間鉄四郎	山崎悦男	宮島孝明	小林秀夫	百瀬長秀

④松原遺跡発掘調査体制（弥生後期～古墳前期面のみ）

調査班長 原 明芳

地区担当 上田典男〈東地区〉 青木一男〈西地区〉

担当調査研究員（弥生後期～古墳前期面のみ）

集落担当 原 明芳 青木一男 小林清人 岡沢康夫

河川担当

S D100 原 明芳 青木一男 小林清人 下島章裕

S D101 町田勝則 小林清人 寺内隆夫 下島浩伸 中平智昭

(2) 整理体制 整理体制は次の通りである

①松原遺跡整理作業体制（弥生後期～古墳前期分担のみ）

担当調査研究員 上田典男（平成4～6年） 青木一男（平成7～10年）

市川桂子（平成7～10年） 町田勝則（平成9～10年） 賢田 明（平成10年）

整理補助員

(写 真 室) 北島康子 小出紀彦

(復 元 室) 安東武子 小林タイ 松林節子 宮入さち 山岸隆男 内山美砂

北沢節子 中沢さか江 西川恵美子 西沢米子 長谷川征子 米田ちえ子

(遺物整理室) 浅井とし子 石田多美子 今井せつ子 丑山和江 岡田咲子 笠井すみ子

風間春芳 加藤周子 北沢三枝子 小林奈美江 近藤久子 滝沢久子

武田多加子 竹鼻多佳子 烏羽徳子 中川麻由美 中村るり子 野沢久子

細田あき子 堀内雅子 堀本香代子 三上義子 柳沢るり子 米山敏子

②執筆・作業分担

第VI部「弥生時代後期・古墳時代前期の調査」の編集は小林秀夫、百瀬長秀の指導の下、青木が行った。

執筆・作業分担は下記の通りである。

土屋 積 第3章2節3(2)、第4章4節

青木一男 第1章1節、2節2、第2章1～3節1～2(1)、4節1、3

第3章1節1～4(4)、2節1～3(1) 第4章1～3節、5節

市川桂子 第1章2節1、第2章4節2、写真図版作成

賢田 明 第3章2節3(3)

徳永哲秀 第4章6節、土器復元

西嶋 力 写真撮影、焼付

風間春芳 第2章3節2(2)(3)、第3章1節4(5)

③指導者・協力者

発掘調査・整理作業にあたり、下記の方々の御指導・御協力を得た。お名前を記して感謝したい。

青木和明 赤堀次郎 赤澤徳明 飯島哲也 石川日出志 石黒立人

伊丹徹 井上洋一 岩崎卓也 大島慎一 及川良彦 岡本孝之

尾見智志 風間栄一 加納俊介 川崎みどり 川村浩司 菊池芳朗

久々忠義 倉沢正幸 小林三郎 小林正春 小林正史 小山岳夫

坂井秀弥 笹森紀巳子 品田高志 助川明広 鈴木敏則 田口一郎

田島明人 立花実 千野浩 寺島孝典 栃木英道 直井雅尚

中司照世 中山誠二 西川修一 前島卓 松本完翠川泰弘

矢口忠良 矢島宏雄 山口明 山下誠一 若狭徹

長野市立博物館 長野市埋蔵文化財センター 更埴市立森将軍塚古墳館 (敬称略)

4 調査・整理方法

(1) 調査区の呼称方法

松原遺跡の調査は、調査区域が延長800m、総面積約46000m²あり、調査区を以下のように呼称した。

A. 東西地区区分呼称方法

調査区中央を分断する長野電鉄河東線を境界に、その東側を「松原東」、西側を「松原西」と呼称した。

イ. 工事エリア呼称方法（第4図）

「松原西」に展開する旧河道SD100、SD101では工事エリア毎に調査が進められたため、旧河道内の調査地点を工事エリアに従ってA～Eのアルファベットで呼称した（第4図）。

工事エリア	調査地点
「①-1」地区	A地点
「①-1・⑥」地区	B地点
「⑥ 東」地区	C地点
「①-2」地区	D地点
「②-1」地区	E地点

ウ. グリッド呼称方法（第5図）

グリッドの設定は、国土座標を利用して、「大々地区」→「大地区」→「中地区」の3段階に区分した。松原遺跡調査区全域にかかる200m×200mの方眼区画を設定し、これを大々地区とし、ローマ数字でI～VIII地区に区分した。この大々地区を40m×40mの25区画に分割した大地区とした。

大地区は、大々地区内をA～Yまでの大文字アルファベットで呼称し、大々地区の呼称との組み合せで「II A」というようにした。中地区は、大地区を8m×8mの25区画に分割し、1から20の算用数字で呼称し、大々、大地区の呼称との組み合わせで「II A 1」「II A 2」というように設定した。

（例）グリッドII A 1（第5図）

大々地区	200m単位方眼	ローマ数字	II
大地区	40m単位方眼	大文字アルファベット	A
中地区	8m単位方眼	算用数字	1

グリッドを用いた地区、地点の呼称方法としては、II A地区と呼称した場合、大々地区II地区内の特定40m方眼マス内をさすことになる。II A 1グリッドと呼称した場合、II地区の大グリッドII A地区（グリッド）内の特定8m方眼マス内をさすことになる。

（2）遺物の整理と管理

① 遺物台帳

出土遺物は洗浄後、注記が行われ『遺物台帳』に登録される。注記表記内容は下記の通りである。

松原遺跡遺跡記号「BMA」

- 「BMA Y K」…………弥生時代後期・遺構、包含層出土の遺物を示す。
- 「BMA Y C」…………弥生時代中期・遺構、包含層出土の遺物を示す。
- 「BMA K Z」…………古墳時代前期・遺構、包含層出土の遺物を示す。



第4図 工事エリアと調査地点の呼称

②遺物選別台帳

「遺物台帳」に登録された遺物は、木製品については保存処理工程作業から記録化作業へ、石製品・土製品については接合・修復工程作業から記録化作業が行われた。弥生時代後期・古墳時代前期の遺物量の98%を占める土器は、複合作業終了後データ化を行う個体を選別して「遺物選別台帳」に登録した。当台帳に登録された土器のナンバーを「土器登録ナンバー」と呼び、土器にラベルで表示をした。

土器登録ナンバーは、本来なら通し番号が個体識別に便利なわけであるが、膨大な量を整理しなくてはならない作業工程上の都合で、遺構毎にNo.1からふることにした。旧河道S D100、101出土遺物の登録については、弥生時代後期と古墳時代前期を分けた。古墳時代前期の遺物については頭文字にZをつけてZ1、Z2というように通しナンバーとした。弥生後期の甕、壺、高杯、鉢、有孔鉢については、K、B、T、H、Uというように器種別頭文字をナンバーの前に付けて器種毎に通しナンバーとした。

③土器実測

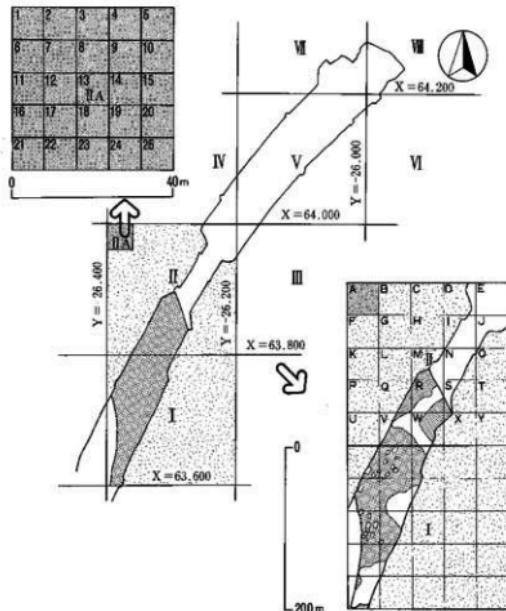
「遺物選別台帳」に登録された土器は、報告書図版に提示するものと、データ処理用に分けられる。土器実測はその8割を整理補助員5名で行い、その一部については（株）シン技術コンサル、（株）写真測図研究所に写真実測を委託した。整理補助員の実測作業習得にあたっては千野浩氏の協力があった。

④土器の補強・復元

土器の実測作業は形状および内外面の観察が必要なため、土器接合・補強終了後実施した。補強は、セメダイン社の「セメダインハイスクーパー5」、クレラ社の形状記憶樹脂「クラブレーン」、竹ひご等を用い、さらに、樹脂「ワーカブルレジュン」を充填して強度を高めることにした。実測終了後は、写真図版掲載個体について器形復元および古色仕上げを実施した。（徳永哲秀1995年「土器復元改良の試み—形状記憶樹脂とエポキシ樹脂を芯材、補強材として—」『長野県埋蔵文化財センター紀要4』参照）

⑤土器の管理

報告書作成に関わる土器の管理は、資料数が膨大なためコンテナに収納し「コンテナナンバー」と「土器登録ナンバー」で管理した。よって、コンテナに表示した土器のナンバーは報告書に記載された土器図版ナンバーではなく、土器登録ナンバーである。土器の検索用に『土器取納台帳』を作成している。『土器取納台帳』では、「土器登録ナンバー」と「報告書図版ナンバー」の照合ができるようにした。報告書から土器を検索する場合、報告書図版ナンバー→土器登録ナンバー→コンテナナンバーの順で検索が可能となる。



第5図 グリッド設定・呼称法

第2節 遺跡の概観

1 地形・層序

(1) 長野盆地の地形

長野盆地は南北長さ40km、東西幅8~10km、標高330~400mの紡錘形をした盆地である。西側は西部山地、東側は河東山地に明瞭に区分される。盆地の周辺は流入する中小河川の扇状地で埋められている。長野市街地の中心部は裾花扇状地上に発達し、盆地南部は犀川扇状地からなる。盆地の中央部を南西~北東に流れる千曲川は、それらの扇状地の発達に影響され自由蛇行している(第6図)。

千曲川氾濫原上には、自然堤防や旧河道の砂堆・中州などの微高地と旧河道・後背湿地などの微低地があり、微地形を形成している。千曲川は更埴市稻荷山・八幡付近で河床勾配を1/1000mと緩め、北西から北東方向へ流れの向きを変え、蛇行を始める。千曲川の左岸側には八幡・稻荷山・塩崎・平久保・旧篠ノ井(東篠ノ井・横田)、東福寺にかけて大規模な自然堤防が発達し、その西側には後背湿地が発達する。右岸側も雨宮・清野・松代・牧島の自然堤防とその東側に後背湿地となる湾入低地が形成されている。

(2) 遺跡周辺の地形

長野盆地東側の河東山地は壯年期の侵食地形を示す。河東山地から延びる主な尾根は北西~南東方向に延び、さらには枝状に小さな尾根が広がる。山麓線は入り組んでおり、千曲川氾濫原と山地との境界線はリニアス式海岸線のようである。松代付近の河東山地山麓部にはかなり急傾斜の扇状地が発達する。これらには崖錐性の堆積物の供給が多く扇状地堆積物とともに崖錐扇状地を形成する。松代町下町は、地蔵峠より流れ出る蛭川(閑屋川)・神田川によって形成された扇状地の末端部に発達した。

清野や東条、西条付近の山地において崖錐性の堆積物が押し出し地形を作る。松代町南東に位置する皆神山は標高659m、比高250mの更新世中期の溶岩円頂丘である。千曲川右岸は氾濫原であり清野、松代、牧島には道島・猪島・柳島・牧島など島のつく地名が多い。この氾濫原はやや高い自然堤防I群とやや低い自然堤防II群、後背湿地、旧河道に区分される(第7図)。

清野付近は妻女山と離山の間に位置し、山脚は半円状の円弧を描く。ここには山沿いに後背湿地、その北側に大規模な自然堤防が見られる。後背湿地はかつて排水不良の湿田で蓮田であった。自然堤防は明瞭な旧河道を境にI群とII群に区分できる。II群は千曲川に近い地域に発達する。I群とII群の比高差は最大約1.5mである。自然堤防の中の旧河道部分も砂質の土壤からなり、畑として利用されている。松代町岩野は薬師山の北側の山かけに洪水を避けて立



第6図 長野盆地の地形(「中部地方I」赤羽・花岡1988に加筆)

地する中州集落である。

松代付近の低地は、ほぼ長野電鉄河東線より千曲川寄りに位置する。松代と東寺尾を結ぶ線より東に旧河道ではなく、千曲川の東側への湾入はこの辺りまでであった。海津城はかつて千曲川に臨んでおり、江戸時代に大がかりな人力による流路変更が行われた。旧河道は百間堀と呼ばれ、現在まで残る。また、神田川沿いの水田地も旧河道である。神田川は平成6年に蛭川を経ずに直接千曲川へ流れ込むような直線的河川に改修された。

松原遺跡は北側を金井山、南側を愛宕山で囲まれた千曲川右岸の自然堤防上に立地し、西側は蛭川によって削られている。この松原自然堤防（寺尾自然堤防とも呼ばれていた）は、蛭川の東側の自然堤防I群と西側の自然堤防II群に区分される。I群とII群の比高差は最大約1.5mである。現地表面での帶状の凹凸や等高線の様子は繩文時代以来の地形形成を反映していることが分かってきた。例えば現在山沿いに用水が流れで帶状に低くなっている部分は古代までここに流路があった場所である。蛭川と直交する帶状の凹地の一部は地表面下1mに礫が分布し少なくとも古代に河道であったことが確認された（長野市教育委員会1993）。また弥生中期の蛇行河川の跡は等高線と一致しているように見える。現地形が出来上がったのは中世頃である。自然堤防上は桑畑、長芋栽培が行われており、近年果樹園も増加している。西寺尾集落は自然堤防II群の中州上標高351m前後の場所に立地する。蛭川は東寺尾で藤沢川を合流し、その下流で自然堤防を大きく侵食しながら千曲川に流れ込む。合流地点より上流では天井川が発達し、周囲に低湿地を形成する。

更埴橋と関崎橋南方の牧島付近の低地は、小島田・牧島・大室の集落を取り巻くように湾曲している。この低地は少なくとも2本の旧河道が明瞭に認められる。旧河道は水田として利用されていたが、近年になって畠へ転換されるが多くなってきていている。金井池も旧河道の跡で千曲川の水位が上がり水が噴き出すといわれている。旧関東枝街道（旧前橋街道）は湾曲した自然堤防上を通らず、松代一烏打峠一大室の直線的なルートであったが、大正5年に山麓を通じる道につけかえられた。明治以前には千曲川の流路を反映するように東寺尾・柴は埴科郡、牧島・小島田は更級郡、大室は高井郡に属していた。

松代町柴は千曲川に向かって突き出した金井山の突端にある標高349m前後の場所に立地する紡錘形をした中洲集落である。水田が無く、大部分が蔬菜地で、金井池の水を灌漑に利用していた。微高地はあるが、対岸の小島田花立集落よりは2m程度低いので、堤防が出来る以前は洪水の際にも集落背後の旧河道の微凹地に湛水した。集落の立地としては、川が直接ぶつかりそうな場所は避ける場合が多いが、柴集落を取り囲むように千曲川は曲がりながら流れている。松代藩祖真田信之の隠居所が柴にあった。

松代町小島田・牧島は、更埴橋下流の千曲川の水術部に面した中洲上標高348mの場所に立地する集落で、集落域の長軸が千曲川の流れと一致する楕円形である。南には半円を描いて旧河道の低地があり、水田が開かれている。集落中央部の神社の辺りが、最も標高が高い。集落の耕地の大半は畑である。旧河道の低地では陸稲を作っていたが、昭和30年代になって井戸をいくつも掘って水田化するようになった。

松代町大室は小規模な自然堤防I群上に立地する。標高は346.5mで自然堤防II群との比高差は最大約1.5mである。洪水に備え家屋は80cm程度の石積みをしたり、味噌蔵は1.8m程の間知を築いてあり、水辺の集落景観を残している。

(3) 調査地の層序

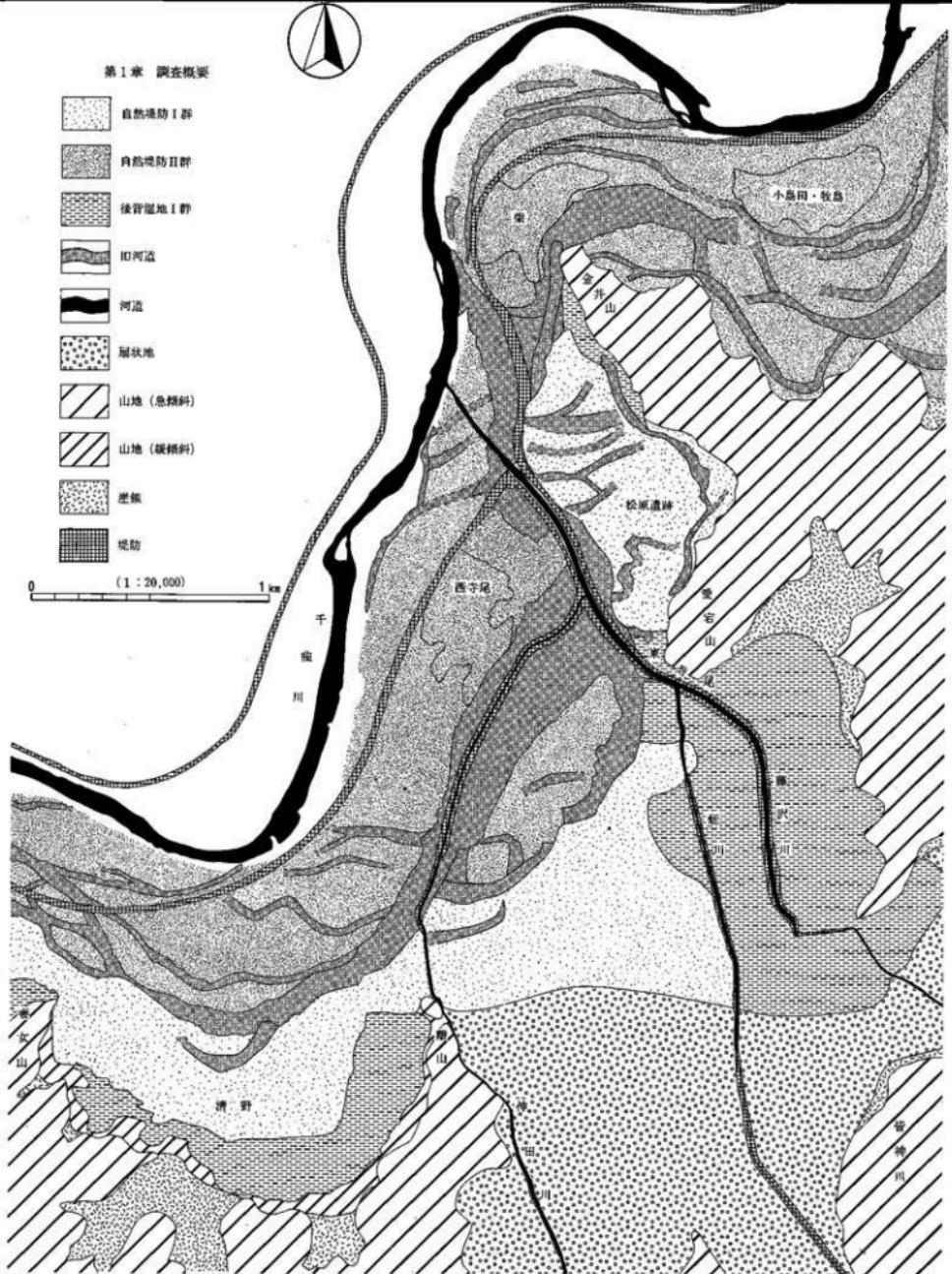
発掘調査地の堆積物は粒度の違いにより上部層と下部層の2つに分けられる。これらはさらに色調、粒度、遺物包含の有無によってI層からXIII層に細分した。上部層はI層からVI層、下部層はVII層からXIII層である。上部層は全体的に砂質であり下部層は粘土質である。なおI層からVII層までは調査中に基本層序として確定されたものであり、VIII層より下位は整理作業中に区分したものである（第8図）。

第1章 調査概要



- 自然堤防・群
Natural levee - Group
- 自然堤防丘群
Natural levee hill group
- 後背堤地帯
Post-levee area
- 旧河道
Old riverbed
- 河道
River channel
- 扇状地
Fan-shaped land
- 山地（急傾斜）
Mountain (steep slope)
- 山地（緩傾斜）
Mountain (gentle slope)
- 崖壁
Cliff
- 堤防
Dike

0 (1 : 20,000) 1 km

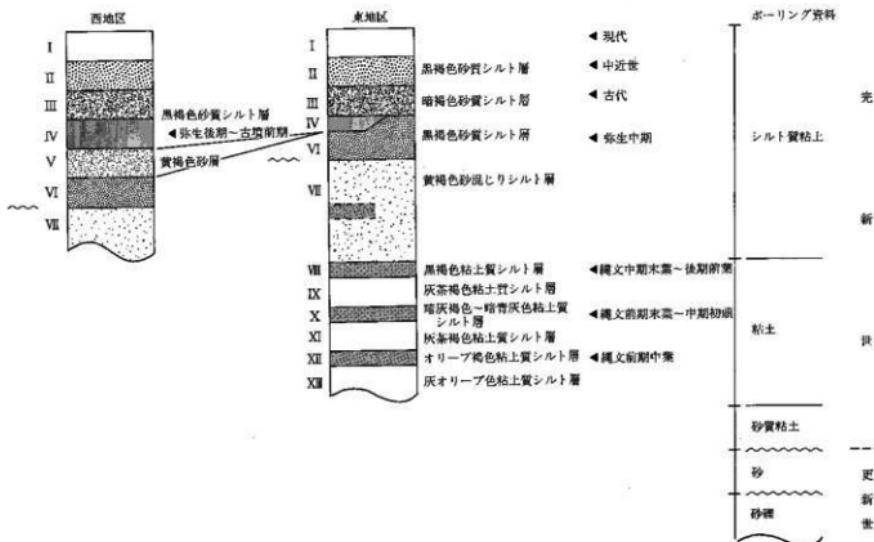


第7図 遺跡周辺の地形区分図

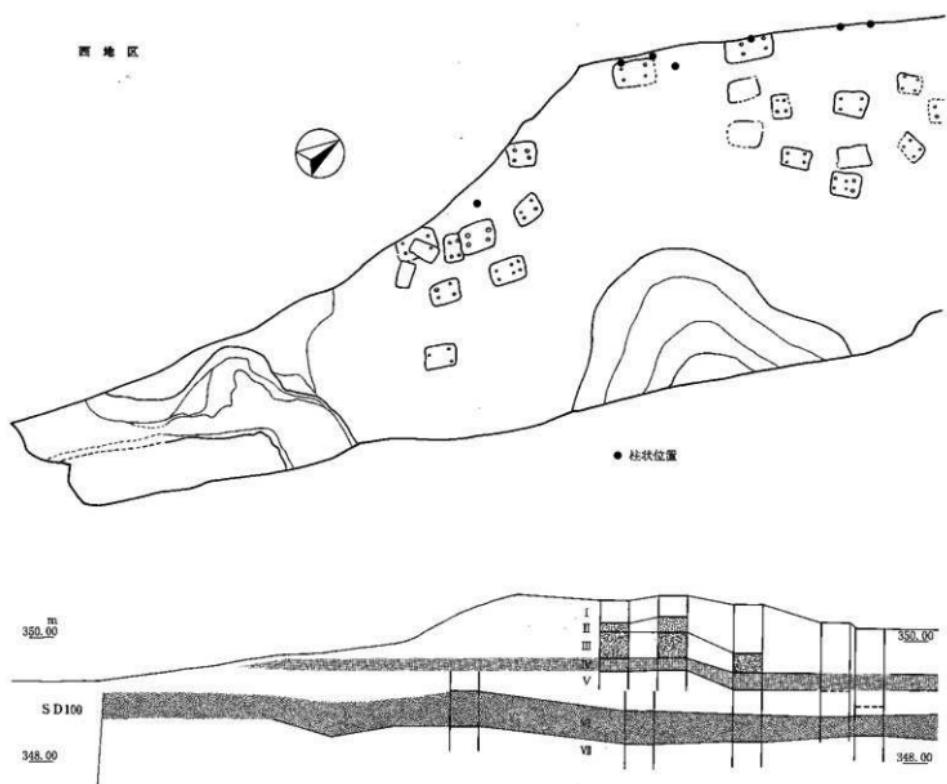
I層は層厚20~30cmの茶褐色砂質シルト層で現耕作土である。II層は層厚20cmの黒褐色砂質シルト層で中・近世の遺物を包含する。III層は層厚20~40cmの暗褐色砂質シルト層で古代の遺物包含層である。IV層は層厚20cmの黒褐色砂質シルト層で古墳・弥生後期の遺物包含層である。V層は層厚20~60cmの黄褐色砂層で無遺物層である。松原東地区にはIV層の一部とV層は欠如している。VI層は層厚20~60cmの黒褐色砂質シルト層で弥生中期の遺物包含層である。VII層は層厚80~140cmの黄褐色砂混じりシルト層で無遺物層である。淡褐色のバンドを一部で挟むこともあるが層準として認められないでVII層で一括した。松原西地区では記録がないためVII層以下に相当する地層については不明である。VIII層は層厚10~40cmの黒褐色粘土質シルト層で繩文中期末葉から後期前葉の遺物包含層である。IX層は層厚20~50cmの灰茶褐色粘土質シルト層である。X層は層厚40~50cmの暗灰褐色から暗青灰色の粘土質シルト層で繩文前期末葉から中期初頭の遺物包含層である。XI層は層厚40cmの灰茶褐色粘土質シルト層である。XII層は層厚20~30cmのオリーブ褐色粘土質シルト層で繩文前期中葉の遺物包含層である。XIII層は層厚20cm+の灰オリーブ色粘土質シルト層である。青色やオリーブ色味を帯びるのは地下水の影響と考えられる。

(4) ポーリングコアの層序

昭和59年の道路公団によるポーリング調査の第一次土質調査報告書によると、松原遺跡内ではB1-41、B1-42、Ss1-3の3本の機械ポーリングがおこなわれている。ポーリング位置は、B1-41はおよそII-25グリッド付近、B1-42はVH-16グリッド付近、Ss1-3はVIIY-25グリッド付近である(第9図)。B1-41は深度37.25mのコアで深度5.4mまでは上位より砂質粘土、シルト質粘土、砂混じり粘土からなる。深度5.4m~6.5mはシルト質の砂層からなり、深度6.5m以下は礫層からなる。深

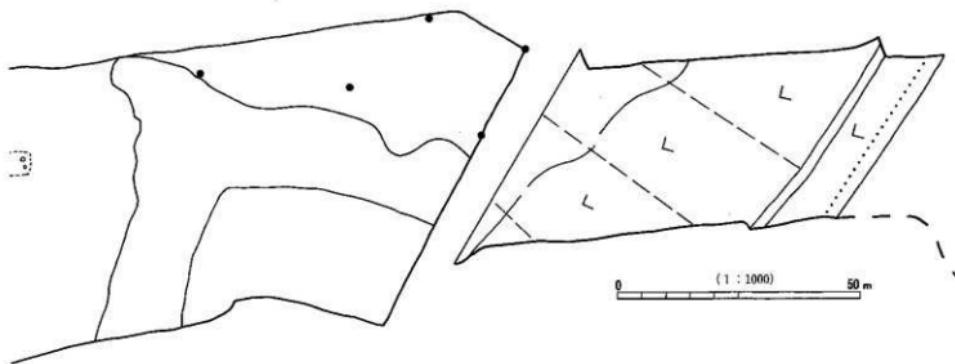


第8図 基本層序

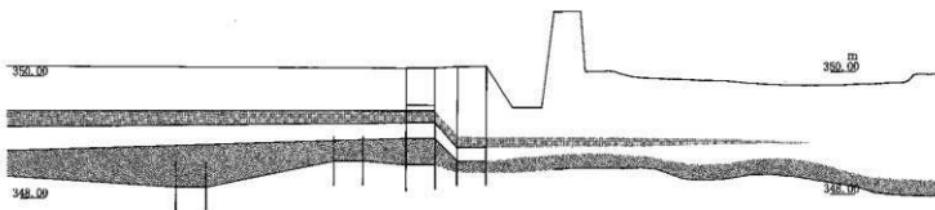


度16.35m以下では再びシルト質粘土からなり、腐植物を混入する層準もある。深度26.5m以下では砂層、深度28.7m以下で砂礫層となる。B 1 - 42は深度10.45mのコアで、深度7.4mまでは上位よりシルト質粘土、粘土、砂質シルト、シルト混じり細粒砂からなる。深度7.4m以下では砂礫層からなる。Ss1-3は詳しい記載はない。

2本のボーリングとも上部はシルト・粘土などの細粒物質からなり、深度6~7m以下は砂礫などの粗粒物質からなる。またB 1 - 41では再び細粒物質と粗粒物質の堆積が繰り返されることが分かった。急激な岩相の変化は堆積環境の変化を表している。細粒物質は小規模な洪水の堆積物、粗粒物質は大規模な洪

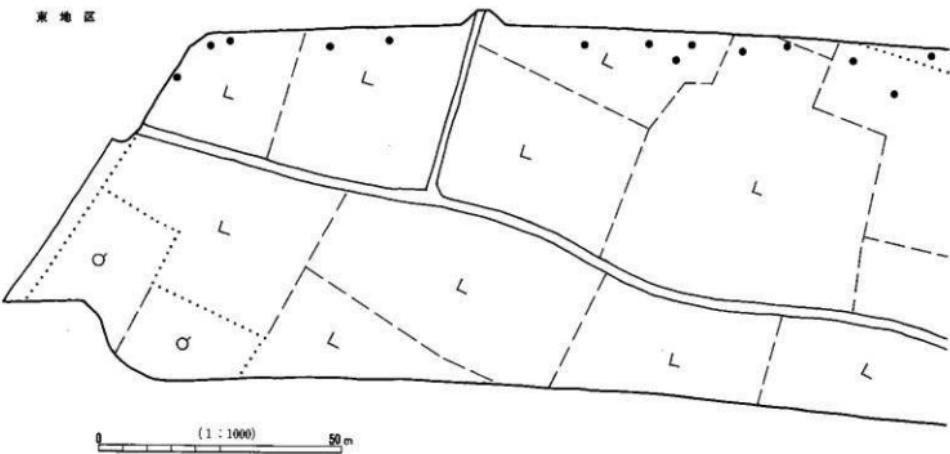


- I 現耕作土
- II 中近世遺物包含層
- III 古代遺物包含層
- IV 弥生時代後期-古墳時代前期遺物包含層
- V 砂層
- VI 弥生時代中期遺物包含層
- VII シルト層



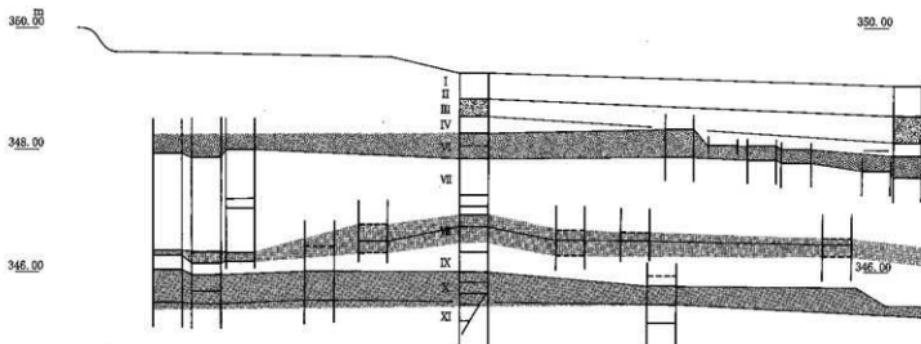
第9図 柱状断面図（1）

水の堆積物としてとらえることができる。このボーリング調査では¹⁴C年代測定や年代の指標となる火山灰層の検出などが行われていないので明確なことは言えないが、更新世と完新世の境界付近で海岸に接する沖積低地では同じ時期に粗粒物質から細粒物質への岩相変化がみられること（井関1962, 1983）、内陸盆地では諏訪湖の湖底堆積物に認められる岩相変化（安間ほか1990）や長野盆地北部の延徳低地のボーリングコアに認められる岩相変化（赤羽1995）が報告されている。このことから深度6～7mの急激な岩相変化が見られる層準がほぼ更新世と完新世の境ではないかと考えられる。

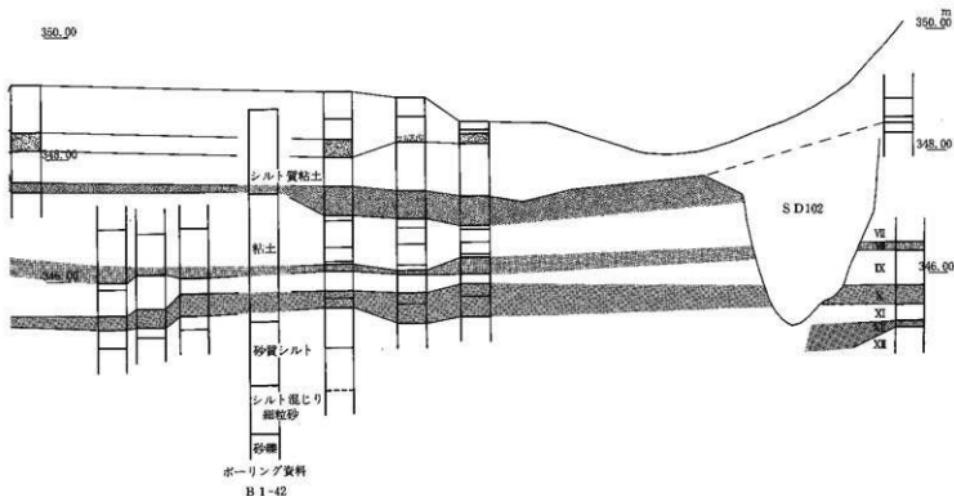
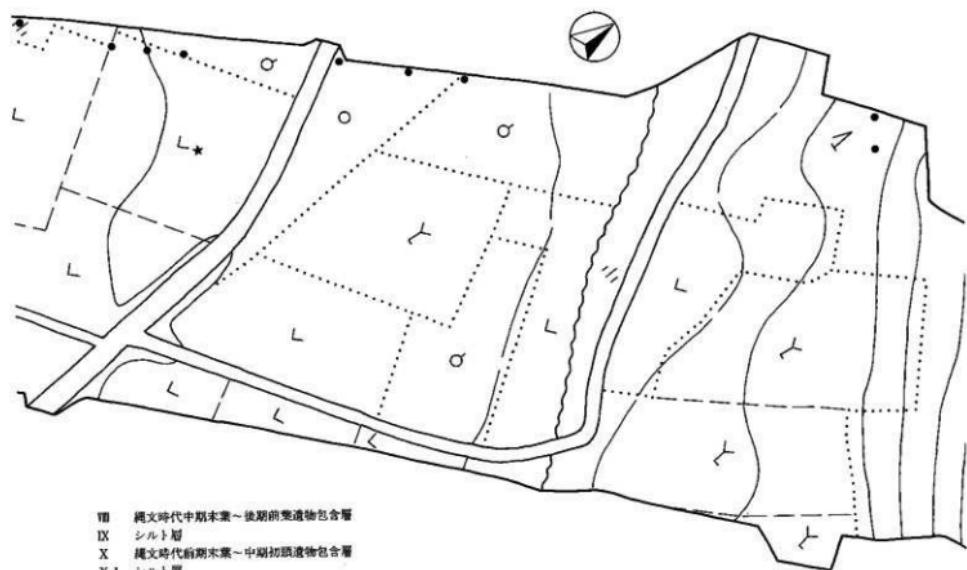


● 柱状位置

- I 現耕作土
- II 中近世遺物包含層
- III 古代遺物包含層
- IV 弥生時代後期～古墳時代前期遺物包含層
- V 砂層
- VI 弥生時代中期遺物包含層
- VII シルト層



第9図 柱状断面図(2)



2 歴史的接近

(1) 長野盆地南部－松代地区－

松原遺跡が所在する長野市松代町は、長野盆地の南部に位置し、歴史的には古代埴科郡英多郷に比定される小空間である（第10図）。当地域における弥生時代、古墳時代の歴史的景観は、長野市埋蔵文化財センター等の調査により明らかになりつつある。当該期の中核遺跡は河東山地との間に後背湿地をもつ自然堤防上や、前面に湿地をもつ崖錐端部に展開するが（第7図）、自然堤防上では、大室（第10図-33）・松原（35）・四ツ屋（41）・崖錐端部では屋地（38）・中条（39）遺跡等があり、調査が行われている。

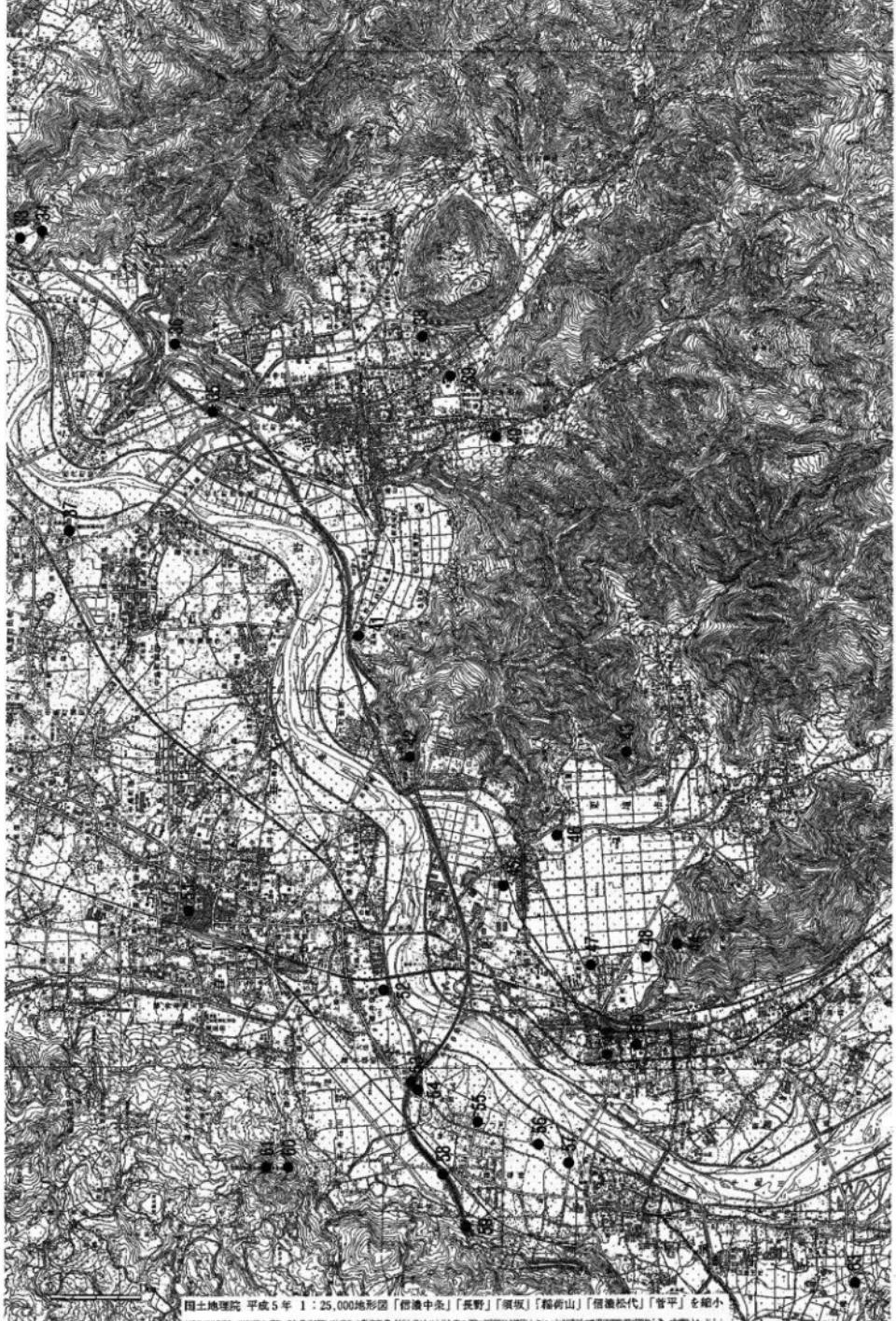
長野盆地南部の松代地域における農耕社会定着期の痕跡については、縄文晩期～弥生中期前半の遺物が、四ツ屋・中村（40）、松原等に散見されるが、集落は確認できない。弥生中期後半栗林期には、松原遺跡に大規模な集落景観が確認できるが、他遺跡では当該期のムラは未発見である。弥生時代後期前半の吉田期には、松原集落は縮小傾向を示し、小河川蛭川沿いの松原・中条・屋地遺跡に集落が拡散する。後期中葉以降の箱清水期には、四ツ屋・大室にも集落が出現する。墳墓では、3世紀後半代の北平1号墳（36）が松原集落から比高差150mの山頂に構築される。古墳時代前期の遺物は中条、四ツ屋に確認されるが詳細は明らかでない。前期古墳は確認されていないが、自然堤防上の四ツ屋遺跡では、円筒埴輪と初期須恵器を併った低墳丘の円墳が確認されている（小林1976年）。

松原遺跡が弥生中期栗林期の拠点集落であることは高速道建設に伴う県埋文センターの調査が明らかにした。（長野県埋文センター1989～1991）。以後、周辺開発に伴って、長野市埋文センターが多くの地点で調査を行っており（長野市埋文センター1991、1993、1994）、栗林期の集落範囲を明らかにしてきた（第4図）。ただし、弥生時代後期～古墳時代前期に関する調査例はなく、当該期の松原遺跡はごく限られた空間に集落が展開していることを推測させる。

〈文献・報告書〉

遺跡名	遺跡	著者・発行者	年度	文献・報告書
35 a	松原	長野県埋文センター	1989～1991	『長野県埋蔵文化財センター 年報』6～8
35 b		長野市埋文センター	1991	『松原遺跡－長野市農業協同組合兼荷場施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
35 c		長野市埋文センター	1993	『松原遺跡II－市道松代東111号線地点一』
35 d		長野市埋文センター	1993	『松原遺跡III－主要地方道中野更埴線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
35 e		長野市埋文センター	1994	『松原遺跡IV－市道松代東63号線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一』
33	大室	森 崎 稔	1978	『更科埴科地方誌』第二巻 原始・古代・中世編
36	北平	長野県埋文センター	1996	『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書7 大尾山古墳群・北平1号墳』
38 a	屋地	日本縮量史研究所	1977	『長野市松代 屋地遺跡』
38 b		長野市教育委員会	1990	『屋地遺跡II－国補中小河川蛭川改修事業地点一』
39	中条	長野市教育委員会	1989	『中条遺跡－長野県松代高等学校体育館建設事業地点一』
40	中村	長野市教育委員会	1978	『中村遺跡－松代西条小学校地点遺跡の測量報告一』
41 a	四ツ屋	竹内 三千夫	1974	『長野市松代町清野四ツ屋遺跡の古代十郎器』『信濃』26-2
41 b		小林 秀夫	1976	『長野市四ツ屋特殊造形の遺物』『信濃考古』36
41 c		長野市教育委員会	1994	『四ツ屋遺跡（第1～3次）・鶴岡遺跡・塩尻遺跡群（3）』

第10図 長野盆地西部の地盤分布図



(2) 長野盆地の歴史的位置

中部高地でも長野県の北東部に位置する長野盆地は、現在の更埴市、長野市付近から中野市、飯山市付近までの直線距離48kmに及ぶ盆地で、盆地中央を流れる千曲川は新潟県で信濃川となり日本海に流れ込む。古代社会においては、更級、埴科、上水内、下水内、上高井、下高井の6郡に分割されている。

弥生時代中期から古墳時代前期の長野盆地については、ここ10年の間、埋蔵文化財の記録保存の進展とともに多くの集落、墳墓の様相、時間的位置づけをするために充分な資料が蓄積されてきた。当該期の長野盆地は土器の地域色から①長野盆地南部、②長野盆地北西部、③長野盆地北部の3ブロックに分けて考えることが可能である。①は現在の更埴市、長野市南部を中核とし、千曲川が形成した自然堤防上に集落が展開する。代表的な集落としては長野市・樅田（第11図-27）、春山（28）、川田条里（29）、松原（35）、更埴市・生仁（46）、五輪堂（50）、長野市・塩崎、篠ノ井遺跡群（52～56）、石川条里（58）、上山田町・御屋敷（65）、坂城町・塚田（67）遺跡等がある。②は現在の長野市北西部を中核とし、広大な扇状地面ならびに千曲川が形成した自然堤防上に集落が展開する。代表的な集落としては浅川扇状地上に位置する浅川扇状地遺跡群と、自然堤防上に位置する小島・柳原遺跡群とがあり、扇状地上の遺跡に長野市・牛札バイパス（20）、神楽橋（21）、樅田・徳間（22）、吉田高校グランド（23）、本村東沖（24）遺跡等が、自然堤防上の遺跡に中俣（18）、水内坐一元神社（18）、小島境（19）遺跡等が位置づけられる。③は現在の中野市、飯山市を中核とし、広大な扇状地面ならびに低丘陵上に集落が展開する。代表的な集落としては飯山市・上野（1）、尾崎・柳町（2）、小泉（3）、東長峰（4）、須多ヶ峯（6）、中野市・栗林（11）、安源寺（12）、七瀬（13）、西条・岩船（14）、間山（16）遺跡等が位置づけられる。当地域は、中野市・飯山市域の低丘陵（長峰丘陵）に集落域が密集する傾向にあり、集落立地の景観が長野盆地南部とは異なる。

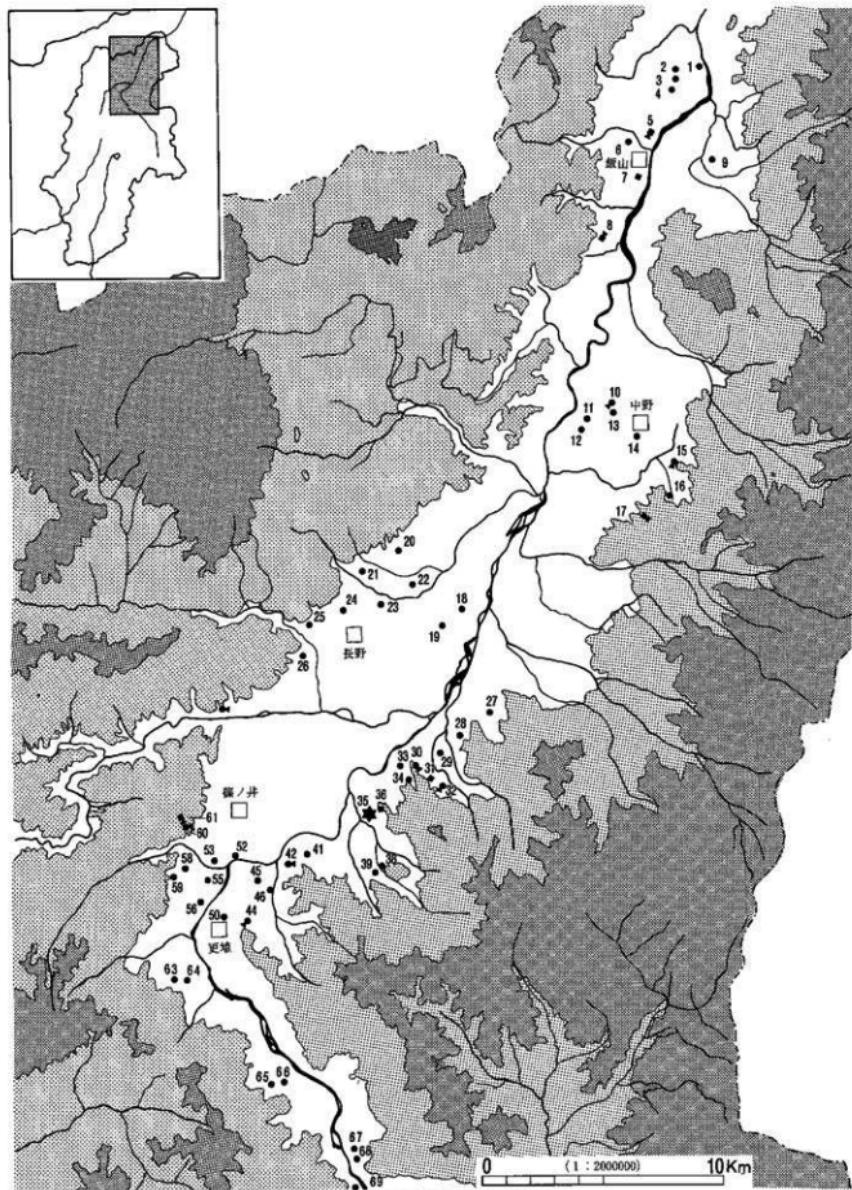
長野盆地の3ブロックの地域には、いずれも弥生時代中期後半段階になると拠点となる集落が出現する。長野盆地北部の小泉、上野、栗林遺跡、長野盆地北西部の樅田・徳間、中俣遺跡、長野盆地南部の松原、樅田、塩崎遺跡群等が該当する。当集落域が各地域において低湿地の水田開発を進める拠点となつたことは言うまでもないが、大陸系磨製石器の生産と流通というシステムの中で分業化を計り、栗林式土器様式圏として、北陸諸地域、東北南部地域、関東地域との交流関係の拠点となっていたことは充分想像できる。

弥生時代後期の箱清水様式に至ると、各々の地域で集落は拡大の方向にあり、小集落が散在化する。長野盆地北部と北西部には後期中葉から北陸北東部系土器が箱清水系土器と共に伴うが、長野盆地南部には少ない。一方、箱清水式土器の型式変化は、長野盆地北部は長野盆地南部に比べて保守的であり、伝統的な型式要素、文様構成が残存していく傾向にある。

3つのブロックが共通した動きをみせるのは、畿内庄内式期に併行する御屋敷期で、東海系土器群の登場、北平1号墳（36）等の方形志向の墳丘墓や、前方後方墳の出現によって箱清水式土器様式をもつ社会は解体する。古墳時代前期には当地域最古相とされる前方後方墳が出現する。北部に法伝寺2号古墳（5）、勘介山古墳（8）、蟹沢古墳（17）、南部に姫塚古墳（61）があげられる。一方、前方後方墳の出現と前後して、北部に高遠山古墳（15）、南部に和田東山3号墳（32）、森將軍塚古墳（44）といった前方後円墳が出現する。今日の研究成果では、当地域での古墳の出現が前方後方墳から前方後円墳へという単純なモデル化では理解し難い状況にある。

(3) 中部高地型土器様式圏

栗林・箱清水式土器様式は、千曲川・犀川水系に位置する長野、上田、佐久、松本、諏訪盆地に展開す



第11図 長野盆地の遺跡分布図

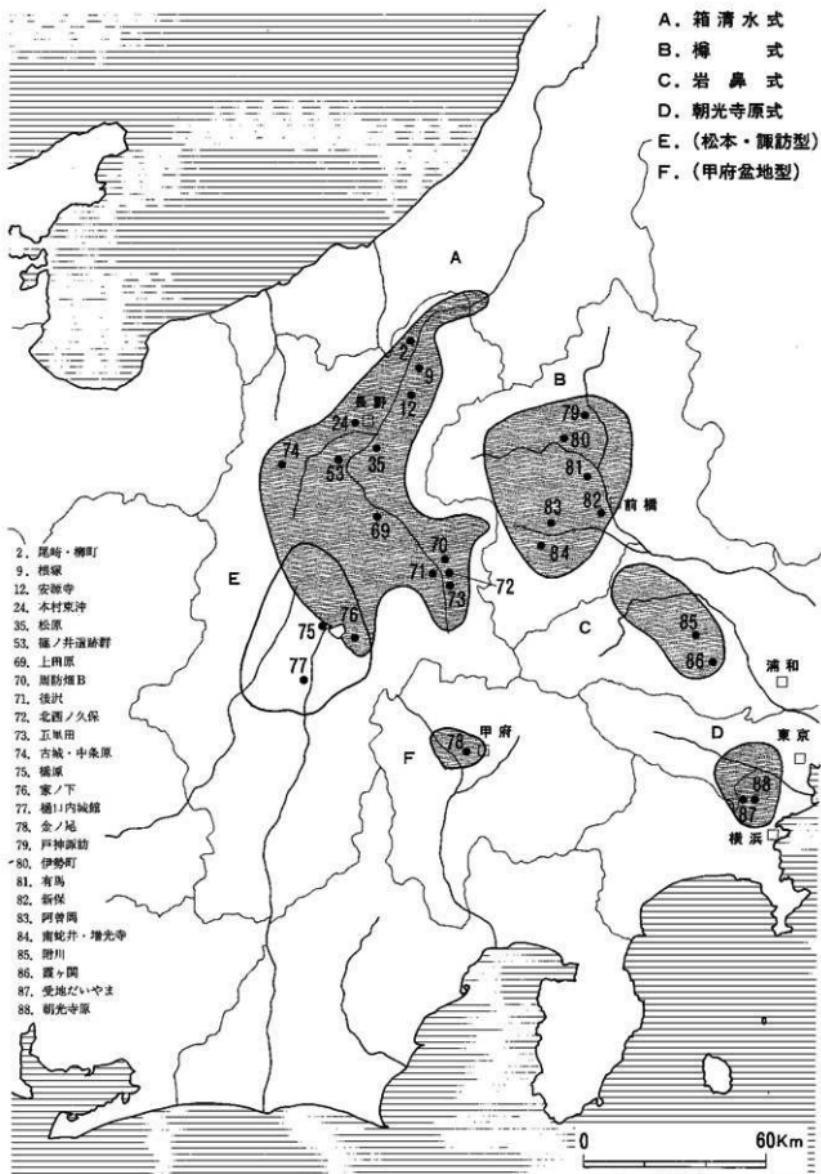
る土器様式で、器を飾る文様に櫛描文を用い、その施文方法が中部高地型をとることに大きな特色がある。長野盆地は千曲川の下流域にあたり、上流域に佐久盆地、中流域に上田盆地の諸遺跡が展開する。各集落は、水系を通じてネットワーク化が計られていたものと思われる。

一方、現在の行政区画を超えて考えると、中部高地型の櫛描文を用いる土器様式として、中期には北関東の竜見町式、後期には北関東の樽式、岩鼻式、南関東の朝光寺原式、甲府盆地の信州系と呼ばれる様式等が千曲川流域と接して展開している。中部高地型櫛描文を用いるこれらの様式圈を、土器に込められた歴史的背景を評価し「中部高地型土器様式圈」としてとらえる。岡本孝之は当様式圈を次のように説明する。「箱清水式土器は、長野・山梨両県だけに分布するのではなく、同系のものは群馬県の樽式土器、埼玉県の岩鼻式土器や神奈川県の朝光寺原式土器などがある。これらは単に文化が長野県から影響されたとみるべきものではなく、箱清水式土器は東方の樽・岩鼻・朝光寺原式土器と一体となって成立しているのである。」とし、「その姿勢の背景に縄文文化の伝統をみてとることができる」とする(岡本1993年)。岡本の中部高地型土器様式圈のとらえ方を評価しつつ、交易ネットワークでは、西日本日本海側ルートとも結びついていたであろう当様式圈の姿を想定しておきたい。

中部高地型土器様式圈の弥生時代後期末～庄内式土器併行期には、長野県木島平村根塚遺跡(9)の鉄剣、同上田市上田原遺跡(69)の鉄矛、群馬県有馬遺跡(81)の鉄剣等、墳墓に鉄剣の副葬がめだち、墓の形態も方形周溝墓ではなく、円形周溝墓を特徴とする。また、鉗を鉄製におきかえた鍛造曲げ輪造りの帶状円環型鉄鉗が同様式圈内に認められ、墓に副葬されることが多い。長野県中野市西条・岩船遺跡(14)の後期前半の墳墓から出土した400点のガラス小玉を評価するならば、鉄器および装身具等を日本海ルートで入手できる窓口が同土器様式圈には存在し、独自な祭祀スタイルをもった地域集団が存在していたものと見たい。その地域色は、中期栗林式様式の延長にあったが、古墳時代前期に崩壊過程へ向かう。

〈文献・報告書〉

遺跡No	遺跡	著者・発行者	年度	文献・報告書
1	上野	飯山市教育委員会	1990	『小沼湯池バイパス関係道路発掘調査報告』上野遺跡・大森崎遺跡
2 a	柳町	飯山市教育委員会	1995	『柳町遺跡』
2 b		飯山市教育委員会	1996	『上野町・柳町遺跡』
3	小泉	飯山市教育委員会	1995	『小泉弥生時代道路』
4	東長峰	長野県史刊行会	1982	『長野県史 考古資料編』全1巻(2) 主要遺跡(北・東信編)
6	須多ヶ堀	飯山市教育委員会	1995	『須多ヶ堀遺跡一帯庶ふるさと農道緊急整備事業に伴う発掘調査』
7	法伝寺2号墳	飯山市教育委員会	1997	『法伝寺2号墳』
8	勘介山	長野県史刊行会	1982	『長野県史 考古資料編』全1巻(2) 主要遺跡(北・東信編)
11	栗林	長野県埋文センター	1994	『県道中野栗野線バイパス志賀中野有料道路埋蔵文化財発掘調査報告書』 七瀬遺跡・栗林遺跡
12 a	安源寺	中野市教育委員会	1987	『安源寺山』
12 b		中野市教育委員会	1995	『安源寺遺跡 中野市西部アイサービスセンター建設用地内』
13	七瀬	長野県埋文センター	1994	『県道中野栗野線バイパス志賀中野有料道路埋蔵文化財発掘調査報告書』 七瀬遺跡・栗林遺跡
14	西条・岩船	中野市教育委員会	1997	『西条・岩船遺跡発掘調査報告書』
15	高遠山	長野県史刊行会	1982	『長野県史 考古資料編』全1巻(2) 主要遺跡(北・東信編)
16	間山	中野市教育委員会	1993	『間山田』
17	蟹沢	長野県史刊行会	1982	『長野県史 考古資料編』全1巻(2) 主要遺跡(北・東信編)



第12図 中部高地型土器様式図

18 a	中俣	長野市埋文センター	1991	『小島柳原遺跡群 仲俣遺跡・浅川層状遺跡群 拝鐘遺跡・猿田遺跡』
18	水内坐一元神社	長野市埋文センター	1980	『三輪遺跡・付水内坐一元神社遺跡』
19	小島境	千曲川水系古代文化研究所	1984	『第5回 三重県シンポジウム 古墳出現期の地域性』
20 a	牛札バイパス	長野市埋文センター	1982	『浅川層状地遺跡群・牛札バイパスA・E地点遺跡』
20 b		長野市埋文センター	1986	『浅川層状地遺跡群・牛札バイパスB・C・D地点遺跡』
21	神楽橋	長野県史刊行会	1988	『長野県史 考古資料編』全1巻(4) 遺跡・遺物
22 a	稻田・猪間	長野市埋文センター	1980	『四ヶ星遺跡(第1~3次)・猪間遺跡・塙崎遺跡群(3)』
22 b		長野市埋文センター	1992	『浅川層状地遺跡群・二ツ宮遺跡・本郷遺跡・柳田遺跡・相添遺跡』
23	吉田高校	長野市埋文センター	1987	『長野吉田高校グランド遺跡』
24 a	本村東沖	長野市教育委員会	1993	『浅川層状地遺跡群 本村東沖遺跡・長野高等学校校舎改築に伴う発掘調査報告書』
27 a b	櫻田	長野県埋文センター	1991-1992	『長野県埋藏文化財センター 年報7』『年報8』
28	春山	長野県埋文センター	1991	『長野県埋藏文化財センター 年報7』
29 a b	川田条里	長野県埋文センター	1990-1991	『長野県埋藏文化財センター 年報6』『年報7』
32	和田東山古墳群	長野市教育委員会	1995	『和田東山古墳群一和田東山3号墳発掘調査概報』
36	北平1号墳	長野県埋文センター	1996	『上信越自動車道埋藏文化財発掘調査報告書7 大星山古墳群・北平1号墳』
44 a	森将軍塚古墳	更埴市教育委員会	1973	『長野県森将軍塚古墳』
44 b		更埴市教育委員会	1992	『史跡 森将軍塚古墳-保存整備事業発掘調査報告書』
46 a	生仁	更埴市教育委員会	1969	『生仁』
46 b		更埴市教育委員会	1989	『長野県更埴市 生仁遺跡III・県宮雨宮地区漏水防除事業に伴う発掘調査報告書』
50 a	五輪堂	更埴市教育委員会	1987	『更埴市栗佐遺跡群五輪堂遺跡IV-長野県屋代南高等学校特別教室棟建設に伴う発掘調査報告書』
50 b		更埴市教育委員会	1990	『更埴市栗佐遺跡群五輪堂遺跡III-屋代南高校改築に伴う発掘調査報告書』
53 a	篠ノ井	長野市教育委員会	1980	『篠ノ井遺跡群-大規模自転車道地點遺跡の調査報告書』
53 b		長野市教育委員会	1989	『篠ノ井遺跡群II-市道山崎西猫線地點』
53 c		長野市教育委員会	1990	『篠ノ井遺跡群III-中電北信坂城線鐵塔地點・長野市青塙崎体育馆地點』
53 d		長野市教育委員会	1992	『篠ノ井遺跡群(4)-聖川堤防地點』
55	塙崎小学校	長野市教育委員会	1979	『塙崎遺跡群-塙崎小学校地點遺跡 第2次調査報告書』
56 a	塙崎	長野市埋文センター	1991	『塙崎遺跡群(6)-石川条里遺跡(5)』
56 b		長野市教育委員会	1987	『塙崎遺跡 V 斎屋敷遺跡一角間地区市道改良事業地點』
56 c		長野市教育委員会	1991	『塙崎遺跡群(6)-塙崎遺跡群市道篠ノ井南253号線地點・石川条里遺跡(5)-石川条里遺跡消防塙崎分署地點』
58 a	石川条里	長野市教育委員会	1991	『石川条里遺跡(6)-篠ノ井西部地区墓葬場整備事業に伴う埋藏文化財発掘調査報告書』
58 b		長野県埋文センター	1997	『中央自動車道長野線埋藏文化財発掘調査報告書15-石川条里遺跡』
65	御屋敷	長野県史刊行会	1982	『長野県史 考古資料編』全1巻(2) 主要遺跡(北・東信編)
67	塙田	坂城町教育委員会	1995	『南条遺跡群 塙田遺跡II』
69	上田原	上田市教育委員会	1996	『上田原遺跡』

第2章 遺跡

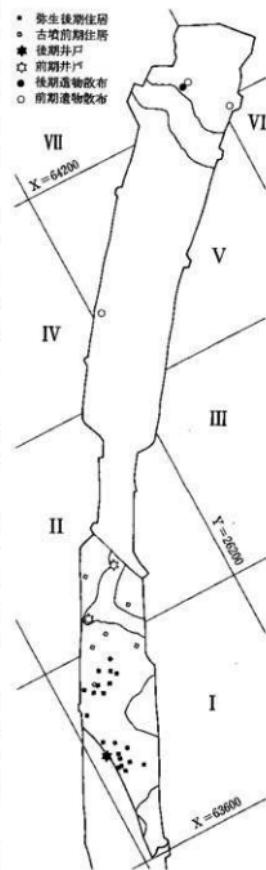
第1節 遺構の概要

松原遺跡における弥生時代後期および古墳時代前期の集落は、高速道路建設に伴う調査以前において周知されることはなかった。高速道路建設に伴う長野県埋蔵文化財センターの調査区内では、字高畠地籍の西地区（大々グリッドI・II地区）のみに弥生時代後期・古墳時代前期集落が存在した（第13図）。高速道路地点に接した長野市埋蔵文化財センターの調査地点（第4図）では当該期の集落は知られないところから、弥生時代後期・古墳時代前期の松原集落は弥生時代中期集落の形態と異なり、限られた空間に展開していたようである。

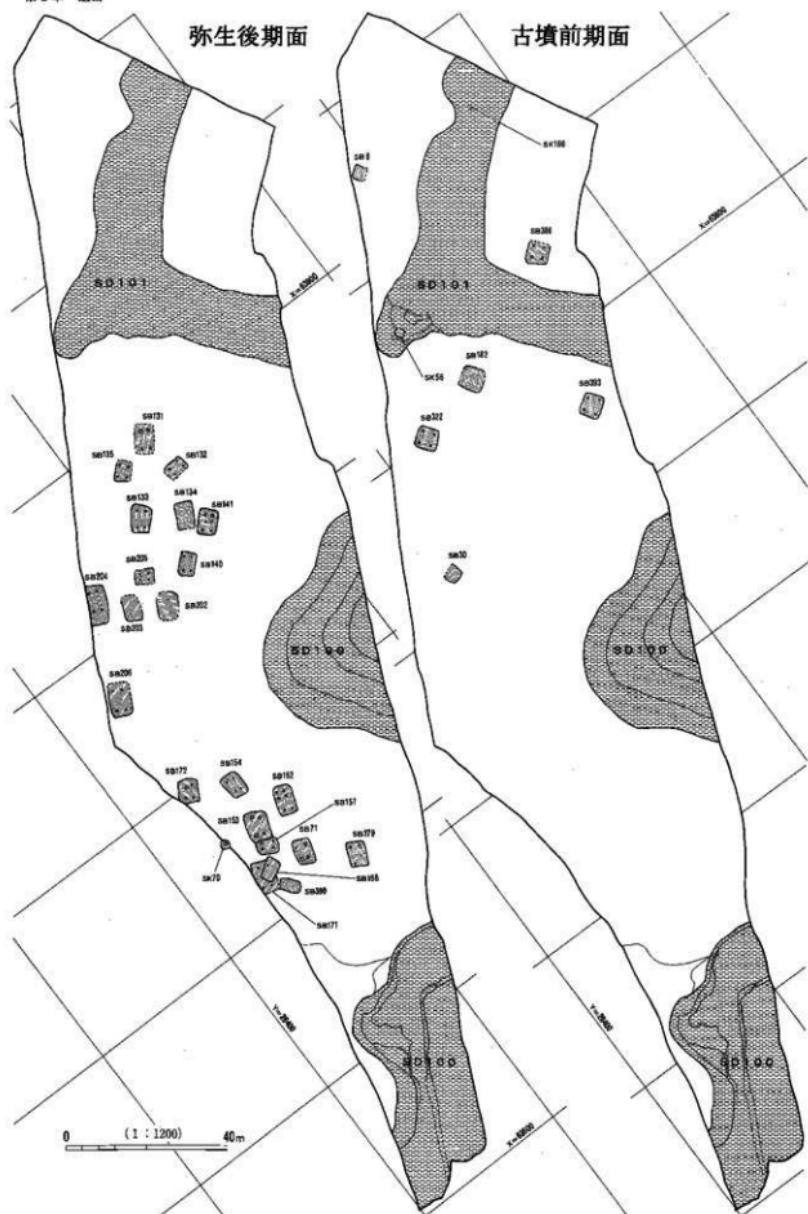
今回の調査では、弥生時代後期面を2面検出することができた。後期前半期の竪穴住居址は中期新相の竪穴住居址と同一検出面で検出できた。後期前半の竪穴住居址は数軒の検出例があるが、土器の評価に検討の余地があるため、弥生時代中期編で報告する。後期中葉の箱清水式期集落の検出面は、前半期検出面より30cmほど上層にあり、その間には洪水砂層が認められることから、後期集落は一時跡絶えることになる。

弥生時代後期中葉の箱清水式期の集落は、竪穴住居址22軒、井戸1基が、古墳時代前期の集落は竪穴住居址7基、井戸2基が確認された（第14図）。両時期の集落は、蛭川が自然堤防面を開拓した低地部と、埋没した旧河道の窪地に狭まれた自然堤防内の高まりに展開する。旧河道の窪地は、幅15~20m、高差1.5~2mの窪地になっており、自然の閑浦溝として機能したとも想定される。弥生時代後期面では旧河道集落側傾斜面に多量の土器が廃棄されていた。長野市埋蔵文化財センターが調査を行った反対側の傾斜面上には土器の廃棄が認められないことから、旧河道を狭んで対面側に集落址はなかったものとみたい。また旧河道縁辺部からは土器棺と想定される大型壺の出土もあり、墓域が集落の脇に展開する可能性がある。古墳時代後期においては、旧河道対岸にまで集落が拡散しており、旧河道の埋没が進んだ様子が伺える。弥生時代後期の住居群が集塊型をなすのに対し、古墳時代前期の住居群が散在型であることを指摘することができる。

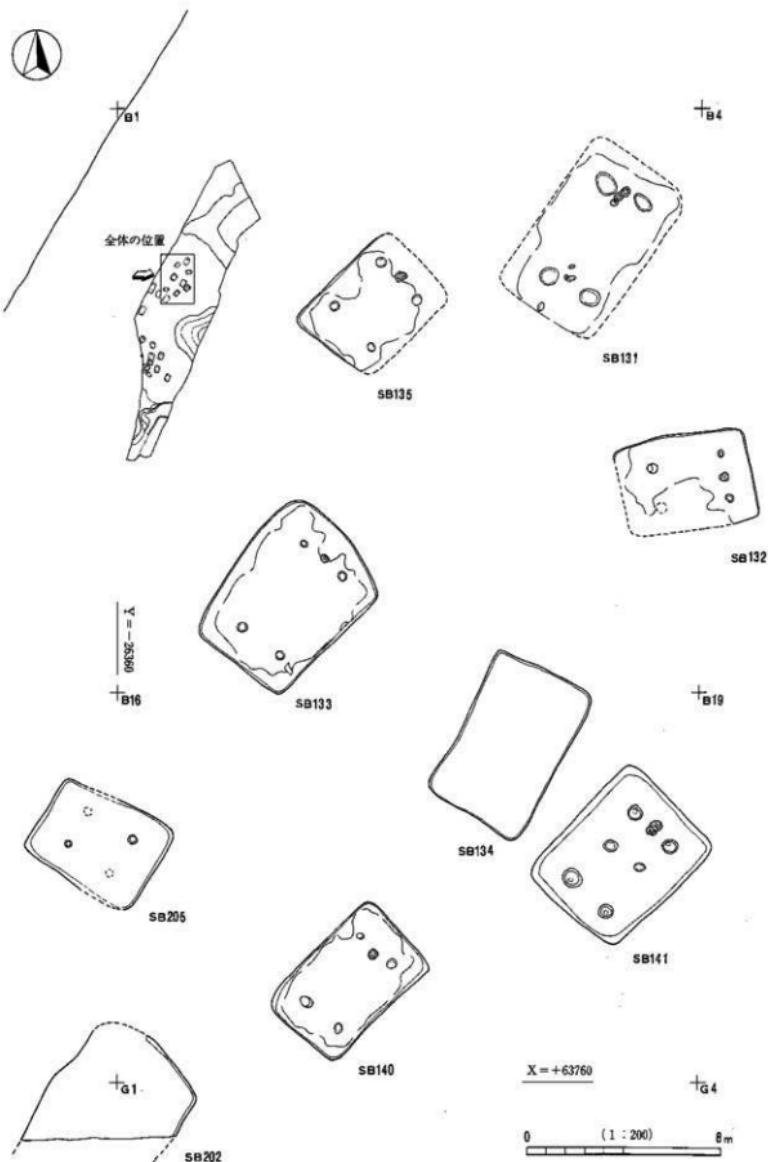
弥生時代後期および古墳時代前期の全体図、遺構割付図を第15図～第19図に示した。



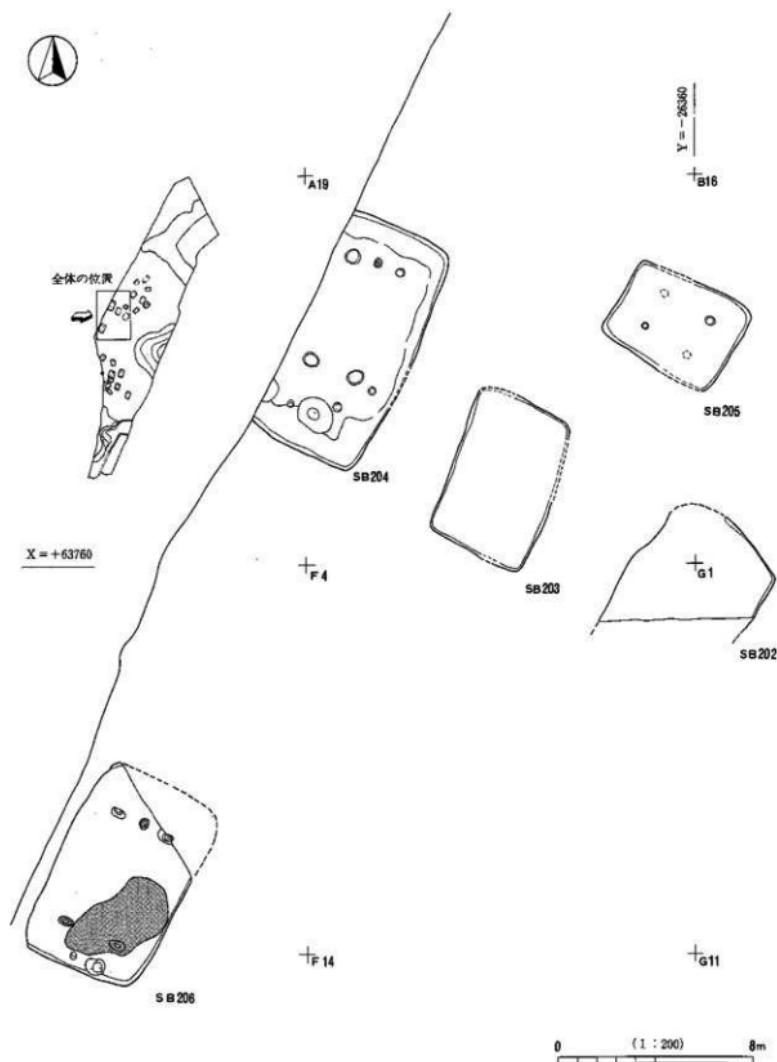
第13図 遺構の分布



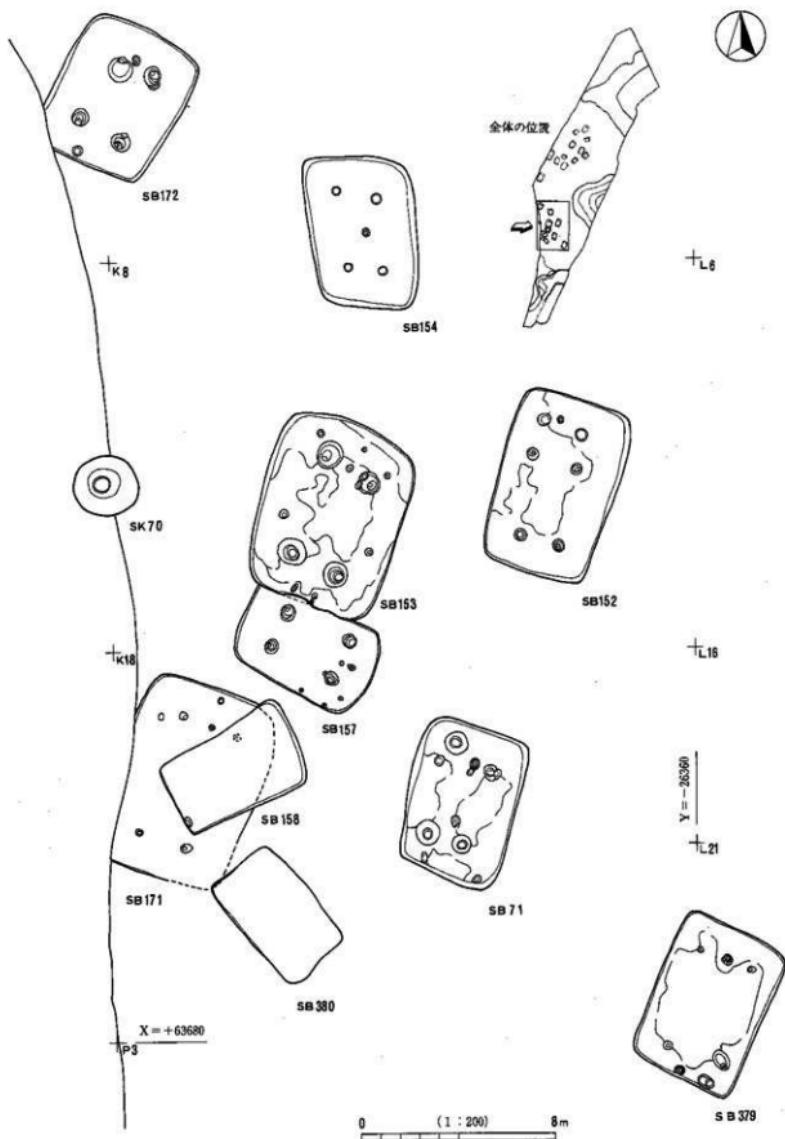
第14図 弥生後期・古墳前期 集落全体図



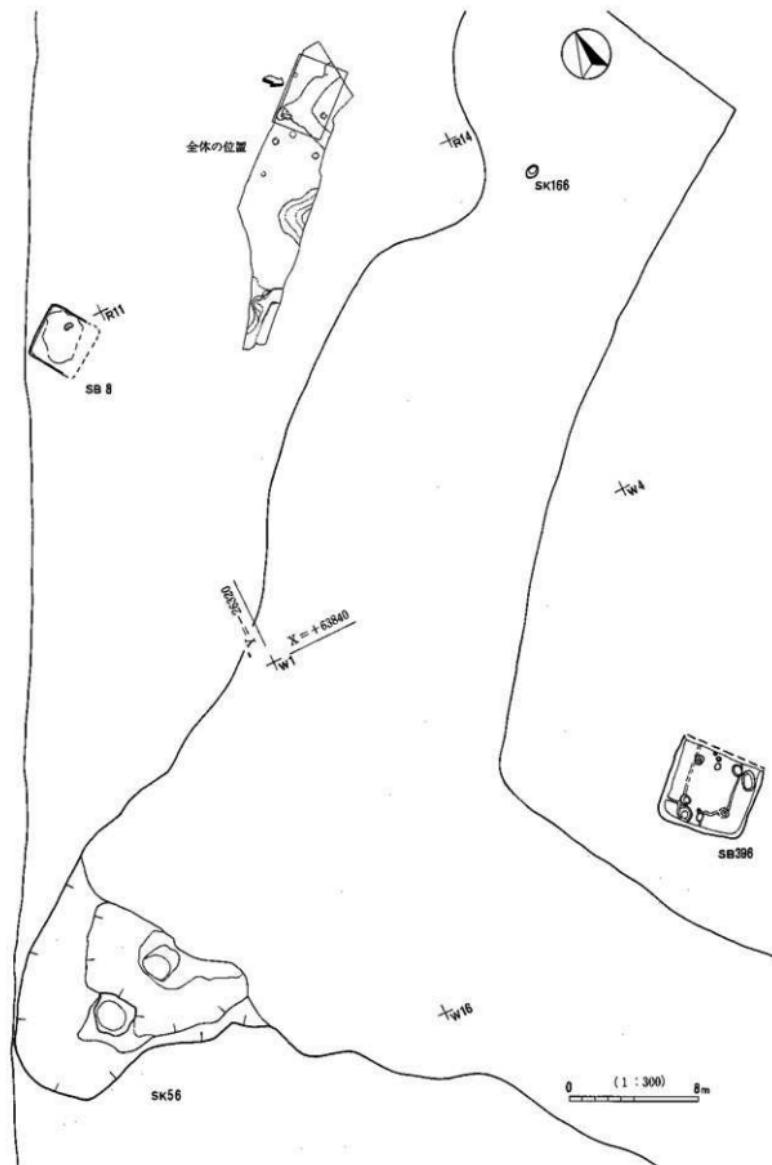
第15図 弥生後期、遺構割付図（1）



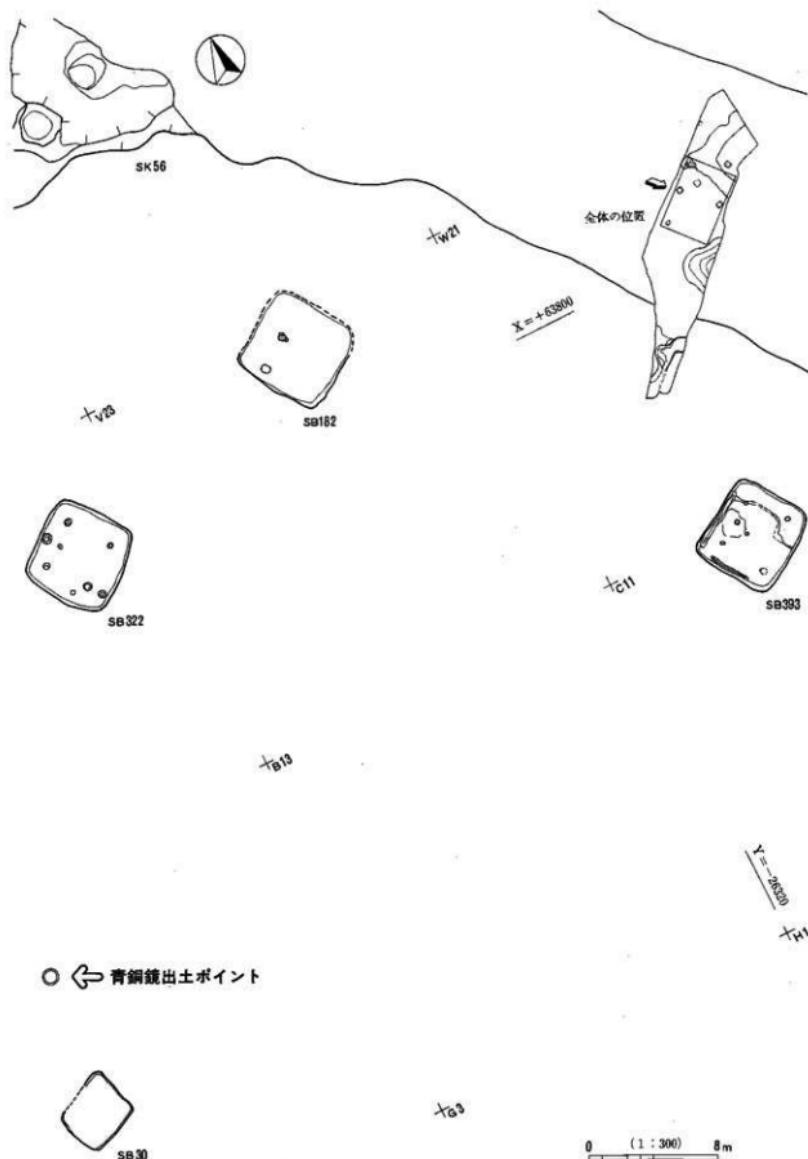
第16図 弥生後期。遺構割付図（2）



第17図 弥生後期 造構割付図（3）



第18図 古墳前期、遺構割付図（1）



第19図 古墳前期、遺構剖面図（2）

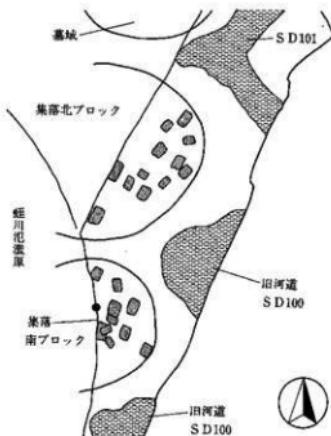
第2節 弥生時代後期集落址の調査

1 概要

弥生時代後期集落は、西地区（大々グリッドI・II地区）において竪穴住居址22軒、井戸1基が明らかとなった（第13・14・20図）。

調査区南西端は、現蛭川が開削した氾濫原となり、自然堤防面と約1.5mの段差となっており、弥生時代後期面はすでに削り取られていた。弥生時代後期集落面が西側に広がっていた可能性は充分にある。

調査区内においては、集落と併に埋没した旧河道が明らかとなり、集落は旧河道と蛭川に挟まれた自然堤防の微高地上に展開していることが予想される。集落のまとまりを2つに区分し、北側を集落北ブロック、南側を集落南ブロックとして報告する（第20図）。集落北ブロックの更に北側には調査区からははずれるものの墓域の存在を想定している。



第20図 弥生後期集落概念図

遺構名	規模			面積 m ²	主軸方位	ピット		主柱穴間距離		床		炉		床底 硬化面	ブロック	備考	
	長軸	短軸	長短比 B/A %			主柱穴	地	人口	乗行	面行	長短比 B/A %	硬化面	幅高	壁高	数	形態	
71	6.3	4.8	73.0	32	N-17-W	4	3	○	3.2	1.5	46.9	○	349.00	56	2	床底炉	○ 南
131	(7.8)	(4.8)	64.0	36	N-34-W	4	1	○	4.4	1.9	43.2	○	348.96	4	3	床底炉	○ 北
132	(5.6)	4.0	71.4	(21)	N-49-W	4	1	○	2.8	1.8	64.3	○	348.91	12	1	土器敷炉	北
133	6.9	5.3	76.8	44	N-39-W	4			3.9	2.0	51.3	○	348.97	42	1	床底炉	北
134	6.6	4.4	66.7	29	N-27-W								349.05	17			北
135	5.2	(4.0)	76.9	(21)	N-46-W	4			2.6	2.2	84.6	○	349.00	11	1	床底炉	北
140	6.0	3.8	63.3	20	N-44-W	4			3.4	1.8	52.9	○	348.99	53	1	床底炉	○ 北
141	6.3	5.0	79.4	29	N-44-W	5			3.8	2.0	52.6	○	348.91	40	3	床底炉	北
152	7.4	4.9	66.2	38	N-16-W	6			4.6	1.8	39.1	○	348.95	44	1	床底炉	南
153	7.8	5.8	74.4	44	N-19-W	4	8	○	4.0	2.2	55.0	○	348.99	32	3	床底炉	南
154	6.2	4.4	71.0	23	N-4-W	4			3.0	1.6	53.3	○	348.78	40	1	床底炉	南
157	5.8	3.8	65.5	20	N-11-W	4	2		2.8	1.8	64.3	○	349.07	22	1	床底炉	南
158	5.8	3.4	58.6	20	N-65-W		1	○					348.94	39			南
171	8.2	5.8	70.7	44	N-21-W	4	1		5.0	2.2	44.9	○	349.00	31	1	床底炉	○ 南
172	6.2	5.2	83.9	35	N-28-W	4	1	○	3.2	1.8	56.3		348.82	57	1	床底炉	南 床底灰化層
202	(6.43以上)	(5.3以上)	82.8	×	N-37-W								349.16	27			北
203	6.6	4.4	66.7	27	N-24-W								348.90	42			北
204	10.1	(5.1)	59.5	(50)	N-23-W	4	5	○	4.6	2.0	43.5	○	348.90	57	1	床底炉	北 灰覆
205	5.1	4.0	78.4	18	N-69-W	(4)			(2.2)	(1.6)	72.7		348.93	44	1	床底炉	北
206	(8.6)	5.4	62.8	(46)	N-27-W	4	3	○	5.0	2.4	48.0	○	348.96	45	1	床底炉	北
379	6.5	4.6	70.8	29	N-25-W	4	2	○	4.0	2.2	55.0	○	348.80	42	1	床底炉	南
380	5.1	3.2	62.7	15	N-40-W								349.02	11			南
						17	11	9					17		4		

第1表 弥生時代後期竪穴住居址一覧

2 遺構

(1) 壓穴住居址 (SB)

SB71 (第21図: PL. 4)

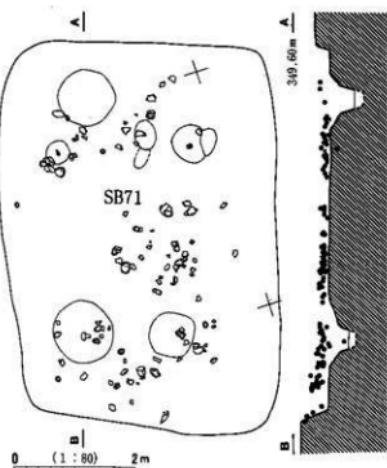
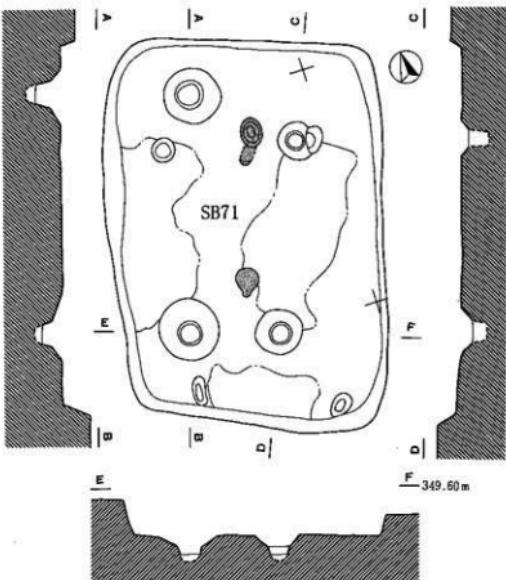
南ブロックに位置する (IK19-20-24-25グリッド)。長方形プランを基本とするが、長軸辺が若干異なり、やや歪んだ形態をなす。短辺および長辺は直線的で、コーナー部分で隅丸状をなす。住居面積は $6.3 \times 4.6\text{m}$ で 29m^2 を測る。

床面は明確に検出された。堅織の部分と、硬化しない部分に分かれ、炉に向かって右側長辺の壁際および奥壁周辺は硬化していない。貼り床は認められない。ピットは主柱穴および、入口施設の柱穴が確認できた。主柱穴の掘り方は2段となり (PL. 4)、下段でも径 $30\sim 40\text{cm}$ を測る。主柱穴下面まで調査が行われていないため、下方部分は推定線で示している。炉は地床炉で、主柱穴間に位置する。炉床は橙褐色に酸化被熱し、2基確認できる。切り合ひ関係から新旧関係として捉えることができ、住居内部側から奥壁側へ移動している。地床炉と反対側の床面中央部には、酸化被熱痕跡を認めることができるが掘り込みはない。

遺物は埋土中および床面上から出土した (PL. 4)。出土状況は、土器片が散在状況をなし、床面上から出土した土器も破片の状態で、埋置されたと考えられる個体はない。出土土器のドットがレンズ状を示すことからも住居廃絶後に廃棄されたものと考えられる。

SB131 (第22図: PL. 4)

北ブロックに位置する (IB3-8グリッド)。検出時にはすでに床面に達しており、硬化面、炉址等の床面状況、遺物出土状況から住居址のプランを想定した。長軸 7.5m 、短軸 4.8m ほどの長方形プラン



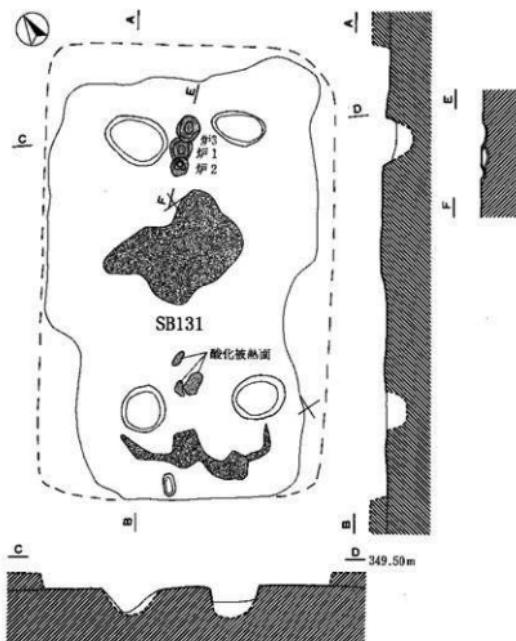
第21図 SB71遺構図・埋土内土器出土状況図

を呈し、住居面積は36m²ほどと推定する。

床面は全体に堅緻で、壁周辺以外は全面硬化する。ピットは主柱穴の掘り方4箇所、および入口部の柱穴が1箇所検出できた。柱穴下部の調査がされていないため、推定ラインで示した。

炉は地床炉で、3基が切り合い関係をなし、炉1→炉2→炉3の順で使用された。炉床はいずれも橙褐色に酸化被熱する。炉と反対側の主柱穴間床面にも橙褐色の酸化被熱面があるが、掘り方は認められない。炉周辺の床面上に炭化粋の分布が認められた。

遺物は床面上から破片が若干検出されたに留まる。



SB132 (第22図: PL. 4)

北ブロックに位置する (IB 8・9・13・14グリッド)。造構プランは北辺および西辺が不明瞭であるが、長方形を基本とする。短辺および長辺は直線的で、コナー部分で隅丸状をなす。住居面積は5.6×4.0mで22m²を測る。住居址の主軸は多くが南北方向を示すのに對し、同住居址は東西方向を示す。

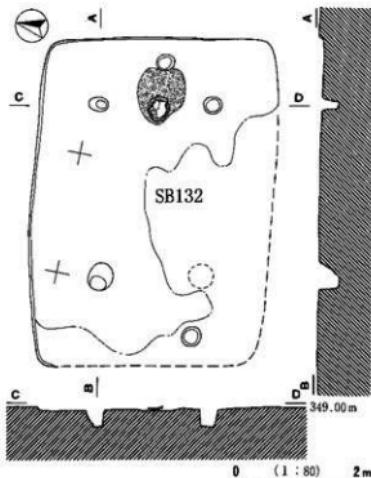
床面は堅緻な部分とそうでない部分があり、炉に対して、左側が堅緻となる。ピットは主柱穴3ヶ所が確認できた。

炉は土器敷炉 (PL. 4) である。大型甕の胴部大破片を掘り方に敷いており、土器および炉床下は強く被熱して酸化状態を示す。松原遺跡の弥生時代後期集落では、土器敷炉は当造構のみである。

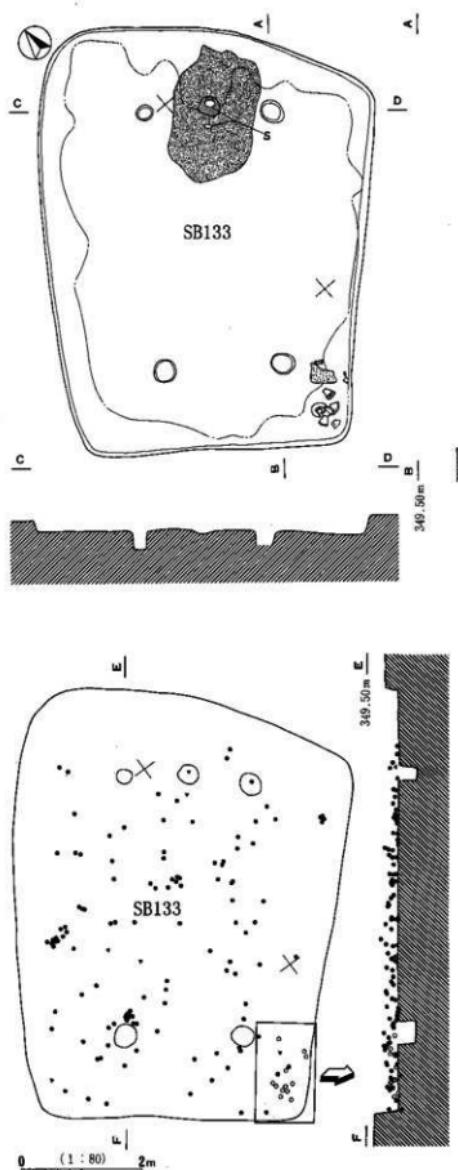
遺物は床面上から破片が若干出土した程度である。

SB133 (第23図: PL. 5)

北ブロックに位置する (IB 11・12グリッド)。造構プランは長方形プランを基本とするが、長辺の長さが異なり、奥壁側短辺が梢円形にカーブする。奥が広が



第22図 SB131・132造構図



第23図 SB133遺構図、埋土内土器出土状況図、埋置土器出土状況図（土器1/16）

る形状を呈す。住居面積は $6.9 \times 5.3m$ で $37m^2$ を測る。

床面は全面に堅級であるが、炉から奥壁側にかけて、入口左右コーナー一部では硬化しない。ピットは主柱穴が4本検出できたが、他に検出されていない。

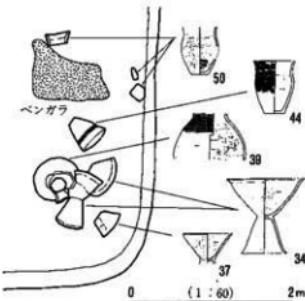
炉は地床炉で、炉床は酸化被熱する。炉址付近の床面上には炭化粒層が広がり、河原石2点が原位置を示さず浮いた状況で検出された。縁石についていた可能性がある。

遺物は埋土中および、床面上から出土した。埋土中からは土器片が散在状態で検出され、入口部右側コーナー付近床面上には、遺棄された土器がまとまって出土した。高杯(34, 37)・小型甕(44)は完形に復元でき、壺(39)

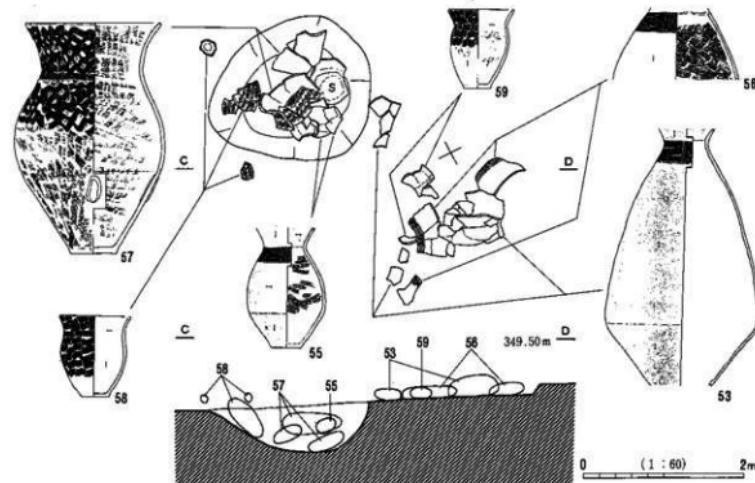
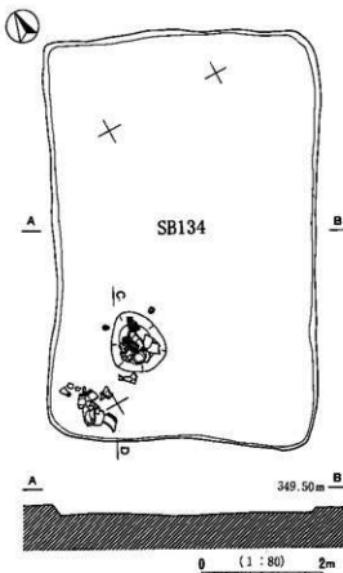
は胴上半が完形に復元された。器台の機能を有していたものであろうか。土器が遺棄された床面周辺には、ベンガラが散布された痕跡が認められた。

SB134 (第24図: PL. 5)

北ブロックに位置する(I B12-13-17-18グリッド)。長方形のプランをなし、短辺

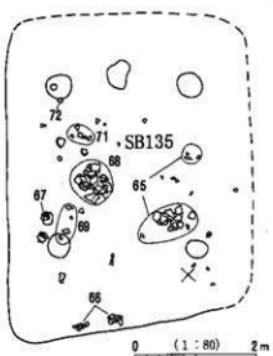


および長辺は直線的で、コーナー部分で隅丸状をなす。住居面積は $6.6 \times 4.4\text{m}$ で 29m^2 を測る。床面は基本土層第V層黄褐色砂質土中にあり、軟弱で硬化面を確認することはできなかった。主柱穴および炉址も確認できないことから、居住造構以外の建物構造を想定することも可能かと思われる。ピットは南西コーナー付近に1箇所みられ、断面が擂り鉢状をなす。遺物は、南西コーナー付近床面上直上およびピット内より出土した。大型壺・甕など6個体が廃棄された状況でまとまって出土した(P.L. 5)が、欠損部があり完形に復元されるものはない。ピット内からは、壺58・大型甕57・壺55が出土した。大型甕57は口縁部破片、胴部上半・下半破片の位置関係に整合性がないことから、打ち欠き後、ピット内に廃棄した様子が窺える。56は打ち欠き面を調整し、器台として転用したものと考えられるが、破損した状態で散在していた。壺53は欠落する破片が多い。胴部と口縁部のまとまりが離れた状態で出土している。57・53はいずれも大型品であるが、57には壺にみられる胴部隆帯があり、且つ被熱痕跡がないことから、壺の機能をもち得ていたのであろう。



第24図 SB134遺構図、遺棄土器出土状況図（土器1/12）

SB135 (第25図: PL. 5)



第25図 SB135遺構図、塙土内土器出土状況図

北プロックに位置する (IB2・6・7グリッド)。調査は、検出時すでに床面近くまで達しており、床面の状態、遺物の状況から住居址のプランを想定した。床面の状況により形状を判断すると長軸5.2m、短軸4.0m程の不整形をなす長方形プランを呈し、住居面積は21m²程と推定する。

床面は、堅緻な部分と硬化しない部分に分かれ、炉に向かって左側が軟化傾向にあるが、全体的に堅緻な部分が多い。ピットは主柱穴が4ヶ所確認できた。炉は地床炉で、炉床は橙褐色に酸化被熱した状況を示す。

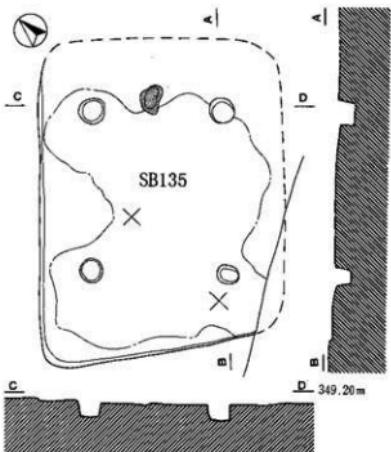
遺物は床面上から遭棄された状況で検出されたが、完形になる個体はない。

SB140 (第26図: PL. 5)

北プロックに位置する (IB21・22グリッド)。長方形プランをなし、短辺および長辺は直線的で、コーナー部分で急にカーブする。住居面積は6.0×3.8mで、20m²を測る。壁は直に立ち上がり、検出面までの高さは53cm。

床面は非常に堅緻である。壁周辺以外は全面硬化する。ピットは主柱穴4本以外検出されなかった。炉は地床炉で、炉床は橙白色に酸化被熱する。住居中央の床面直上に炭化物集中が確認できる。

遺物はほとんど出土していないが主柱穴より土器片が出土している。



第26図 SB140遺構図

SB141 (第27図: PL. 5)
北ブロックに位置する (I B18-23
グリッド)。長方形プランをなし、短辺および長辺は直線的で、コーナー部
分で隅丸状をなす。住居面積は $6.3 \times$
 5.0m で 32m^2 を測る。

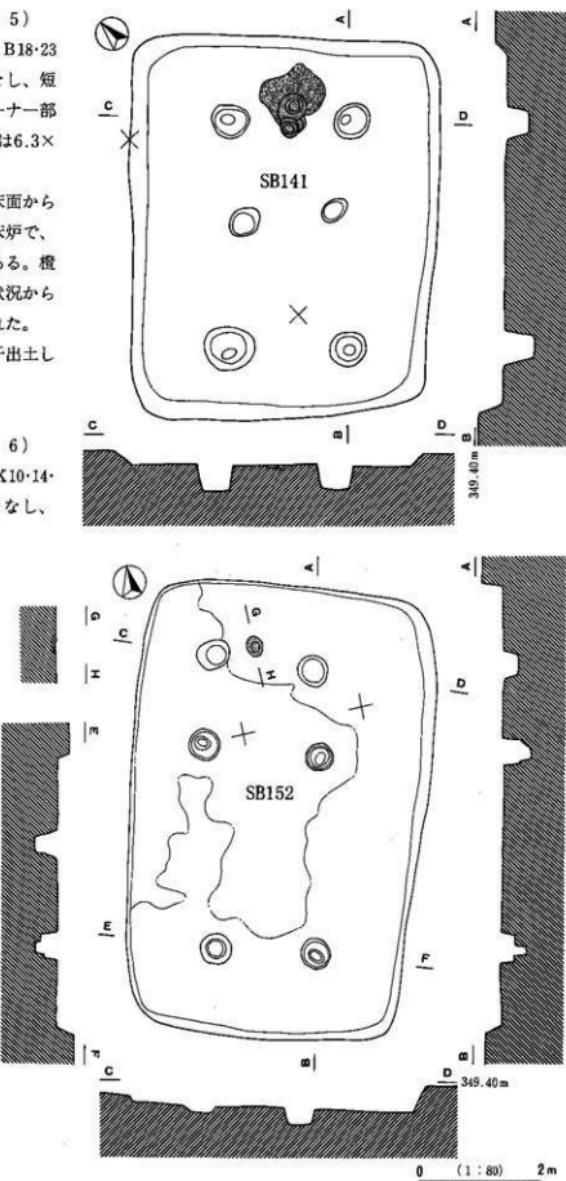
ピットは主柱穴がいずれも床面から
50cm程掘り込まれる。炉は地床炉で、
円形をなし、若干窪む程度である。橙
褐色に被熱硬化した酸化面の状況から
3回の切り合い関係が認められた。

遺物は床面上から破片が若干出土し
た程度である。

SB152 (第27図: PL. 6)
南ブロックに位置する (I K10-14-
15グリッド)。長方形プランをなし、
短辺および長辺は直線的で、
コーナー部分で隅丸状をな
す。住居面積は、 $7.4 \times 4.9\text{m}$
で 36m^2 を測る。

床面は堅緻の部分と、硬化
しない部分に別れ、炉に向か
って右長辺側は軟化、左長辺
側は硬化する。ピットは主柱
穴が6本確認できた。炉は地
床炉で、椭円形をなす。床面
から4cmほど掘り込み、1cm
ほど粘土をはっている。炉床
は橙白色に酸化被熱して硬化
する。炉床下は3cmほど茶褐
色に酸化状態を示すことから
かなり強く熱を受けている様
子が窺える。炉床内には1cm
ほど炭化粒が詰まっていた
(PL. 6)。

遺物は、床面上から破片が
若干出土した程度である。

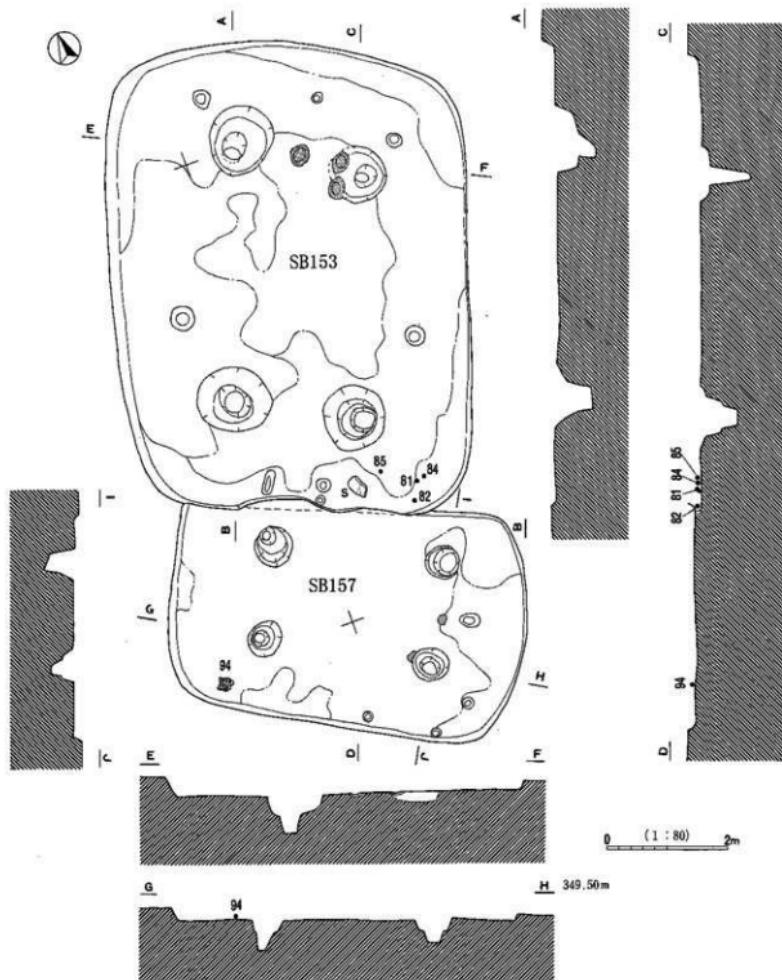


第27図 SB141・152遺構図

SB153 (第28図: PL. 6)

南ブロックに位置する (IK 8・9・13・14グリッド)。SB157と重複関係 (SB153→SB157) にあり、床面はSB157に比べ若干深い。両者の主軸は直交関係にある。隅丸の長方形プランをなし、入口側短辺は直線的、奥壁側短辺は弧状を呈する。住居面積は7.8×5.8mで、44m²を測る。

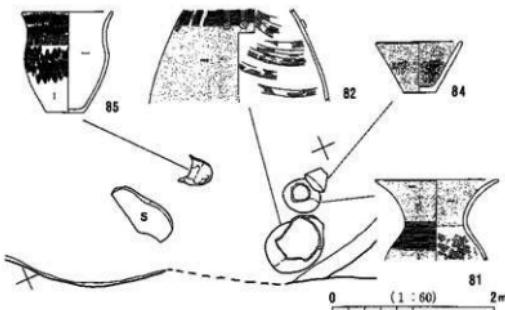
床面は全面に堅緻であるが、主柱穴4本内の空間が最も硬化する。炉は地床炉で、3ヶ所確認できたが、切り合い関係はない。炉床は1~2cm若干窪む程度である。橙白色に硬化し、その背面2~4cmは茶



第28図 SB153・157遺構図

褐色に強く酸化被熱している。ピットは主柱穴および、入口施設等が検出された。主柱穴の掘り方は二段掘りとなっている。

遺物は、床面上から破片が若干出土した程度であるが、住居入口右側コーナー床面直上には遺棄された土器が数点まとまっていた。壺・甕・鉢はいずれも欠損した状況であった。壺82は頸部以上と胴下半を欠くほかは完存し、器台の機態を想定させる。入口右側コーナー床面への土器の遺棄は133号住居址でも確認された。入口右側コーナー部分への土器の遺棄は、住居址廃絶時の儀礼と密接にかかわるであろう。



第29図 SB153遺棄土器出土状況図（土器1/9）

SB157（第28図：PL. 6・7）

南ブロックに位置する（IK13・14・18・19グリッド）。SB153と重複関係（SB153→SB157）にあり、SB153埋土を切り込む形で床面が広がる。床面はSB157が若干浅い。隅丸長方形プランをなし、住居面積は $5.8 \times 3.8\text{m}$ で、 20m^2 を測る。

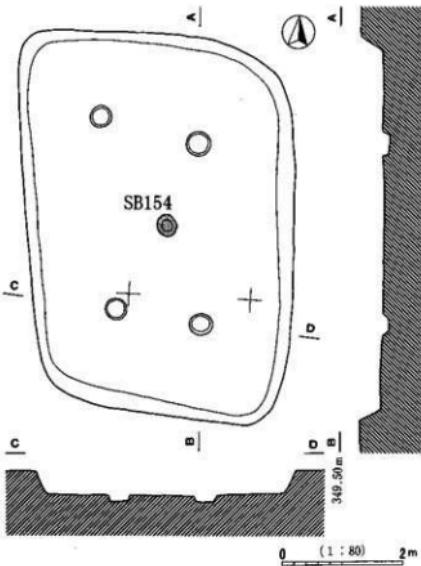
床面は壁周辺以外全体的に堅緻で、硬化面が認められる。ピットは主柱穴が4ヶ所確認できた。炉は地床炉で、酸化被熱する。

遺物は埋土中より破片が散在状態で出土した。甕94は床面から 10cm 浮いた埋土中より出土した。

SB154（第30図）

南ブロックに位置する（IK3・4・9グリッド）。長方形プランを基本とするが、長辺と短辺が直交せず若干歪みがみられる。コーナー部分は隅丸状をなす。住居面積は $6.2 \times 4.4\text{m}$ で、 27m^2 を測る。

床面は部分的に硬化するが、全体的に締りに欠ける。主柱穴は4ヶ所確認できたが、住居プランと同様に歪みが確認される。炉址は浅い地床炉で、住居中央部に検出された。同住居址のみ炉が中央に位置する。被熱痕跡が弱く、使用が長期に及んでいないことが推測される。遺物は床面上から破片が若干出土した程度である。



第30図 SB154遺構図

SB158 (第31図)

南ブロックに位置する (IK18グリッド)。SB171と重複関係 (SB171→SB158) にあり、SB171床面を若干掘り込む。隅丸長方形プランをなし、住居面積は $5.8 \times 3.4\text{m}$ で、 20m^2 を測る。

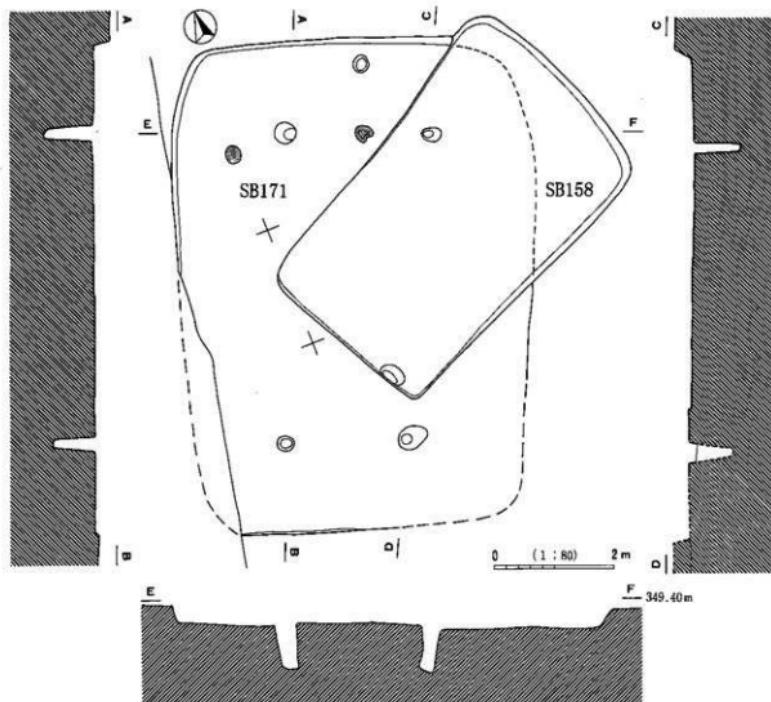
床面は軟弱で、硬化面を確認することができなかった。主柱穴および、炉址も確認できることから、居住遺構以外の建物構造を想定することも可能である。同様な建物としてSB134・203が認められる。

遺物は埋土中より破片が若干出土した程度である。図化できるものはない。

SB171 (第31図)

南ブロックに位置する (IK17・18・22・23グリッド)。SB158と重複関係 (SB171→SB158) にあり、床面をSB158によって切られる。隅丸の長方形プランをなすものと想定され、住居面積は $8.2 \times 5.8\text{m}$ で、 44m^2 を測る。

床面は、壁周辺以外は全体的に堅緻で、硬化面が認められる。ピットは主柱穴4ヶ所および、他に3ヶ所検出できた。主柱穴は掘り方を調査したのではなく、柱痕を掘り抜いたものと思われる。深さは80cmほどあり、住居群中最も深い。柱痕の径は10~20cm大であり、主柱の構造が推定される。炉は地床炉で炉床は橙白色に酸化状況を示す。床面に酸化面が認められる。遺物はほとんどなく図化できるものはない。



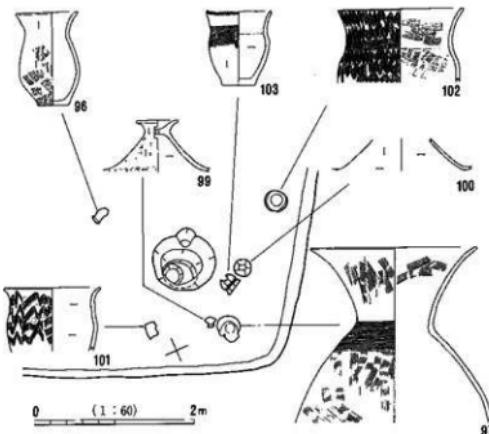
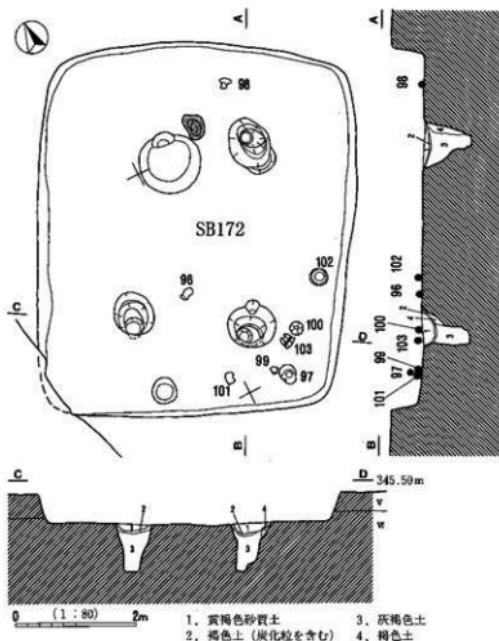
第31図 SB158・171遺構図

S B 172 (第32図: P.L. 7)
南プロックに位置する (I F22-23・IK 2・3 グリッド)。長方形プランをなし、短辺および長辺は直線的で、コーナー部分で隅丸状をなす。奥壁がやや弧状を呈す。住居面積は $6.2 \times 5.2\text{m}$ で 32m^2 を測る。

床面は基本土層第VI層褐色土を掘り込み、硬化しない。壁面から 50cm ほど内側の床面直上には炭化粒・焼土粒が 2cm ほど堆積し、炭化材はみられない。壁面も被熱をしていないところから、1次埋没後堆積したものと考えられる。

ピットは主柱穴と入口部に1箇所検出できた。主柱穴は床面の炭化層(2層)がピット内に落ち込み(P.L. 7)、床面で明瞭に検出することができた。主柱穴の土層3層は主柱抜き取り層と考えることができ、1・2層はその後の流入層である。同住居址は廐棄にあたって、主柱穴の抜き取りが行われたものとみたい。炉は地床炉で、楕円形をなして若干窪む。酸化被熱し、橙褐色に硬化する。

遺物は、床面直上に遺棄され、南東コーナー付近にまとまる (P.L. 7)。97と102は胴下半を打ち欠いた壺と甕で、打ち欠き面を調整し、正位の状態で置かれていた。転用品で、器台の機能をもち得ていたのだろう。高杯98と壺96は、完成品で置かれていたものが横転した状況で床面直上より出土した。入口右側コーナー部分の床面直上に土器が遺棄される現象は S B133・153にも認められる。



第32図 S B172 遺構図・遺棄土器出土状況図 (土器1/9)

SB202 (第33図)

北ブロックに位置する (IA25・B21・F5・G1グリッド)。古代の溝SD7等に切られ全容は明らかでない。残存部から長軸6.4m以上、短軸5.3m以上の大型住居が想定される。床面は堅鐵な部分がみられる。柱穴、炉址はSD7に切られ確認できない。遺物は、床面上から遣棄された大型甕(107)と台付甕(106)が出土した。大型甕は破碎された状態で、台付甕は遣棄された状態で出土した。

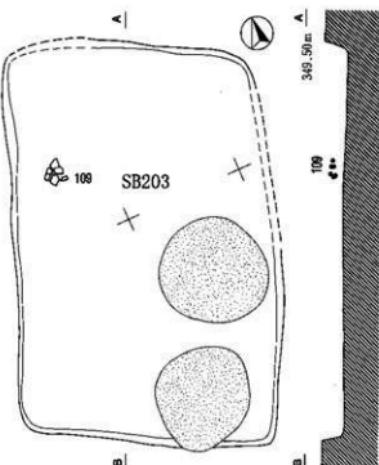
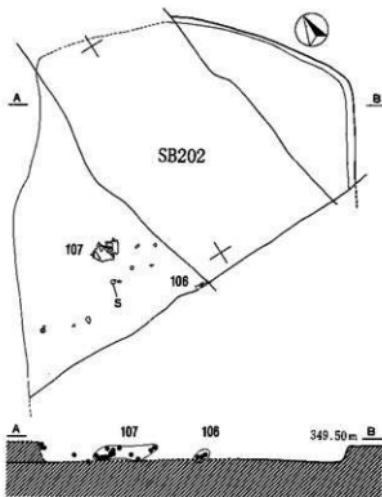
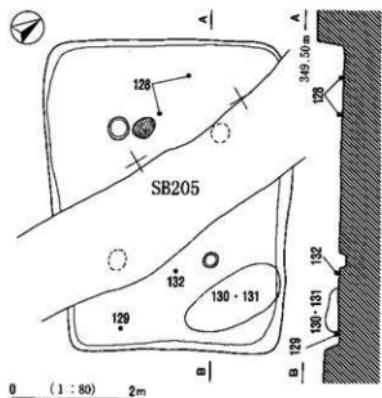
SB203 (第33図)

北ブロックに位置する (IA24・25・IF4・5グリッド)。長方形プランを基本とする。住居面積は $6.6 \times 4.4\text{ m}$ で、 29 m^2 を測る。床面は中世の井戸によって一部切られるが、硬化面が認められず、柱穴・炉址も確認できない。遺物は、埋土中から破片が若干出土した。

SB205 (第33図: PL. 7)

北ブロックに位置する (IA20・25・IB16・21グリッド)。長方形プランをなし、コーナー部分で隅丸状をなす。住居面積は $5.1 \times 4.0\text{ m}$ で 20 m^2 を測る。住居址の主軸は東西方向を示す。

床面は軟弱で、硬化面を確認することはできない。古代の溝SD7に切られるため、全様は明らかではないが、主柱穴が2箇所確認できた。南北主柱穴間の床面には炭化粒の集中範囲があり、炉として機能していたものと考えられる。遺物は床面上から破片が若干出土した。

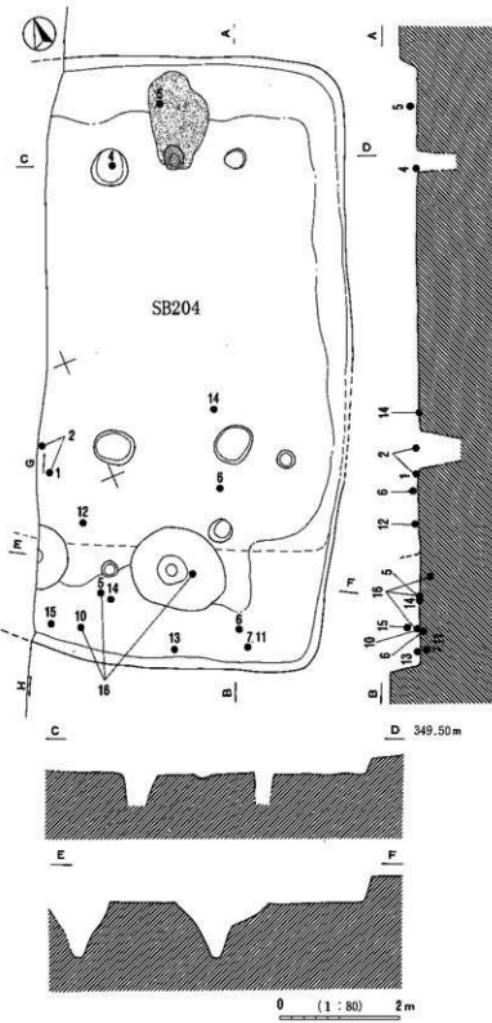


第33図 SB202・203・205遺構図

S B 204 (第34図: P.L. 7)
 北プロックに位置する (I A18-19・
 23-24グリッド)。住居址の西辺側が調
 査区域外にかかるため、全容を知り得
 ないが、隅丸長方形プランを呈し、拡
 張が認められる。拡張後のプランは長
 辺10.1m×短辺5.1m以上となり、面
 積は50m²以上を測る。拡張前の長辺は
 8m程であったものと想定される。

床面は、壁周辺以外全面的に堅緻
 で、硬化面がみられ、拡張部分にも及
 んでいる。ピットは拡張前の主柱穴4
 ヶ所が検出できた。拡張時における主
 柱穴は調査区の断面にかかり、掘り方
 の形状を明らかにし得た。掘り方は床
 面上では径1m程のプランを持ち、円
 錐状に深さ1m程掘り下げている。炉
 は地床炉で、1ヶ所のみ検出された。
 拡張にあたって、炉址が動くことはな
 かったようである。炉から奥壁側に向
 かって、床面上に炭化粒が分布してい
 た。

遺物は、拡張部を中心に床面上から
 破片となって出土した。



- I ~ II. 基本土層・黒褐色砂質シルト
 III. 基本土層・暗褐色砂質シルト
 IV. 基本土層・黒褐色砂質シルト
 V. 基本土層・黄褐色砂層
 VIa. 基本土層・黒褐色砂質シルト (炭化物含む)
 VIb. 基本土層・黒褐色砂質シルト (炭化物含む)
1. SB204堆土・暗褐色炭化粒層
 2. SB204堆土・褐色土層 (炭化物含む)

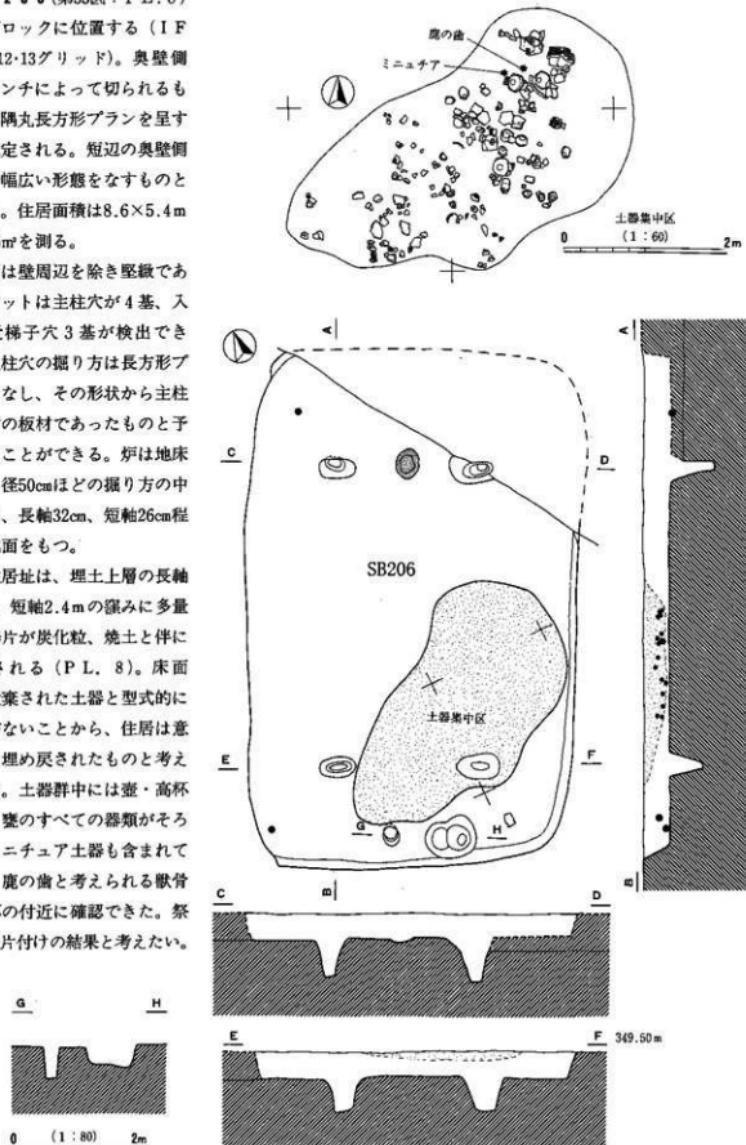
3. SB204堆土・褐色粘質土 (貼り床部分)
 4. SB204柱穴・暗褐色土
 5. SB204柱穴・黄褐色砂質土
 6. SB204柱穴・黄褐色砂質土 (暗褐色土含む)
 7. SB204柱穴・黄褐色砂質土
 8. SB204柱穴・暗褐色粘質土
 9. SB204柱穴・暗褐色粘質土 (炭化物含む)
 10. SB204柱穴・黄褐色粘質土 (炭化物含む)
 11. SB204柱穴・黄褐色粘質土 (炭化物含む)
 12. SB204柱穴・暗褐色土
 13. SB204柱穴・褐色土層 (炭化物含む)
 14. SB204柱穴・褐色土層 (炭化物含む)
 15. SB204柱穴・褐色土層 (炭化物含む)
 16. SB204柱穴・褐色土層 (炭化物含む)

第34図 S B 204構造図

SB206(第35図: PL. 8)
北ブロックに位置する(I F 7・8・12・13グリッド)。奥壁側がトレンチによって切られるものの、隅丸長方形プランを呈すると想定される。短辺の奥壁側がやや幅広い形態をなすものと考える。住居面積は8.6×5.4mで、46m²を測る。

床面は壁周辺を除き堅緻である。ピットは主柱穴が4基、入口付近梯子穴3基が検出できた。主柱穴の掘り方は長方形プランをなし、その形状から主柱は軸材の板材であったものと予想することができる。炉は地床炉で、径50cmほどの掘り方の中央部に、長軸32cm、短軸26cm程の酸化面をもつ。

同住居址は、埋土上層の長軸4.6m、短軸2.4mの窓みに多量の土器片が炭化粒、焼土と共に廃棄される(PL. 8)。床面上に遺棄された土器と型式的に変化がないことから、住居は意図的に埋め戻されたものと考えられる。土器群中には壺・高杯・鉢・甌のすべての器類がそろい、ミニチュア土器も含まれている。鹿の歯と考えられる獸骨も高杯の付近に確認できた。祭祀の後片付けの結果と考えたい。



第35図 SB206遺構図、埋土上層土器集中区出土状況図

SB379 (第36図)

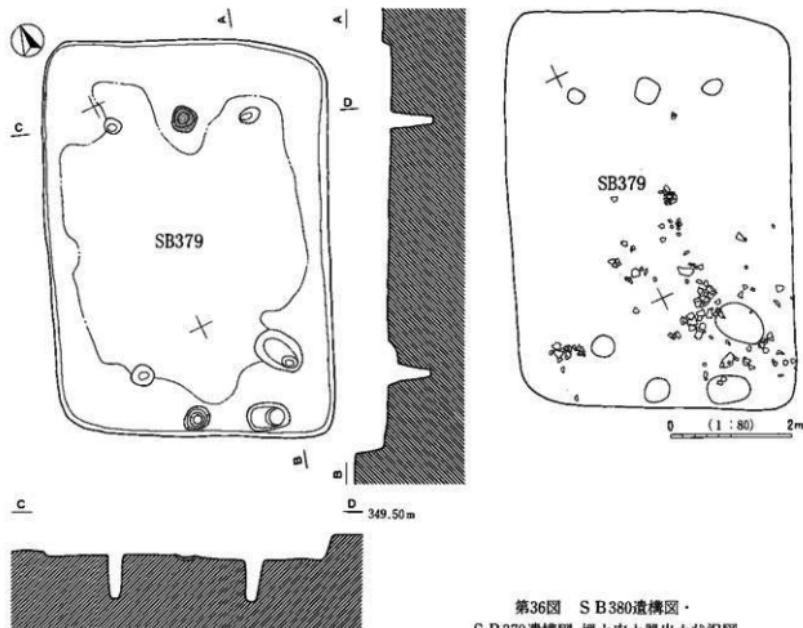
南ブロックに位置する (IK25・L21・P5・Q1グリッド)。長方形プランをなし、コーナー部分で隅丸状を呈す。住居面積は $6.5 \times 4.6\text{m}$ で 30m^2 を測る。

床面は堅緻で、主柱穴間が特に硬化する。ピットは主柱穴と入口部に梯子穴2基検出できた。主柱穴は床面から70cmほど掘り込まれているのに対し、入口部の梯子穴は20~30cmと浅い。炉は地床炉で、円形をなし若干窪む。炉底に貼られた粘土は酸化被熱して橙褐色に硬化する。

遺物の土器は、床面直上および埋土内から破片となって出土した。土器片は南東コーナー部に集中し、南東コーナー付近では浮いた状況で、北西に向かって床面直上から出土した。住居址を埋め戻す際、南東コーナー側から廃棄されたものと考える。

SB380 (第36図)

南ブロックに位置する (IK23・24グリッド)。長方形プランをなし、コーナー部分は隅丸状を呈す。住居面積は $5.1 \times 3.2\text{m}$ で、 16m^2 を測る。床面には硬化面・柱穴・炉址が確認できない。遺物は埋土中から破片が若干出土した程度である。



第36図 SB380遺構図・
SB379遺構図・埋土内土器出土状況図

(2) 井戸

SK70 (第37図:P.L. 4)

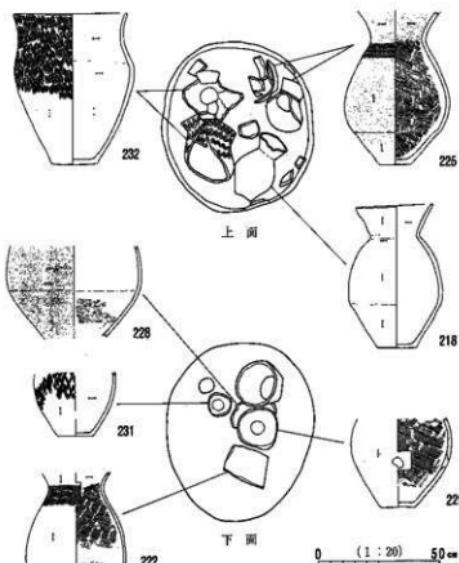
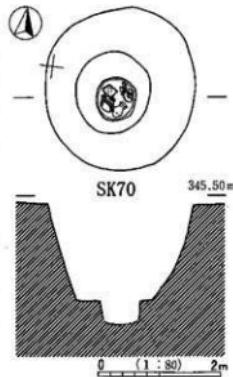
南プロックに位置する(I K12-13)。井戸 SK70は、調査区境界部で検出された。SK70がかかる調査区境界線は、自然堤防面と現蛭川の氾濫原との境界段差面にあたり、その比高差は1.5mあまり認められた。同境界ラインは、古代以降に現蛭川が自然堤防面をカットしたもので、弥生時代においては、自然堤防からさらに東までのびていたものと想定される。よって、南プロック集落も井戸 SK70より東側にまで展開していた可能性がある。SK70は、境界段差面を精査していたところ、カット面に半裁された状況で検出された。

SK70の掘り方は、2段の掘り込みとなり、検出面で径2.4m、底面で1.2mを測り、さらに径0.6mの掘り込みがみられる。上段掘り込みが擂鉢状を呈するのに対し、下段の壁は直に掘り込まれている。上段掘り込みの深さは1.4mを測り、下段掘り込みの下層については調査されていない。

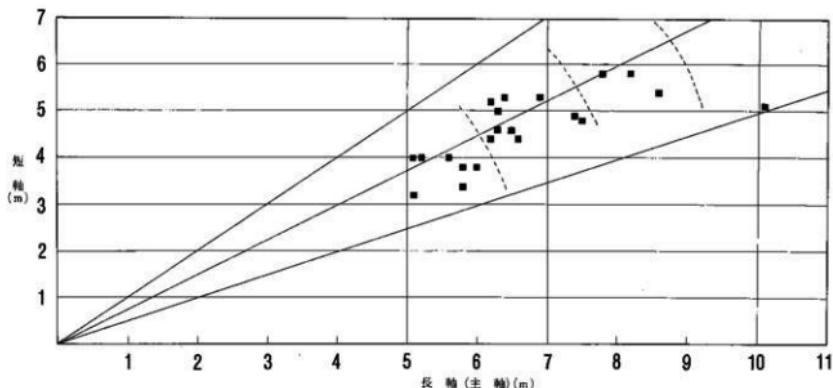
下段掘り込みは、基本土層第VII層黄褐色シルト層に達しており、下面ではじめじめしていた。

埋土は、上段掘り込み部においてはレンズ堆積を示し、自然埋没した状況が窺えた。遺物の出土はない。下段掘り込み面からは、壺を中心とする土器がまとまって出土した。第70図で土器集中出土層の上面と下面を示した。出土土器は割られた状況で出土し、218・232を除き、完形に復元できるものはない。218は完形のまま埋置された状況であったが、225・232は胴部最大径付近で2分割され、横に埋置されたかのような状況で出土した。壺は胴部最大径より上位のみのものと、下位のみのもの2者が出土した。このような壺の残存状況はSB206土器集中においても同様な傾向であった。

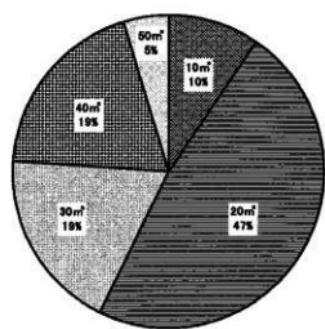
下段掘り込み面から井戸枠は検出されなかったが、掘り込みの形状から、木製の井戸枠の存在が想定できる。出土土器群は、井戸の機能停止段階に埋置されたものと想定されるが、赤彩されない壺の存在がやや目立つようになる。



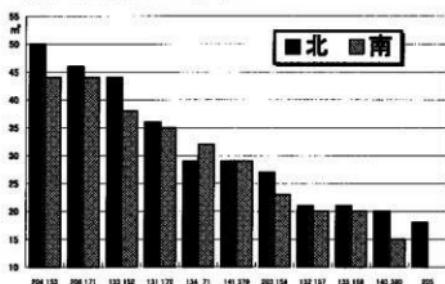
第37図 SK70遺構図、土器出土状況図(土器1/9)



(赤外) 坪穴住居址 面積比率



(赤外) 坪穴住居址 面積別分布表



第38図 弥生時代後期 坪穴住居址の規模

(3) 若干のまとめ

ア. 建物の背景

弥生時代後期集落で確認できた建物はすべて坪穴式で、平地式の建物は存在しない。対称構造の主柱穴、炉をもつ建物は坪穴式住居として位置づけられるが、主柱穴、炉をもたない坪穴式の建物の一群が存在し、注意しなくてはならない。主柱穴、炉をもたない坪穴式の建物は、床面に硬化面が確認されず、土器の廃棄も少ない。しかも、遺棄される土器は、SB134・203にみられるように大型壺の破片がある。そこに非日常的空间が読みとれるようにも思える。詳細な分析は今後の課題とし、ここではいわゆる坪穴式建物の一類型として捉えておくことにする。

坪穴式住居は居住空間であり、その面積は食事を共にする家族の構成および、その関係を追及する手段として有効となり得る。松原遺跡の坪穴式住居は、最小床面積のSB380の15m²から最大床面積のSB204の50m²に至るまで、その大きさは漸移的に変化し、特にまとまることはない。その面積から、大型・中型・小型に分類する。10m²ごとに分類すると20m²代が過半数近くを占めるが(第38図)、面積の分布(第38図)から、25m²以下を小型、26~40m²を中型、41m²以上を大型とする。集落内の坪穴式住居のまとめりを便宜的に分けた北ブロックと南ブロックでは、大・中・小

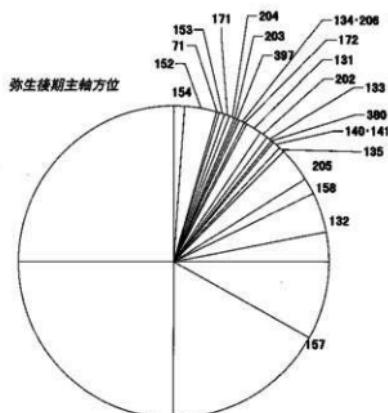
の堅穴式住居が集団状の構成をとつまとまっていることから、堅穴式住居の面積は単位集団内の堅穴住居の住み分けを想定する際の基礎データとなり得るだろう。松原集落における住居址の面積差は、大・中・小だけで理解すべきものではなく、その組み合わせで理解されるものと考えたい。ここで問題となるのは、堅穴式住居個々に住み分ける構成員の集団内での位置づけであるが、充分な予察は用意できない。しかしながら、住居址の主軸をグラフ化するといくつかのまとめを示し(第39図)、このまとめは、体験的に同時期の墓域における主軸のまとめに近いように思える。堅穴式住居址内の構成員の集団内の位置は一定のルールがあったようである。堅穴式住居の面積のみから集団内の構成までを語るには無理があるが、今後単位集団、集落内の構成にせまる分析が必要である。

イ. 建物の構造

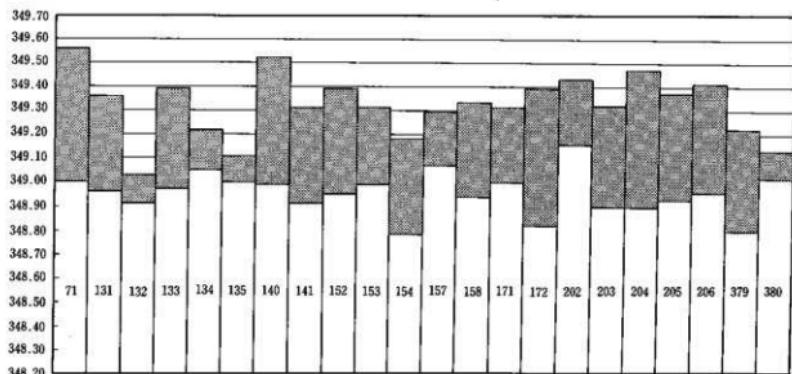
対称構造を持つ箱清水様式期の堅穴式住居の主柱は、掘り方の中に設置され、住居廃絶時に抜き取られるものと、そうでないものがあったようである。主柱のあり方は建物の構造を考える場合、重要な要素であり、主柱穴の内容の調査が充分でなければ、上屋構造を想定する必要なデータを得たとは言えないだろう。今回の調査では、土の見分けが困難な調査にあって、主柱穴の調査は充分であるとは言い難い。主柱穴については資料批判をしてデータを活用していただきたい。堅穴住居の堅穴の深さについては、第40図で床面と検出面の高さを示した。

ウ. 炉

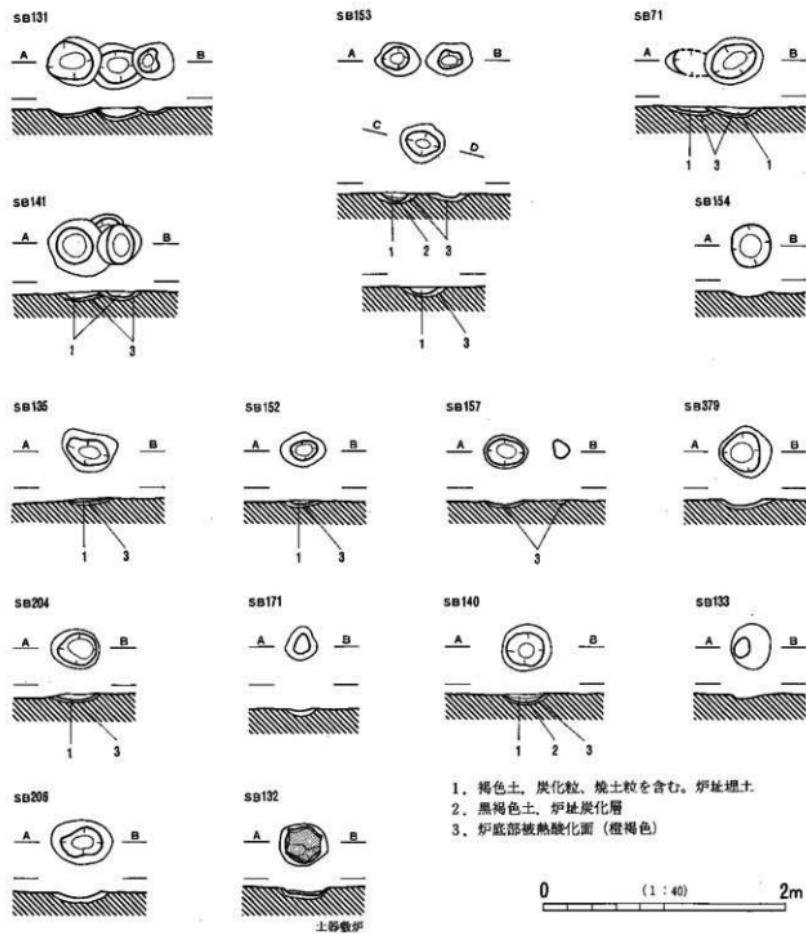
松原遺跡の弥生時代後期の炉を集成したのが第41図である。土器敷炉の一例を除き他は地床炉である。



第39図 弥生時代後期 堅穴住居址主軸方位



第40図 弥生時代後期 堅穴住居址 検出面・床面レベル



第41図 弥生時代後期 地床炉集成図

地床炉は床面に10cmほど掘り込まれ橙褐色に酸化被熱している。その酸化面（3層）は3~4cmに及ぶことから、長期的に強い熱を受けた様子が窺える。被熱面の上部に薄く炭化層（2層）が乗っている。形状は椭円形を呈し被熱部の長径は20~30cm程と小さいことが特徴となる。置き炭の状態で炉が使用されていたことが想定される。

第3節 古墳時代前期集落址の調査

1 概要

古墳時代前期集落は、西地区（大々グリッドI・II地区）において堅穴住居址7軒、井戸2基（第42図）が明らかとなった。

集落域は弥生時代後期集落域と一部重なるものの、弥生集落域と比較した場合、蛭川から離れて自然堤防内部北側に移動した形となっている。弥生後期集落が集塊状を呈すのに対して古墳時代前期集落は散在状況をなし、旧河道SD101対岸にも集落が展開している。

旧河道は埋没が進み、窪地となっていたものと想定され、旧河道内に2基の井戸が掘削されている。

なお、整理作業の過程で、東地区的旧河道SD102から前期の建物群が明らかとなった。中期編で提示したい。



第42図 古墳前期集落概念図

遺構名	規模			面積 m ²	主軸 方位	ピット		主柱穴間距離		床		炉		床直 酸化面	備考		
	長軸	短軸	長短比 B/A %			主柱穴	地	入口施設	溝行	桁行	長短比 B/A %	硬化面	標高	壁高	数	形態	
8 (3.6)	3.3	91.7	(11)	N-34-E							○	348.95	7	1	地床炉		
10																	
30	3.3	3.8	115.1	12	N-22-E							349.86	7				
182	5.8	5.7	98.3	37	N-32-E						○	348.57	54	1	地床炉	○	
322	5.5	5.8	105.5	31	N-36-E				2.8	2.8	100.0	○	348.76	—	1	地床炉	○
393	5.1	5.6	109.8	25	N-35-E				2.6	2.8	107.7		348.42	64	1	地床炉	○
396 (5.0)	5.5	110.0	24	N-13-E					2.6	2.4	92.3		348.31	58	1	地床炉	○
											3			5		4	

第2表 古墳時代前期堅穴住居址一覧

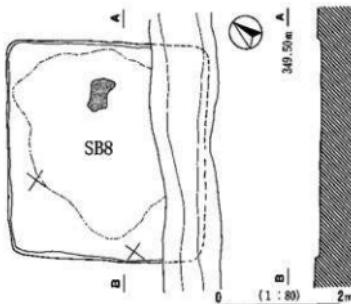
2 造構

(1) 堅穴住居址 (SB)

SB8 (第43図)

II Q10-15グリッドに位置する。古代の溝に切られるために全容は明らかでないが、方形に近いプランを呈するものと考えられる。長軸3.6m×短軸、推定3.3mで、面積は推定で11m²を測る。

床面は中央付近が堅緻で、硬化面を有していた。ピットは確認されていない。炉は地床炉で、炉床は橙褐色に酸化する。炉の位置は奥壁側主柱間であったものと推定される。遺物は破片が若干出土した。



第43図 SB8 造構図

SB 3 0

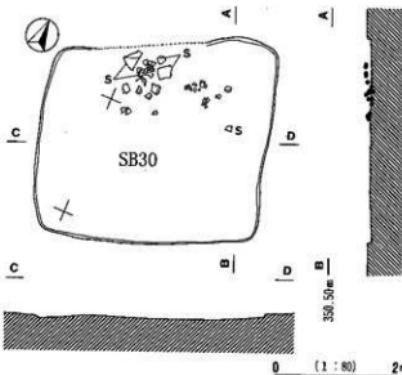
II R 6付近に位置した。調査時の不備で記録類が残っていない。記述者の記憶によれば、小型の方形プランであり、柱穴は検出されなかった。

SB 3 0 (第44図)

I A 20-25グリッドに位置する。隅丸方形プランをなし、若干ながら横長の形態を示す。3.3×3.8mで面積は12m²を測る。

床面の状況についての記録はないが、柱穴、炉址の記録がないことから、住居以外の建物を想定しても良いであろう。

遺物は床面上より破片で出土した。

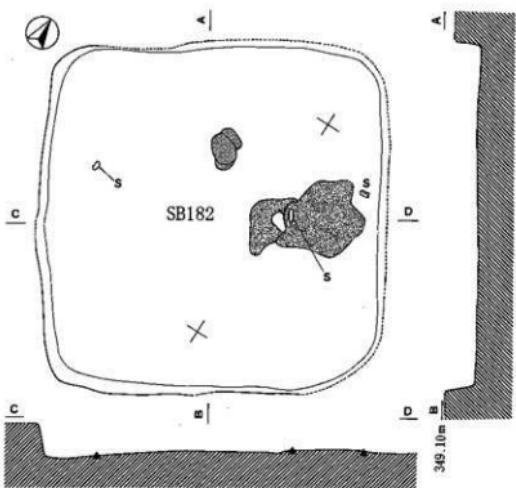


SB 1 8 2 (第44図: P.L. 7)

II V 18-23-25グリッドに位置する。隅丸方形プランをなし、横長の形態となる。5.7×5.8mで、37m²を測る。竪穴は深い掘り込みをもち、検出面から床面までの掘り込みは50cmを測る。

床面は全体に堅緻で、硬化面を有していた。ピットは調査されていない。本来は所在したものだろう。炉は地床炉で、長軸50cm、幅40cmの橢円形をなす。炉床は橙褐色に酸化する。炉に向かって右側の床面上に、1.8×0.8mの範囲に炭化粒の分布が確認された。

遺物は埋土中より破片で出土した。

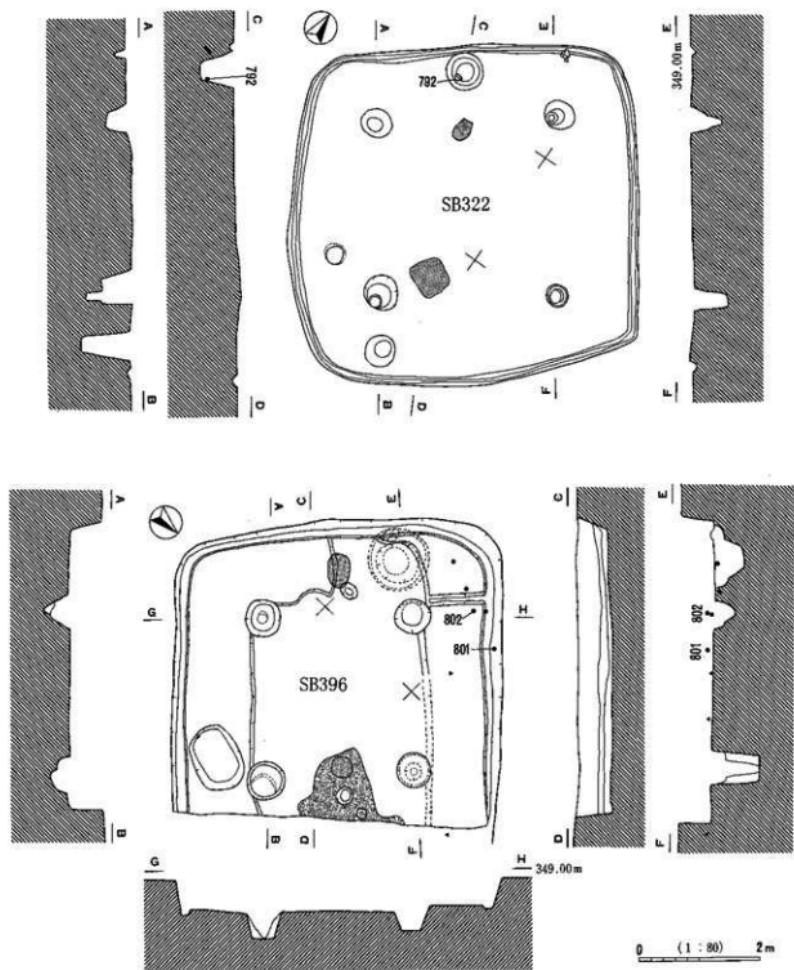


SB 3 2 2 (第45図)

I B 2・II V 22グリッドに位置する。隅丸方形プランをなし、横長の形態を示す。5.5×5.8mで、31m²を測る。掘り込みは浅い。

第44図 SB 30・182遺構図

ピットは主柱穴4ヶ所のほか、3ヶ所検出された。北壁中央部のピットは径60cmの円形を呈し、深さは80cmを測り、主柱穴の深いものと同様であった。壁際には全面に周溝が検出された。炉址は地床炉で、北壁側主柱穴間に1ヶ所検出された。反対側主柱穴間床面にも酸化状態を示す場所がある。



第45図 S B 322・396遺構図

S B 3 9 6 (第45図)

IIW 8・13グリッドに位置する。1辺を切られ、全容は明らかでないが、縦長の隅丸方形プランをなすものと想定される。残存部で、(5.0) × 5.5mをなし、面積は24m²を測る。

床面は主柱穴間内と外では段差があり、壁周辺幅1m程にわたって10cm程度高くなっている。主柱穴は4本検出され、短辺側主柱穴間中央にもピットがみられる。貯藏穴と考えられる穴も2ヶ所にみられる。炉は地床炉で、短辺側の両サイド主柱穴間に1ヶ所づつ、計2ヶ所検出された。建て替えによって入口が対反側に代えられたものであろうか。

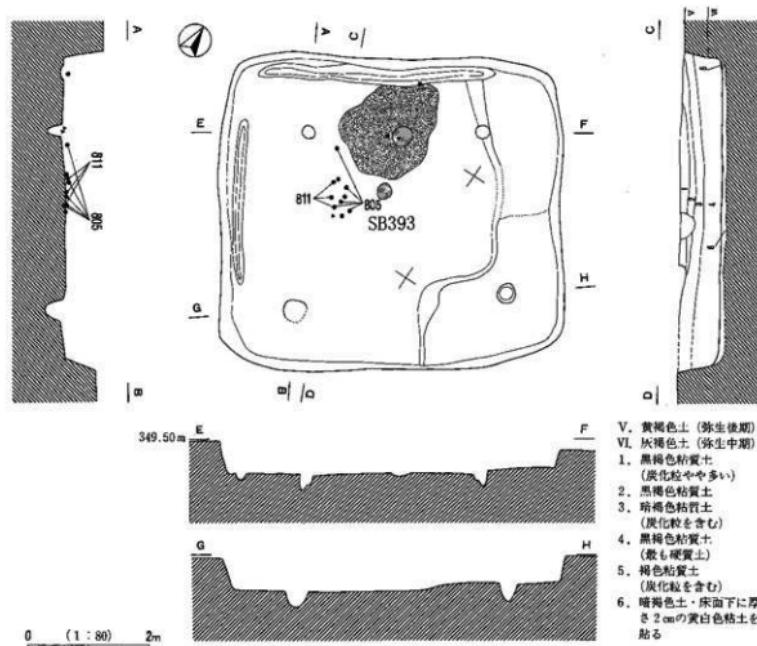
SB393 (第46図)

IC 6・7・11・12グリッドに位置する。隅丸方形プランをなし、横長の形態を呈す。5.1×5.6mで、25m²を測る。検出面から床面までの掘り込みは60~70cmを測る。

床面は凹凸部があり、炉に向かって右側長軸辺側が幅1m程、高さ15cm程、床面が高くなっている。所謂「ベッド状遺構」となる。同部分は硬化しない。炉前面および、中央部床面が堅緻であり、硬化面となる。

主柱穴は4ヶ所確認された。炉址は地床炉で、主柱穴間に1ヶ所検出した。径35cm程の円形を呈し、強く被熱して橙褐色に酸化する。地床炉から入口部手前1m程の床面も酸化被熱している。地床炉上からは河原石2個体が出土しており、縁石炉であった可能性がある。

遺物は床面左側の直上で破片がまとまって出土した。



第46図 SB393遺構図

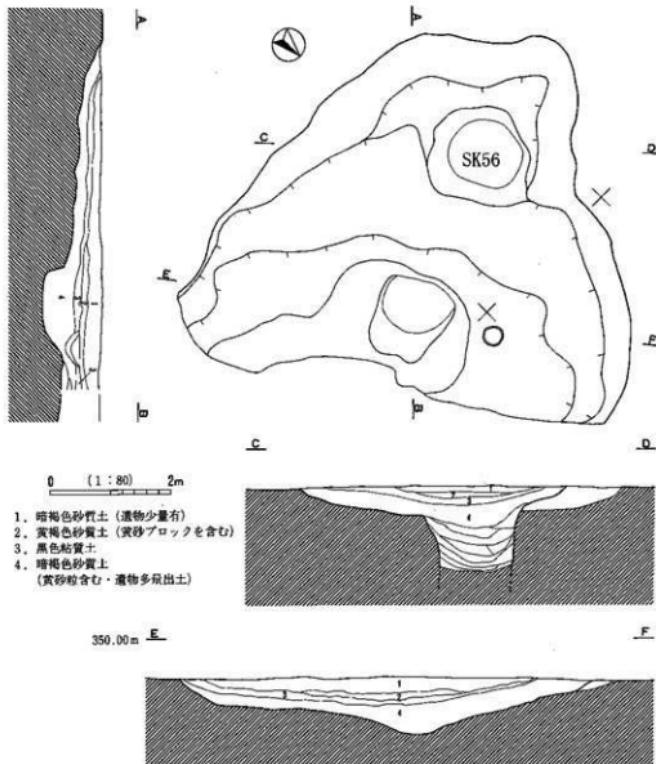
(2) 井戸

SK56 (第47図)

II V 8・9・13・14グリッドに位置する。旧河道 S D101の後期遺物包含層調査時に確認された。調査当初は弥生時代後期の遺物群に古墳時代前期の遺物が混合する状況であった。土層ベルトの断面観察から、中央に窪みがあり、古墳時代前期の遺物が出土すること、周囲は旧河道 S D101傾斜面に廃棄された弥生時代後期遺物包含層まで掘り下げられていることが明らかとなった。

S K56は S D101が蛇行する流路攻擊面部分に位置する。S D101は、古墳時代前期にはすでに埋没し窪地となっていたが、S K56はその幅7.6m程の窪地入口部に掘削されている。形状は径1.6mの円形をなし、直に落ち込む形状を呈す。底面まで調査が行われていないが、調査が行われた最下部までは1.4m程を測る。

遺物は埋土中より、土器が破片となって出土したが、完形に復元できるものはない。小型の精製土器群の破片が目立つことから、周辺で何らかの祭祀行為が執り行われたものと想定される。



第47図 SK56遺構図

SK166 (第48図)

II R14グリッドに位置する。旧河道S D101弥生時代中期面の調査時に確認されたもので、遺構の最下部を調査する結果となった。遺構の形状、最下層における砂質土のラミナ状堆積から井戸址と判断した。

SK166は、旧河道S D101の窪地に掘削されている。検出面の標高は345.7mであったが、同遺構付近の古墳時代前期遺物包含層は標高347.5m付近にあり、約3mほど掘り込まれた井戸の可能性がある。底部の形状は、長径0.7m、短径0.5mの橢円形をなし、直に落ち込む形状を呈す。上部の形状は明らかではない。

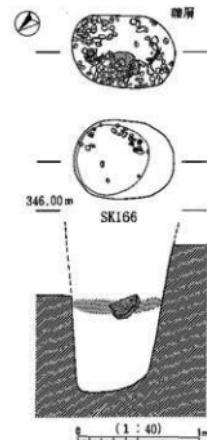
底面より70cm上部には径5~8cm大の河原石の集石が散漫ながら確認され、同集石層中より、胸部焼成後穿孔が施された壺1/2大下半部と植物繊維で編みこまれた籠(第146図)が1つ正位の状態で検出された。同集石下層は砂質土のラミナ堆積をなす。

(3) 青銅鏡片出土ポイント (第19・49図)

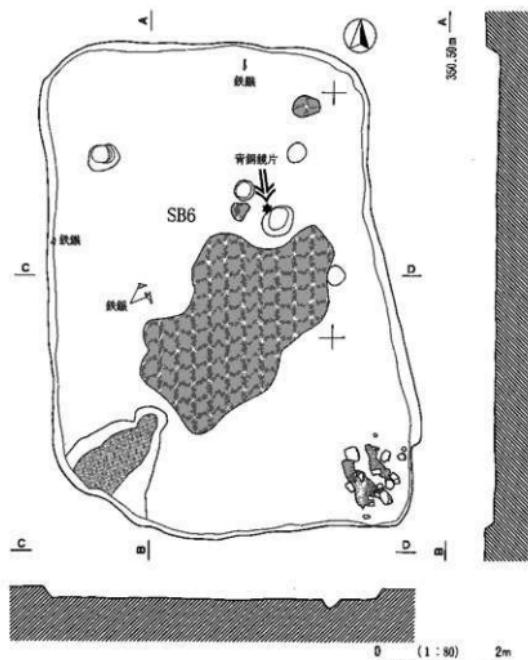
古墳時代前期の遺物と想定される青銅鏡片が、11世紀代の大型竪穴式住居(建物)SB6の北側床面上から出土している。(第49図)。

SB6はIA15-20・IB11-16グリッド(第19図)に位置する。長軸8m×短軸5.5mの長方形大型住居で、南東コーナーに石組みのカマドをもち、床面中央部が長さ4m、巾2mに渡って被熱酸化する。南西コーナー部にも同様な被熱酸化面が存在する。床面上からは、鐵鍬・刀子が数点出土した。

青銅鏡片は、住居址中央部のピット脇から出土した。同住居址内から平安時代以外の遺物の混入はなく、遺物もごくわずかであった。平安時代の建物の埋土中に位置していたことはほぼ間違いないく、銅鏡が遺棄された空間が当グリッド周辺であった可能性を示している。



第48図 SK166遺構図



第49図 青銅鏡片出土古代住居址

第4節 旧河道の調査

1 調査概要

① 概要

S D100, 101, 102は、沖積地自然堤防面に埋没した旧河道である。SD100, 101は現在の蛭川に接近した大タグリッドI～II地区に、SD102は自然堤防背面と金井山山麓との境界の大タグリッドV・VII地区に位置する。旧河道内からは縄文時代後期から古墳時代前期の遺物が出土した。考古学的所見では、その開析時期は弥生時代中期以前にあたり、河道が埋没した結果旧河道上にもムラが展開するのは古代以降であることが明らかとなった。

縄文時代後期から弥生時代中期以前の遺物は下層より出土したが、その主体は弥生時代中期末の栗林様式の土器と石器で、他時期の遺物は数パーセントにも満たない量である。弥生時代後期から古墳時代前期の遺物は、SD100, 101においては栗林包含層と間層をはさんで中層より出土した。当分冊では、SD100, 101の弥生時代後期～古墳時代前期層について扱い、SD102およびSD100, 101の下層については弥生時代中期編でデータを提示して考察を行う。

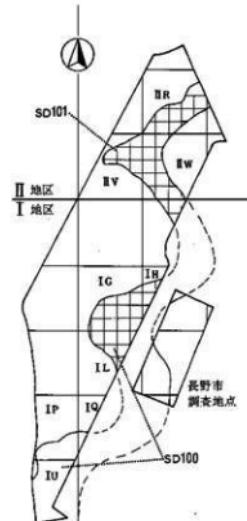
② 経緯

旧河道の存在が明らかとなったのは、調査区全域に広がる古代集落面の調査以降である。古代面で試掘トレンチを入れたところ、古代面より0.5～1m地下に弥生集落面が確認された。同層は、集落外に1～2m深く落ち込みをみせたため、調査員は当初、環濠の構を想定したが、その規模、土層堆積状況から旧河道であると判断した。(第1章第1節 経緯と経過参照)

旧河道の調査は、工事行程との擦り合わせで設定された調査区毎に行われた。報告書では調査区の呼称をAからF地区に置き換えて報告を行う(第4図)。当初、A・B地区(I P・Q・L・G・Hグリッド)で行われた調査では、集落側河道線辺部で多量の弥生時代後期の土器群を検出したが、河道対岸は調査区域外にかかり明らかではなかった。この段階で、A・B地区は同一河道と想定し、SD100と命名する。C～E地区(II R・V・Wグリッド)で検出された河道部では、A・B地区と同様な遺物出土状況を示し、A・B地区と同一河道と判断したが、多量の遺物処理を考慮し、SD101と命名した。同一河道名が地区によって呼称が変わってしまうと言う結果となつたが、本来は同一名称にすべきであろう。SD100, 101は同一河道として評価するものの、報告書では調査時点のままで報告を行う。同河道は、近接地点を調査した長野市埋蔵文化財センターの発掘調査によって、河道対岸部が検出され、その様相が明らかとなった。第4節では、河道の流跡変遷ならびに遺物出土状況を示す。

2 旧河道の調査

SD100・101とともに弥生時代中期以前に自然堤防上を削り込んだ



第50図 旧河道(SD100・101)配置図

で形成された河川であることが分かった。削り込み開始の時期がいつ頃まで遡るかは現在まだ明確でない。断面図からは弥生時代中期末の栗林式土器を含む砂層・砂質シルト層・粘性のあるシルト層の流路に削られる形で、材・木片を多量に含む有機質の粘土層・シルト層の存在が認められた。弥生時代中期以前の河川の状態を発掘調査時に認識していなかったため資料は少ないと、推定を含み河川の変遷を簡単に述べる。

弥生時代中期以前のある時期に自然堤防が蛇行河川によって大きく解剖された。解剖後、流路には有機質の粘土層・シルト層が堆積するとともに、直径約30~40cm(最大約60cm)、長さ約2~5m(最大約8~9m)の材やそれより小さな直径約5~15cm、長さ約50cm~2mの木片が含まれていた。SD100の珪藻化石分析からは流水不定性種を伴う流水性種(中~下流性河川指標種群集であり好清水性種)の多産が明らかになっている。清浄な水質で流れているという結果である。弥生時代中期末の時期には流入物質の量や流速も増したようで、粗粒の堆積物に変化する。砂層・砂質シルト層の互層と遺物・木片(下位のものよりどちらかと言うと小さいものはほうが多い。)が混ざって堆積する。弥生時代中期以前の時より流路の屈曲がやや強くなる。その後自然堤防上まで覆うような黄褐色~灰黄褐色のシルト質砂層によって河川は埋まる。弥生時代後期も一時的に流れがあり削ったりするが基本的には既に帯状の窪地であり斜面に土器が廃棄された。その後古代、10C頃までに窪地は完全に埋まり平坦化する。そして住居なども建てられるようになる。

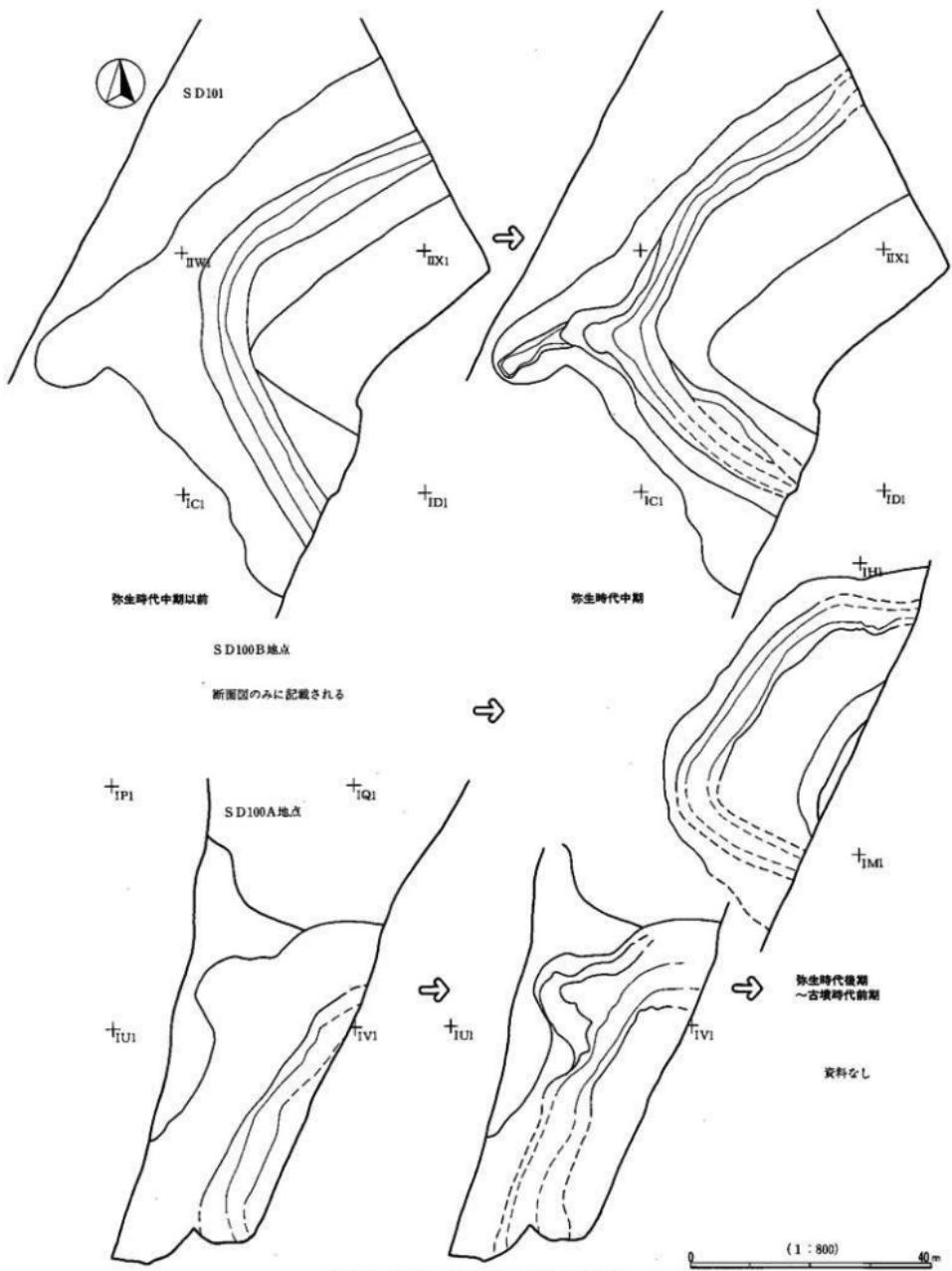
次にそれぞれの河川について記載をする。堆積物の記載などは人により見方が異なるため加筆・修正をおこない表記の仕方を統一するよう努めた。

(1) SD100A・B地点

平面形について見ると、主に西側の調査地区内側では窪地の縁がはっきりしているが東側は不明瞭である。隣接する長野市松原遺跡農協地点での成果を合わせて考えると弥生時代後期の検出面において窪地の幅は約35~40m、深さは約1.5~2mと推定される。当時の生活面は検出面よりも上位であることを考慮すると実際はそれ以上であったと思われる(第51図)。

B地点調査区東側の断面F(第52図)では弥生時代後期の遺物包含層は5暗褐色シルト層で粘性や締まりもやや強くなっている。層厚は約10~60cmで、炭化物・焼土を含んでいる。直上の古墳時代前期の遺物包含層も層厚約10~30cmで同質の堆積物であるが、比較すると下位よりもやや暗色である。断面G(第52図)では弥生時代後期の遺物包含層は10褐色~暗黃褐色シルト層である。下部では細粒砂混じりになる。層厚約50cmである。直上の古墳時代前期の遺物包含層は5・6褐色~黒褐色シルト層で色調の差が断面Fよりも明瞭である。層厚は約10~40cmである。それぞれ下位の堆積物を覆う形で堆積し、その上面は弥生時代後期、古墳時代前期ともまだ凹形で窪地の状態であった。

土器集中が見られた河川西側の断面A、B(第52図)では3・5にぶい黄褐色シルト層で粘性がやや強く炭化物を伴う部分に箱清水式土器を含むことが特徴である。土器を伴わない部分は2・4にぶい黄褐色砂質シルト層となる。層厚は全体で約120cmであり、その中に土器集中部分がレンズ状に厚さ約30cmで含まれる。断面A、Bは包含層の一部分の記録であるが断面F、Gとやや堆積の状況の違いが見られる。断面F、Gでは弥生時代後期の遺物包含層は下位の黄褐色シルト質砂層を多少削っているもののほぼトレイスする形で堆積している。ところが断面A、Bではこの黄褐色シルト質砂層が欠如してさらに下位である弥生時代中期の遺物包含層の上位に直接弥生時代後期の遺物包含層が堆積している部分が見られる。松原西地区全体には黄褐色シルト質砂層が分布し、対岸の東側には連続して堆積していることから、河川西側だけ堆積しなかったとは考えられない。人為か自然かは不明であるが削られていると思われる。黄褐色シ

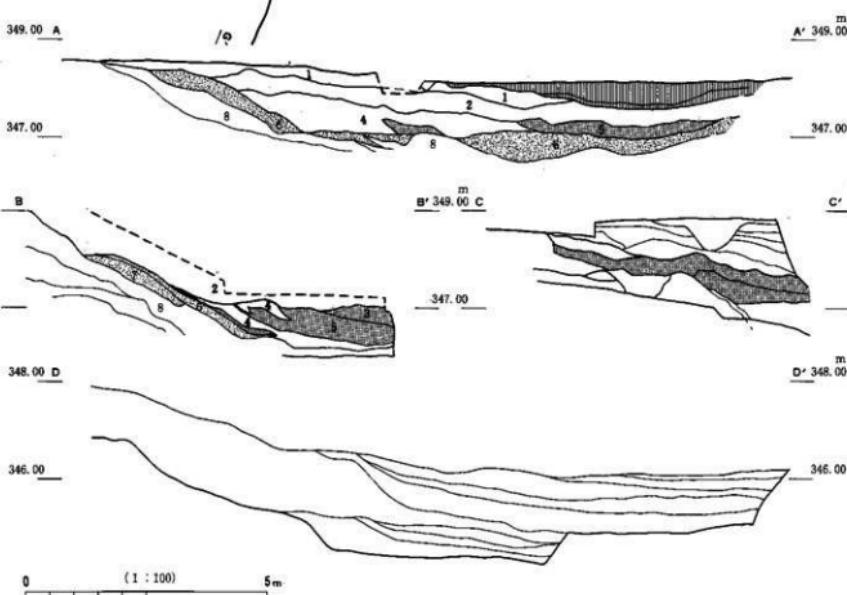
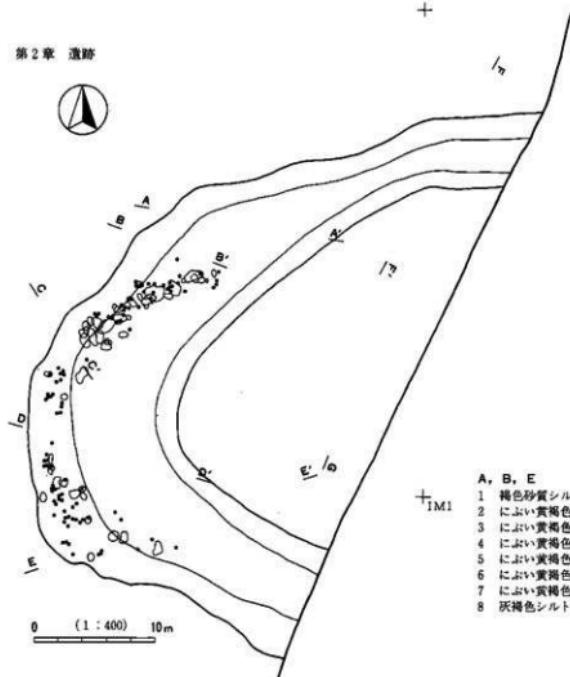


第51図 旧河道 (SD 100・101) 流路変遷

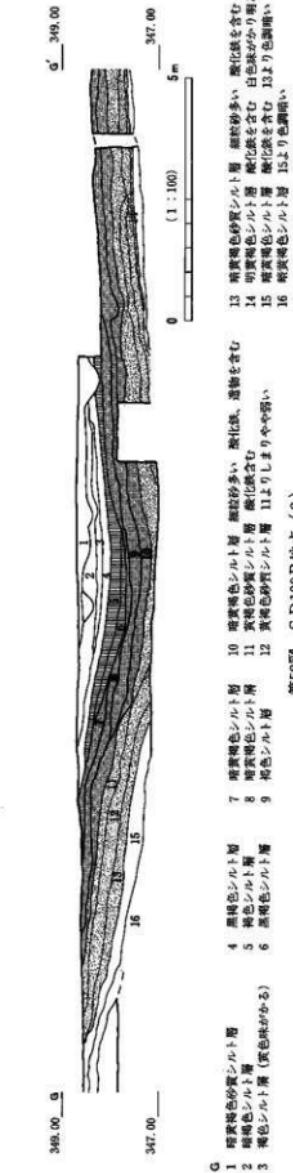
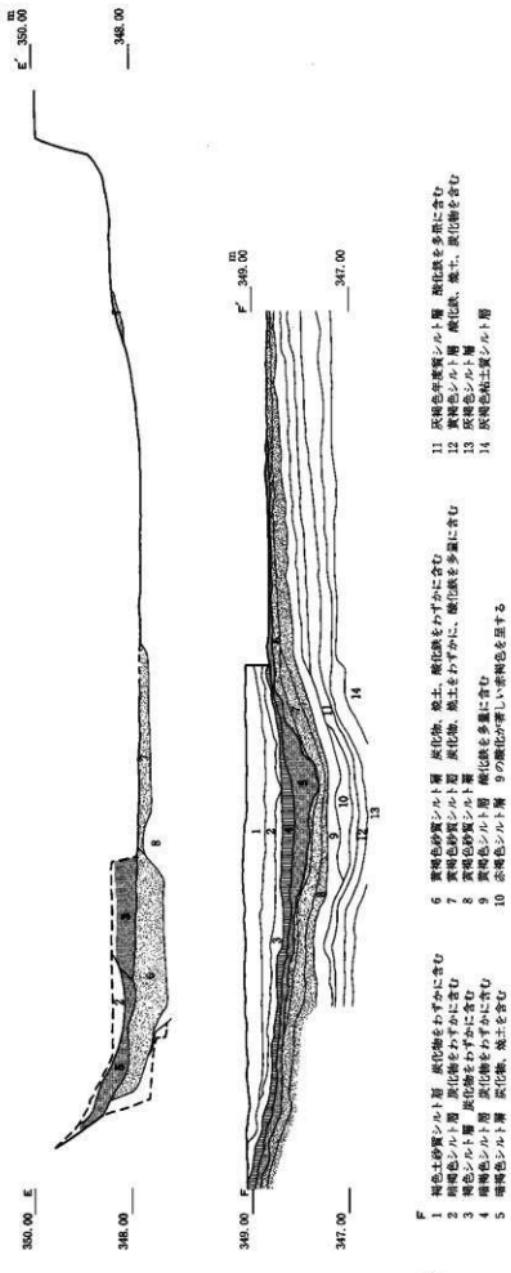


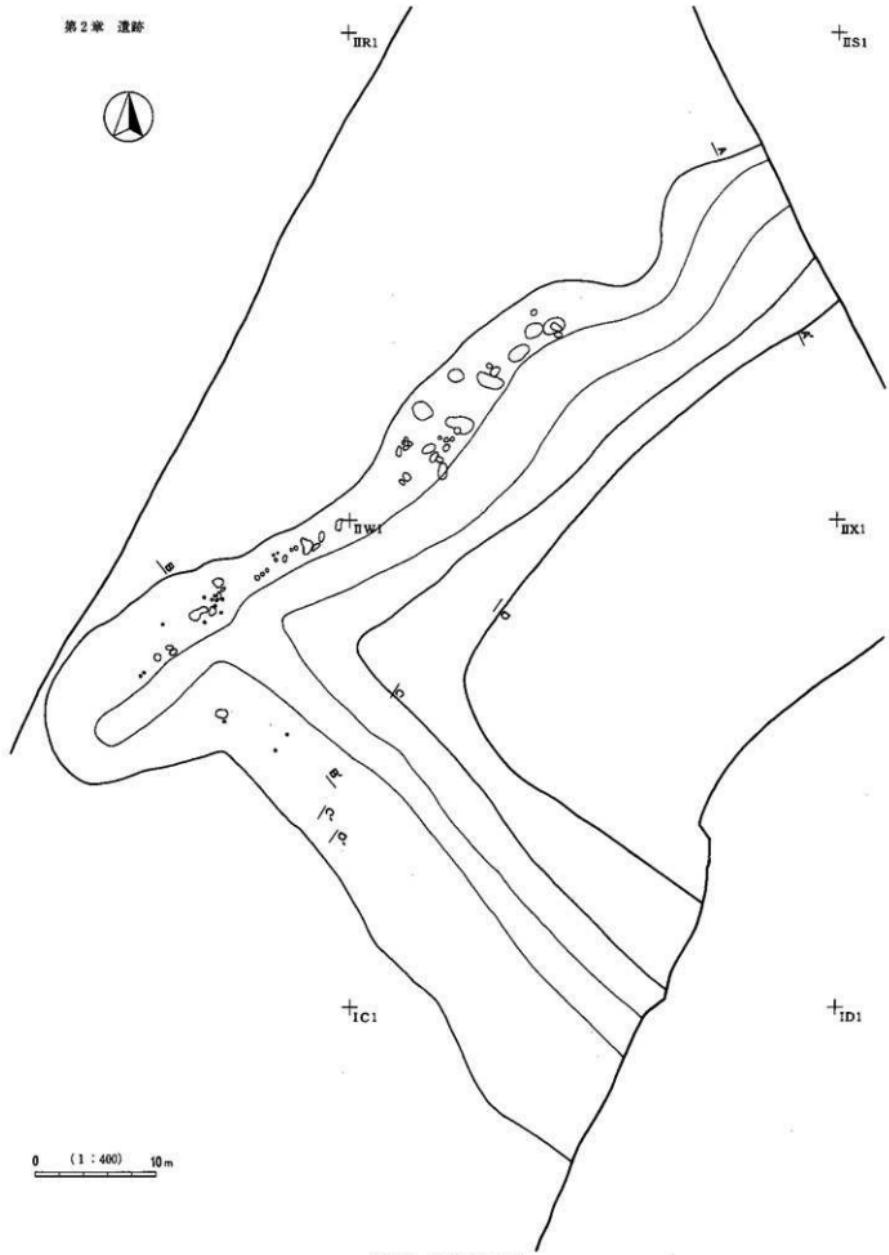
+

+

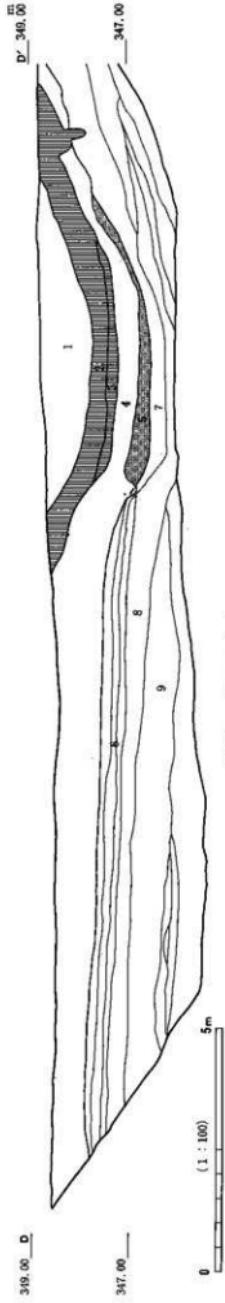
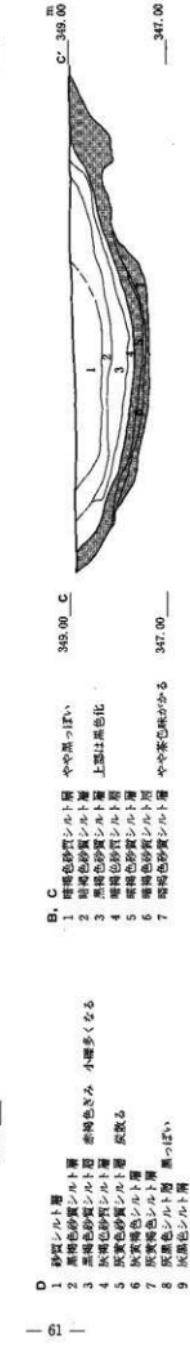
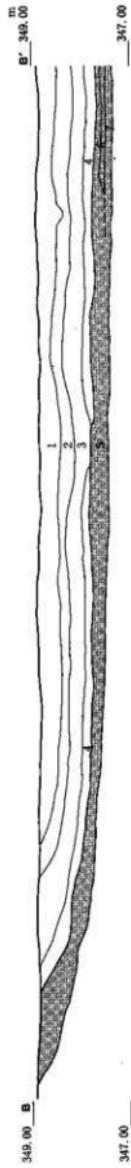
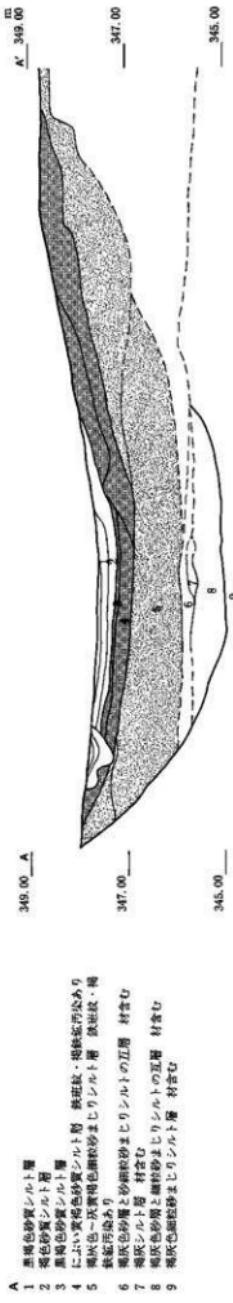


第52図 SD100B地点(1)





第53図 SD101 (1)



第55図 SD101 (2)

ルト質砂層が人為的に欠如し土器集中（麻糸）との関連があるとすればおもしろい。

断面Dでは弥生時代後期の遺物包含層を掘り終えた後の凹地の形が図の上面で表現される。断面Eもほぼ同様である。

A地点については弥生時代後期・古墳時代前期に関する記録が無いため記載できない。しかし写真と担当者の記憶によればSD100B地点・SD101と同じような状態であったと予想される。なお東壁で珪藻化石分析が行われているが必ずしも河道内の堆積物を分析していないので、河川の環境変化を連続して捉える資料とならなかった。

(2) SD101

平面形は「く」の字状に屈曲していて、検出面において幅20~30m、深さ1.5mの大きさである。窪地の縁は両側とも明瞭である（第53図1）。

調査区北東の県道直下断面A（第53図2）は弥生時代後期・古墳時代前期の遺物包含層の堆積状況を良く表している。弥生後期の遺物包含層は4に分ける黄褐色砂質シルト層で鉄・褐鉄鉱の斑紋が見られる。層厚約30~50cmである。その上位には3 黒褐色砂質シルト層が層厚約20cm以上堆積している。古墳時代前期の遺物包含層に相当すると思われるが、記載には箱清水式土器と4世紀の土器が一緒に出土しているとかかっている。断面B、Cも同様で5・6・7 暗褐色砂質シルト層中から弥生時代後期・古墳時代前期の土器が多数出土している。層厚は約20~50cmである。時期と層位とが一致して分層出来ないが、包含層の上部がやや黒く、下部はやや茶色味がかる違いが認められる。断面Dでは弥生時代後期の遺物包含層は5灰黄褐色砂質シルト層で炭化物を含む。層厚約50~90cmである。上位に部分的に厚さ約20cmの4灰褐色砂質シルト層を挟んで2・3 黒褐色砂質シルト層の古墳時代前期の遺物包含層が堆積する。層厚約30~60cmである。この灰褐色砂質シルト層はこの断面でしか確認されないため弥生時代後期の堆積物か古墳時代前期の堆積物かどちらにも属さないのかは不明である。どのセクションでも下位の堆積物を覆う形で堆積した上面は凹形に窪んでいる。

(3) SD102

SD102は調査地区北東の山沿いに位置し、現在でも帶状にやや低くなっている用水が流れている。調査段階では弥生時代後期から古墳時代前期の流路、窪地に相当する構造は確認されていない。所見では古代、12世紀頃まで流路が存在し、埋没・平坦化したのは中世、13世紀頃とされている。また第1章第2節調査地の層序で述べたように、東地区では弥生時代後期から古墳時代前期の遺物包含層が欠如しているため面的な調査はされていない、当時の河川の状態は不明である。しかしSD100・SD101より少量ではあるが若干箱清水式土器が出土していること、断面図では弥生時代中期の流路と古代の流路との間に時期を特定していない流路が認められることから、弥生時代後期から古墳時代前期に相当する流路・堆積物が存在していると考えられる。

本分冊ではSD102について詳しく触れることができないが、弥生時代中期遺構編において遺物の出土状況をふまえて、流路の変遷・堆積・埋没の状況を検討したい。

3 遺物出土状況

旧河道SD100、101、102の、弥生時代後期・古墳時代前期層から出土した遺物には、土器・木製品・紡錘車・ガラス小玉・鉄器がある。その主体を占める弥生時代後期の土器群は、自然堤防を開拓した河道の傾斜面から出土しており、河道底面からの出土は少ない。いずれの地点においても、弥生時代後期の

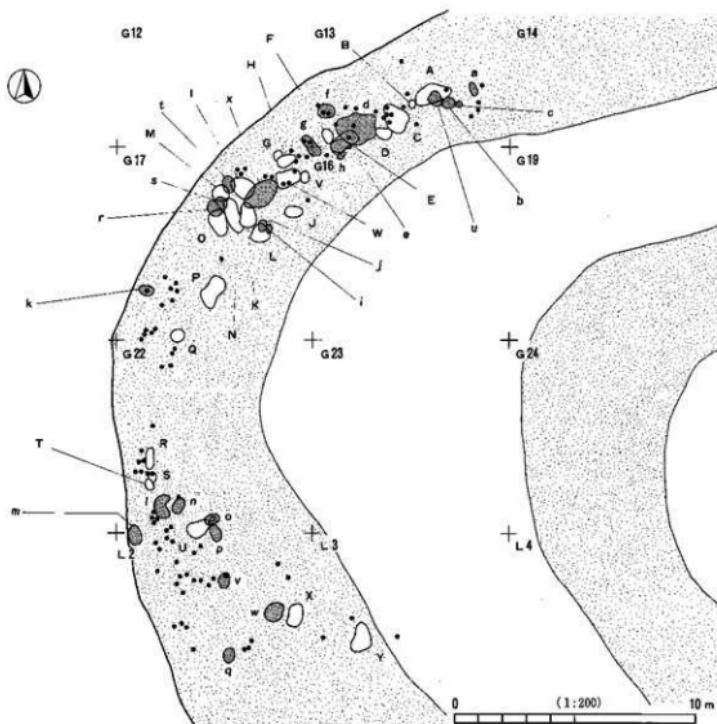
土器群は、集落が展開する傾斜面側に存在することが、旧河道 S D100対岸を調査した長野市埋蔵文化財センターの調査で想定することが可能となった。一方、古墳時代前期の土器群は、河道傾斜面部と底面に広く分布するが、底面を中心に出土する傾向にある。

遺物の出土状況、取り上げ方は各地点毎に異なっており、地点毎に遺物出土状況を提示する。S D102 の遺物出土状況については、中期遺物編で詳しく触れることにし、本節ではその概要を留める。

(1) S D100 A・B地点 (第54図: PL 10-11)

A地点は集落南側のI P, Q, U, Vグリッドに位置し、現経川およびその氾濫原に接している(第4図)。古墳時代前期に該当する遺物の出土はなく、弥生時代後期の遺物が集落側傾斜面より多量に出土した。土器は各器種に及び、完形に近い状態で出土したものもあるが、多くは破片の状態で集落側から廃棄されたかのような状況で出土した。A地点の土器出土状況の記録はない。

B地点は集落東側のI G, H, Lグリッドに位置する。古墳時代前期の土器は、集落南東部側にあたるI H11グリッド付近で、旧河道底面から若干出土したが、他の地点と比較するとその量は少ない。弥生時代後期の遺物はA地点と同様に集落側傾斜面より大量に出土した(第54図その1・その2 PL 11)。



第54図 S D100, B 地点土器出土状況図(土器群)(その1)

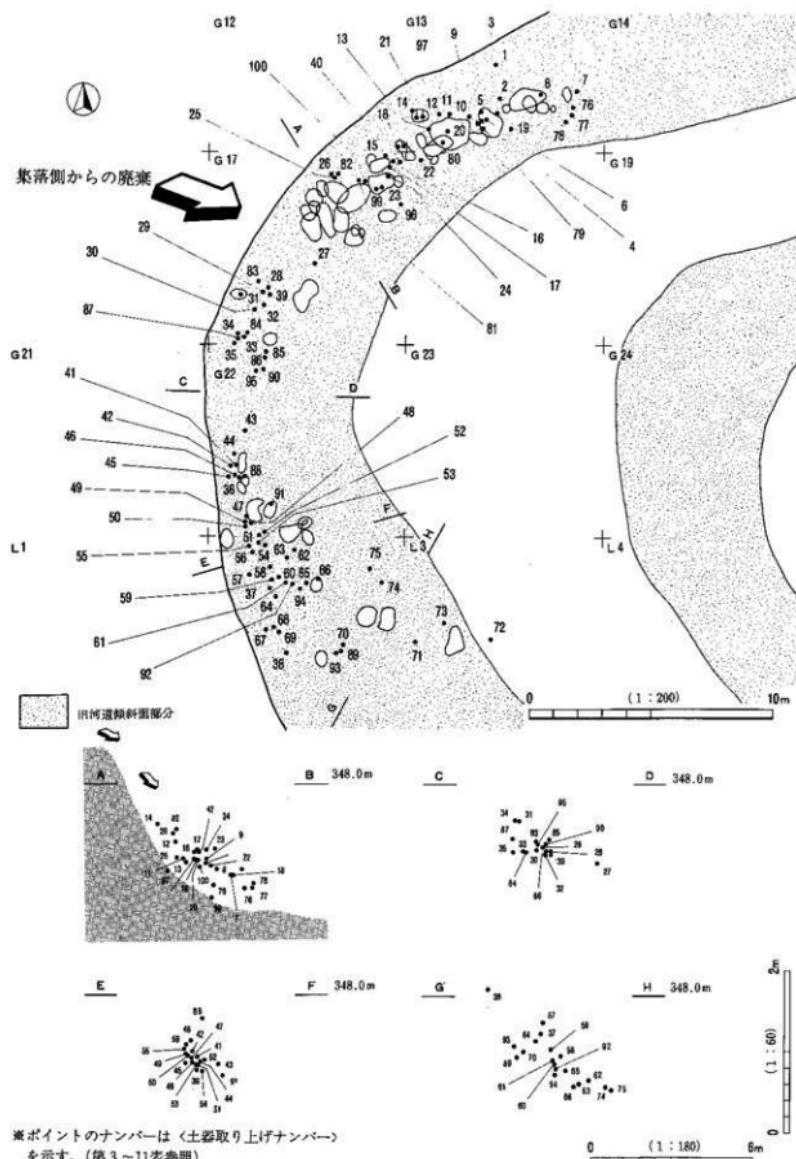


図54 SD100.B地点土器出土状況図(ナンバー土器)(その2)

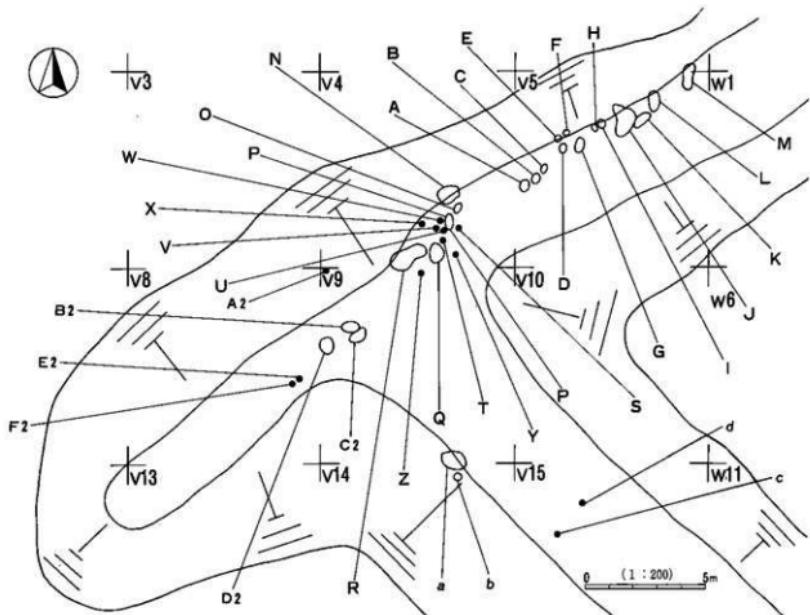
弥生時代後期の遺物は、いくつかのまとまりに分れるが、集落における北側ブロックから南東傾斜面にあたるG13・17グリッド付近では遺物が集中する傾向にある。土器は集落側から廃棄された状況で出土したが、完形の壺や高杯が廃棄された状況で出土した例も少ないながらある（PL11）。遺物の取り上げは個体毎に取り上げられたものと、出土状況のまとまりで取り上げられたものとがあり、前者を算用数字、後者を大文字と小文字のアルファベットで取り上げ、土器取り上げナンバーを付けた。土器の取り上げナンバーと土器図版ナンバーの対照は、第3～10表「旧河道土器出土状況一覧」で照合が可能である。

(2) SD101 C・D・E地点 (第55～57図: PL13)

①古墳時代前期

SD101はII R, V, Wグリッドに位置し、C～E地点に分れる（第4図）。古墳時代前期の集落は、3地点を取り囲むように展開しており、弥生時代後期集落では認められなかった旧河道対岸にも住居が展開している。旧河道の埋没が進んだ状況が窺えよう。写真図版13の河道は埋没が進んだ古墳時代前期面の完掘状況である。

古墳時代前期の遺物は、住居群に取り囲まれるC地点（⑥区東地区）・D地点（①～2地区）に集中する（IV・IWグリッド付近 第4図）。遺物の取り上げは、C地点では地区内一括、D地点では8mを単位とする中グリッド毎に行われた。古墳時代前期の土器は旧河道底面付近からの出土が多く、弥生時代後期の土器との混在は少なかったが、層位的には接近しており両者の混在化も認められた。



第55図 SD101.D地点土器出土状況図

②弥生時代後期

旧河道調査地点と集落の位置関係は、C・D地点（第55図）が集落北東部側に、E地点（第56、57図）が調査区内に確認できる集落域とは接していない空間となる。弥生時代後期の遺物は、A・B地点での集中の仕方とは異なり、集落と接するC・D地点の集落側傾斜面には少なく、集落と接していないD・E地点の傾斜面（II Vグリッド付近 第55図 P L13）に集中した。弥生時代後期と古墳時代前期の遺物集中は河道の傾斜部と底部という位置関係にあり、異なる点に存在する。

D地点のV 4～5・8～9グリッド河道斜面部（第55図）からは弥生時代後期の土器がまとめて出土した。遺物の取り上げは遺物群のまとまりにアルファベット名を与えて処理されている。土器は北西側から廃棄された状況で、いくつかのまとまりで出土した（P L13）。B地点の器種に比べ、甕の比率が低く、壺の割合が高い。赤彩土器の高杯、鉢、赤彩深鉢の占める割合も高く、単に生活具を廃棄した地点でないことを示唆する。完形に復元できるものが少ないと特徴となる。

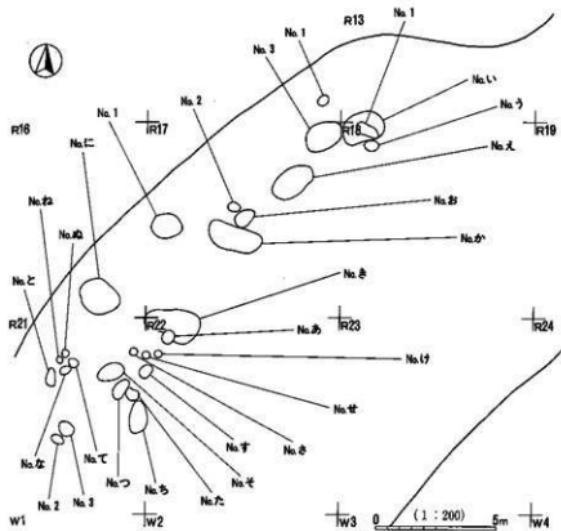
E地点のR16～18・21～22グリッド（第56図）では、D地点からのつながりで河道縁辺部に箱清水式土器がまとめて出土した。担当調査研究員は遺物の取り上げを「仮名」で処理したが、原団図等の照合に混乱を招かないよう、担当調査研究員がふたままの状況で提示する。当地点において特記すべきことはII R17-21-22グリッド付近に、器高50cm以上の大型壺を中心に、壺類の集中傾向が認められることである（第57図）。この大型壺が集中する地点は、旧河道の傾斜部でも上部の傾斜変換点付近に位置する。

大型壺663・665は埋置された状況でII R22グリッドから、大型壺664はまとまった状況でII R21グリッドから出土した（第57図）。いずれも接近した位置にあり、大型壺集中地点としてとらえる。

大型壺663は正位の状態で「け」の位置より、大型壺665は「あ」の位置より出土した。特に665は調整された口縁部を下方にして斜位に埋置されていた（P L14）。いずれも欠損部を除き完形の状態に復元された。土器内部から出土した

ものはなく、掘り込みのプランも明らかとならなかった。

E地点大型壺集中地点のように、集落縁辺部から大型壺がまとめて出土する調査例は、注意が必要である。長野市石川条里遺跡では、水田域と接する微高地境界に弥生後期大型壺の埋置が集中する地点があり、土器の内部からガラス小玉が出土したものもあるが、骨片などは確認されていない。松原、石川条里に認められる大型壺の埋置を、大型壺埋納行為と評価する。また、群馬県有馬遺跡の土器棺に頸部打ち欠き後に調整をする土器棺が認められるが、松原遺跡出土大型壺665にも認



第56図 SD101.E 地点土器出土状況図

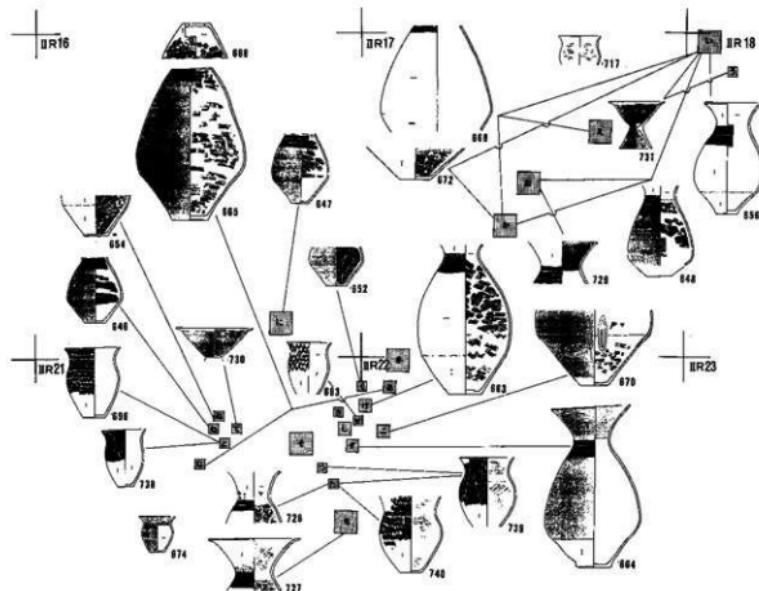


図57 SD 101.E 地点大型壺集中区出土状況図

められることと、蓋と想定される底部穿孔の甕666が存在することから、大型壺集中地点を土器棺埋納と位置づけ、墓域エリアとして評価したい。SD 101D・E地点傾斜面に赤彩器種が多いのは、墓域で使用された共飲共食具が廃棄されたことが想定できる。SD 101出土の土器群のあり方からその北西側（IIK・L・P・Qグリッド付近）の調査地区外域に墓域の所在が充分想定できる。

土器棺に転用されたと想定した土器について理解するために、子どもと大型壺665・302・303をいっしょに撮影した写真を写真図版PL50に提示した。写真的子供たちの年齢は0歳・5歳・9歳である。

(3) SD 102

SD 102からは弥生時代後期・古墳時代前期の土器および、弥生時代ないしは古墳時代前期に位置づけることができる木製品が出土した。木製品の取り上げについては検討の余地があり、その出土状況については弥生中期編で取り上げ、当分冊では当該期に想定される木製品のみを示す。出土土器についても弥生中期編で補遺として提示する予定である。

(4) 旧河道土器出土状況一覧

SD 100、101出土土器の出土状況を第3~11表に「旧河道土器出土状況一覧」としてまとめて提示する。第54~57図の数字、アルファベット等のナンバーは表の「取り上げNo.群」である。「土器図版番号」と照合すると土器の出土位置が確定する。

第3章 遺物各説

第1節 弥生時代後期

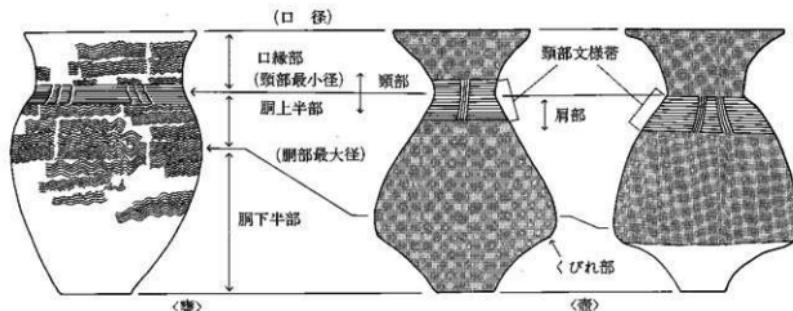
松原遺跡の弥生時代後期の遺物は、箱清水式土器を主体とする。土器の提示方法は、造構単位のまとまりと旧河道出土土器群とに分け、第2項では集落内の造構毎に、第3項では旧河道S D100とS D101のそれぞれについて、各器種毎にまとめて扱う。甕については、成形・調整技法・施文手法の観察表を第12~17表にまとめた。遺物の出土状況については第2章で造構毎に示した。

1 観察の視点

箱清水式土器の呼称法について簡単に触れておきたい。箱清水式土器には壺形土器、甕形土器、高杯形土器、鉢形土器があり、器台形土器はない（以下、壺、甕のように呼称する）。煮沸具以外は赤彩ヘラミガキを施すことが多く、煮沸具は櫛描文様によって飾られる。櫛描文の施文手法は、佐原真（佐原1959年）、笹沢浩（笹沢1978年）、橋本裕行（橋本1986年）らによって明らかにされてきた「中部高地型櫛描文」が用いられる。この特徴をもって、箱清水式土器群を中部高地型櫛描文系土器と呼ぶ。

壺、甕における各部位の位置と呼称については第58図の通りとする。壺は頸部文様帯をもち、他の部位には赤色塗彩を施すことが多い。甕は胴最大径下位から口縁部にかけて櫛描文が充填される。壺の頸部直線文と甕の頸部籠状文は、施文原体を器面から離さずに1周する施文となり、甕の口縁部および胴部の波状文は、一定幅の施文を行った後、原体を器面から離す施文となる。回転台と櫛描文の施文手法との関連を予察した佐原真は、前者の手法を「畿内型」、後者の手法を「中部高地型」と呼称した（佐原1959年）。櫛描文の施文手法の呼称については、佐原の「畿内型」「中部高地型」という用語を用いる。

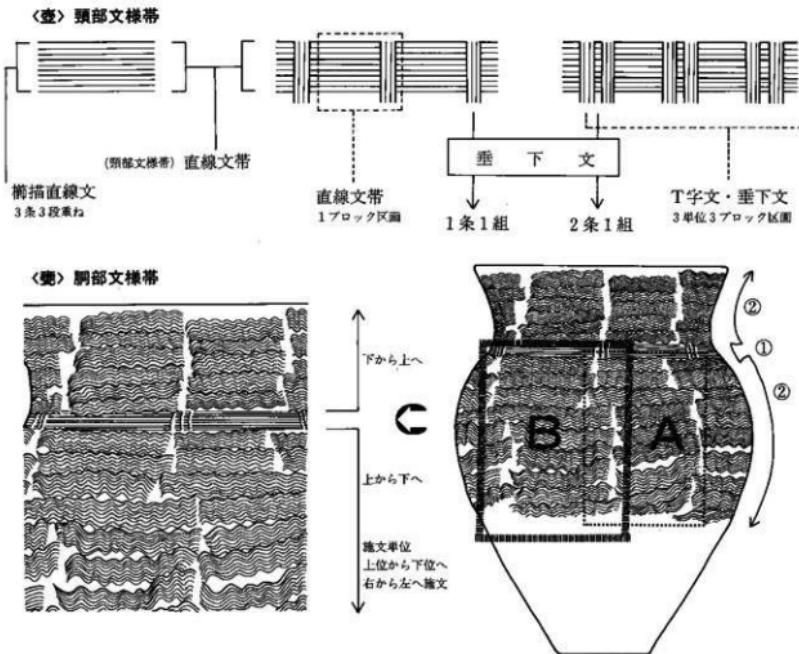
箱清水式土器の櫛描文様とその手法の呼称方法について示す（第59図）。壺の頸部には、櫛描直線文を



第58図 弥生時代後期土器の部位呼称法

多段に重ねる文様帯がみられる。この頸部文様帯を直線文帯と呼称する。直線文帯は同一原体で縦方向に施しする垂下文によって区画される場合があり、この文様帯の総称を「T字文」としてとらえる。T字文は直線文帯を縦に区画する文様であるが、1条で区画する場合と、2条1組で区画する場合がある。垂下文の数は直線文帯を区画する単位となることから、垂下文の数を「○単位」と呼称したい。2条1組の垂下文が直線文帯を4箇所区画した場合、このT字文は「2条1組4単位のT字文」と呼ぶことにする(第59図)。

壺の文様帯は、頸部の簾状文を境に口縁部と胴部に波状文が充填される。一見横帯文風に見える波状文の構成は、1条の波状文を一定幅で上下方向に重ねる「中部高地型描描文」で、縦構成のブロックが横に連続する。中部高地型描描文の施し手法をモデル化したのが第59図である。この場合の施し順位は、①簾状文→②波状文となる。胴部文様帯の施し単位は、施し原体をもった手の動きの範囲と関係する。波状文は手の動きの範囲で上下に重ねられることにより縦方向の重なりとなる。このモデルの場合、上位から下位に向かって波状文を重ねることにより、Aのブロックに文様を充填する。ブロックAとBの先後関係はA→Bとなり、文様帯は右回りに施しされ、土器は左回りに動かされていることが理解できる。中部高地型描描文の施し手法には、施し単位の組み合わせ、切り合いの先後関係によっていくつかのパターンがあり、それが施し流儀として系統づけられる。施し順位の類型は第4章第1節第157図に示している。



第59図 文様帯および施し手法の呼称法

2 集落址出土の土器

(1) 穫穴住居址出土土器

S B 7 1 (第60, 61図1~22: P L, 15)

図示した土器は、1~3が壺、4~7が蓋、8が有孔鉢、9が台付甕、10~21が甕である。

7は、灰色を呈し、ゆがみが激しく還元状態で被熱した状況を示す。その要因が焼成時のものか2次被熱かは明らかでないが同様なものは他に例をみない。甕は頸部に簾状文をもつもの(10~13, 20, 21)と簾状文をもたないもの(14~19, 22)に大別される。後者の施文手法は、14が静止部1回の巣内型で、16~18は数回の静止部をもつ中部高地型で行い、いずれも正位の状態で右回りで施文する。第60図22の小型甕は、形態および文様構成から異系統の土器である。①胴中位の最大径部分で強く屈曲し、胴部がソロバン玉状となる。②口縁部はハケ調整後、ヨコナデを施し、施文を行わない。③胴下半にLR単節繩文施文を行う。①~③の要素は箱清水式土器とは異なる。④波状文は中部高地型で、上位から下位方向に施文する。⑤胴外面にタテヘラミガキ、内面にヨコヘラミガキを施す点は共通要素となる。胎土は、肉眼観察によれば他の土器と変わりない。

S B 1 3 1 (第61図23~27: P L, 15)

図示した土器は、23が甕、24が赤彩深鉢、25, 26が鉢、27が蓋である。25は片口を持つ鉢で、内面に丁寧なヘラミガキを、外面上にナデ調整を施し、一次調整のハケを残す。赤彩はしない。24の赤彩深鉢は被熱し、歪みが激しい。胴最大径を上位にとり、口縁部が短く外反する形状は甕と連動している。

S B 1 3 2 (第61図28, 29)

図示した土器は28, 29双方とも甕である。28は大破片を反転復元した。炉床に敷かれていたもので、2次的に被熱している。

S B 1 3 3 (第61~63図30~51: P L, 15)

図示した土器は、30が蓋、31が台付甕、32~35, 37が高杯、38が鉢、36, 39, 40が壺、41~49が甕、50, 51が赤彩深鉢である。

蓋30は、外面对して内面のヘラミガキが荒く、ヘラミガキ調整から壺の蓋が想定できる。煤の付着はない。色調は灰色を呈し、若干の歪みも認められる。

高杯は、鉢状口縁を呈する鉢状口縁高杯(34~35)と、楕円形口縁を呈する楕円形口縁高杯(37)とがあり、いずれも口径に対して杯部が深い。杯部の立ち上がりが45°前後と急になるところは鉢38も同様である。鉢状口縁高杯は鉢状部分がゆるやかに外反し、明瞭に屈曲しない。

壺のT字文区画は、1条の垂下文で直線文帯を4単位に区画する39と、2条1組の垂下文で4単位を区画する40がある。39は球形を呈すが、頸部はゆるやかに外反し、稜線は認められない。

甕は、①胴最大径を上位にもち、頸部内面に明瞭な稜をもつもの(41~44, 48)と、②胴最大径を中位にもち、頸部内面に明瞭な稜をもたないもの(45~47, 49)に分れる。41と45は両者の成形技法の差を示すと同時にその共存関係を明らかにする。赤彩深鉢の50はヘラミガキで、51はナデによって頸部外面を調整する。台付甕脚部31と、高杯脚部33の接合は充填技法をとり同様である。

SB134 (第63, 64図52~59: PL. 15, 16)

図示した土器は、52~56が壺、57~59が甕である。

壺の頸部文様帶には、直線文(52)とT字文(53~56)が認められる。T字文は、1条1組(53, 54)と2条1組(55, 56)とがあり、いずれも直線文帯を4単位に区画する。56は肩部が完形で残存し、下部および上部は水平に打ち欠かれ、上部打ち欠き面は擦って調整される。器台として再利用されたものとみたい。

57は大形の器で、胴最大径を中位にとり、縊りの弱い頸部をなして口縁部が弓状に外反する。形態的には壺に近く、文様は甕の構成をとる。成形の特徴としては、胴最大径下位に成形時の静止面があり、内外面の稜となる。同様な成形技法は甕に認められるものである。調整の特徴として甕に見られる内面へラミガキを施すことはない。被熟痕跡がなく、煤・オコゲの付着が認められないところからも甕的な用途が想定される。また、胴部下位の内外面に粘土帯を縦に貼り付けた隆帯が1箇所みられる。中期栗林式期の甕に盛行するもので、後期の例は珍しい。

SB135. (第65図65~72: PL. 16)

図示した土器は65~68が壺、69が赤彩深鉢、70が甕、71が鉢、72が高杯である。

壺は頸部の括れが明瞭に屈曲するもの(65)と、弱いもの(66~68)とがある。文様帶の施文部位は、前者が肩部に、後者が口縁部から肩部にかけて施す傾向にある。文様帶は、1条1組のT字文(65)、2条1組のT字文(68)、直線文(66, 67)がある。T字文は65が8単位、68が4単位区画を行う。68は波状沈線による垂下文をT字文間に1箇所のみ施文するが、その原体は櫛の1本より太い棒状工具を用いる。65は無彩の壺で、胴部外面にはタテヘラミガキを施し、口縁部内外面には丁寧なハケ後、ヘラミガキを加えない。その口縁部外面にハケを残す手法は、後期前半の甕に求めることができよう。71は無彩の片口鉢で、内外面にヘラミガキを施す。72は鉢状口縁高杯で、口唇部の突起は箱清水式土器の高杯にみられるものと異なり中期の系譜に近い。

SB140 (第64図60~64)

図示した土器は60, 61が壺、62が赤彩深鉢、63, 64が高杯である。63は楕円口縁、64は鉢状口縁を呈する高杯で、いずれも杯部は深い。64は細片を図化した。

SB141 (第65図73~75)

図示した土器は、73が壺、74, 75が蓋である。蓋の器面調整は、ハケ後ヘラミガキを施すが、ハケ調整痕が残る程度のヘラミガキである。74は天井部に径4mmの通気孔を1孔もつ。

SB152 (第66図76~80)

図示した土器は、76, 78が壺、77が赤彩深鉢、79, 80が甕である。76は折り返し口縁の無彩壺で、内外面に丁寧なヨコヘラミガキを施す。79は口縁部の外反度が大きく、端部に強いヨコナデを施して段をもつ。甕よりも壺の口縁形態に近い。

SB153 (第66図81~88: PL. 17)

図示した土器は、81, 82が壺、83が高杯、84が鉢、85が甕、86~88が蓋である。

壺82は図示した部分が完存する。頸部および胴部を水平に打ち欠いたもので、器台として転用されたも

のと思われるが、第64図56のように打ち欠き部分を調整することはない。文様帯は2条1組のT字文を4単位施し、直線文帯を4ブロックに区画するが、構造T字文の間に赤彩ヘラミガキ手法によるT字文を施す。よって、直線文帯は2系統のT字文によって8ブロックに区画される。赤彩ヘラミガキ手法によるT字文は飯山市小泉遺跡等に認められるが、松原遺跡では破片資料を含めて同例のみである。

S B 1 5 4 (第66図89, 90)

図示した土器は、89が壺、90が高杯である。89は簾状文をもたない壺で、明瞭な稜がなく緩やかに変化する。90は楕円口縁高杯で、口縁端部が内彎することから古相として位置づけられる。

S B 1 5 7 (第67図91~94: P L. 17)

図示した土器は、91が高杯、92が鉢、93、94が壺である。92は折り返し口縁をもつ大型の鉢で、内外面に丁寧なヘラミガキを施す精製鉢である。箱清水式土器では類例が多くないが、長野市四ッ星、牟礼バイパス遺跡等に散見される。壺93は胴最大径部に稜をもち、肩部から口縁部にかけて大きく弓状に外反する。肩部も口縁部の一部となるタイプで、箱清水式土器の古相に認められる。

S B 1 5 8 (第67図95)

図示した土器95は壺である。肩部から頸部、口縁部とゆるやかに外反するもので、頸部内外面に棱をもたない。文様帯は簾状文をもたず中部高地型施文をとる。

S B 1 7 2 (第67, 68図96~105: P L. 17)

図示した土器は、96、97が壺、98が高杯、99、100が蓋、101~104が壺、105が無頸壺である。

小型壺96は、稜を持たない下膨れ状の肩部をもち、頸部は太頭で、短い口縁部が広口状に外反する。外面はハケ後、丁寧なタテヘラミガキを施す。類例は多くない。97は頸部の屈曲が明瞭で、胴最大径付近に比べて頸部が縮まる。口縁部はアサガオ状に大きく外反するが、胴最大径を凌ぐことはない。

壺は頸部文様帯に簾状文をもつもの(102~104)と、もたないもの(101)があり、前者は頸部括れが弱いプロポーションとなる。成形技法では、101が胴最大径で静止面をもつに対し、102は頸部で静止面をもつ。技法、プロポーション、文様帯の関連をつかむことができる。101の施文は、原体を静止させながら右回転する中部高地型である。1単位の波状文は左から右方向へ施し、土器を逆時計回りさせながら左側に文様を重ねることで、右回りとなっている。

103は口縁部外面に文様を施さない壺で、口縁端部には横方向から刺突列点文を施す。両要素は千曲川流域の箱清水式土器には類例が少なく、後期前半の伝統が色濃く残っているものと言えよう。文様施文は中部高地型、口縁部内面はヨコナデのままでヘラミガキを加えない。

S B 2 0 2 (第68図106, 107: P L. 17)

図示した土器106、107は壺である。いずれも床面上からつぶれた状況で出土した。106の台付壺と107の折り返し口縁平底壺には、成形技法上の差が認められる。成形時の静止面が106は頸部にあるのに対し、107は胴最大径に位置する。土器の容量と成形技法の差を考えねばなるまい。折り返し口縁は松原遺跡では珍しい。文様帯の簾状文は4連止めで、類例は松原遺跡では多くない。

S B 2 0 3 (第68図108, 109)

図示した土器108, 109は壺である。壺108のT字文は1条1組で4単位施文し、直線文帯を4ブロックに区画する。壺109は胴最大径下位に静止部をもつが、括れは不明瞭で下彫れ状の胴部になるものと考えられる。

S B 2 0 4 (第68~70図110~127: P L. 18)

図示した土器は、110, 111, 113が高杯、112, 114が鉢、115~117が壺、118~124, 127が甕、125, 126が蓋である。

高杯110, 113は椀形口縁高杯、111は鉢状口縁高杯である。110~114の高杯・鉢はいずれも赤彩ヘラミガキを施すが、外面は110を除きタテヘラミガキ、内面はすべてヨコヘラミガキという技法上の共通志向が窺える。

壺115, 116のT字文は、2条1組で4単位施文し、直線文帯を4ブロックに区画する。116は無彩の壺で、口縁部外面はヘラミガキが弱いためハケ調整痕が浮き出ている。胴外面は丁寧なヘラミガキを施しハケが浮かび上がることはない。117は折り返し口縁壺で、胴外面は左上がりのハケ後、丁寧なタテヘラミガキを施すがハケ調整痕は残る。口縁部外面はヨコナデを施す。

甕の形態は、胴最大径から頸部・口縁部へと稜をもたずスムーズに移行するものがめだつ(118, 119, 123)。119, 123は胴最大径付近で成形を一担静止し、静止面から口縁部にかけて一举に成形する結果、肩部から口縁部が弓状に外反する。121は頸部で一担静止し、口縁部を外反させている。121の胴文様帯は肩部の2条のみで、胴部文様充填率が他と比べて少ないとこから系統を異にする甕とも考えられる。127は胴下位に製作時の静止面を持つ。胴上位外面は波状文を施し、胴下位外面はハケ後荒いヘラミガキを施す。内面はナデを施す。S B134-57と同様で火にかけられた痕跡がなく、壺的機能が想定されよう。松原遺跡の後期では一番大きな甕型土器で、器高は推定で約70cmを計る。

S B 2 0 5 (第70図128~132: P L. 18)

図示した土器は128, 129が壺、130, 131が甕、132が鉢である。

壺128, 129は、肩部が直線的な「なで肩状」をなし、無花果形を呈す。文様帶は掃描直線文を多段に重ねて施文する。直線文はなで肩状を呈する形態の壺に施文される率が高い。

甕130, 131は、口径>頸最小径・胴最大径となり、深鉢状の形態を示す。頸部には等連止めの簾状文を施す。

S B 2 0 6 (第70~75図133~201: P L. 18, 19)

図示した土器は、133~146が高杯、147~165が壺、166~172が鉢、173~179が蓋、180~201が甕である。

高杯は鉢状口縁高杯(133~138)と、椀形口縁高杯(146)とがあり、鉢状口縁高杯が主体となる。鉢状口縁高杯の中には、135のように杯部にゆるやかな稜をもつものがあり、その背景に有段口縁高杯の存在が示唆される。脚部は、長脚(133, 134)と、短脚(141, 142)とがあり、長脚には二等辺三角形の透し孔が認められるものがある。133, 134は鋭い刃物で切り込まれており、4孔あけられている。134の脚部内面の調整手法は、上から下に向かうヨコハケで、倒立技法で成形された事が分かる。脚部と杯部の接合は充填技法で行われている。

壺は完形に復元されたものではなく、全様を知り得るものはない。T字文は2条1組(152, 153)と、1

条1組(154~158)とがあり、いずれも直線文帯を4ブロックに区画すると考えられる。162の胴外面には一箇所、隆部が認められる。163は脚がつく赤彩深鉢で類例は少ない。165はナデ調整の細頸壺で、ハケを残し赤彩しない。163と同様に類例は少ない。

蓋は赤彩(173~175)と、無彩(176~179)とがある。大型品と小型品があり、大型品が赤彩される傾向にある。赤彩蓋が大型壺の蓋として機能したものと想定される。

甕は、①胴最大径から頸部、口縁部にかけて括れが弱く、ゆるやかに変化するもの(180~182)、②胴最大径で括れをもち、頸部から口縁部にかけてゆるやかに外反するもの(183, 184)、③頸部内面に稜をもち口縁部が外反するもの(188)がある。①、②は成形時に、胴最大径部分で静止面をもち、同住居跡出土甕の主体となる。189, 197~201は台付甕となると考えられ、胴最大径部分に静止面をもつ。190, 191は折り返し口縁をなし、190の頸部には簾状文が見られない。いずれも外面に煤の付着はない。

S B 3 7 9 (第75~77図202~216: P L. 19)

図示した土器は202, 205~209が壺、203, 204, 211~216が甕、210が蓋である。壺は大型壺が主体となる。胴部を赤彩するもの(202, 209)と、赤彩しないもの(205)がある。208は口縁部外面に赤彩を施さず内面に赤彩を施すもので、後期初頭の吉田式の系譜を引く。同例は頸部の屈曲が他と異なる。頸部文様帶は、1条1組のT字文をもつもの(202)と、直線文帯をもつもの(205, 206, 208)がある。207は胴部に括れ部を持たない小型壺で、胴部外面にはヘラミガキを施す。

甕は胴最大径から頸部、口縁部にかけて、稜をもたずにスムーズに変化する。文様帶は、簾状文をもたないもの(212~214)と、もつもの(215, 216)とがある。

(2) 土壺・造構外出土の土器

S K 7 0 (第77, 78図218~232: P L. 20)

井戸の底から出土した土器群で、破片が主体であるが218, 225のように完形、あるいは完形に近いものもある。231, 232を除き他はすべて壺である。

壺は赤彩するもの(224~230)と、赤彩せずに丁寧なヘラミガキを施すもの(218~222)とがある。223は淡い赤彩を施す。口縁部が短く直立外反するもの(218, 220, 224)は、端部が外反することなく直立ぎみに立ち上がる。223の折り返し口縁壺も同様な形態を示すと思われる。胴最大径下位は218, 225, 228のように括れ部を有して稜が明瞭なものと、219, 221のように稜をもたないものとがある。221は胴下位に焼成後穿孔が認められる。

甕232は胴最大径が上位に位置し、同部分で成形の静止面をもち、明瞭な括れ部となる。口縁部は胴最大径から弓状に外反する。

S K 3 0 7 (第77図217: P L. 19)

217は完形の小型甕である。胴最大径を上位にとり、頸部から口縁部にかけてスムーズに外反し、頸部の括れが弱いプロポーションとなる。文様帶は、口縁部に波状文を3段充填する。羽状文は静止部を持たずに、右回りに一周する畿内型飾描文となる。

造構外 (第78, 79図233~247: P L. 20)

図示した土器は233, 234, 241~245が壺、246が赤彩深鉢、235~237が甕、238~240が蓋、247が高杯である。

233は外反した胴下半部が、胴最大径下位で明瞭な括れ部となる。文様は、頸部から肩部にかけて幅広く施され、直線文を上から下へ5段重ねた後、1条1組のT字文で4ブロックに直線文帯を区画し最後に最下部を波状文で区切る。I F 10グリッドから出土した。

241、242は大型壺の口縁部である。241の口縁端部は強いヨコナデによって内彎ぎみとなる。口縁部内外面は、ハケ後に赤彩ヘラミガキを施すことなく古相の要素を残す。243のT字文は2条1組で、8単位施文する。いずれも集落内包含層出土土器である。

3 旧河道出土の土器

旧河道S D 100・101の集落側斜面部からは廃棄された土器が多量に出土した。整理作業では、一括性が高いと想定されるこれらの土器群の接合に充分時間をかけることによって器形復元に重点を置いた。甕の完形復元率はかなり高くなつたものの、壺・高杯においては完形に復元できるものが少なかつた。両者の廃棄のされ方が異なるためであろうか。ここではS D 100・101出土遺物を器種毎に提示する。

(1) 旧河道 S D 1 0 0 出土土器

① 壺 (第80~87図248~316: P L, 20~24)

第80~87図は、頸部から肩部に横描文様帯をもち、文様帯以外は赤色塗彩を施す箱清水式土器の広口壺である。形態、文様の特徴に分け提示する。

<プロポーション>

第80図248~256は、胴下半部の括れが緩やかで、明瞭な棱線を持たない。頸部の括れも緩やかで肩部は「なで肩」状をなす。胴最大径に対して頸部までの器高が長い綫長の形状は中期・栗林式土器の系譜上にある。253は胴下半の括れは緩やかであるが、頸部までの器高に対して胴最大径比が高い。

第81図260、262は、綫長無花果形の壺に対して球胴志向タイプの壺で、頸部までの器高に対して胴最大径比が高い。胴下半部の括れは明瞭な稜を形成し、球胴志向であるものの「なで肩」状をなす点が特徴となる。

第80~82図は、器形の全容を想定できるものを中心に集めた。その型式は、頸部と胴下半部の屈折が不明瞭で、肩部から胴上半にかけて「なで肩」状をなすものが主体を占める。一方、第82図272~274のように肩部が張り出し、球胴志向をとるもののが共存する。器形の全容を確認できないものも多い。第80図254は底部を打ち欠きする。口縁部を欠損するものも一定量確認できる。壺の廃棄のされ方、転用方法の一端を示すものだろうか。第82図266は、胴最大径部分に一箇所隆帯を持つ。その手法は厚さ3~4mmの隆帯を貼り付けた後、赤彩ヘラミガキを施し、内面にもタテユビナデを施す。また、第80図255、第81図264は胴部に焼成後穿孔が認められる。焼成後穿孔、隆帯は壺の機能を考える上で重要な要素となろう。

<頸部文様帯>

第80~83図の文様帯は、横描直線文を多段に重ねて構成される。第81図260、第82図265、第83図278~280は2条1組の垂下文で、第80図248、253、第82、83図266~277は1条1組の垂下文で横描直線文帯を区画するT字文である。266~272は4単位のT字文を施文し、直線文帯を4ブロックに区画する。274~277はT字文の施文単位が多く、274(5単位)、275(6単位)、276(10単位)、277(8単位)となる。276、277は垂下文によるブロックの区画が多く、文様構成のあり方が擬態状文に通じる。

第83図278~280は、2条1組のT字文で、垂下文の単位は、278(5単位)、279(3単位)、280(4単位)となる。第80図250~252、第81図263、264、第83図281~285はT字文をもたず、横描直線文のみで構成される。松原遺跡の直線文、垂下文は同一原体の横(横彎状工具)で施文するのが基本であるが、他の

原体を用いた施文も見られる。第82図271は7本のヒゴを結束させた櫛描直線文帯に、彫りが深い4本のヘラ描沈線の垂下文を施文する。266は櫛描直線文帯の上下に、1条の沈線文を施すことによって文様帯を区画している。第84図287の頸部文様帯は、緩やかに結束された2つの櫛歯状工具によって櫛描簾状文が2条施文され、鋸歯文が附加される。鋸歯文はヘラ描沈線で施文し、櫛の刺突文で充填する。第84図288～293は、横位の縫杉状文の破片で、頸部文様帯以外は赤色塗彩を施す。288は横位沈線区画内に斜位のヘラ描沈線を、289は櫛描斜線文を充填する。

第82図266、271、第84図287、288～293に見られる沈線文、ヘラ描沈線文は前段階の施文手法の伝統を残すが、口縁部の調整技法にも少數ながら前段階の様相を示すものがある。第83図277は口縁部外面を赤彩へラミガキをせずに、内面は赤色塗彩を施す。278は口縁外面にハケを残し、内面をヘラミガキ調整する。

<大型壺>

第85～87図300～316は器高50cm以上の大型壺で、縮尺1/6で図示した。300、301、304、305は、胴下半部に明瞭な括れ部を持つ壺である。形態は、胴下半部が逆への字状を呈して括れ部で稜線となり、胴部上半が内彎ぎみに立ち上がる。肩部は頸最小径と括れ部の中間点で直線的に立ち上がりっている。300、305の内面調整のハケメ方向は、括れ部までが横方向、胴上半部中間までは斜め左上がり方向、上位頸部までが横方向をなす。大型壺の頸部までの製作には、3段階の成作過程がありそうである。303、307、308は、胴下半部に括れ部を持つものの、その稜線が明瞭ではない。胴下半部はやや内彎ぎみに立ち上がる。302は胴最大径に対し、括れ部と頸部の間の胴上半部の器高が通常より長い長胴壺で、これまでの箱清水式土器に類例を知らない。推定される器高は約80cmとなる。306は、胴部径に対して頸部径が著しく細頸の壺であるが、類例は多くない。

頸部文様帯の櫛描直線文は、300、302～304、306が4段、301が5段、303が7段に、いずれも上位から下位方向に重ねて施文する。T字文は、300、307が1条1組、301、303、304、306が、2条1組で、306が4単位、301、307が5単位、300、303が7単位に施文し、直線文帯を各ブロックに区画する。306のT字文は4単位中の3単位が2条1組、1単位が1条1組の施文である。

② 赤彩深鉢（第87～89図317～351：P L. 24）

全形を知り得る個体は、第87図317～319の3点である。広口を呈する深鉢で、外面及び口縁部内面に赤彩へラミガキを施すことから、「赤彩深鉢」と呼称する。赤彩深鉢は胴内面に赤彩を施さずに、丁寧なヘラミガキを施す。このことにより、第88～89図337～351が赤彩深鉢の底部と判別することが可能となる。337～346の平底と、347～351の脚台付のものが認められるが平底が多い。

赤彩深鉢は、その外面に煤の付着が、内面にオコゲ状の黒色化が観察される。317～323、327、330～334、336～341、347、349、350、351に確認できる。胴外面の煤は、赤色塗彩の彩色を変化させるものではなく、頸部下半の胴部に若干付着し、胴下半が強く被熱した痕跡はない。胴内面のオコゲ状の黒色化は、器形の全体像が判明する318～322、327、底部337～345の観察によれば、胴中位より若干下部から頸部にかけて認められる。常時火にかけたものではないようである。

第85図336はその大きさにおいて例外的な存在である。胴内面は、ハケを残しヘラミガキを施すことはない。内外面に薄い煤、オコゲが確認できることから、機能は同様であったと考えられる。336は調整手法、色調、胎土から347と同一個体と想定され、脚台付で胴最大径を上位にとる型式となる。347はその脚台部が欠落した底部で、擬口縁の形態から、脚台部と胴下半部の接合技法が明瞭に観察できる。中空の脚台部外面に粘土ひもを巻き上げて胴下半部を成形した後、中空部内面に粘土ひもを1本巻き、脚台部と胴

部の接合面を内面上部からおさええる。さらに、その中空部にクサビ状のホゾを充填し、おさえを強化する。349の脚台は、外面に赤色塗彩を施すが、被熱によって剥離が著しい。外面上位には煤が付着する。第89図350の内面には全面的に炭化物がコールタール状に付着する。

③ 無頸壺・鉢・小型土器（第89図352～365：PL. 24）

第89図352～356はいわゆる無頸壺で、外面に丁寧なヘラミガキを施す精製品である。蓋とセットになることが予想されるが、つまみを持たない扁平蓋の出土例は松原遺跡の当該期資料にはない。354は内外面に丁寧なヘラミガキを施すがハケ調整痕が残る。357～359は鉢の一類型であるが、357は無頸壺との判別がつきにくい。片口を持つ鉢で、外面はヘラミガキ、内面はハケ調整でヘラミガキを施さない。358、359は、丁寧な調整を行うカップ型の鉢である。358は内外面軽いタテケズリ後ヘラミガキを、359はナデを施す。

360～365は、小型土器である。360、361は形態的には358、359に類似するが、軽いケズリ、なでつけ状のハケを施す粗製品である。口縁部はヨコナデを施さないため凸凹が激しい。365は粘土ひもを巻き上げた後、縱方向に指ナデをして成形する。仮器としての機能が想定される。362～364は壺を範型とした小型土器である。363、364は一時に火にかけられた痕跡がある。363は内面に、364は内外面に煤状の黒色化が観察される。なお底部にベンガラの痕跡が確認される。

④ 高杯（第89～92図366～434：PL. 24, 25）

全形状を知り得る個体は少ない。366～386は杯部の形状が明らかなもの、387～434は脚部の形状が明らかなものをまとめた。

第89～90図366～378は銅状口縁高杯である。銅の形態に型式差が読み取れる。366、367は銅状部分が杯部内面で明瞭な稜線をもって直線的に屈曲する。杯部と銅状部接点は、変換点にヨコナデを施すことにより、杯部がやや内彎ぎとなり銅状部が明瞭に屈折して外方へ張り出す。368～371は杯部内面の稜が明確化傾向にある。372～377は杯部内面の稜が明瞭でなく、銅状部分は外反状を呈す。型式的に367→369→377という変化が読み取れる。第90図379、380は楕円口縁高杯である。杯部端部が内彎するもの（379）と、直立するもの（380）がある。いずれも小型の高杯である。第90～91図381～386は有段口縁高杯である。杯部に明瞭な段を持ち、口縁部上位が外反するタイプ（381～383）と、形態的には銅状口縁に類似しながらも、杯部上位部分で不明瞭な立ち上がりがあり、口縁部上位が外反するタイプ（384～386）がある。後者の有段部は稜を形成せずに、緩やかな変換点となっており、意識して観察しないと銅状口縁高杯に分類してしまう。銅状口縁高杯と有段口縁高杯の折衷として捉えることも可能である。375、385は、内面に煤の付着が観察され、二次転用が考えられるが、赤彩深鉢と同様に高杯がまれに火にかけられることがあったかもしれない。特に385は、内面のみが強く被熱し、赤色塗彩がはげ落ちて青灰色に変化している。外面の赤色塗彩は残存する。二次転用の用いられ方として興味が持たれる。

第91～92図387～434は、高杯の脚部である。脚部と杯部の接合には充填技法が用いられている。429、431、433はホゾ状の粘土塊を、403、404は円版状の粘土塊を充填する。後者では杯部の底面を成形した後、底部を穿孔しそこに粘土塊を充填することによって、脚部と杯部の接合を強化している。388、391、401は脚部内面がナデ調整され接合技法が観察できないが、充填技法が用いられているものと想定される。

杯部内面の底部には、377、398、403、418、425、426、430、431、433に剥離が観察できる。剥離は、上位から敲打した状況を示し、底面が2～3mm抉れている。高杯の使用方法の一端を示していると言えまいか。435は高杯に分類したが、台付の赤彩深鉢である。

⑤ 鉢（第93図436～465）

箱清水式土器の鉢は逆ハの字状に立ち上がる小型の鉢で、口縁部が直線的に立ち上がり内外面に赤彩ヘラミガキを施すものが多い。463, 465は例外的存在である。口縁部の立ち上がりは直線的なもの（436, 437, 447, 448）と、内彎ぎみなもの（438, 445）とがある。弥生中期末に見られる鍔状口縁鉢、内彎口縁鉢は認められない。鉢類が火にかけられた痕跡はない。

⑥ 有孔鉢（第93, 94図466, 467, 494～498：P L. 25）

逆ハの字状に立ち上がる鉢で、底部に1.5～2 cm大の焼成前穿孔が認められる。内外面には丁寧なヘラミガキを加えるが、赤色塗彩を施すことはない。法量は口径20cm前後で一定しており、赤彩鉢よりもひとまわり大きい。内彎ぎみに立ち上がるもの（495～498）と、直線的に外反するもの（466, 467, 494）とがあり、前者が主体となる。粘土帯を口縁端部外面に貼りつけ折り返し口縁を呈するものの（498）は例外的存在である。調整は、赤彩鉢と同様に丁寧なヘラミガキを施す。内外面に被熱痕跡、削痕等は観察できない。495の内面上位にはオコゲ状の黒色化が淡く観察できるが、例外的な存在であり、内外面に煤、オコゲが観察できないものが多い。

⑦ 蓋（第94図468～493）

つまみをもつ蓋で、体部はハの字状に広がる。赤色塗彩を施す赤彩蓋（468～473, 490）と、無彩蓋（475～489, 491～493）とがあり、後者が主体となる。天井部に焼成前の孔をもつものともたないものがあり、穿孔については図示した。径4～8 mmの1孔が主体であり、多孔は例外的存在である。調整は、内外面にハケ後ヘラミガキを施す。特に内面は甕と同様に丁寧なヘラミガキを施す。

蓋の内面には使用的痕跡が観察できるものもある。淡く黒色化するもの（468, 469, 472, 475, 478～480, 483, 489, 490, 492）と、煤状の黒色物が全体にこびりつくもの（476, 481, 482）があり、他（470, 471, 473, 477, 482, 485～488, 491）については、痕跡は観察できない。蓋の用途も多岐に渡っていたようである。483, 489は口縁端部付近で外反する型式であるが、内面の淡い黒色物質が付着する位置に差が見られる。483は口縁部の外反する変換点から内側のみに、489は外側のみに観察できる。483が落とし蓋として、489の外反蓋が甕に覆いかぶせられるようにかけられていたのであろうか。

赤彩蓋には474のような大型のものと、490のような小型なものが見られる。490は口縁端部に2孔の紐通し孔が見られ、赤彩深鉢とセット関係にあることが想定される。内面が淡く黒色化する。大型の蓋474は甕の蓋と考えられる。赤彩蓋は赤彩しないものに比べて大型化傾向にある。

⑧ 瓢（第95～106図499～644：P L. 25～34）

旧河道からは多量の甕が出土し、箱清水式土器の甕の様相を知る上で良好なデータとなったため、本報告では実測図版、写真プレートに多くの甕を提示するように心がけた。成形・調整技法、文様施文手法については、別表「甕型土器成形・調整観察表」（第12～17表）にデータの提示を行う。本章ではその概要を示すことにし、詳細については第4章1節「中部高地型備攜文系土器群の理解」で触ることにする。

ア. 畿内型備攜文施文甕（第95, 96図499～511：P L. 25, 26）

畿内型備攜文を施文する甕を集めた。畿内型備攜文は、原体を器面から離さずに右から左へ施文を行う。中部高地型に対する畿内型の割合は8%にすぎない。

畿内型備攜文を施文する甕は、501, 507のように胴最大径を中位付近にとり、頸部の括れが弱い深鉢タイプ型の器形が標準となる。畿内型備攜文は、胴最大径よりも上位に波状文が3～5条施文され、中部高

地型櫛描文施文甕よりも条数が少なく施文範囲も狭い。また、波状文の重なりが少なく、波状文間の隙間が大きいことも特徴のひとつとなる。

イ. 短筋波状文施文甕（第96図512～518：P L. 26, 27）

波状文は、施文原体を器面に対して上下させながら横方向に施文する。その波状は、中部高地型においても畿内型においても数回繰り返されることによって波状文となる。ここでいう「短筋波状文」とは、中部高地型櫛描文に属し、施文幅が短く、原体をすぐに器面から離してしまうために、波の山が1～2単位にしか至らない波状文をさすることにする。

短筋波状文を施文する甕の形状は、512, 515のように深鉢タイプのものと、516, 518のように球胴志向のものがある。512の形状は、畿内型櫛描文を施文する甕の形状に通じるものがある。同施文は、器を正位にすえた場合、手の運動法則にのっとって、左から右へ短く描かれることにポイントがある。さらに、施文方向は右から左へ時計回りに施文されている。同施文を行う甕の文様帶には、簾状文をもつものもあるが、その率は低い。また畿内型櫛描文同様に全体における率はかなり低い。

ウ. 簾状文をもたない甕（第97図519～532：P L. 27, 28）

畿内型櫛描文施文甕、短筋波状文甕以外で、簾状文をもたない中部高地型櫛描文施文土器を集めた。容積的に532の大サイズ、519の大サイズ、521の中サイズ、530の小サイズとがある。522, 525, 526は台付甕となる可能性もある。

大大サイズから中サイズでは、文様施文部位が胴最大径下位まで及んでおり、その条数も6～10段以上と、波状文施文部分の占める割合が高くしかも密に施文される。一方、小サイズでは527, 531のように施文部位が胴最大径上位にあり、条数も少なく、畿内型櫛描文の施文法に近い。520はいわゆる折り返し口縁の、522は面取りされた口縁端部に横方向から刺突文を施した甕である。522のような刺突文は類例が少ない。

エ. 簾状文施文甕（第98～105図533～612：P L. 28～34）

松原遺跡では、頸部に簾状文を施文する甕が71%を占めその主体となる。ここでは器形に注目してまとめてみることにする。

＜胴最大径中位型＞（第98～101図533～578：P L. 28～30）

胴最大径を器高の中位付近にとる甕を胴最大径中位型と仮称する。第98図536～538のように器高に対して口径・胴最大径が大きく、頸部がされることによって球胴化傾向を示すものを球胴タイプとする。第100～101図562～566のように器高に対して口径・胴最大径が小さく、長胴化傾向を示すものを縦長タイプとする。第98図540～542、第99図547, 548, 551、第100図557, 560、第101図572～574は球胴タイプであるが、法量、プロポーションを考慮するならば、台付甕となる可能性が大きい。台付甕における球胴タイプとして位置づけておきたい。胴最大径中位型の甕は、内外面に明瞭な稜が認められずに、形態がスムーズに変化するものが主体となる。第100図556は頸部が明瞭に屈折し内面に稜をもつ。製作段階において、頸部で静止面をもつことが理解できるが、当例のように製作段階を理解できる例は少ない。

文様の施文手法についてみると、第98図533～535、第100図544は中部高地型櫛描文施文ではあるが、畿内型櫛描文施文土器との関連が想定される。533～535, 554の文様施文は、胴最大径上位部分に限られ、その波状文の横帯段数も少ない。544の波状文の重なりは隙間が大きく畿内型櫛描文施文甕と共通する。

＜胴最大径上位型＞（第102, 103図579～593：P L. 30～32）

胴最大径を器高の上位付近にとる甕を胴最大径上位型と仮称する。第102図579～587は胴最大径から頸部内外面付近にかけて明瞭な稜をもつもので、製作時の静止面が観察できる。胴最大径部分で静止することによって同部分に稜をもち、肩部から口縁部を弓状に外反させるタイプ（579, 585）と、頸部最小径部

分まで製作し、頸部の綺から口縁部を外反させるタイプ(587)とがある。第103図588~593は内外面に稜が確認できず、製作時の静止面が明らかではない。

〈深鉢型〉(第104、105図594~605:P.L. 32, 33)

頸部の綺まりが弱く広口を呈する甕で、口径>胴最大径、頸部最小径≤胴最大径をなし、頸部最小径と胴最大径の数値が近い形態を深鉢型と仮称する。胴最大径の位置はその中位にとるものが多い。先に提示した胴最大径中位型・縦長タイプと比べると、器高に対する頸部最小径、胴最大径の比率は大きい。口径は外側に張り出すことによって頸部は広口化し、胴部も頸部に対して張り出さない。深鉢型は596~601のように器高20cm前後の小型品にみられる傾向にある。

深鉢型の甕は、胴最大径中位型と同様に内外面に明瞭な稜が認められず、器形がスムーズに変化するものが主体となる。胴最大径と頸部最小径の数値がほとんど変化ないことから、胴最大径から立ち上がるようすに肩部がのびて口縁部が外方に開く。肩部から口縁部は、頸部の屈曲が甘いために、口縁部と胴上半部(肩部)の区別が明瞭でなく、胴最大径から緩やかな弓状となる。製作段階は、胴最大径で一担静止し、胴上半部から口縁部にかけて一挙に成形していることが603等で理解できる。深鉢型は、頸部内外面に大きな変換点がなく、弓状の口縁部を形成する。

オ. 台付甕(第106図616~644:P.L. 34)

これまで示したア~エについては安定した平底を呈する甕である。中部高地型構造文を施文する台付甕は、616~618のように器高20cm前後を標準とし、さらに小型なものと(621)、大型なもの(622~624)とに別れる。中部高地型の台付甕は平底甕に対して法量的に小型品であることが特徴となる。616~627に胴部を、628~644に脚部を提示する。623~627は脚台の有無は不明であるが、胴部の形状から台付甕と判断した。胴部の形状は、頸部の綺まりが弱く縦長で深鉢型を呈する616~622と、扁平な形状を呈する623、624がある。成形技法は、616~620が胴最大径部分に静止面をもち、ゆるやかに口縁部が立ち上がるのに対して、622、624は頸部に静止面をもち、稜を形成して口縁部が大きく外反する。胴部と脚部の接合技法は、616に見られるように充填技法を用いているものとそうでないものがある。使用法に関しては、いずれも火にかけられたことが想定され、胴最大径上位に煤の付着が観察できる。内面は616、617、623で胴上位に黒色化が観察できるが、618~620、622では黒色化、オコゲ等は観察できない。火にかけても内容物は異なっていたらしい。脚台は、脚部内面に飛び出した充填の粘土をそのまま残すタイプ(628、632)と、その回りにナデを施すタイプ(629、630)とがある。635~637、639~641は充填技法とは異なる接合技法が想定される。

(2) 旧河道S D 1 0 1 出土土器

① 壺(第107~110図645~672:P.L. 35~37)

第107~110図は、頸部から肩部に構造文様帶をもち、文様帶以外は赤色塗彩を施す箱清水式土器の広口壺である。プロポーション、頸部文様帶、大型壺の観点で提示を行う。

〈プロポーション〉

第107図646、647は、頸部までの器高に対して胴最大径が大きい球胴志向タイプの壺である。胴最大径と括れ部がほぼ一致し、稜をもって明瞭に括れる形状を示す。第81図260、262と同様で「なで肩」状をなすことが特徴である。内面の調整は、括れ以下がナデ、括れ以上が左上がりハケを施し、括れ部にヨコナデを施す。このことからも、括れ部に成形上の静止面があり2段階成形が行われていることが理解できる。649は胴最大径と括れ部の高さが異なり、やや縦長のプロポーションを示す。胴最大径と括れ部の数値がほぼ等しいため、肩が張った形状をなして無花果形というよりは球胴化志向となる。

645, 648, 655, 656は、括れが不明瞭で胴部は無花果形に近い形態を呈する。645, 656は、胴下半部に静止面の痕跡を残すことから、胴部成形に2段階成形が行われていることが理解できる。第108図655は静止面の痕跡が見られない。第107図645~649の頸部は647, 649内面に若干の稜が観察される外は変化がゆるやかである。松原遺跡の壺の口縁部は、頸部付近が明瞭に屈折せずに弓状に大きく立ち上がるが、甕も同様な頸部形状をとるところから、壺と甕の形態、成形技法に共鳴現象を読みとることができる。

<頸部文様帯>

壺の文様帯は頸部に集約させる。文様帯の多くは櫛描直線文を多段に重ねた構成をとり、同文様帯を櫛描垂下文によって縦区画するT字文が多く認められる。645は3条の655, 656は4条の櫛描直線文を重ねて構成される。645, 655, 656は赤色塗彩を施さず、文様、形態ともに古相を示す。646~648は1条1組の垂下文で、646, 647は4単位の、648は5単位のT字文を施す。直線文と垂下文は同一原体である。

第108図657~659は、頸部文様帯に櫛描文ではなく、並行沈線文が用いられる。657は7本の並行沈線文を擬簾状文風に施文するが、擬簾状文は静止部がそろっているところから、原体は太い棒を櫛状に結束していることが想定される。同施文は、簾状文と同様に原体を数回静止させて施文するもので、原体を器面から離すことではない。擬簾状文下部には、ヘラ描沈線文が付加されており、全体像はつかめないが鋸歯文が付加されるものと考えられる。658, 659は並行沈線文を施文するが、その全体像はつかめない。並行沈線文を施文する壺は、口縁部内外面の調整にも特徴がみられ、657は外面にヨコハケ、内面に赤彩ヘラミガキを、658は外面にタテヘラミガキ、内面に赤彩ヘラミガキを、659は内外面ヘラミガキを施す。文様構成、赤彩される部位に吉田式土器の要素を持つ。

第108図660は、長野盆地南部では特異な文様形態として位置づけられる。頸部文様帯は、櫛描波状文を4条上から下方へ多段に重ねているが、波状文のみで多段構成する例は稀である。波状文帯は、2条1組の垂下文で区画されるが、垂下文の下端は1/4円弧文風に左側に回転している。その組み合わせの形状から、ここではJ字文と呼ぶことにしよう。J字文の中核分布エリアは中南信地方であり、南からの系譜を考えることが可能であり、また、畿内型櫛描文系甕の系譜を考える際に重要であろう。661は赤彩された壺の頸部文様帯の破片で、ヘラ描沈線文による綾杉文が想定される。

<大型壺>

第109, 110図663~672は、器高50cm以上の大型壺を中心に提示する。縮尺は1/6で図示した。663~665は、663, 664が60cm大の、665が70cm大の器高が想定される。器形は、663が胴最大径を中位とする卵形胴を、664, 665が下位にとる無花果形をなし、括れ部はゆるやかに変化し稜線は明瞭でない。

663, 664の残存状況は、図示した部分がほぼ完存する。663の口縁部は打ち欠かれている。665は胴が乾燥・焼成時にやや扁平化しているために90度回転した状況で2方向から図示した。頸文様帯以上の口縁部を打ち欠き、端部内側を擦り込んで調整を行うことによって水平面を形成している。胴部・底部などに焼成後穿孔は認められないが転用土器格と想定している。666の甕底部は、胴最大径下位で水平に打ち欠き、底部に径6cmの焼成後穿孔を施す。665付近から出土したもので本来はセットで使用されたものと想定している。写真図版P L50では同土器と0歳、5歳、8歳の子供を比較した。

第110図667~670は括れ部がやや明瞭化し、669, 670は稜線が明確となっている。670の胴括れ部には1箇所隆帯が確認できる。弥生時代中期・葉林土器にみられる隆帯に比べ、張り付ける粘土が少ないためにめだたないが、2~3mmの盛り上がりとなる。内外面双方から粘土を張り付けており、縦に亀裂が入っている。

頸部文様帯の櫛描直線文は、667が4段、663, 664, 669が5段に、いずれも上位から下位方向に重ねて施文する。T字文は、663, 667, 669いずれも1条1組で、663が6単位、667が5単位、669が4単位に直

線文帶を区画する。

② 赤彩深鉢・高杯・その他（第110, 111図673～689：P.L. 37）

＜赤彩深鉢・無頸壺＞

赤彩深鉢の673～678は、その形状および成形技法は壺と同様であるが、赤彩される点で壺と区別される。箱清水式土器の赤彩器種は通常火にかけられることはないが、赤彩深鉢に限っては火にかけられるることは前述した。673～677の外面にはすべて煤の付着が確認でき、内面にもオコゲ状の黒色化が観察される。内面にみられる黒色化は、674, 676では胴下半部の1/2付近から頸部にかけて、677は底面から3～4cm上位付近から頸部にかけて観察できる。壺のオコゲが付着する位置に黒色化が観察されないところから、煮沸した内容物が壺とは異なっていたのかもしれない。679は無頸壺で口縁端部が内彎する。内外面ともに丁寧なヘラミガキを施し、外面のみを赤彩する。その形状は第89図355と類似する小型品で、無頸壺の小型品とするか鉢の一類型とするか判断に迷うところであるが、形状と赤彩技法のあり方から無頸壺としておく。

＜高杯・有孔鉢・ミニチュア＞

高杯は鉢状口縁高杯（680, 681）と有段口縁高杯（682）がある。鉢状部分の内面屈曲部は、680が強いヨコナデが施して稜を持ち水平ぎみに屈曲するのに対して、681は稜を持たずやかに外反する。680→681という型式変化が想定される。682は碗形の口縁部が有段部で外反する形態をとり、有段高杯381～386（第90, 91図）と比較した場合386に近い。脚部は箱清水式に通常みられるサイズのもの（683, 686, 687）と低脚のもの（684, 685）がある。685は脚部に対して杯部の比率が大きくなることが想定され、弥生中期から系譜が求められる低脚高杯になるものと考えられる。688は有孔鉢、689はミニチュア土器である。

③ 壺（第111～114図690～720：P.L. 37～39）

ア. 簾状文をもたない壺（第111, 112図690～695：P.L. 37, 38）

頸部に簾状文をもたない壺を第111, 112図に図示した。同類型の壺はその多くが頸部の継りが弱いという形態上の共通点があり、690を除いて、胴最大径を上位にとる。690, 691は口縁部から胴最大径下位に至るまで、横描波状文を重ねて充填している。いずれも中部高地型の横描文であるが、一回の施文の長さが長いために、畿内型の横描文のようにも見える。各ブロックの施文は690では上から下方向へ、下から上方向へと交互に施文するが、691ではすべて上から下方向へ施文を行う。692～695はいずれも中部高地型の横描文で、波状文間に隙間がみられる。692, 695は一回の施文が長く、693, 694は短い。いずれも器高20cm前後の小型品である。

イ. 簾状文施文壺（第112～114図696～719：P.L. 38, 39）

＜胴最大径中位型＞（第112, 113図696～698, 704, 705：P.L. 38）

口径と胴最大径の差が小さく、胴最大径を胴中位付近にとる。外面に明瞭な稜が見られず、胴部から口縁部にかけてスムーズに変化する。697, 704, 705では胴最大径付近に変換点があり、同付近で製作段階の静止が考えられる。698は変換点が頸部付近にみられ、静止面が頸部に位置する。横描波状文はいずれも中部高地型で、696はその一回あたりの施文単位が長く、698は短い。

＜胴最大径上位型＞（第112, 113図699, 700, 706～711：P.L. 38, 39）

胴部最大径を器高の上位付近にとる。胴部最大径から口縁部の内外面に明瞭な稜をもつもの（706, 709, 710）と変化するもの（699, 700, 704, 705, 707, 708, 711）と、内面に明瞭な稜をもつもの（706, 709, 710）と

がある。製作段階の静止面は、699, 704, 705, 709では胴最大径部に、700, 706, 710では頸部付近にあり、前者では胴最大径部からゆるやかに口縁部化するに対して、後者では頸部が明確になり、口縁部が胴部と分化して長くのびる傾向にある。櫛描波状文はいずれも中部高地型櫛描文であるが、一回の施文が長い例(699)と、短い例(709, 710)とがある。710は一回の施文で波状文の波が1~2回繰り返すのみの「短節波状文」である。一回の施文は、土器を正位にすえた場合、左から右方向に描きその施文回転方向は時計回りとなっている。短節波状文施文箇で簾状文をもつものは少ない。

<深鉢型> (第114図712~716 : P L. 39)

712~716は、頸部の縄りが弱く広口を呈するもので、胴部最大径をその上位にもつ。714, 715のように頸部最小径と胴部最大径の数値が近いものと、713, 716のように胴部最大径がやや大きく胴が張り出す形態のものとがある。成形段階の静止面は714, 716では胴最大径部に、712では肩部に、713では頸部最小径に位置する。口縁部は静止面からゆるやかな弓状となるが、714, 716では胴最大径より上位が口縁化していることになる。

中部高地型櫛描文の施文は、712~714が右から左方向に、715~716が左から右方向へ描き、時計回りに重ねて施文する。

(3) SD 100・101 追加資料

第114~116図721~748に提示する資料は、SD 100, SD 101の整理作業において遺物図版作成後明らかになった資料で、本来ならば前項、(1)旧河道SD 100出土土器、(2)旧河道SD 101出土土器の中で提示しなくてはならないのだが追加資料とする。よって、特に意図があってまとめたものではない。

① SD 100 出土追加資料 (第115, 116図732~736, 744~746 : P L. 40)

壺(732)、赤彩深鉢(733)、甕(736)、台付甕(734)、鉢(735)、蓋(744~746)を追加する。732は括れの不明瞭な壺であるが、器高20cm前後の小型壺は二段階成形をしなくとも成形が可能なため括れが不明瞭なものが多い。胴部および口縁内外面は無彩で丁寧なヘラミガキを施す。頸部文様帶は直線文を3条、上から下方向に重ねて施文し、2条1組のT字文で、4ブロックに直線文帯を区画している。734は小型の台付甕である。胴最大径部に静止面をもち、肩部からゆるやかな弓状の口縁を形成する。櫛描文は上から下方向に中部高地型櫛描文を施文し、その後、頸部に直線文を施文する。735はコップ型の鉢で、内外面にナデツケ状のハケを施し、口縁端部をヨコナデする。ナデ等で調整されることなく、粗製品である。被熱痕跡はない。コップ型の類例は少ないが、ミニチュアの項で提示した第119図39と関連があるのかもしれない。甕736は深鉢型を呈し、胴最大径を上位にとり、成形段階においても同部分が静止面となる。静止面より上位の肩部からゆるやかに弓状に外反し口縁部として立ち上がる。同例には煮沸痕跡が認められない。蓋746内面は付着物によって黒色化する。

② SD 101 出土追加資料 (第114~116図721~731, 737~743 : P L. 40)

壺(725~729, 742)、高杯(730, 731)、甕(737~740, 743)、台付甕(741)を追加する。壺726は広口の無花果形をなし、括れ部には棱がなくゆるやかにカーブする。肩部は「なで肩」状となり、頸部、口縁端部にも大きな変換点がなく器形全体がスムーズに変化する。頸部文様帶は、7本のひごを連結した簾状工具によって上から下方向に直線文を重ねている。直線文帯には図示した1箇所のみにT字文を弱く施文する。T字文は直線文と原体が異なり、直線文を施文した簾状工具のひごを3本ゆるやかに連結し施文を行っているため、T字文は弱く、3本の直線がそろっていない。T字文部分が正面として位置づいていたで

あろうか。729は口縁部内面のみが赤彩される壺で、頸部文様帶は沈線によって区画される。742は括れ部をもたない球胴壺で、胴部外面にハケ、口縁部外面にヨコナデを施した後、丁寧なタテヘラミガキを施す。内面は口縁部にナデ、胴部にハケを施す。

730、731は鉢状口縁高杯である。731の杯部底面には敲打痕によって剥離が認められる。736～740は簾状文を施文する中部高地型櫛描文甕であり、743は無文ヘラミガキ甕である。737、738は頸部の括れがゆるやかで胴最大径を中位にもつ深鉢型であり、739、740は口径と胴最大径がほぼ等しく、胴最大径を中位にとる胴最大径中位型である。文様は、簾状文を先に施文し波状文を後で中部高地型に充填する。波状文は密に重ねて充填するタイプ(738、739)と、重ねながらも波状文間に隙間ができるタイプ(737、340)の二者が見られる。743は外外面にヘラミガキを施すが煮沸痕跡は観察できない。

747、748はII V18・22グリッド出土の高杯である。748は内彫ぎみに立ち上がった杯部が有段部と外方に外反する。その形状は集落域内出土の高杯の中で最も新相を示す。

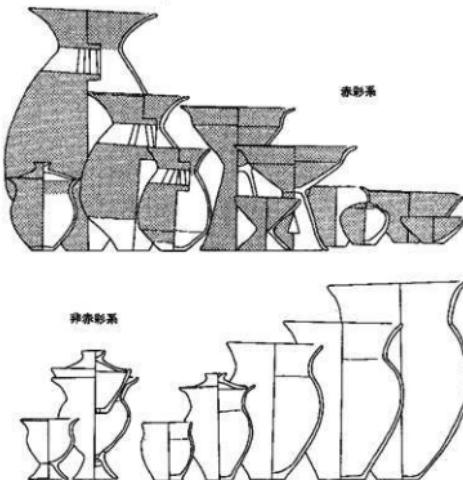
(4) 瓢形土器成形・調整観察表(第12～17表)

箱清水式土器の甕については、その型式内容が不明な点が多い。松原遺跡の調査では完形率の高い甕の一群を提示できるため、その形成・調査について第12～17表に観察表としてまとめることにした。観察表でまとめたデータを用いて「第4章第1節2 中部高地型櫛描文を施文する後期甕」で考察をした。

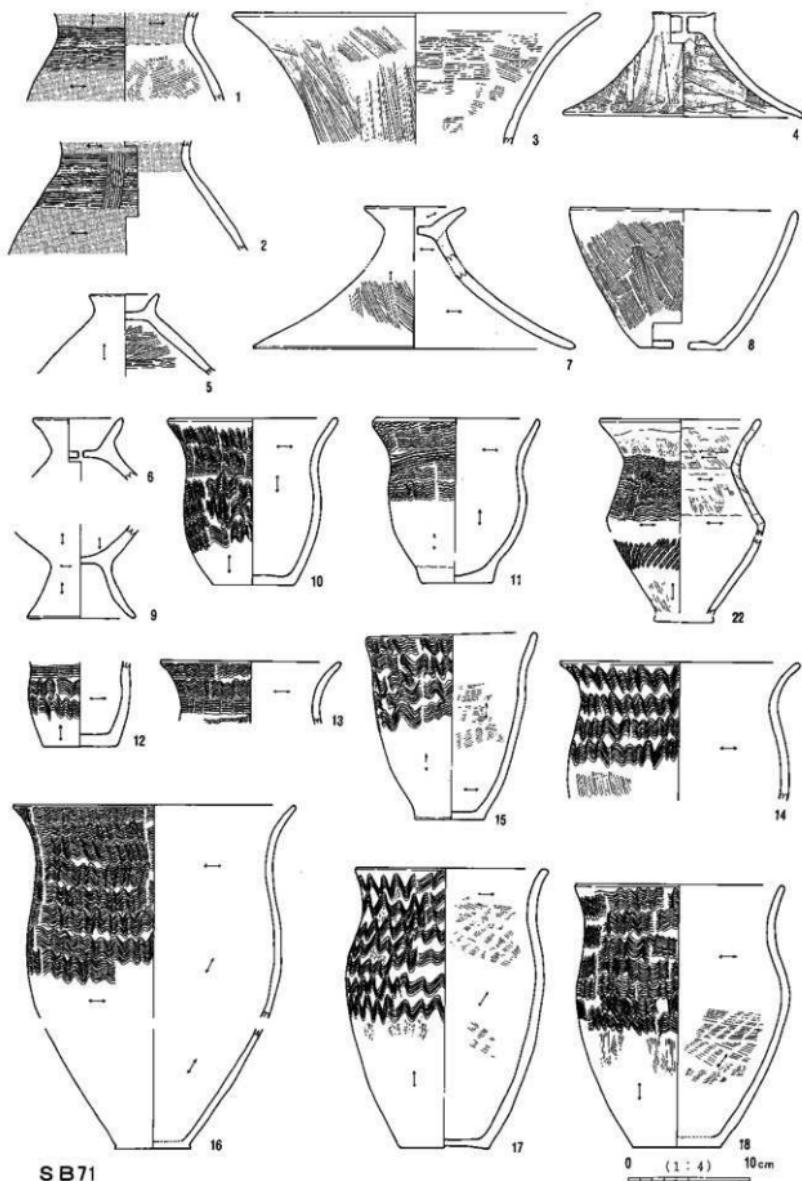
観察表(第12～17表)「成形・調整」「ミガキ」項目のI～IIIとは以下の通り、器形の部位を示している。(第153図)

- I. 口縁部付近を示す。 (簾状文より上位部分)
- II. 胴最大径付近から頸部付近を示す。(簾状文以下、胴最大径付近までの部分)
- III. 底部から胴最大径付近まで。 (胴最大径より下位部分)

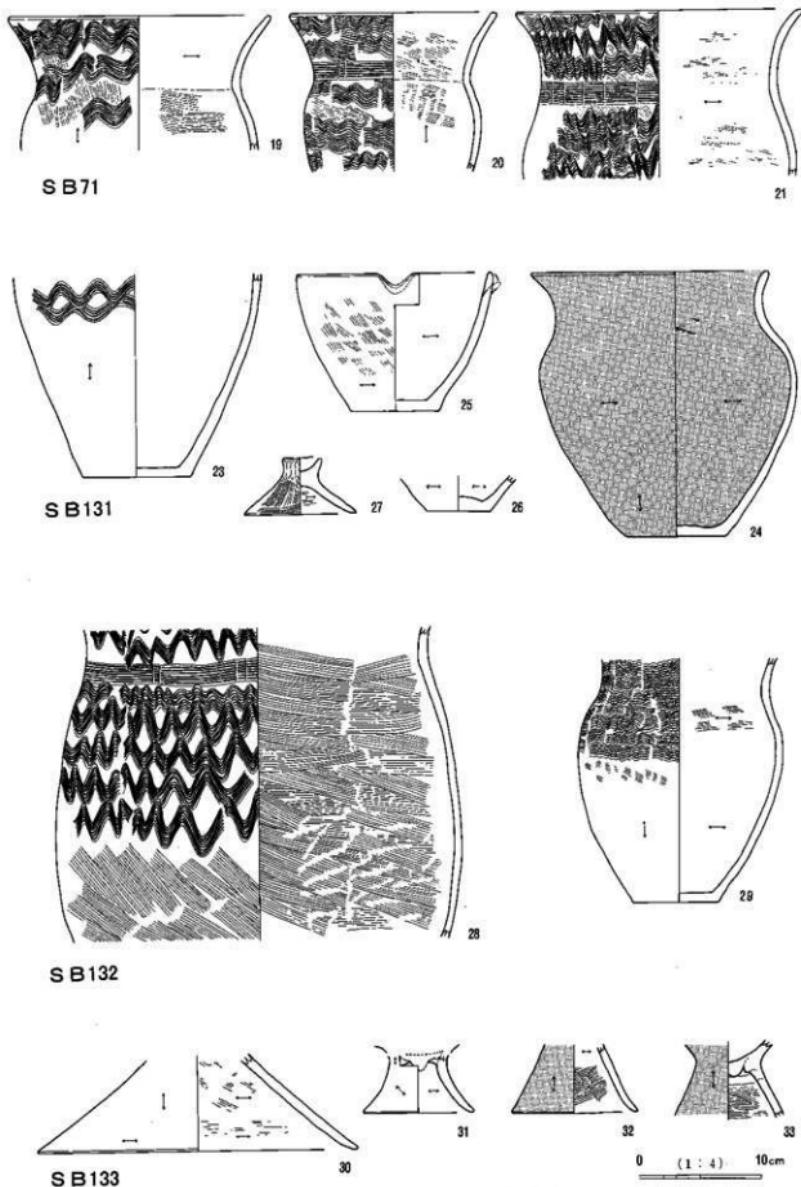
観察表「文様帶」の項目のうち、簾状文についてはその静止回数を示し、波状文については各部位の施文条数(段数)を示している。施文順位の数字は、施文順位類型の記号で、第4章第1節第157図にそのモデルを示している(第4章第1節3(3) 文様施文手法)。



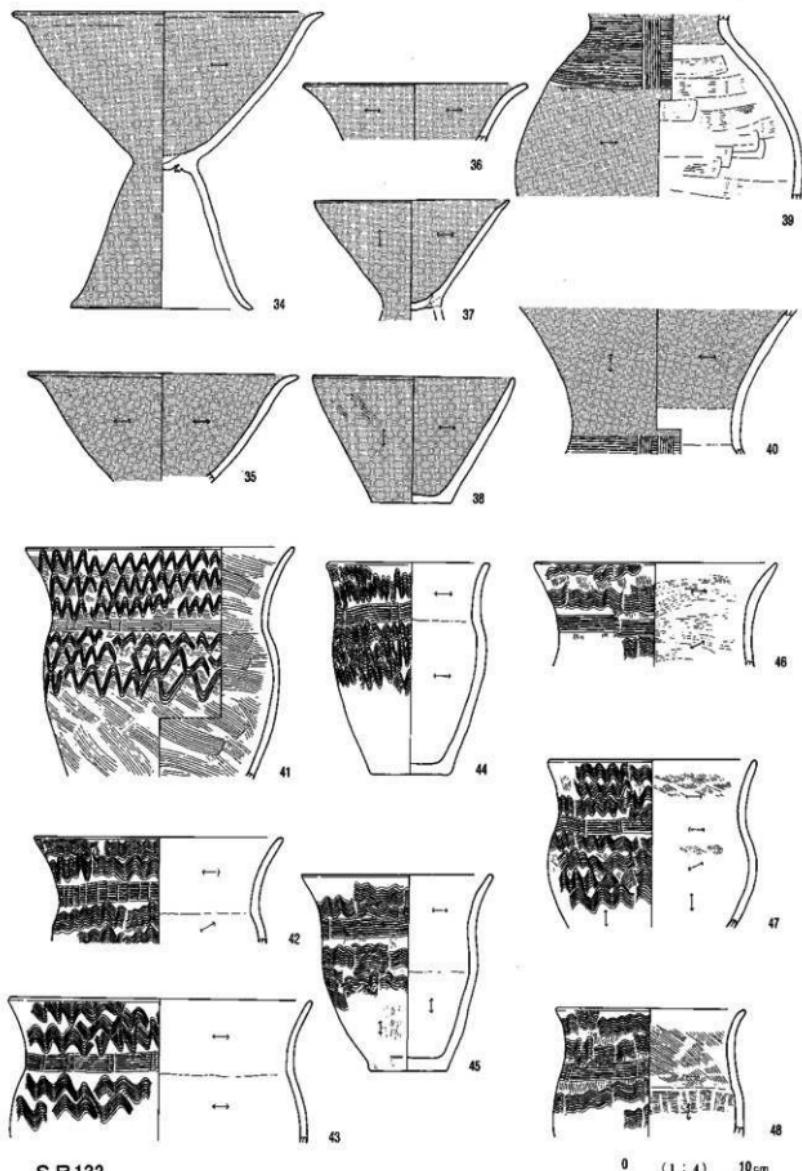
第117図 箱清水式土器群



第60図 坂穴住居址出土土器、後期（1）

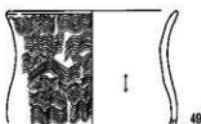


第61図 積穴住居址出土土器.後期 (2)

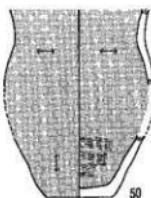


S B 133

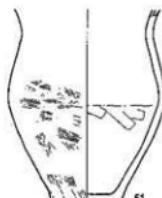
第62図 積穴住居址出土土器.後期 (3)



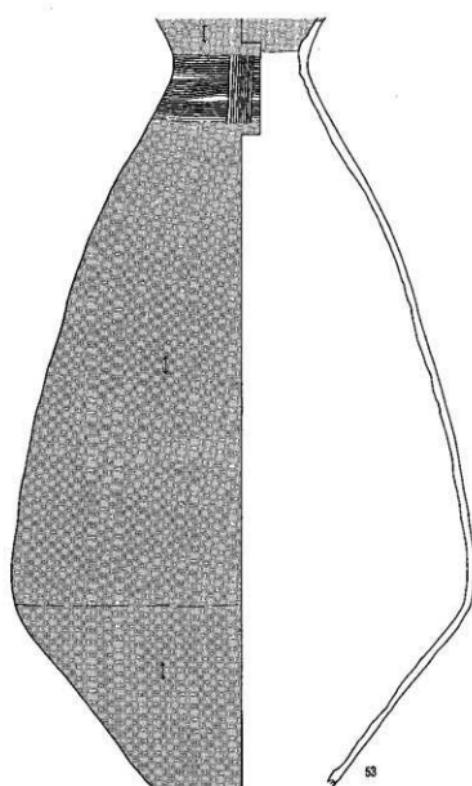
S B 133



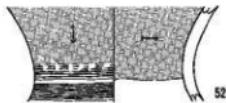
50



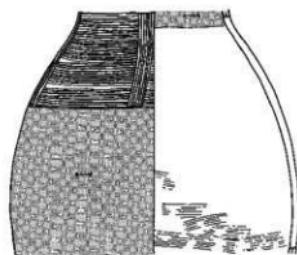
51



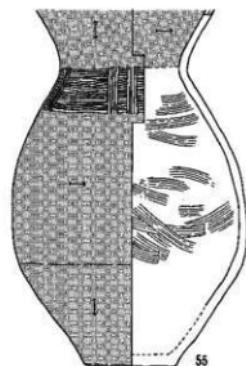
53



52



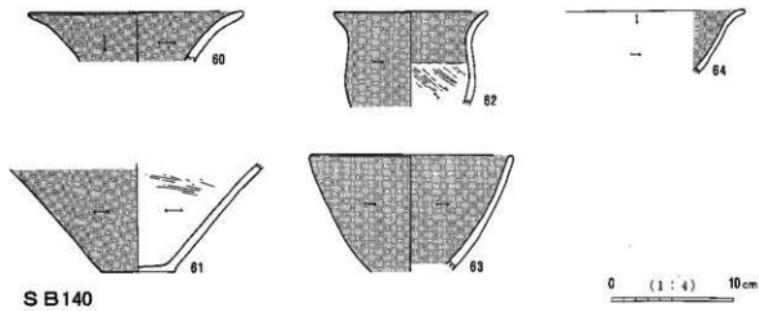
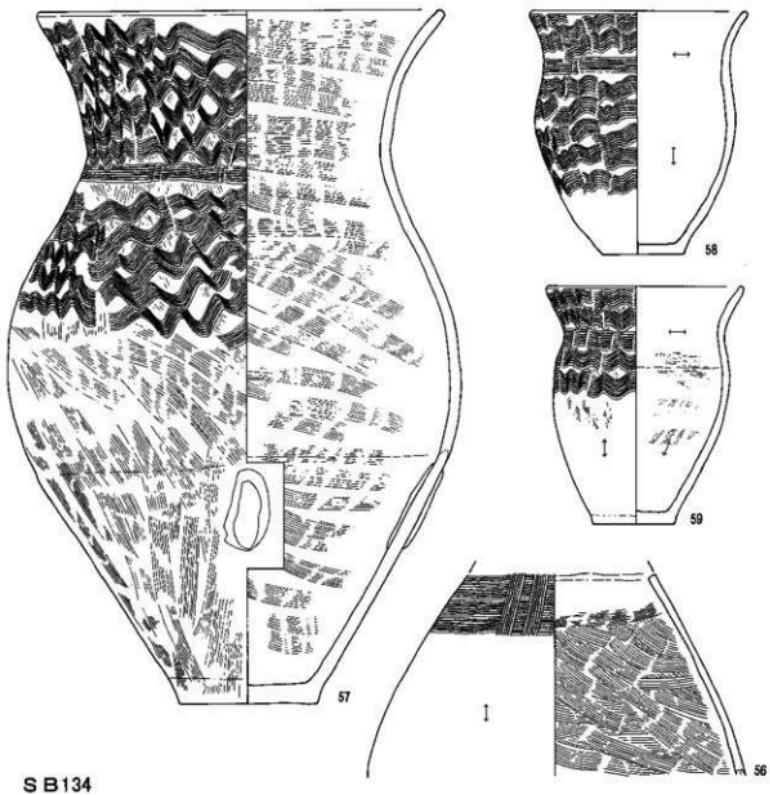
54



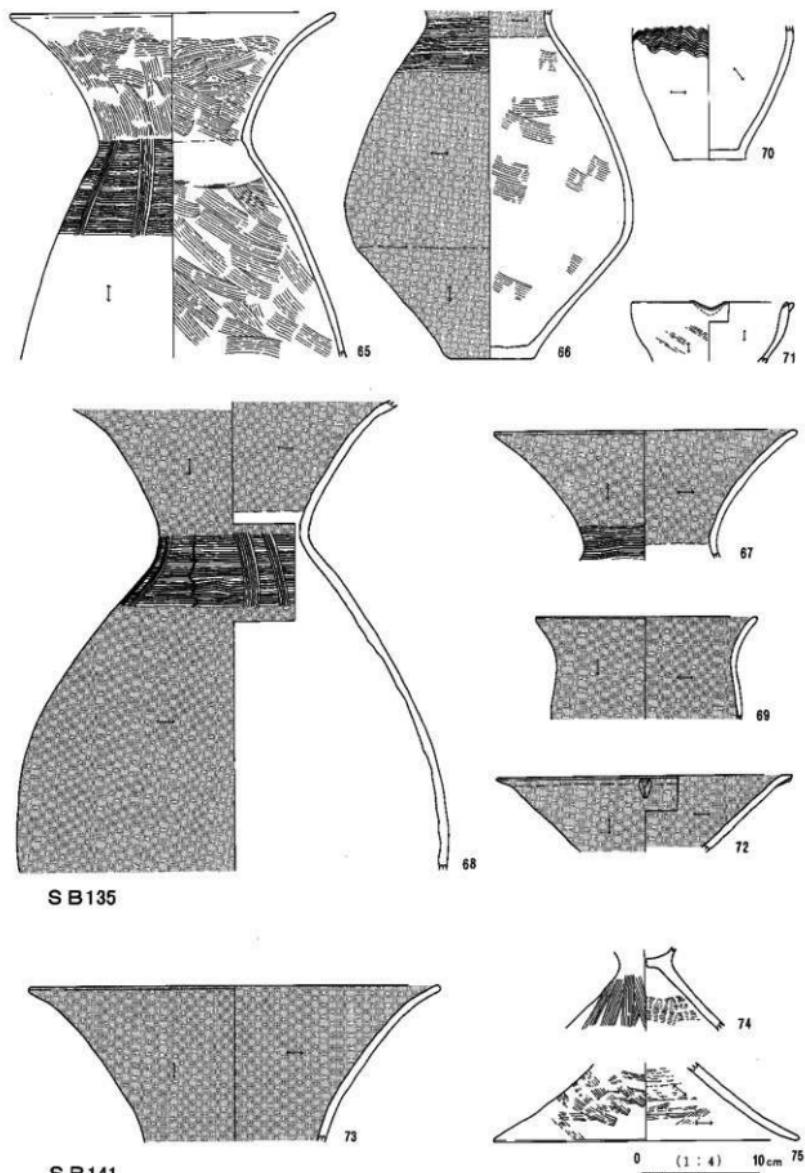
0 (1 : 4) 10 cm

S B 134

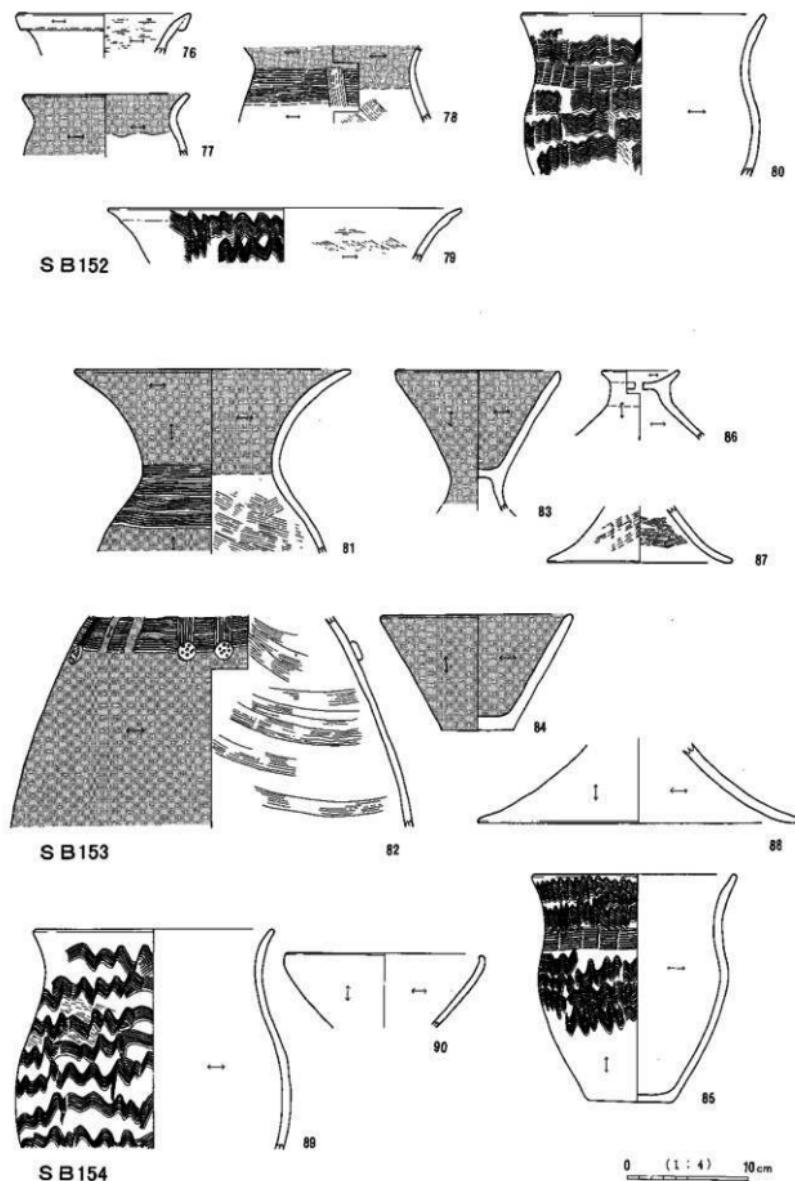
第63図 穂穴住居址出土土器.後期 (4)



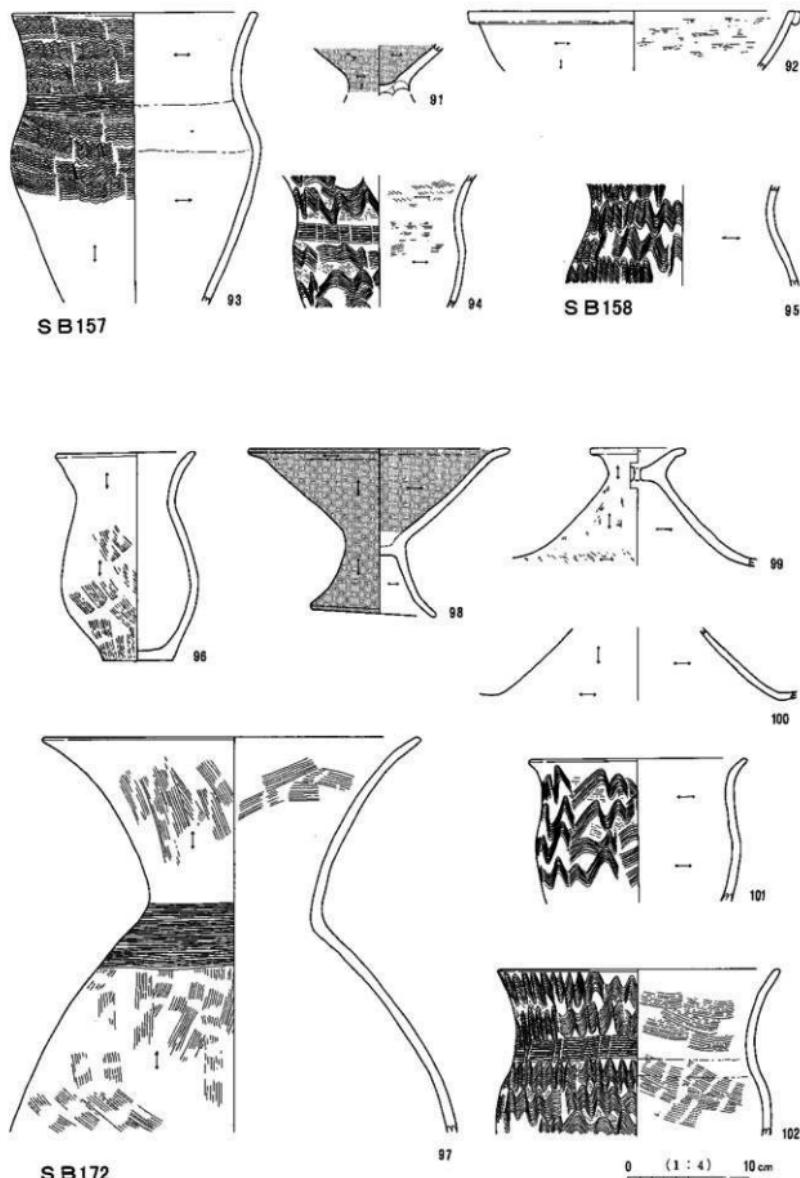
第64図 竪穴住居址出土土器、後期（5）



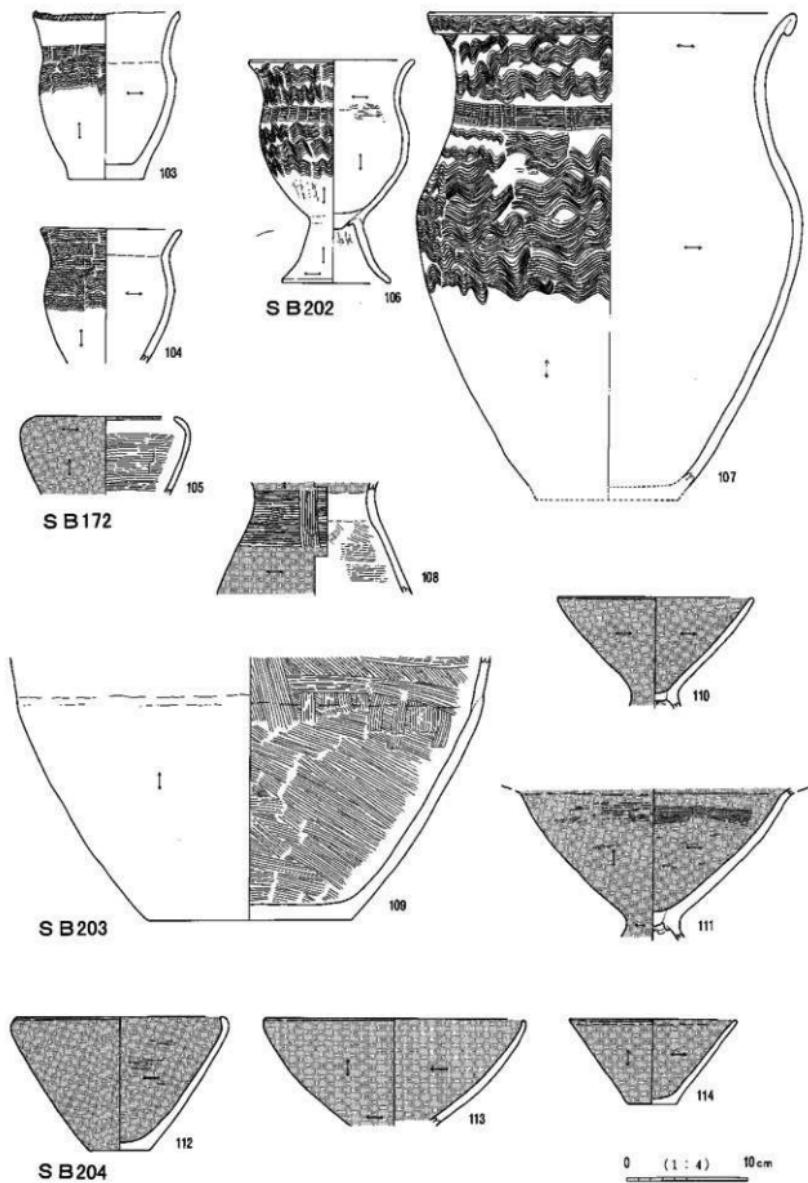
第65図 積穴住居址出土土器、後期（6）



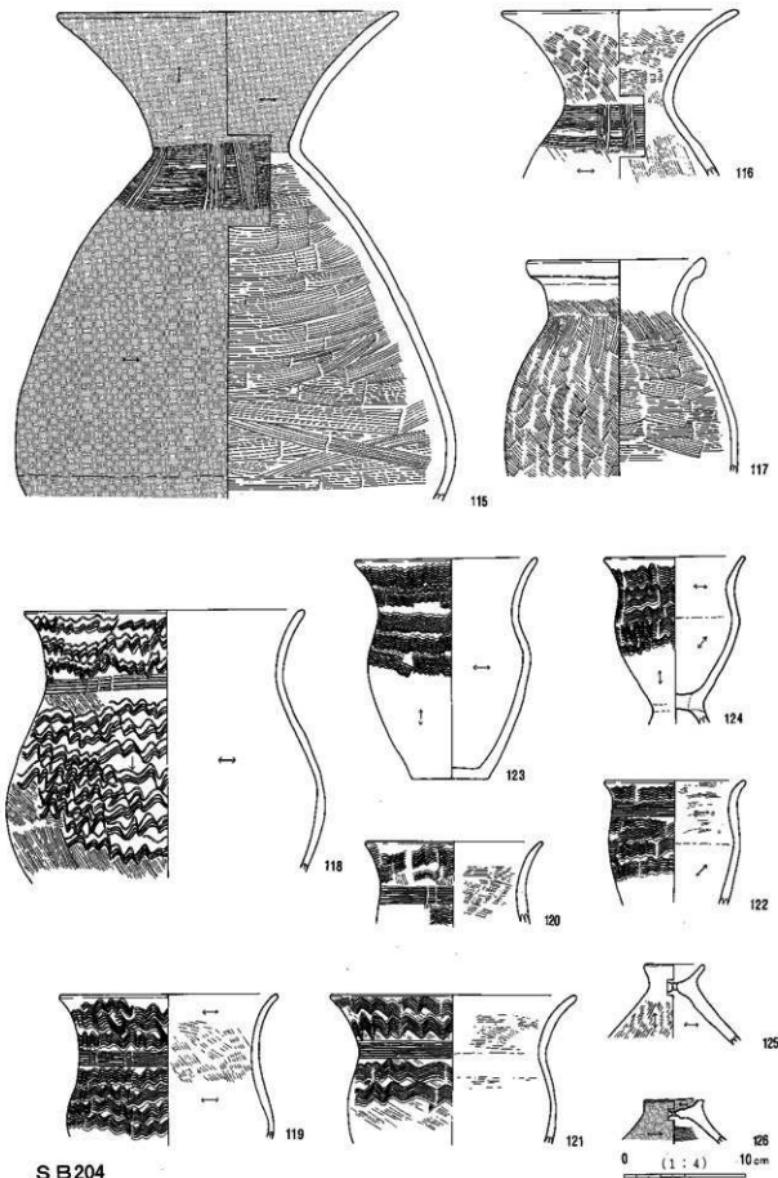
第66図 積穴住居址出土土器.後期 (7)



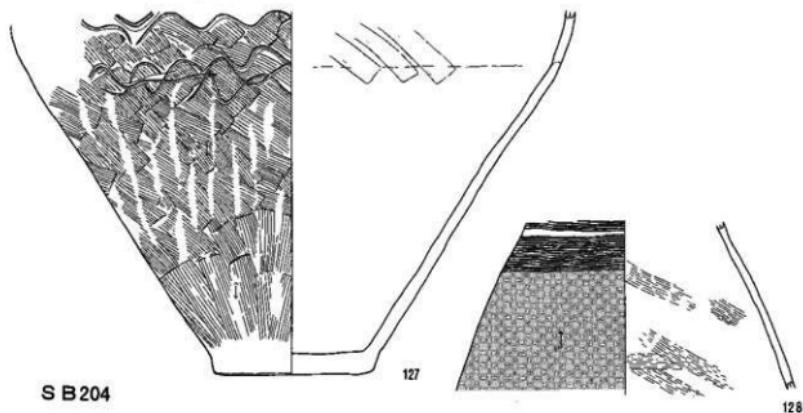
第67図 穂穴住居址出土土器、後期（8）



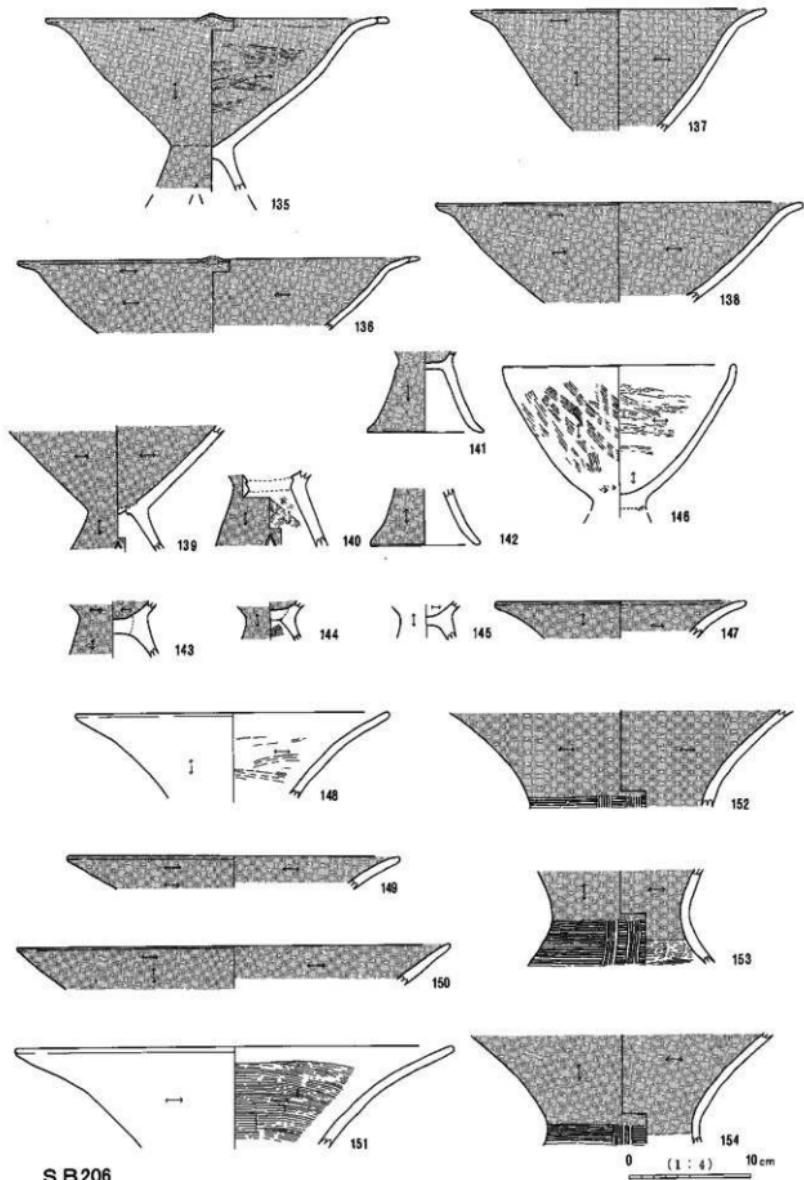
第68図 整穴住居址出土土器.後期 (9)



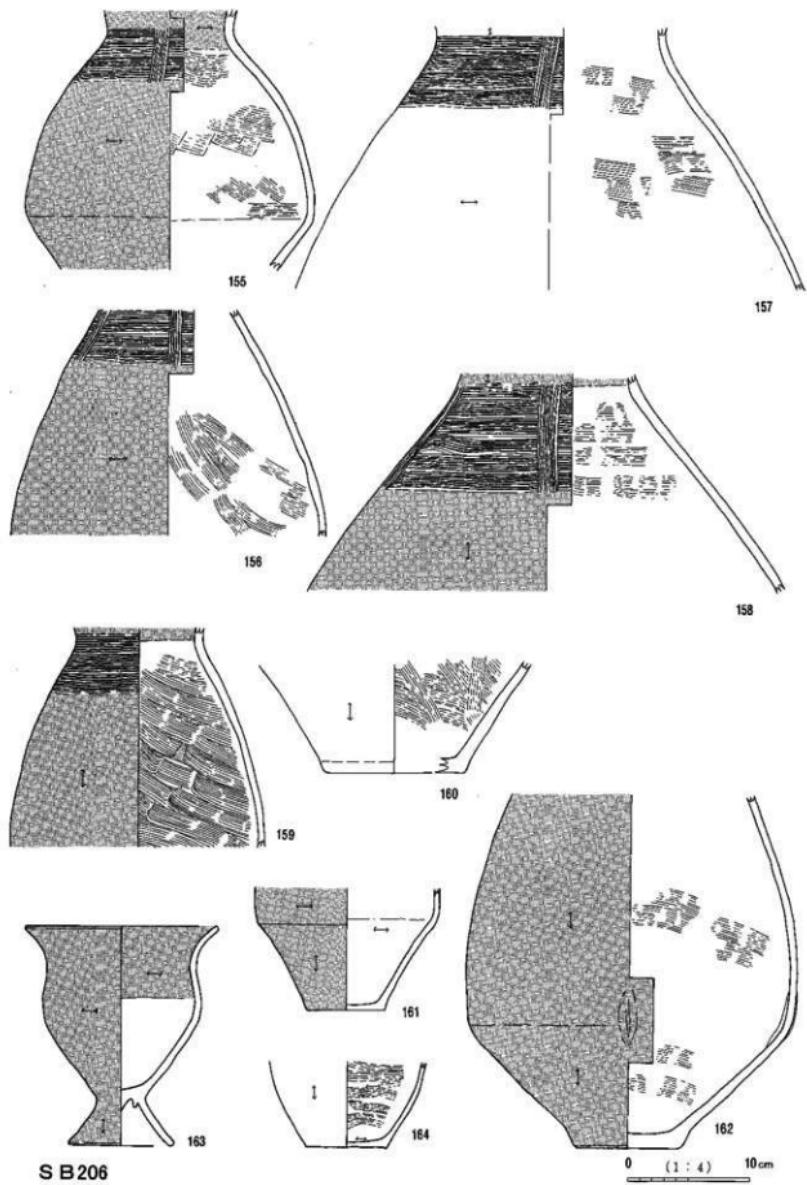
第69図 積穴住居址出土土器、後期 (10)



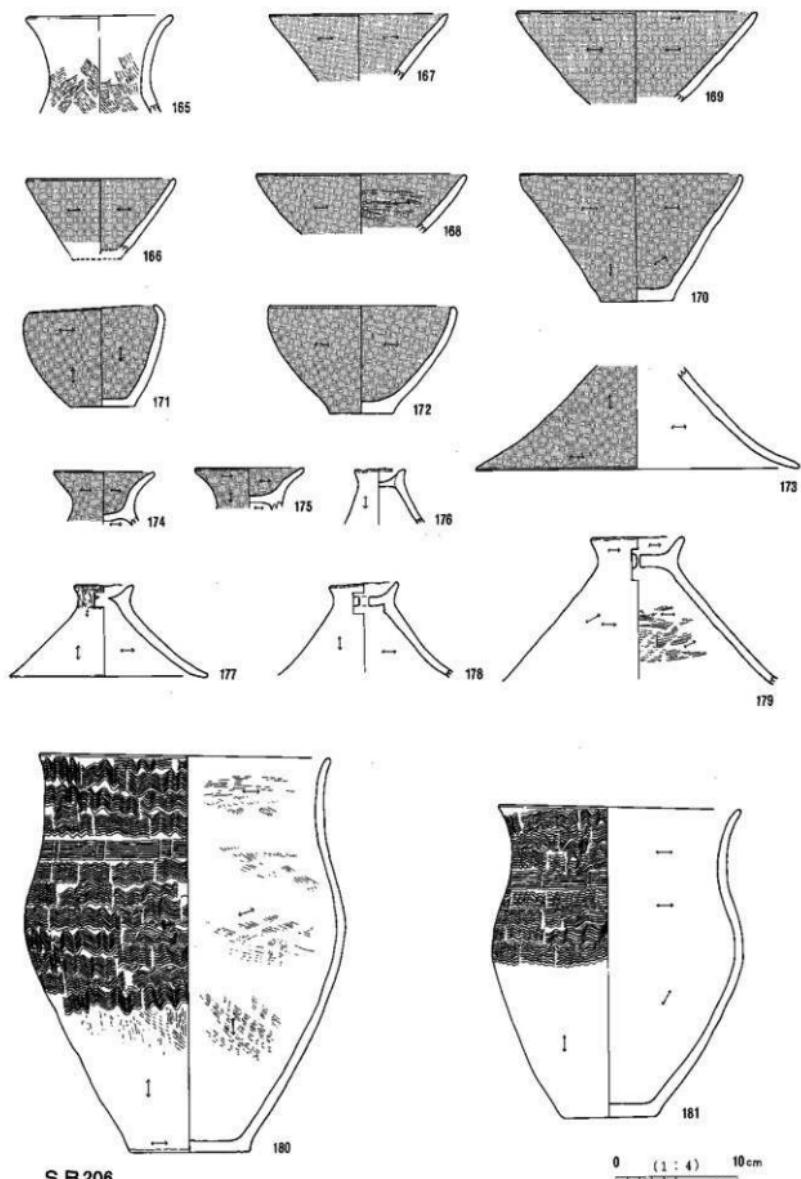
第70図 穹穴住居址出土土器.後期 (11)



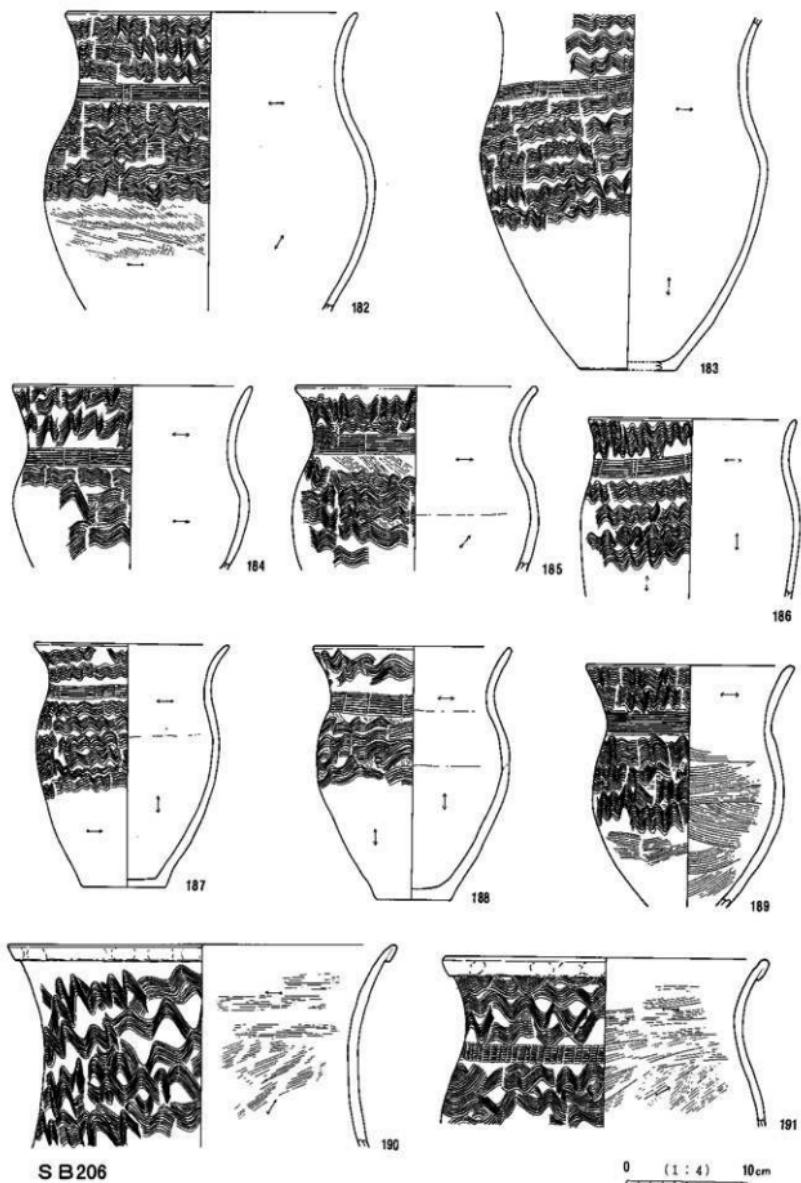
第71図 竪穴住居出土土器、後期 (12)



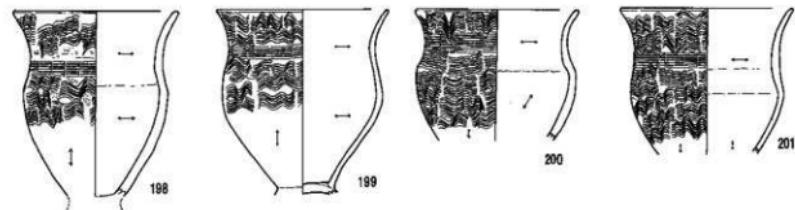
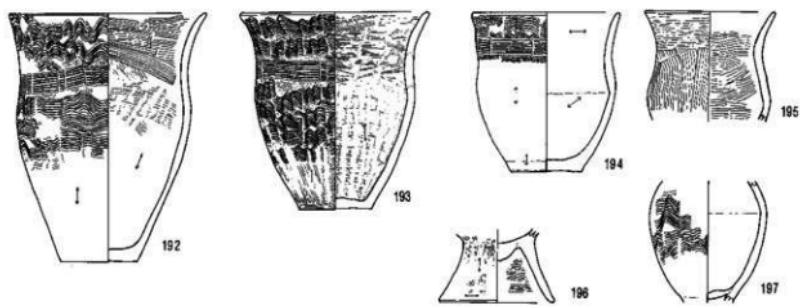
第72図 竪穴住居址出土土器、後期 (13)



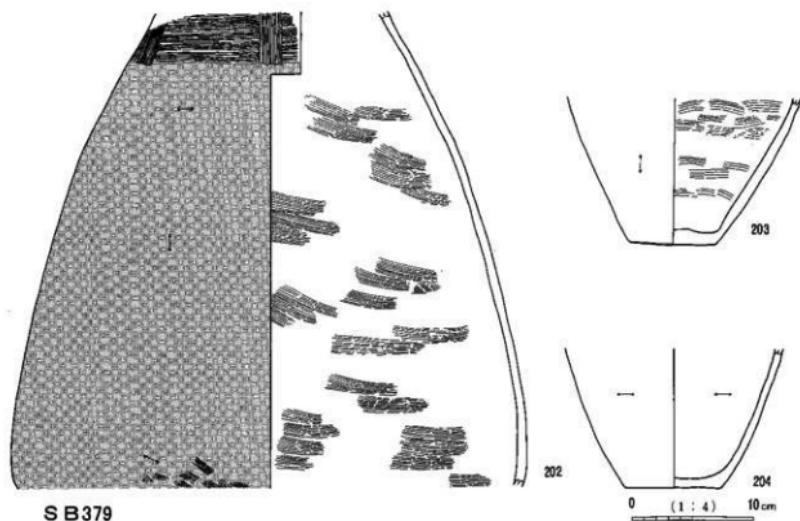
第73図 穴住居址出土土器、後期（14）



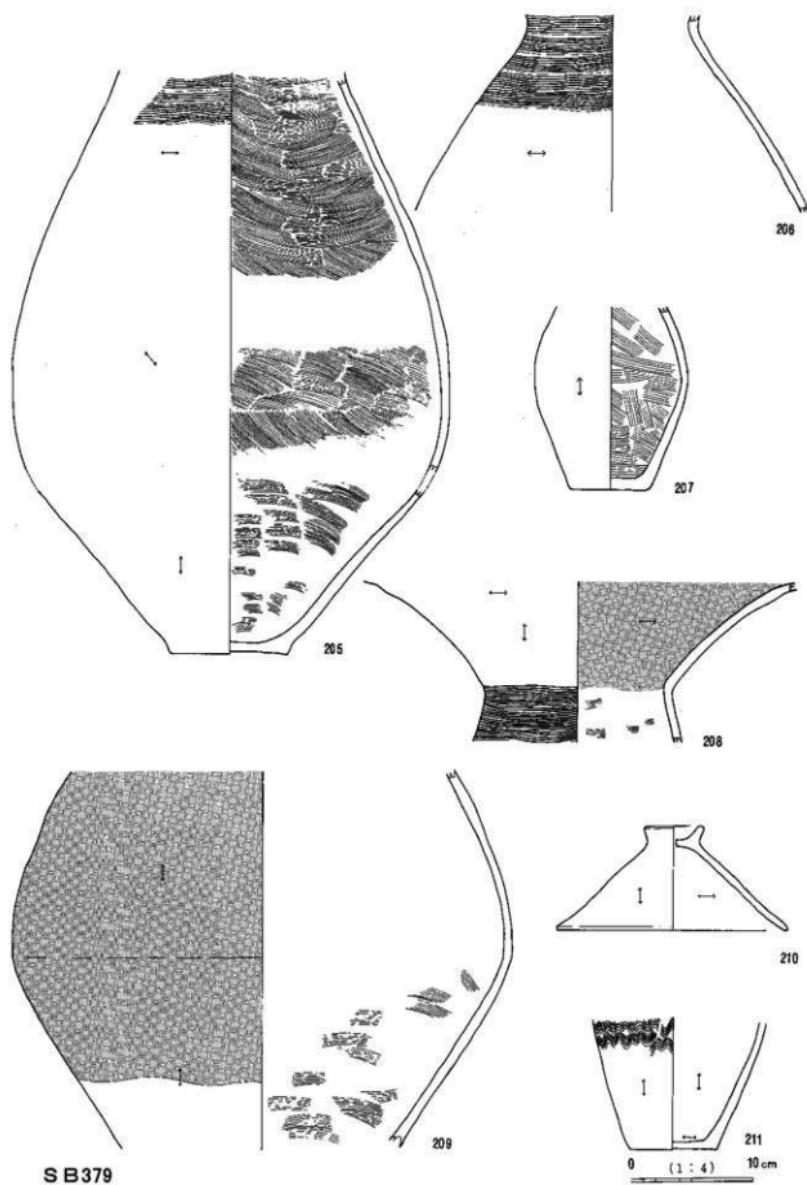
第74図 横穴住居址出土土器、後期（15）



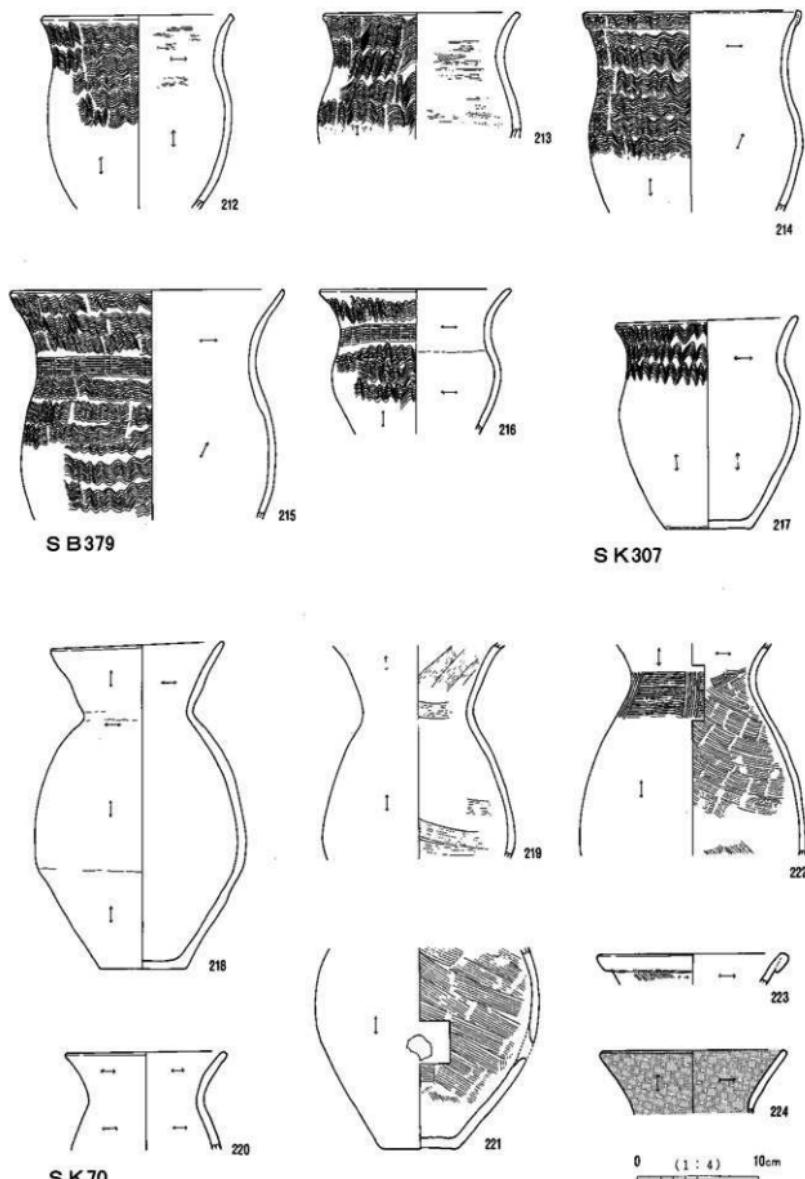
S B 206



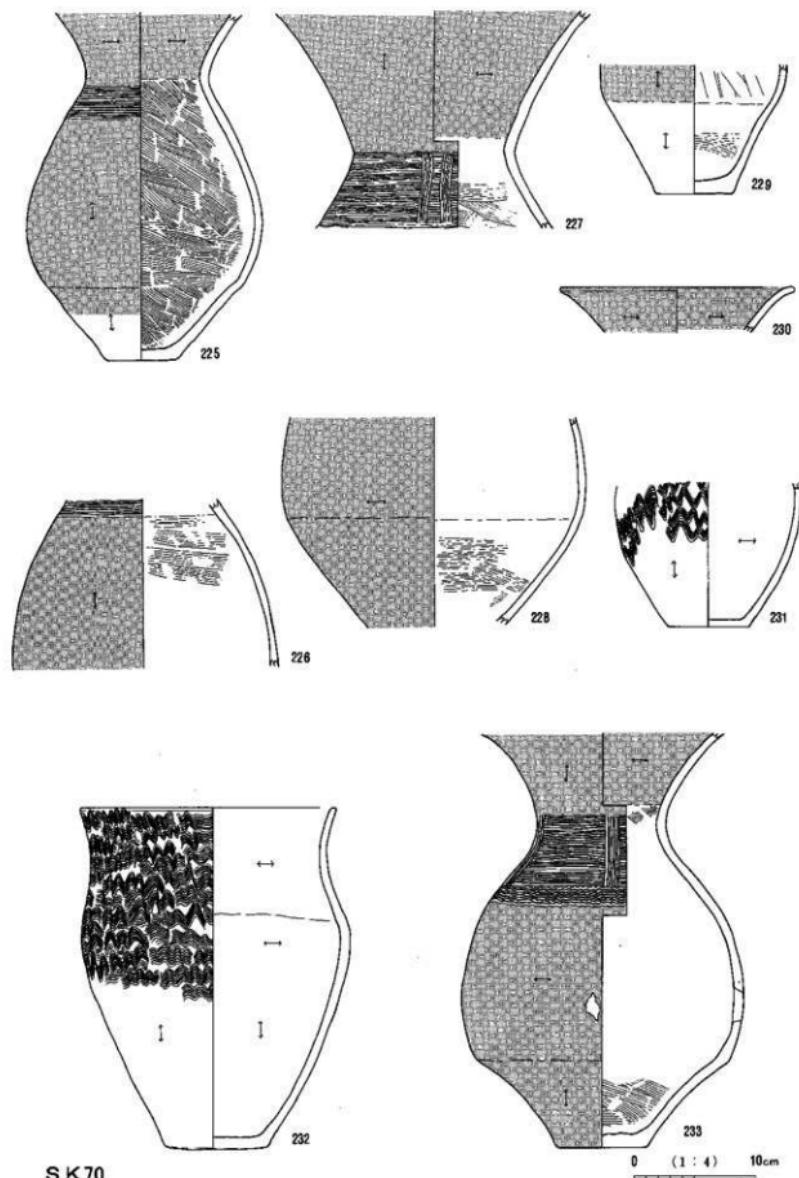
第75図 穂穴住居址出土土器.後期 (16)



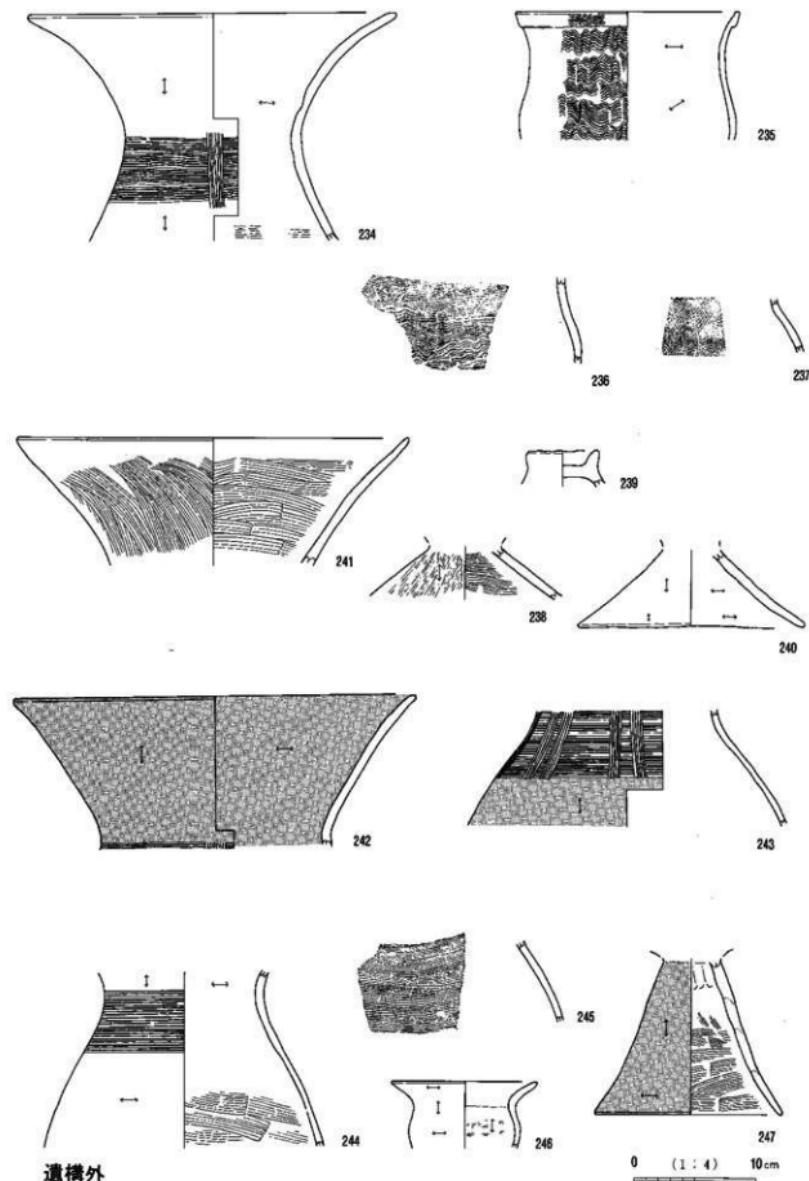
第76図 竪穴住居址出土土器.後期 (17)



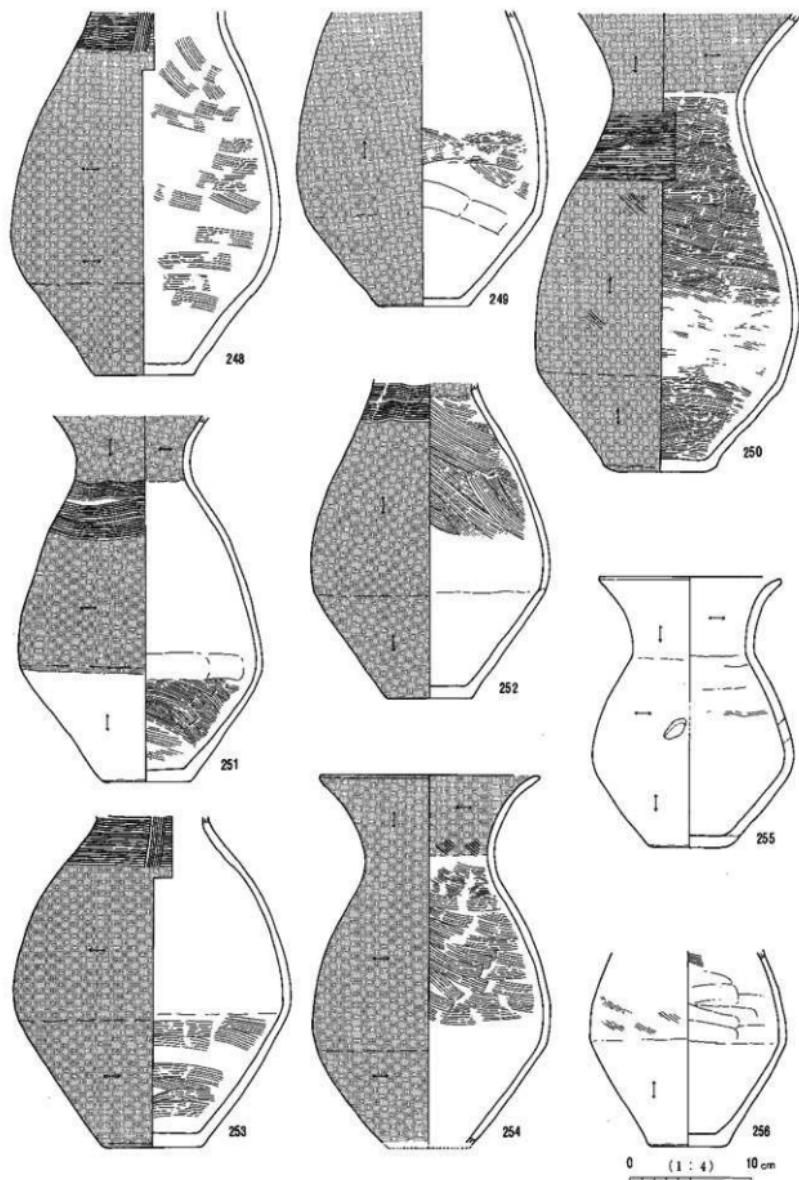
第77図 積穴住居址出土土器、後期（18）・集落址出土土器、後期（1）



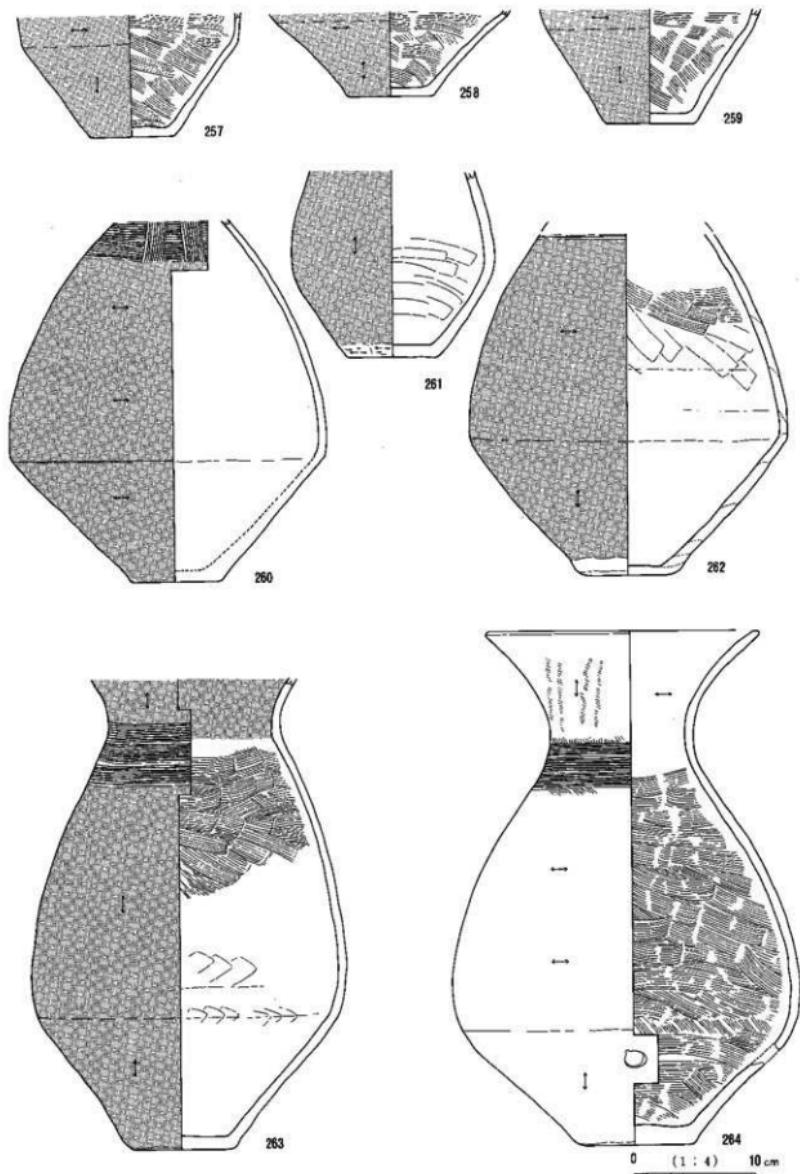
第78図 集落址出土土器、後期（2）



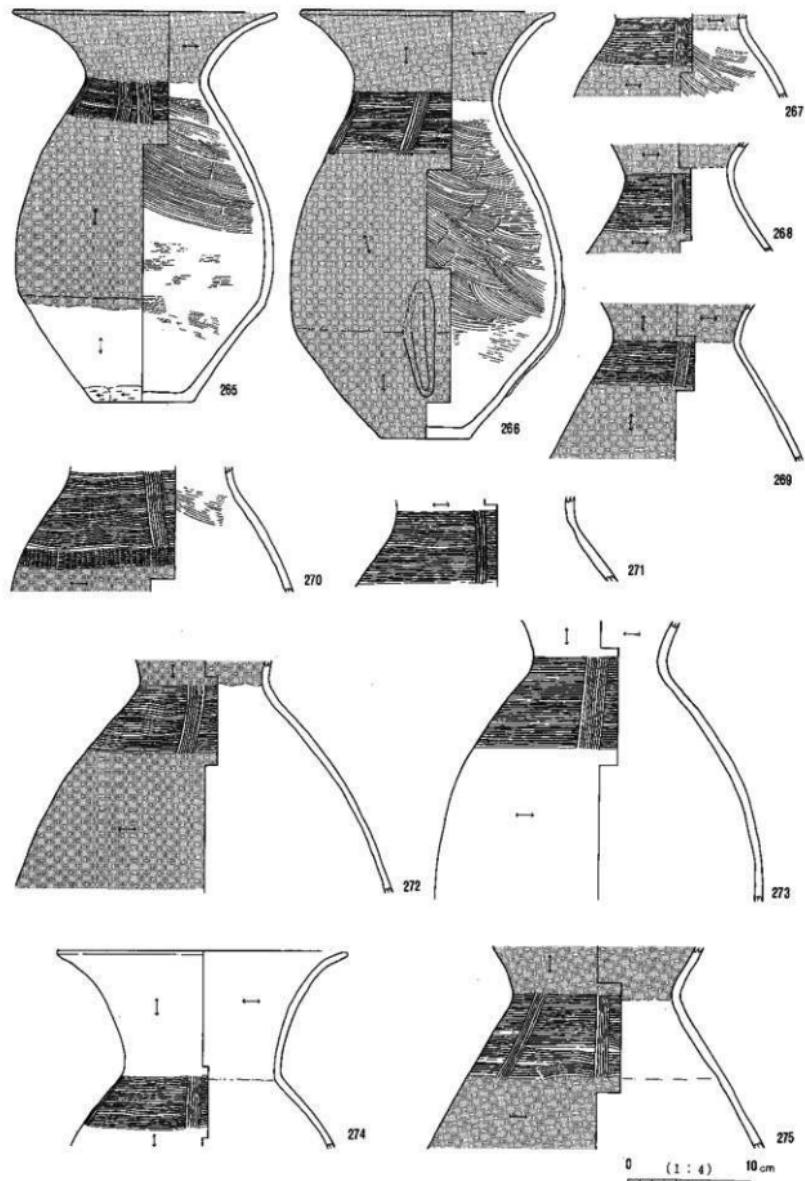
第79図 集落址出土土器、後期（3）



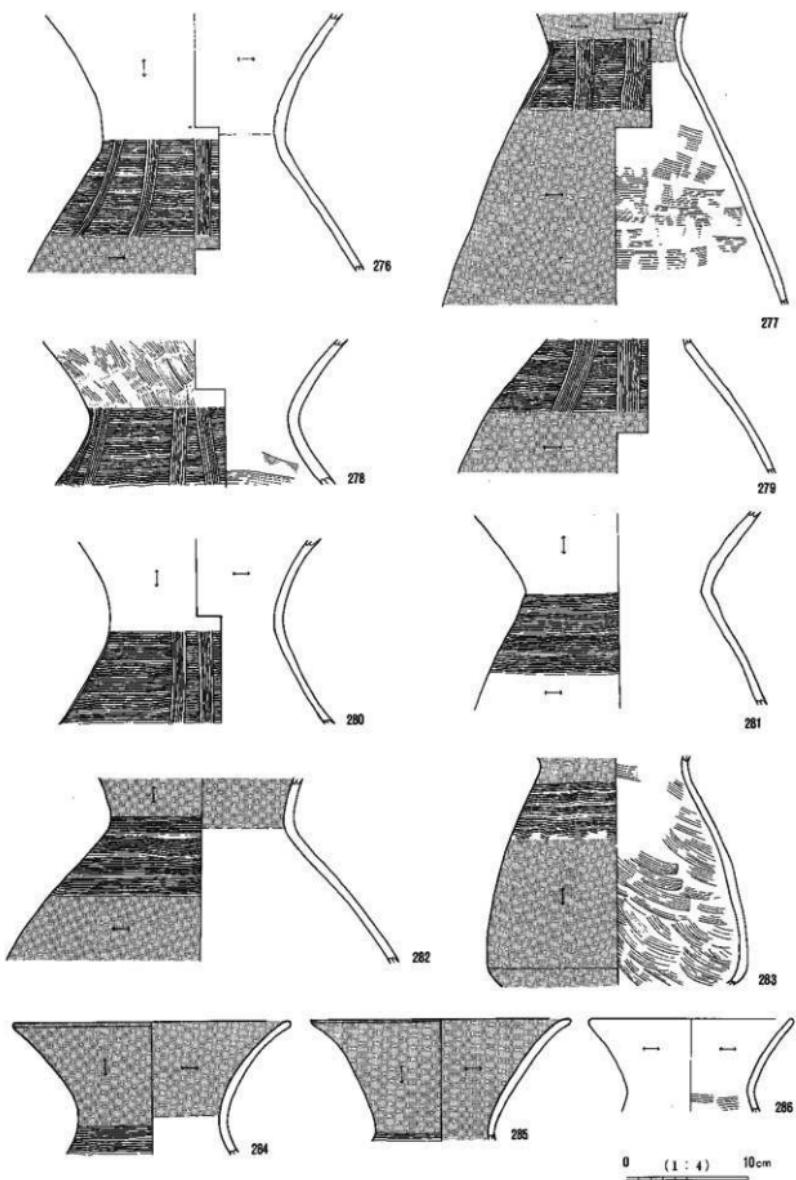
第80図 SD100出土土器、後期（1）壹



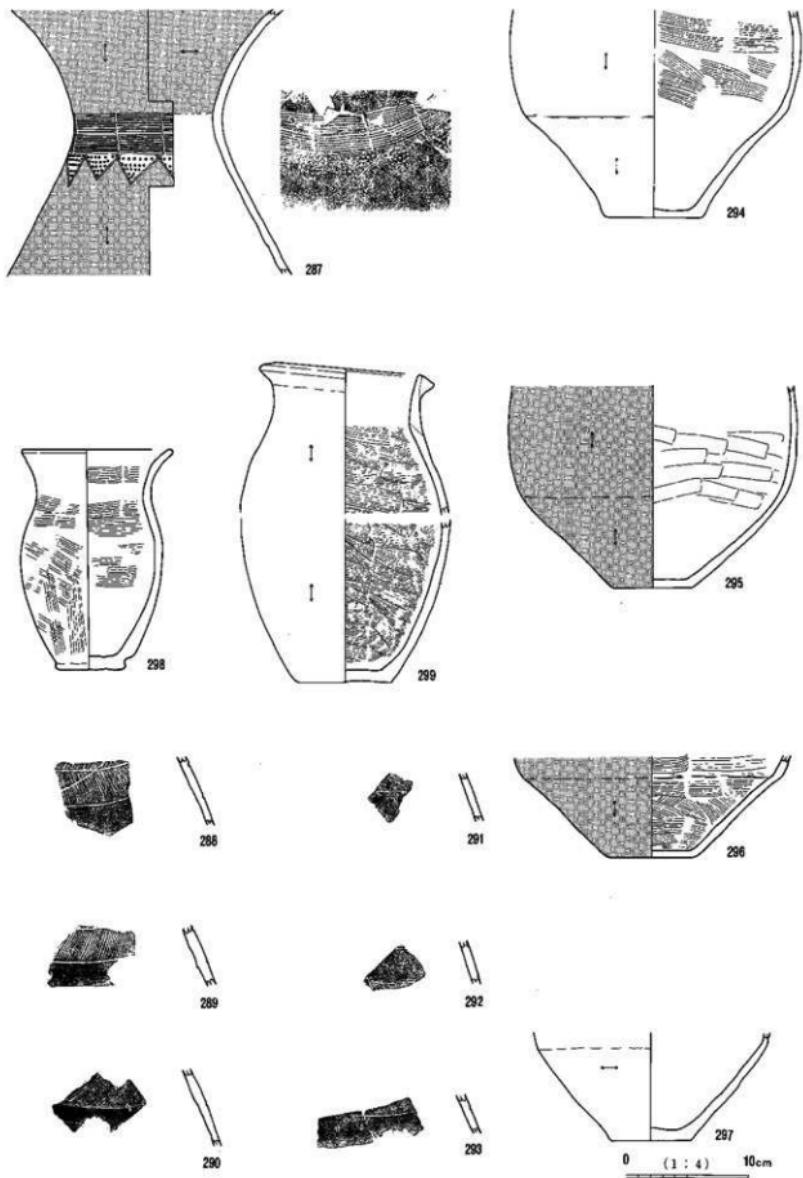
第81図 SD100出土土器.後期（2）壺



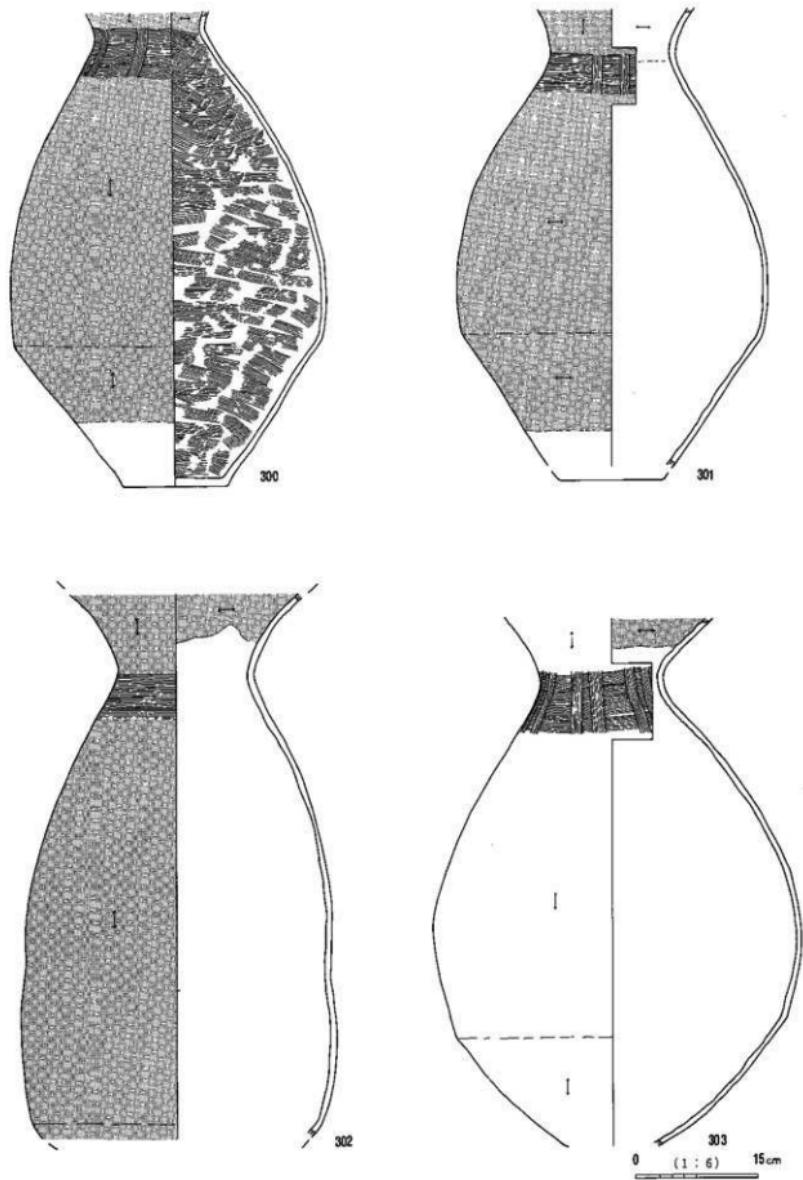
第82図 SD 100出土土器.後期（3）壺



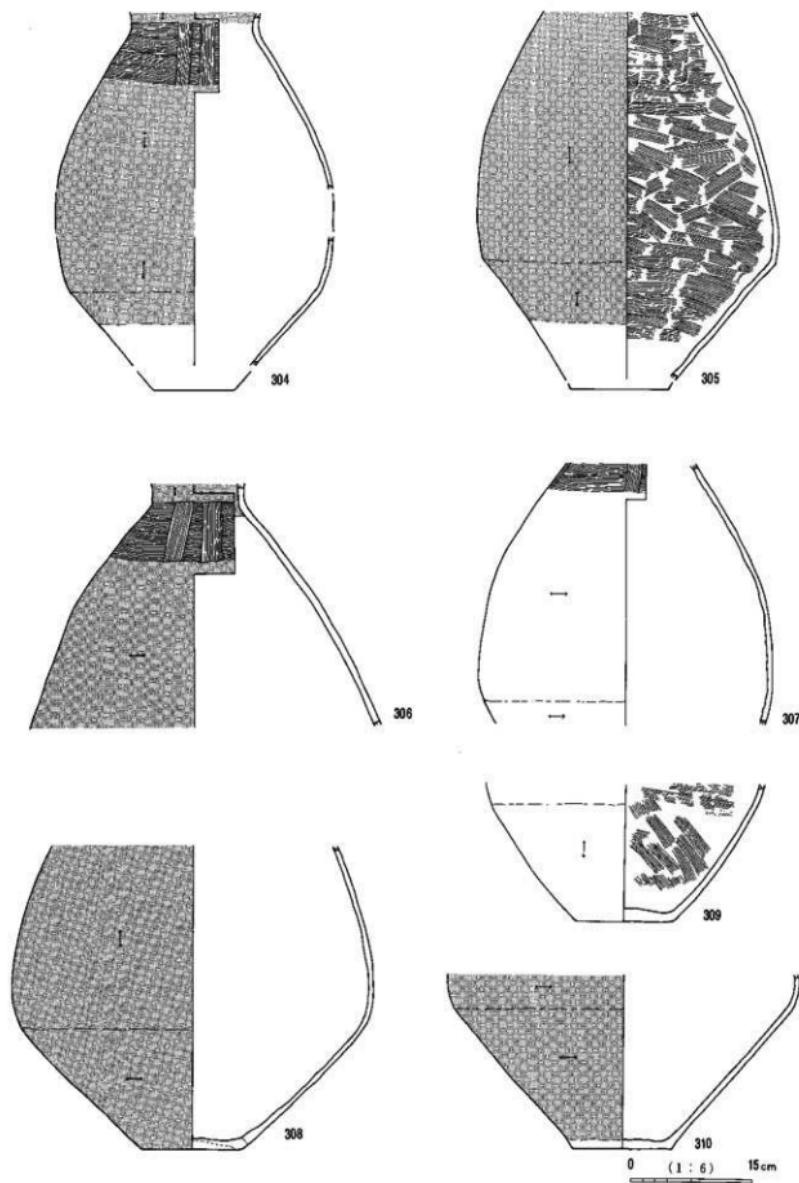
第83図 SD100出土土器、後期（4）壺



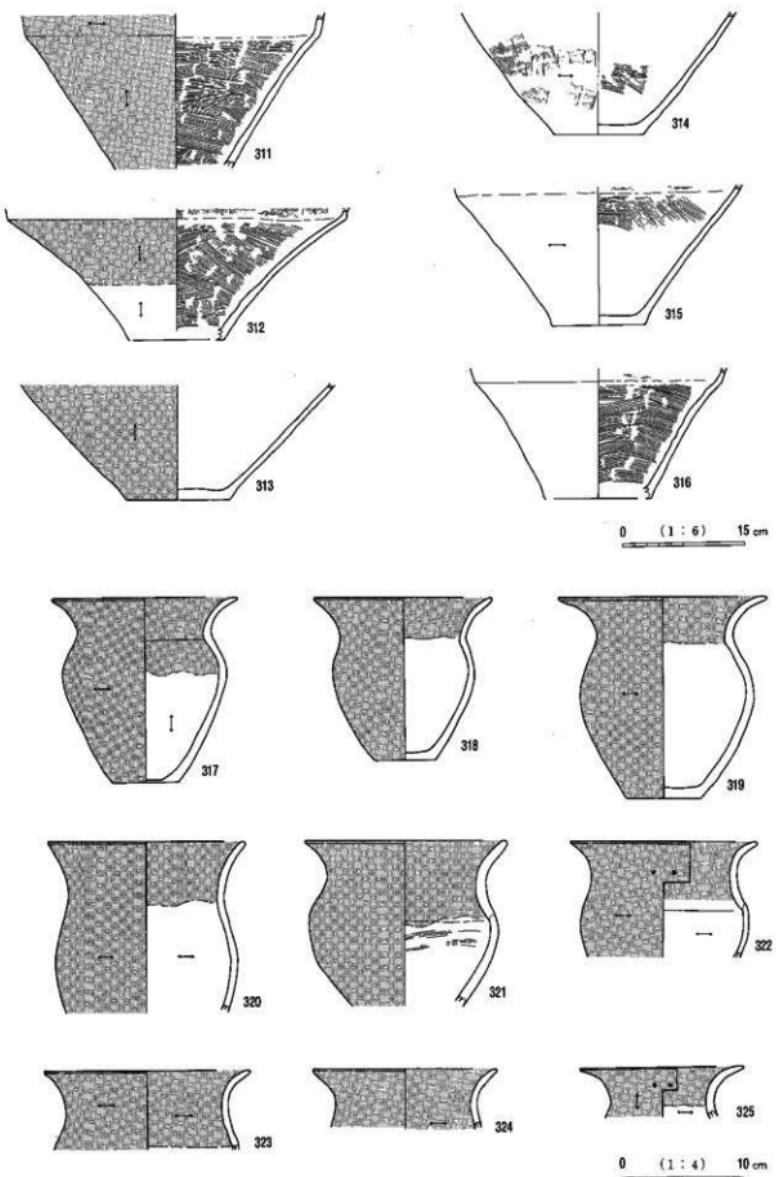
第84図 SD100出土土器、後期（5）壺



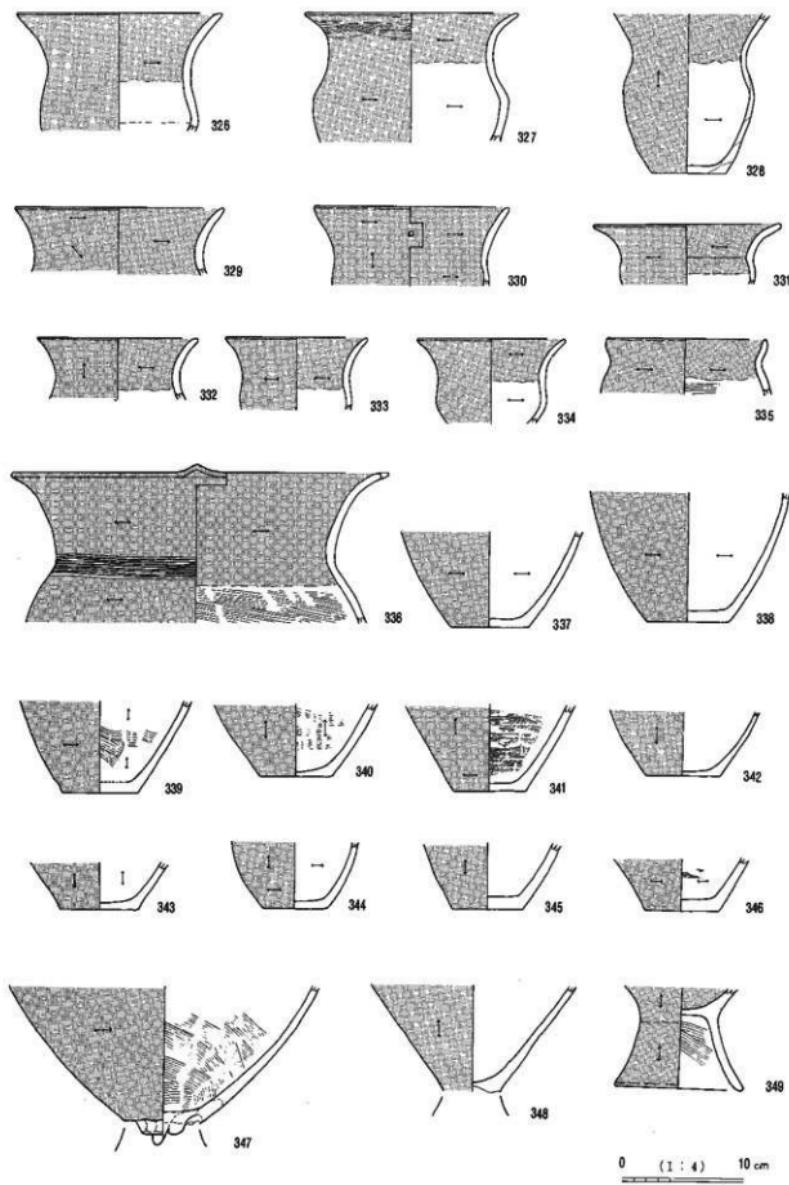
第85図 SD100出土土器.後期（6）壺



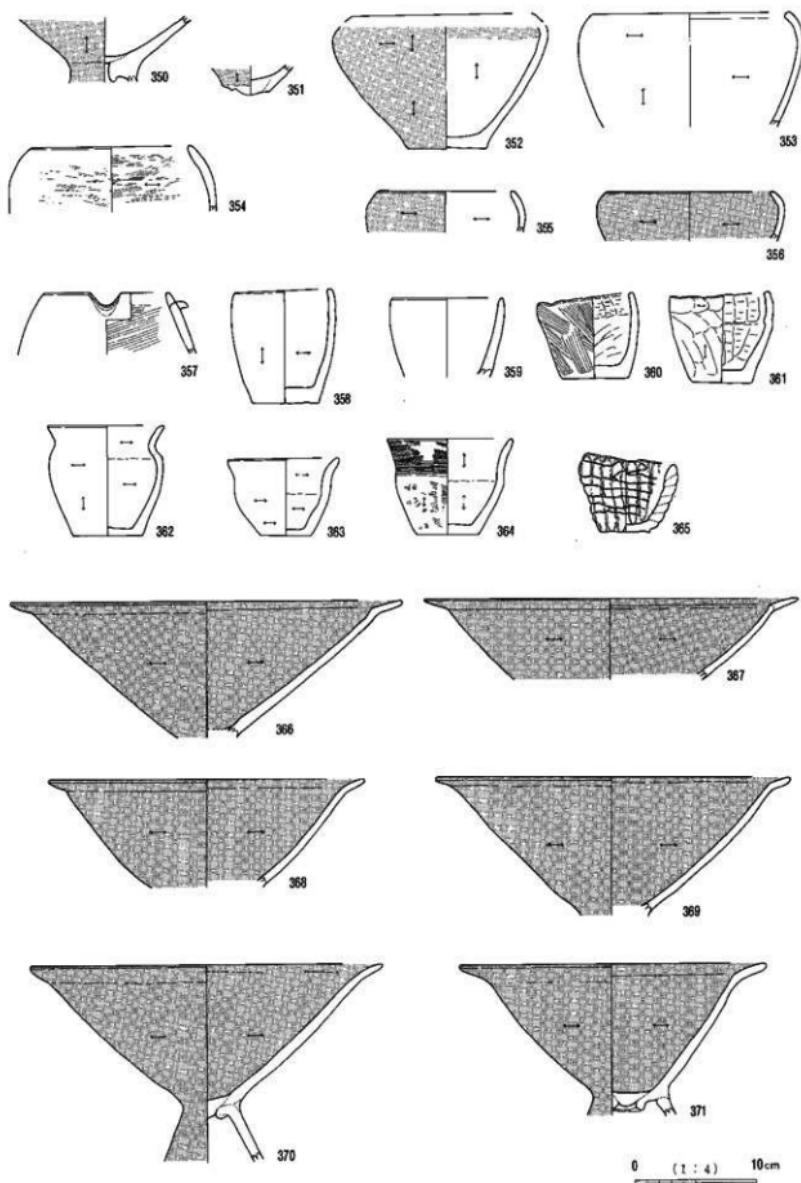
第86図 SD100出土土器.後期(7)壺



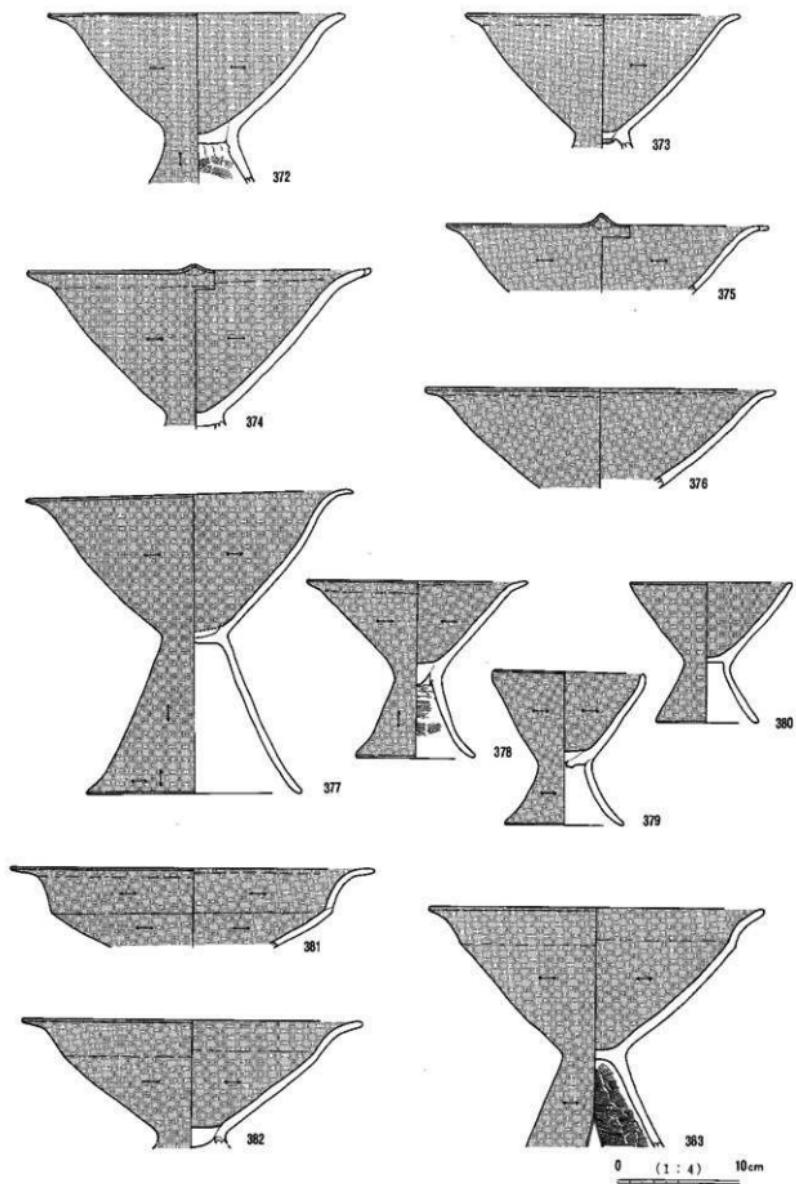
第87図 SD100出土土器・後期(8)壺・赤彩深鉢



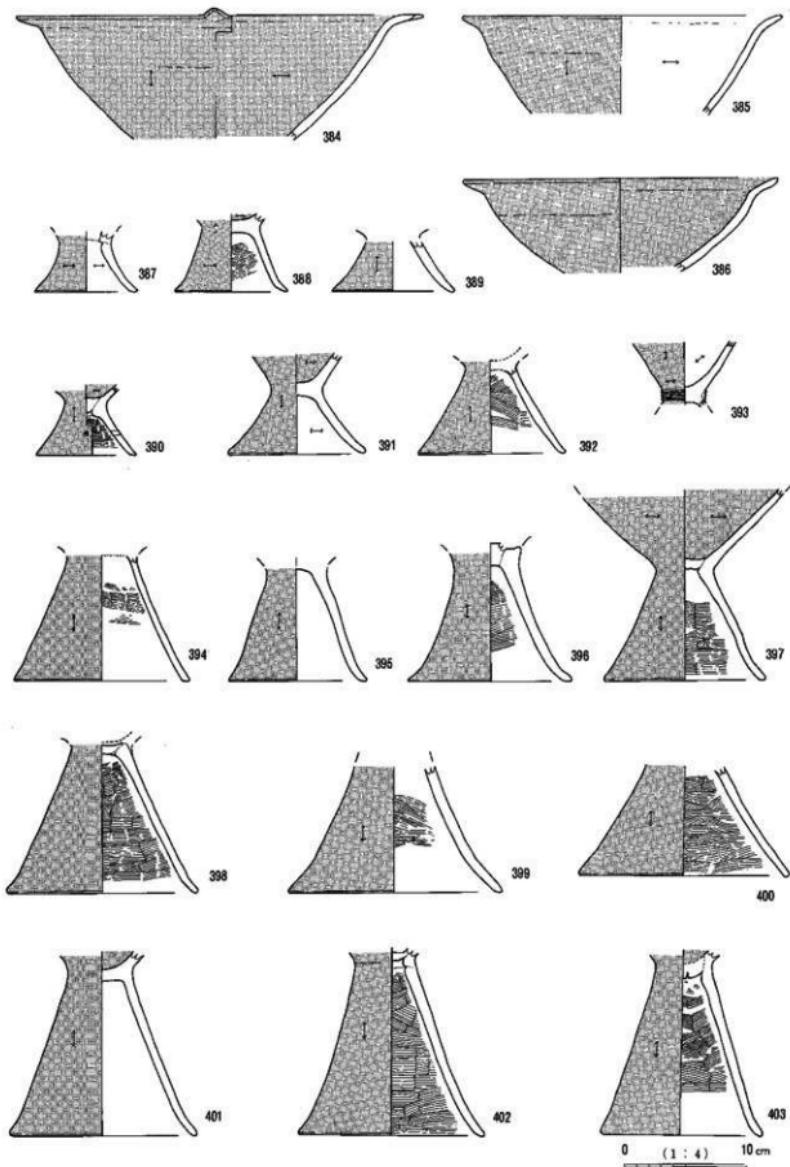
第88図 SD100出土土器.後期（9）赤彩深鉢



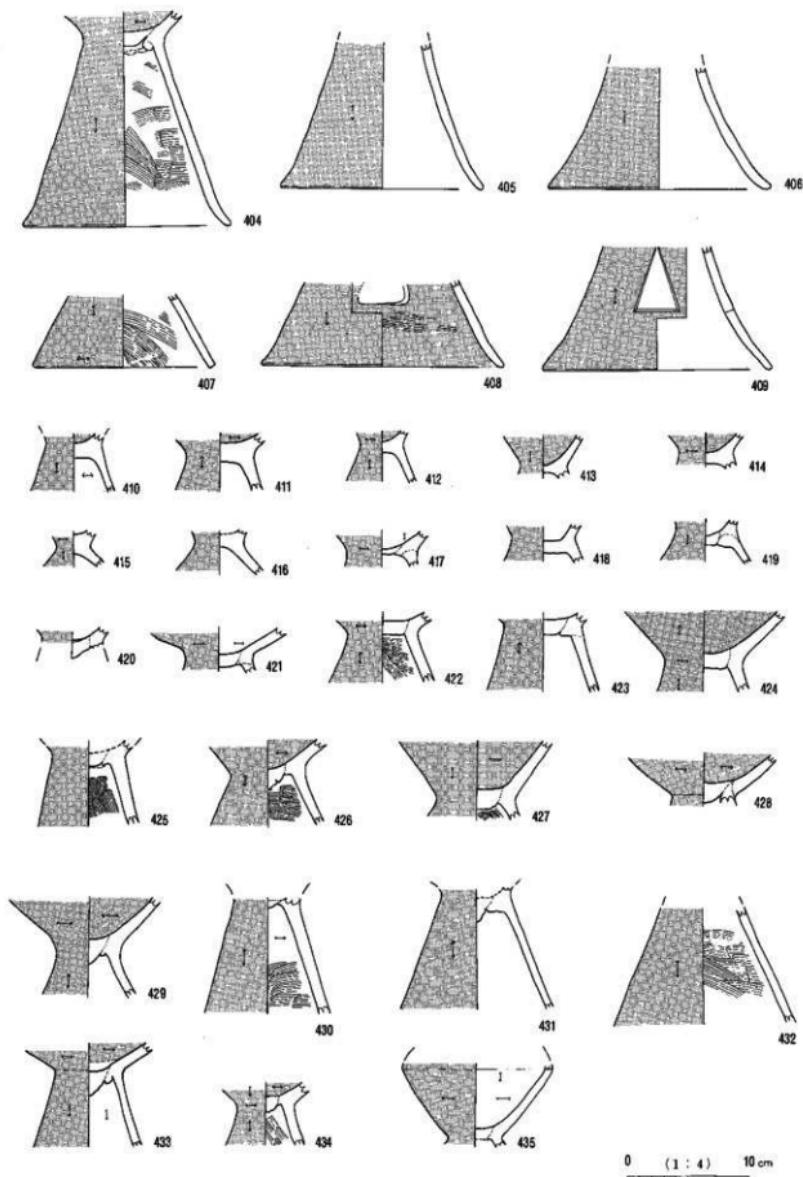
第89図 S D 100出土土器、後期 (10) 無頸壺・高杯



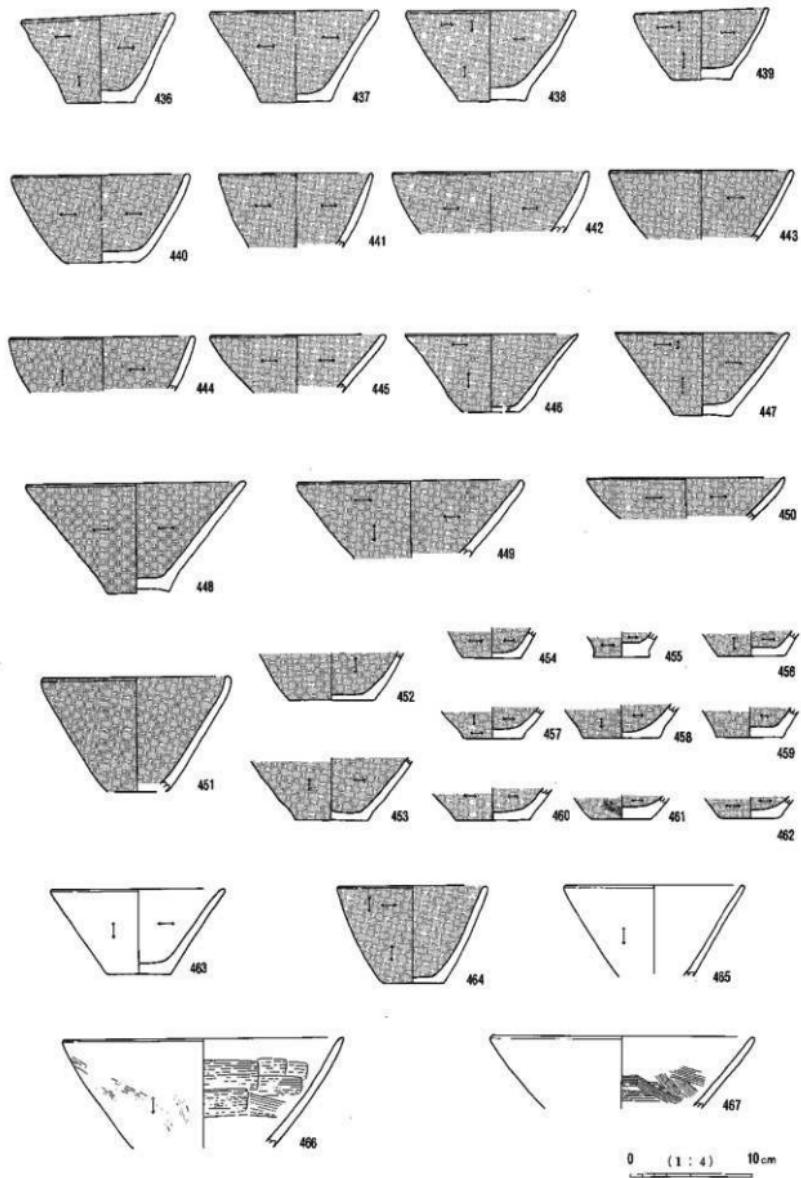
第90図 SD 100出土土器、後期（11）高杯



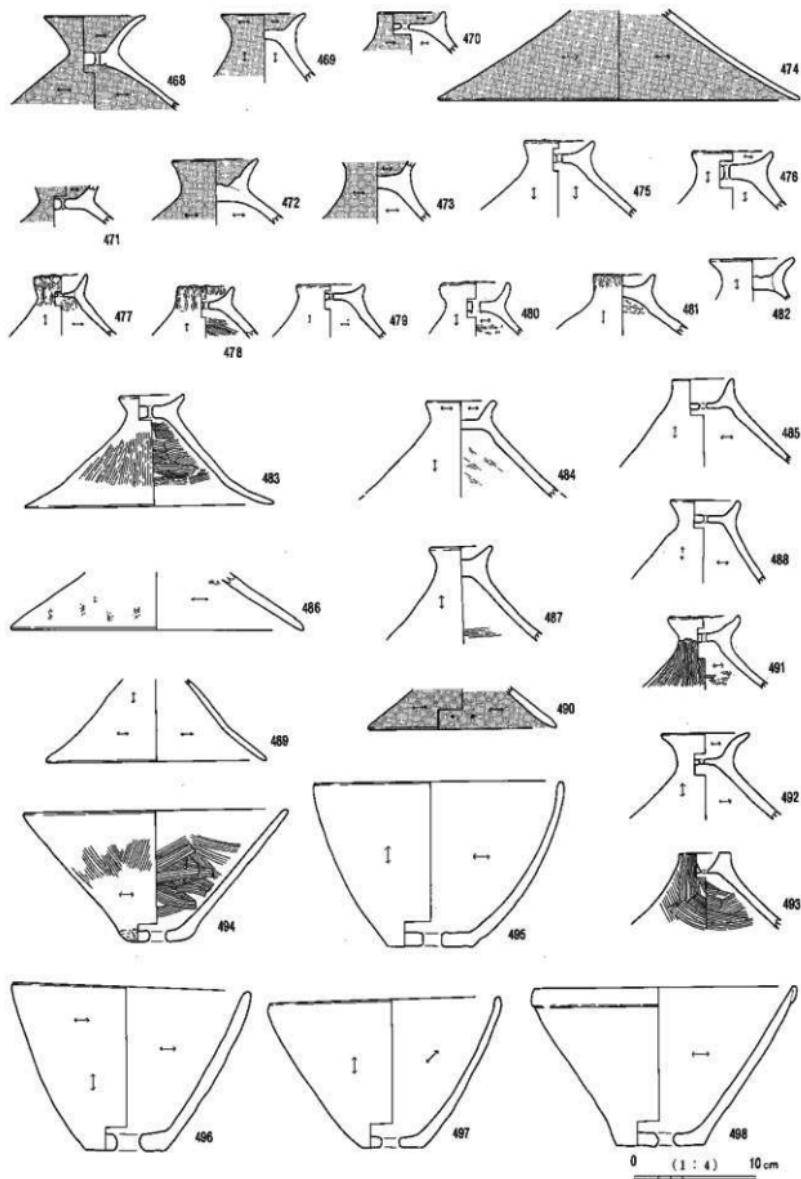
第91図 SD 100出土土器、後期 (12) 高杯



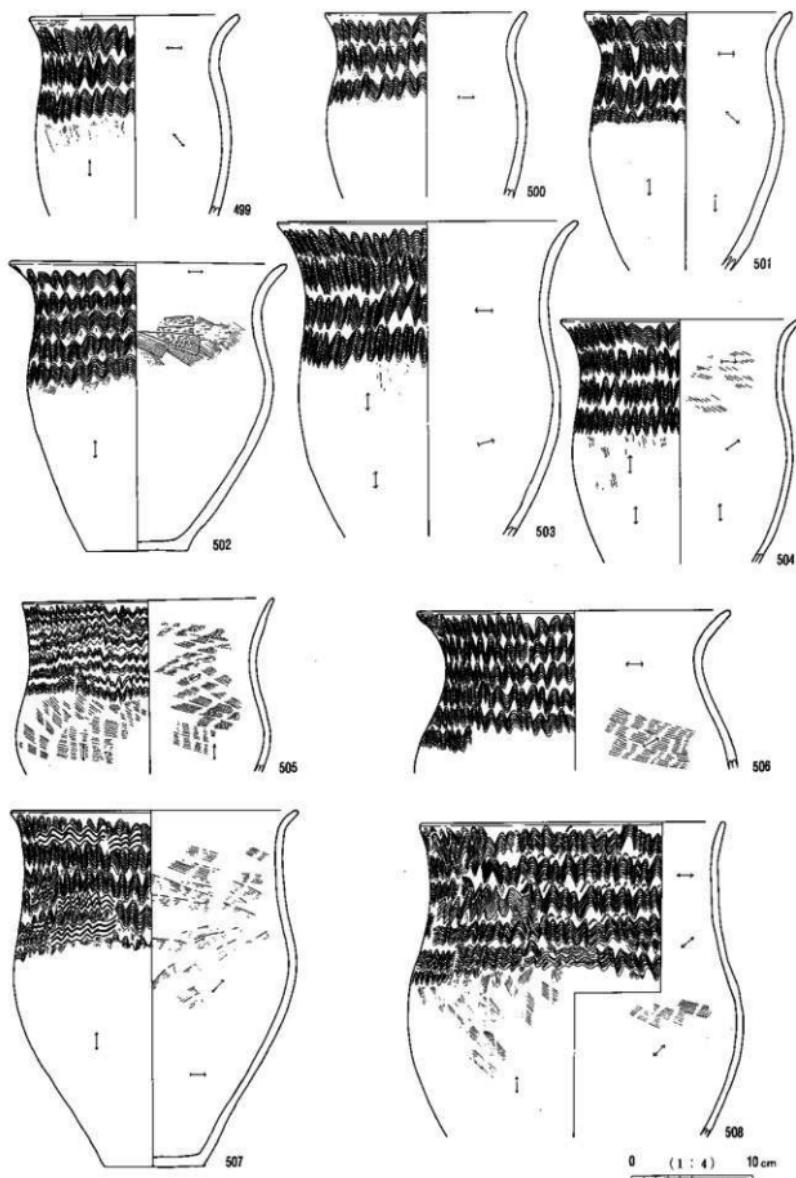
第92図 SD100出土土器.後期(13)高杯



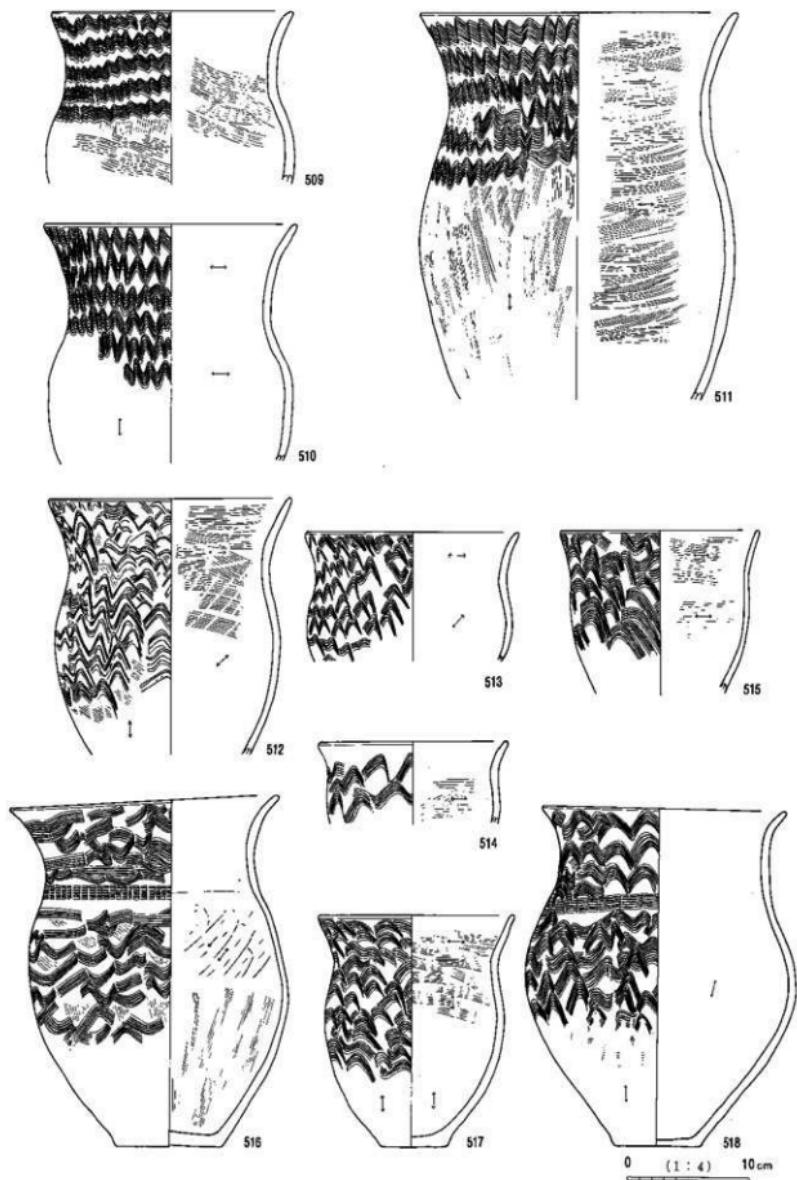
第93図 S D100出土土器・後期 (14) 鉢



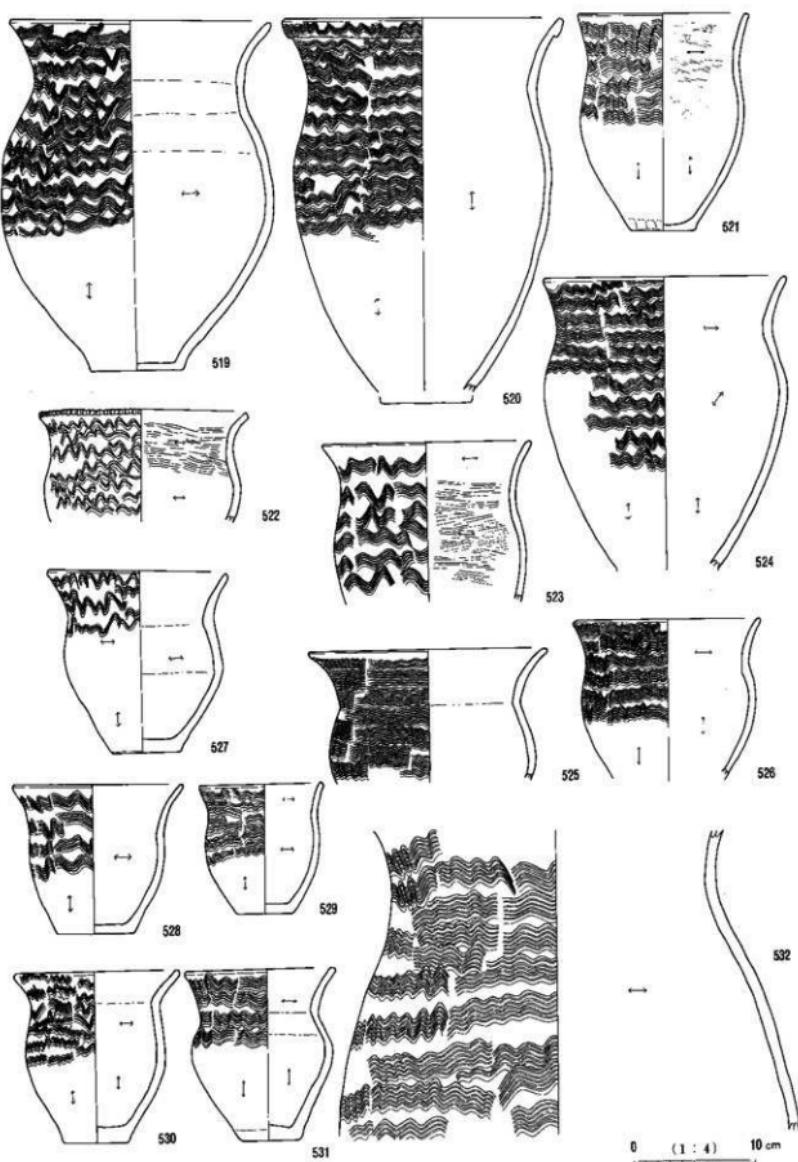
第94図 SD 100出土土器、後期（15）蓋・有孔鉢



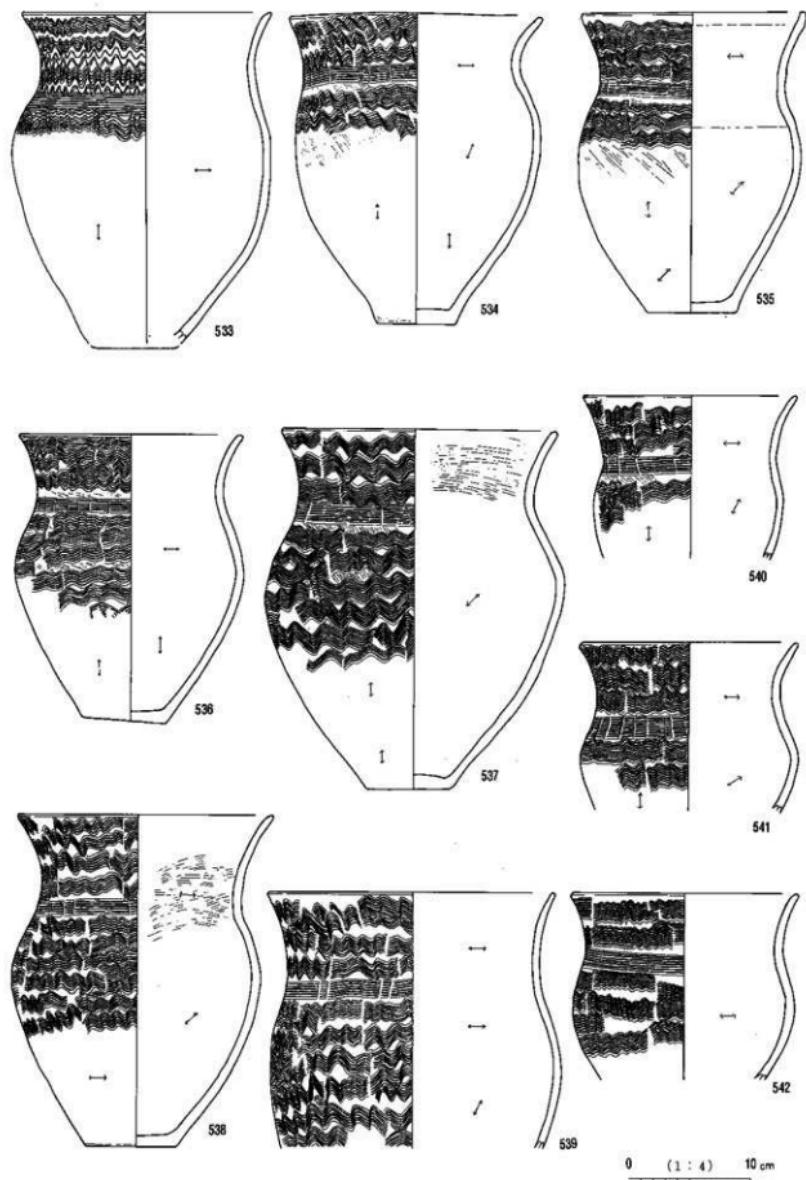
第95図 SD100出土土器.後期(16) 瓢



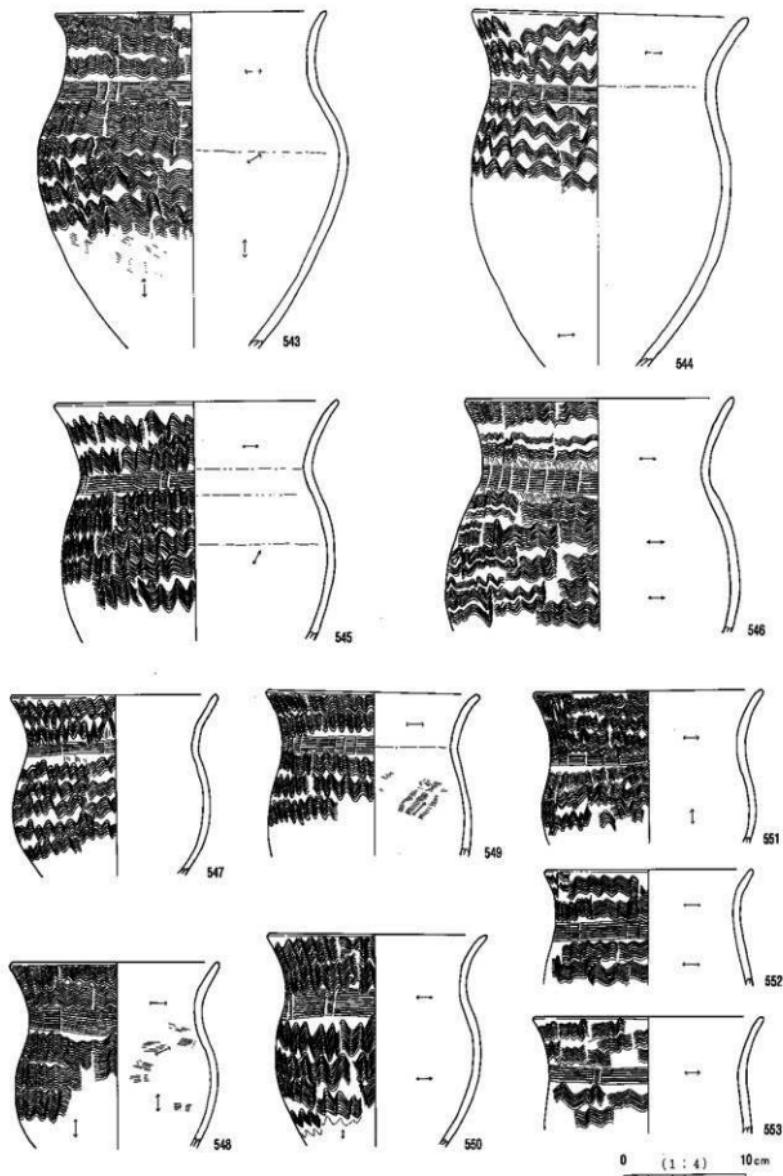
第96図 SD 100出土土器・後期 (17) 壺



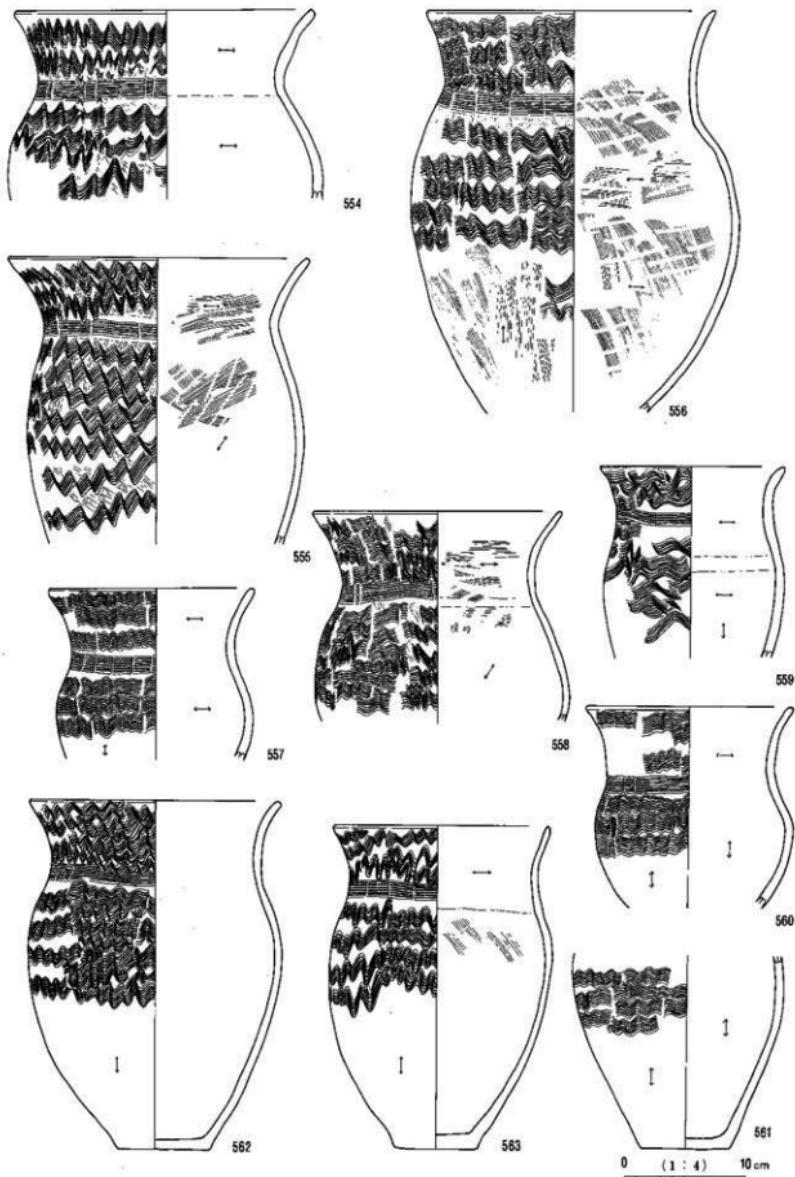
第97図 SD100出土土器、後期（18）甕



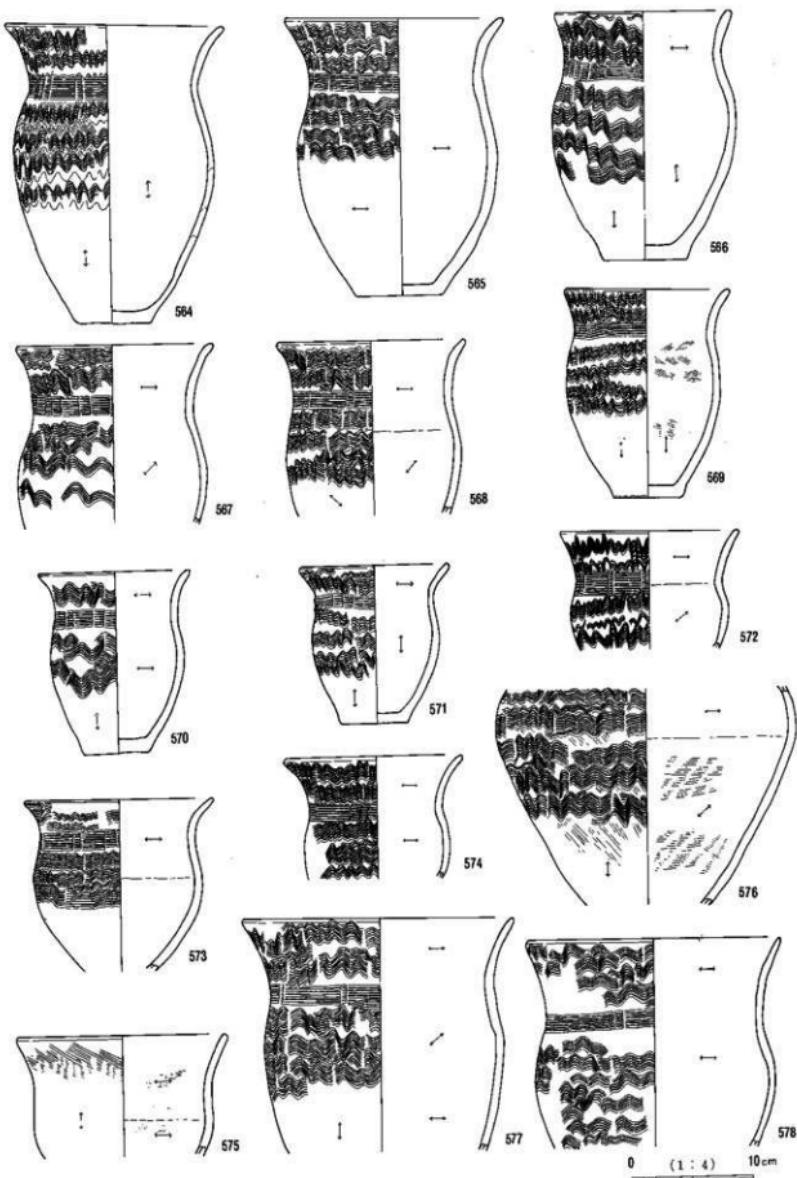
第98図 SD 100出土土器、後期 (19) 瓢



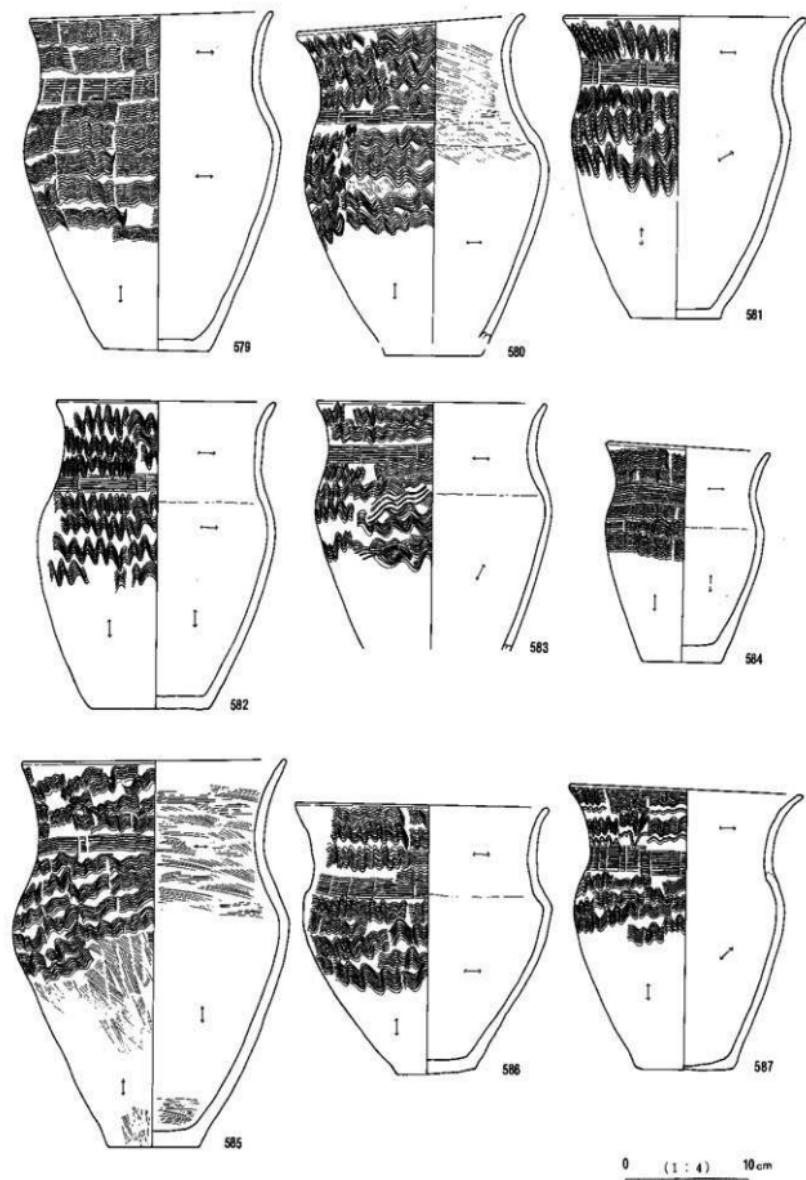
第99図 S D100出土土器、後期（20）変



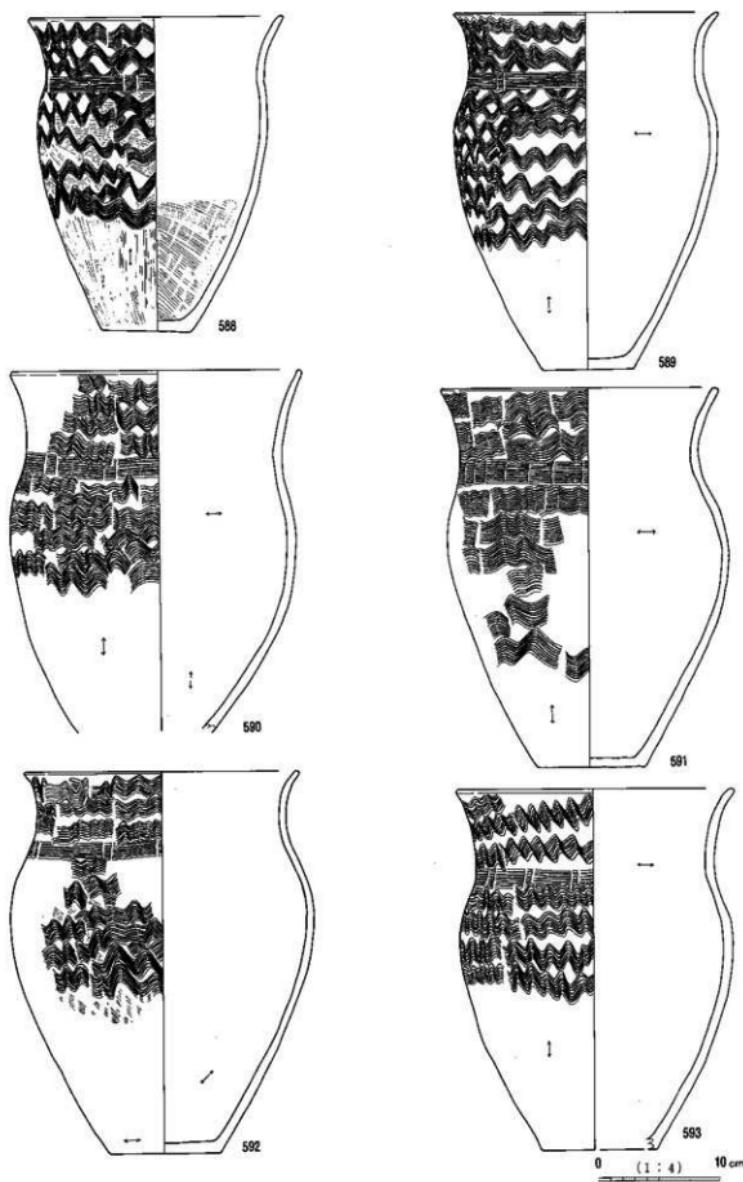
第100図 SD 100出土土器、後期（21）型



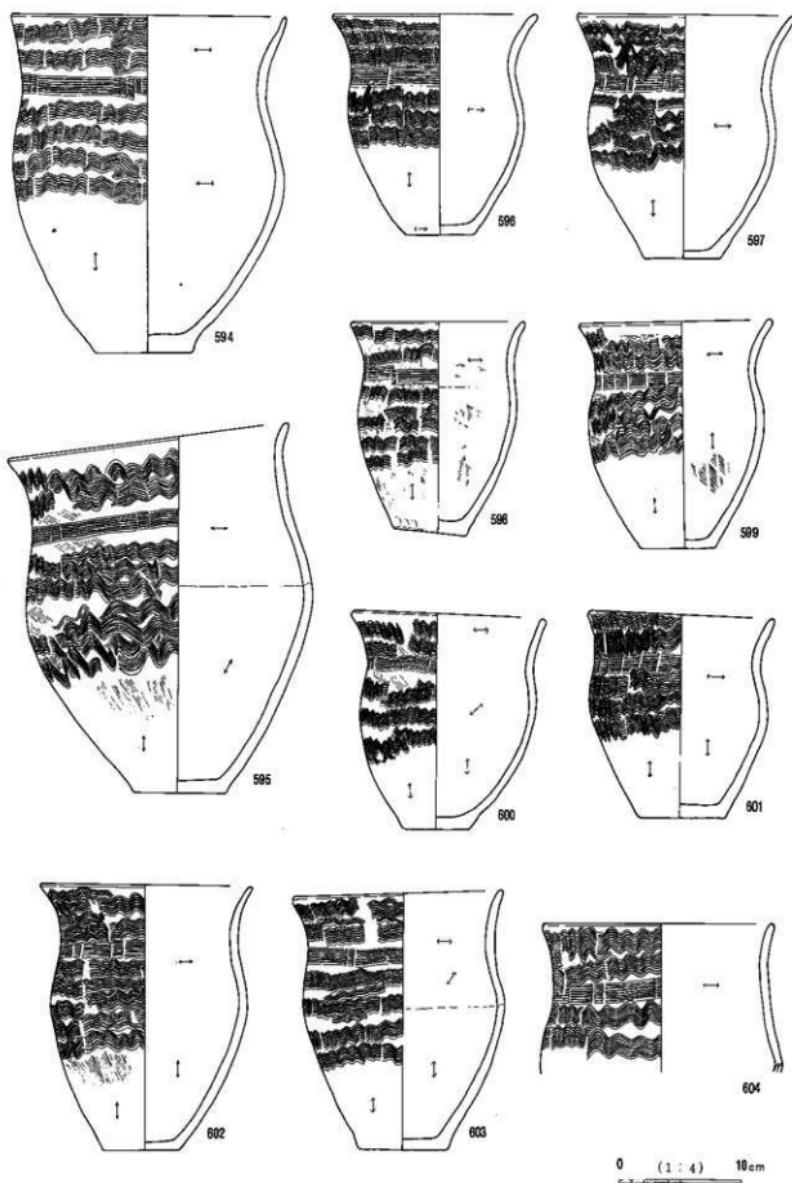
第101図 S D100出土土器.後期 (22) 壺



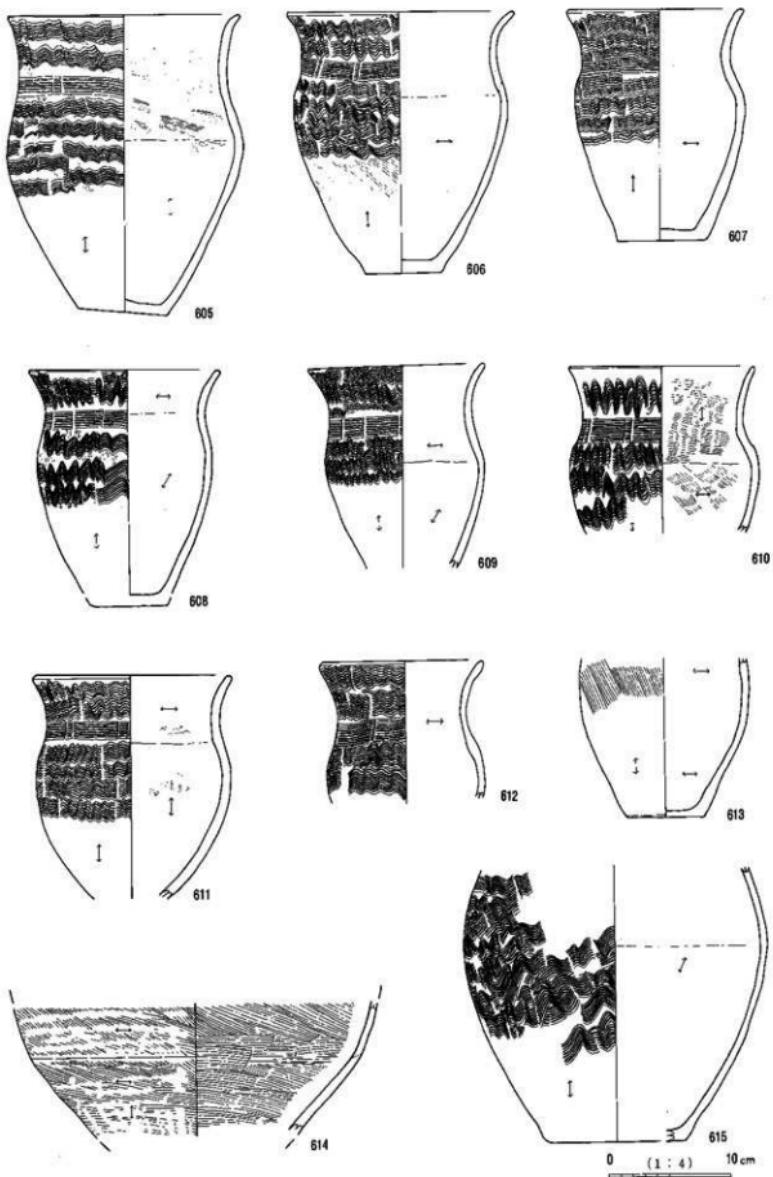
第102図 SD100出土土器、後期（23）甕



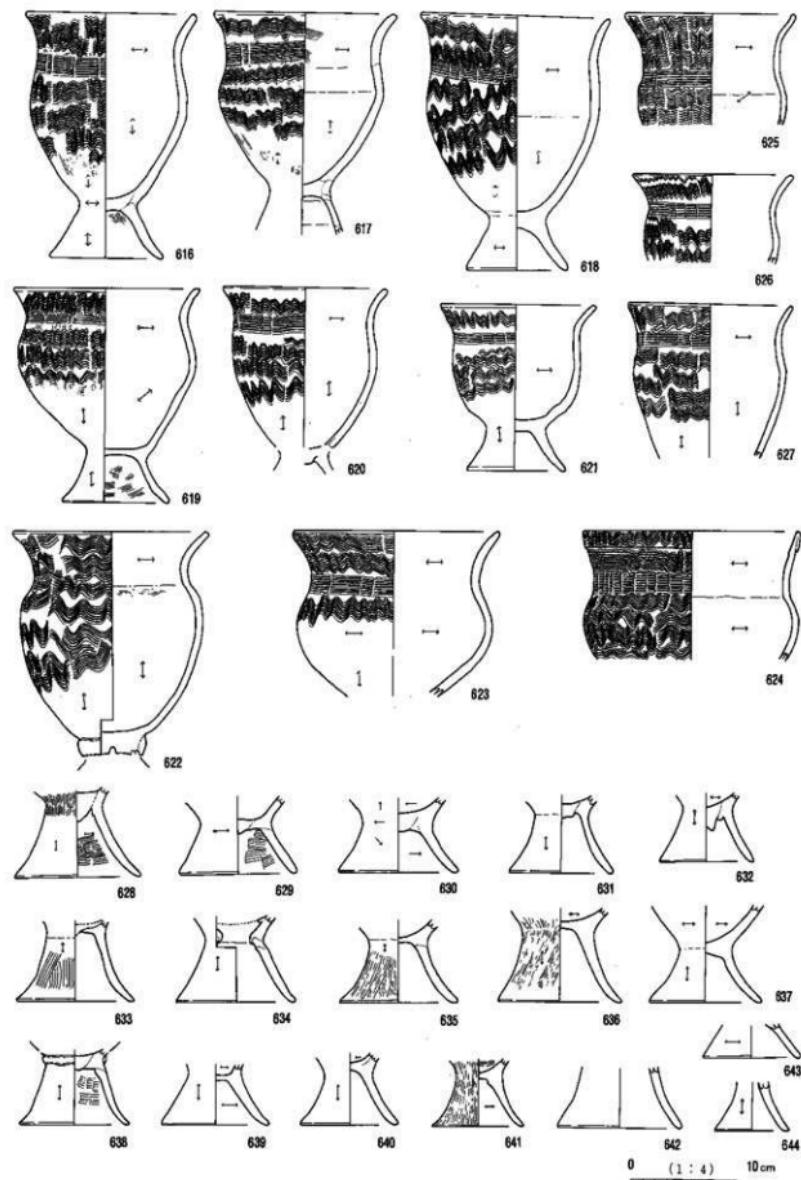
第103図 S D100出土土器.後期 (24) 瓢



第104図 SD 100出土土器.後期 (25) 磁



第105図 S D 100出土土器、後期 (26) 瓢



第106図 SD 100出土土器、後期 (27) 壺